フロイド
精神分析
学全集 L

快不快原則を超えて

強迫神経症

T·I·P·A·

精神分析学研究所

フロイド精神分析學全集

快不快原則を超えて
強迫神經症

對馬完治譯

精神分析學研究所

春陽堂

フロイド精神分析學全集

快不快原則を超えて
強迫神經症

對馬完治譯

精神分析學研究所

春陽堂版

目次

附錄

快不快原則を超えて

第一章

我々は精神分析學に於て、精神作用の過程は所謂快不快原則によつて自動的に調節されるものであるといふ事を認容した。即ちあらゆる精神作用は張度から生ずる不快なる狀態を避けむが爲めに、その張度を緩和させようと努力する過程によつて、はじめて決定されるとしてゐる。それは苦痛を回避して快感を得ようとする爲である。然しながらこの精神作用を、その結果から考察する時は、こゝに經濟的見地が持出されて來る。我々の信ずる處では、一つの精神現象が局所的又は動的見地のみならず、經濟的見地からも考慮された場合には、それは現在考へられるものゝ中で最も完結した精神現象であると見做してゐる。このことは超心理學的として區別される價値を持つてゐるのである。

快不快原則を主張するに當り、それが如何なる程度まで歷史的に編成されたる哲學に接近してゐるか、或はそれを採用してゐるかを論ずる必要はない。かゝる超心理學的問題に接觸するに至つたのは我々が日常觀察してゐる範圍内に起る事實を叙述し、これに說明を附けようとする努力からであつて、この主張の優先權乃至獨創權といふやうな事は、精神分析そのものゝ關する處ではない。この原則を主張するに至つた基礎は、無視し難いもの且つ疑ふべからざるものゝ上に立脚してゐる。然し乍

ら從來この力強き影響を與ふる快感及苦感の意義について、他に說明を附與し得る哲學或は心理學があるならば、我々は之に對して大いに歡迎せざるを得ないのであるが、不幸にして價値ある學理は未だ發表されてゐない。この事は、精神生活の中で極めて茫漠たるもので、殆んど研究されてゐない部に屬する。然しながら我々はこれを回避する事は出來ないので、着手するに至つたのだが、この場合ゆゑ、これを說明するには最も都合のよい伸縮自在なる假定に據ることが最良の方法であると思ふ。此處に於いて我々は、快感及不快感は精神生活中に於て發生したる興奮の量に關係してゐるものであるといふ事を決定したのである。この興奮の量は局限されてはゐないで、不快感はこの量の增加に基づき、快感はこの量の減退に基づくといふ事になる。このことは、精神生理的經驗の見地より見て、感情の强さとそれに相當する變化との間に存在する單なる關係を云ふのではなく、卽ち兩者の間に存する直接の比例から見たのではなくて、或る一定の場合に於て、感覺に對して決定的要素を來すが如き量をいふのである。恐らく此の點については、猶實驗的に證明すべき餘地は存してゐるであらうが、我々分析者としては、更にこれ以上の確實なる觀察に立脚する事は、今日にあつては面白くないのである。

然しながらフェヒネル Fechner の如く、この問題を實驗的に硏究した人を、我々は全く無視し放擲

する事は出來ない。氏は快感と不快感との概念について、事實と本質との一致といふことを主張した。これは精神分析學的に認容せざるを得ないことで、氏は『微生體の發生史及發育史に就いての二三の見解』(第十一章九一頁)で次の如く發表してゐる。『意識的衝動は常に快感及び不快感と關係してゐる。この關係の範圍內では、快感及び不快感は精神物理的關係の安定及び不安定の狀態に關係してゐると見做される。いま自分が玆に提出せむとする假定は、これを基礎として立てた。卽ち意識を超えて現はれる總ての精神物理的運動は、完全なる權衡狀態を保たむとして、或程度を超えてそれに近寄らうとする。その場合に當つて、權衡狀態に接近すればする程快感に伴はれ、又或範圍を超えて隔たれば隔たる程不快感に伴はれるのである。而して此の快感若しくは不快感の量的限閾と見做される二つの限界の中間に、無關係の地帶が存在するのである。』

精神生活の中にあつて、快不快原則が主權を占むるといふ事を信ずるに至つたのは、次の過程によつてゞある。卽ち精神作用の役目として、興奮の量を出來るだけ低く或は一樣に保たうとする傾向があるといふ事からである。これは同じ事を異つた形式で述べたに過ぎない。何故ならば、若し精神作用が興奮の量を出來るだけ低く持續せむとして現はさるゝものならば、この量を增加させる總ての傾向は、精神作用の目的に背馳したものと認められねばならぬ。卽ち苦痛として認められねばならぬか

らだ。快不快原則は不變原則から推論されるのである。云ひ換へれば、不變原則が我々に快不快原則の假定を餘儀なくせしめたのは事實である。更に精しく云へば、我々によつて提案された精神作用のこの傾向は、フェヒネルの所謂安定に向ふ傾向及びその傾向に苦樂感を結びつけた原則の特殊のものと見做され得よう。

然し乍ら此の場合では、精神作用の過程にあつて、快不快原則は常に主權を占めてゐるとは云ひ難い。若しこれが主權であるならば、我々の精神作用の大多數は必然的に快感に伴はるゝか、或は快感を示すがごときことゝならう。然るに我々の日常の經驗は全然斯かる結論に反對である。が、我々の精神作用のなかには、この原則に從はうとする强い傾向のあることは認めざるを得ない。だが此の傾向に對しては、他の或る力又は條件が反對してゐるから、その最後の結果は、常に快感追及の傾向に從つては起り得ない。この問題についてフェヒネル Fechner の言葉を參照すれば、『終局の目的に向はむとする傾向は、この目的を果すものだとは定まつてゐない。一般にはこの目的にたゞ近寄り得るのみだ』といふ。それで、今この快不快原則を遂行するに當つて、妨害となるべき力は果して何物であるかといふことを考へるならば、この問題の解決が、既知の土地を辿るやうに、より安全に遂げられるであらう。この問題の解決に當つては、精神分析の經驗から澤山の材料を引出すことが出來る。

快不快原則に對する斯かる妨害をなしてゐる最初の例として、この妨害が殆んど正規的に起るものといふ事實は熟知してゐる。卽ち快不快原則は、精神作用の原始的の働き振りに順應するやうに出來て居り、且つ外界の困難なる中にあつて、有機物を保存せんが爲めには全く無益な且つ屢危險な仕方で出來てゐる。そこで自己保存に對する自我本能の影響のもとに、快不快原則が現實原則によつて置換へられる。そして現實原則は終局に於ては快感を求めるのであるが、この場合だけ一時的の滿足(快感)を繰延べする。一時的滿足の種々の可能性を放棄するのである。これは長く且つ迂回した道筋によつて終局の快感を得んが爲めに、一時不快を忍ばうとすることを要求するのである。然し乍ら性的衝動の働く場合に於ては、この快不快原則は久しい期間そのまゝ其處に殘るものである。この性的衝動は、容易に馭し難いもので、その結果、繰返しつゝこの衝動が現はれ、また自我それ自身の中にも働いて、全體の有機體の不利益を來すが如き鹽梅に、現實原則を覆してゐる。

同時に、爭ふことの出來ない事實は、快不快原則が現實原則によつて置換へらるゝ事は一小部分に限られて居り、然かも最も强烈にして最も苦痛なる經驗の場合には、この置換が果されてゐないといふことである。

苦痛の猶一つの且つ屢認められる根原は、漸次發達向上する組織に向つて、自我が發達する間に起つ

てくる精神作用の葛藤と分裂とである。それは、精神作用に纏綿する力は、本源的の本能より生ずるものだが、これらの本能の總ては、同一程度に發達することは許されてゐない。その發達の過程で、或る特殊の本能或はその一部は、他の自我統一の要素として參加すべき本能と兩立しない場合が屢生ずる。爲めに、それらの本能は抑壓作用を受けて統一團より分裂し、遂に精神作用の發達の低級な下層の中に保留されて了ひ、そして滿足の總ての可能性を奪はれてしまふのである。若しこれ等の本能が、迂回路を經て直接の又は代償的の滿足を求むることに成功するならば、——これは抑壓された性的衝動の場合には屢容易に起るものである——この成功は、他の場合には快感を齎す筈なるにも拘らず、却つて自我によつて苦痛として感ぜられる。これは、嘗て葛藤の結果として抑壓されたものであるが、此處に於て再び快不快原則は、この抑壓の制限を破つたことになる。恰も此時は快不快原則に從つて新らしき快感を得んが爲めに、或る衝動が發せられた時である。斯く抑壓が快感の可能性を苦痛の原因に變更させるといふ事は、如何なる理由であるか。この精細な理由については未だ理解されてゐない。從つてこれを明瞭に說明することも出來ない。けれども神經症的苦痛の總ては、此の種類に屬するといふことは確實なことである。といふのは、此の苦痛は、快感として感ずることの出來ない快感なのである。

こゝに述べた二種の不快（神經症的及び普通の不快）の原因は、我々の不快の經驗の大多數を含んでは居ない。然し此處に含まれてゐない不快は、快不快原則の主權を破つては居らないと云ひ得る。我々の日常經驗する不快の最も多くは、感覺系統に屬してゐる。この感覺は、慾望を充たし損なつた本能に驅逐されたもの、又はそれ自身が不快である外界の刺戟、或は精神作用が危險と認めた場合に起る不快の豫感となり得るものである。これらの衝動の要求及び危險の脅威に對する反應、卽ち精神作用が示す現實的活動たる反應は、快不快原則又は此の原則を修正し得る力を持つた現實原則によつて、正確に指導されるものである。斯樣なわけで、快不快原則に關しては、猶これ以上の限界を認める必要はあるまいと思ふ。然し本問題に對して新しき材料を供し又は新しき疑問を附するが如き外界の危險に對する反應を研究するには、この快不快原則はその範圍を擴げねばならない。

第二章

激烈なる器械的の震盪（ショック）、例へば汽車の衝突或は生死の問題に關するやうな事故に遭遇した人には、或る狀態が惹起される。この狀態は外傷性神經症 Traumatische Neurose と稱せられて、久しい以前から認められてゐた。今回の戰慄すべき戰爭は今終つたが、この戰爭では、斯樣な疾病の例を無數に出した。この疾病の說明としては、少なくとも器械的作用によつて神經組織に肉體的加害を及ぼした爲めであると見做された。(一)

【註】(一) フェレンチー Ferenczi, アブラハム Abraham, ジンメル Simmel, アーネスト・ジョーンズ Ernest Jones 氏等によつて報告せられたる『精神分析と戰爭神經症』を參照。一九二〇年發行、國際精神分析學會誌第二號。

外傷性神經症の臨床的症狀は、ヒステリーに類似した運動神經症狀で滿ちてゐる。それ故にヒステリーに甚だよく似てゐるが、自覺的苦痛感の遙かに强烈な處は、むしろヒポコンデリーか或はメランコリーに類似してゐる。殊に、精神作用が完全に一般衰弱を來してゐたり、且つ破壞されたりしてゐる點は最もよく似てゐる。戰爭性神經症や平時の外傷性神經症等は、猶未だ十分な研究が施されてゐ

ない。然し戰爭性神經症だけは幾分か明瞭になつた且つ複雜した問題が現はれて來た。といふのは、單なる器械力によらなくとも、同樣の症狀が惹起されるといふ事が解つて來た。玆に外傷性神經症について、我々の考慮を更に深く進ませる端緒として必要な著しい事實が二つある。その第一は、その主なる原因は、突發的といふこと及び恐怖といふことらしいこと。第二は、外傷（譯者曰、本書にて外傷と云へるは肉體的外傷を云ふにあらずして、總て精神的外傷の意味である）を受けたと同時に、肉體の危害又は負傷を受けた場合には、神經症を發することが妨げられるといふ事である。從來、驚愕 Schreck, 恐怖 Furcht, 杞憂 Angst が同じ意味にて取扱はれてゐるのは誤りである。危險に關した是等の語は明かに區別されねばならない。杞憂（アングスト）とは危險を期待すること及びそれに對して準備する狀態を云ひ、この危險は必ずしも既知のものに限らない。恐怖（フールフト）とは怖るべきものゝ確實に存在してゐることを意味し、驚愕（シユレツク）とは全然準備せざる時に危險に遭遇した狀態をいひ、突發といふことに重きを置く。自分の信ずる處では、杞憂では外傷性神經症を發することはない。何故ならば、杞憂には恐怖に對して擁護するやうなもの、即ち恐怖神經症に對して擁護するものがあるからである。この點に就いては後述する。

夢の研究は、深い底部にある精神作用を研究するに當つて、最も信賴し得る途となるのである。外

傷性神經症に於ては、患者の夢が特殊の狀態を示してゐる。それは患者をして間斷なく此症狀を發せしめた狀態に連れ戻すので、患者は更に恐怖を感じて目を醒すのである。この事實は餘り豫想してゐなかつたのであつたが、然し實際それは不思議な事である。患者が、與へられた外傷的經驗の印象を睡眠中に於てさへも再三呼び起すといふ事は、單にこの外傷の强さとして認められるであらう。卽ち患者は外傷に對して精神的定着を受けたのである。疾病を起した經驗によつて斯樣な定着が起るといふ事は、ヒステリー症の場合では我々は既に遠い以前から分つてゐた。卽ち一八九三年ブロイエル Breuer と自分とは次の主張をなした。『ヒステリー患者は主として追憶になやむものである』と。戰爭神經症を觀察せる人、例へばフェレンチー、ヂンメルの如きは運動障碍の一團を外傷的要素の定着として說明し得た。

然し乍ら、外傷性神經症になやむ患者は、彼等が經驗せるものゝ追憶を、覺醒中に持つてゐるとは信じられない。彼等は、むしろその經驗を考へざらむと努めるであらう。患者が每夜見る夢は、この症狀を發せしめた當時の狀態にこの患者を連れ戻すのであると說明するのは、夢の意義を誤解した事になる。夢の意義としては、むしろ彼の健全なりし時代を、又は彼が願望してゐる恢復後に於ける心象を、睡眠中に現して吳れるものであれば、相應しい事なのである。これらの戰爭神經症患者の夢の

結果より見て、夢に於ける願望實現の傾向が少しも紛亂される事が無いとするならば、恐らく我々は特に除外例を必要とせねばならぬであらう。即ち夢の作用といふものが、此の状態では他の作用と同時に失敗するものであり、又夢の普通の目的から曲げられてしまふからである。さもなければ我々は自我の示す謎的被虐性傾向を採用せねばならなくなる。そこで自分は外傷神經症の漠然たる且つ憂鬱的な問題を一時捨てゝ、此處に精神作用が、その最も早期時代に普通の活動を示した、その一つの活動の現はれ振りを研究して見ようと思ふ。それは子供等の遊びである。子供の遊びに就いては、從來と異つた持論がプァイフェル S. Pfeifer 氏によつて『イマゴー』Imago（雜誌）に發表された。(一) これらの説は、子供等の遊びの動機について考慮してゐる。尤も此の考慮中には、經濟的見地（即ち快感を得むとする考慮についての經濟的見地）に對しては特別の注意を拂つてゐない。自分は、これらの子供の遊びについて、研究を全うする考へは持たないでゐたが、測らずも年齡一ケ年半の男兒が自分で考案した最初の遊戲を、研究すべき機會を得たのである。これは單に偶然の觀察のみではなかつた。といふのは自分と此の子供とは、その兩親と共に同じ家屋内に數週間住んでゐた。そして、この子供が謎のごとく繰返してやる遊びの意味が、自分に明かになるまでには、少なからぬ時間がかゝつたのであつた。

【註】（一）この發表によつて分析的價値が評價されるやうになつた。自分は讀者にこれを參照されむことを希望する。

その子供は知慧の發達が遲れてゐて、生後一年半になつても極めて僅かの言葉よりしか話し得ず、言葉以外には或る意味をもつた發音をしたが、それは周圍の者だけにしか分らなかつた。兎に角、子守りとは、それによつて意志を通ずることが出來た。また、その子供は噂さによると行儀がよく、夜間でも兩親を困らせるやうな事はなかつた。また、此の器物に觸れてはならぬとか、此の室に入つてはならぬとかといふ命令は堅く守つた。それのみならず、彼の母が數時間外出してゐても、決して泣かなかつた。といつて、母に對する愛着は少なくはなかつたのだ。母は自分の乳で哺育したのみならず、全然他人の手を借りずに世話をしたのである。處が、この行儀のよい子供が、時々惡遊びの癖を出すやうになつた。それは、室の隅や寢臺の下に、手當り次第小さい物を抛り込むので、その玩具を片付けることが容易な事ではなかつた。が、子供はこの遊戲にふける最中、樂しさうに滿足したやうな顏をして『オーオーオーオー』と長大息で叫ぶ。この言葉は、母親の考では（自分もさう思つたのだが）彼方（あちら）へ行け（fort）といふ感投詞であるといつた。自分は、この意味を『行つて了へ（フォルト）』といふ遊びであつたことが解つた。それに就いては、或日自分は一つの觀察をやつて、自分の考へを裏書した。

その觀察といふのは、この子供が絲卷きの附いた玩具を貰つた。これは馬に車を曳かせて遊ぶものであつたが、その子供は、この玩具を床の上で曳かせて遊ばうとせずに、極めて巧みに抛げて遊ぶ。何處に抛げるかといへば寢臺の傍に抛げる。すると玩具は寢臺の下に隱れる。隱れると『オーオーオー』と云つて、それから絲をたぐつて寢臺の下から曳きずり出す。出て來た時には嬉しさうに『ホラ其處に』(Da)といふ。卽ち見失ふことゝ現れてくることゝが、この遊びの全部なのである。初めの抛げる事は一般に認めらるゝ快感で、子供はそれが爲めに飽きずに繰り返してゐたが、然し最も大なる快感は、次の曳出す事にあるらしかつた。(一)

【註】(一) この註釋は、この觀察を更に進めて、十分なる證據を得た。それは或日母が數時間外出して歸宅した時、子供は『坊や、オーオーオー』といつて迎へた。これは最初は分らなかつたが、遂に次の事が明かになつた。母の不在中の永い淋しい間、子供は自分自身も不在だといふ一方法を發見した。それは何かといふと、子供は天井から床まで下つてゐた大鏡に、まづ自分の姿を寫して、次に蹲んで下に隱れて了ふ。自身が『彼方へ行け』(フオルト)になつて仕舞つたといふ意味である。

この遊びの意味を知るには困難でなかつた。それは子供の著しい分化的發達に關係してゐた。卽ちそれは本能の滿足を放棄することであつて、その結果、子供は母の後を追ふことなく、母を外出させることが出來た。それは、子供自身で淋しさを忍ぶ爲めに、その補償を爲したのである。卽ち子供は

手にしてゐたものを無くしたり取返したりする事を、劇化してやつてゐたのであつた。此の遊びがもつ興味の價値については、かの子供自身がこの遊びを發明したか、或は他人が教へたかといふ點などは重大問題ではなく、我々の興味とする處は他の點にある。母の外出は子供に對しては決して愉快なことではない。又全然無關心な事ではない。子供が、この苦痛なる經驗を遊戲として繰返すといふことは、快不快原則からは何ういふ説明が加へられるか。この解答は斯うであらう。即ち母が外出する事(苦痛)は、母が歸宅する事の喜びを、必然の結果として含んでゐねばならぬ。そして歸宅といふことに、この遊戲の眞の目的があるのであると。然しながら是の説明に反對しては、斯ういふ事が云へる。遊戲の初めの部分、即ち母が外出するといふ事それ自身が、遊戲として示される場合が甚だ多いといふことで、母の歸宅を含んだ即ち全體の遊戲として示される場合は、それよりも遥かに少ないといふ事が云はれてゐる。

この種類の分析では、一回のみで的確な結論を得ることは難いが、然し虚心に考ふる時は、その動機は、子供がその經驗を遊戲に代へたといふ事であると思はざるを得ないのである。子供は、最初は受動(パッシーブ)的な立場で、經驗に捉へられたのだつたが、今度は、自ら能動(アクティーブ)的の役割をとつて遊ぶやうになつた。その遊びは不快な性質であるにも拘らず、繰返してゐるのであつた。この不快を繰返すといふ努

力は、或る衝動に基いてゐるのである。卽ちその衝動は、或る狀態を自分の意のまゝに操縱する力を得ようとする衝動である(力の本能)。これは追憶の愉快な場合でも、獨立して現はされるのである。然しこれ以外に他の註釋も試みられる。卽ち物を抛げることは、現實にあつて抑壓されたる復讐衝動の滿足であるかも知れない。つまり、母が自分を捨てゝ外出する事に對して仕向けた行爲である。さうだとすれば、それは『よろしい、あなたは行きなさい、あなたは私には要らない、私の方からあなたを追出してやる』といふ意味かも知れぬ。その子供は其後一ヶ年程經た頃、自分の氣に入らぬ玩具を抛げ捨てながら『戰爭に行け！』と云つた。これは父が戰爭に行つたことを聞かされて、その父の不在なのを喜んでゐたのであつた。それ故、これは自分が母を獨占するのに就いて、父を邪魔にしてゐた明瞭な表現である。(一)

【註】(一) この子供は年齢五年三ヶ月になつた時に母に死なれた。今、彼の母はオーオーになつた(死んだ意)が、子供は少しも悲しまなかつた。母の死前に弟が生れた。それが彼の強き嫉妬となつた。

他の子供に就いて觀察すれば、これと類似した事で、人間の代りに器物を抛げつけるやうなことをするのがある。(二) 斯樣なわけで、受けた深い印象を精神作用の裡で消費してしまひ、この印象を十分に操縱し得るところの强迫は、根原的に快不快原則とは別個に獨立して存在するかといふ疑問が生じな

いだらうか。然し乍ら此處に論じた例では、子供には繰返すといふことが又別個の快感であるけれども、更にそれ以上に直接の多大な快感を感じたので、この場合に限つて不快な印象をも遊戲として繰返すのかも知れない。

【註】（一）一九一七年『イマゴ』第五卷參照。

この遊戲の問題を更に進めてみると、猶まだこの二つの概念の間に、我々の躊躇を解くことが出來ないものがある。子供等の遊びを見ると、彼等が現實に於て受けた種々の印象を、遊びの中で繰返してゐることを認めないわけには行かぬ。彼等はこれを繰返すといふことで、その印象の力を抽出消散（アブレアギーレン）する。そして印象を受けた時の狀態を、彼等自身で意のまゝ操縱しようとするのである。が、然しこれと同時に、生活中に起る主要な願望にも影響されてゐる事は明らかである。それは早く大人になつて、大人が爲してゐるやうな性能を得たいといふ願望である。この他猶常に認められるのは、不快な經驗を遊戲として利用してゐる場合に、それが不快な經驗だからといつて遊戲とするには差支へないといふ事である。例へば醫師が子供の咽喉を診察し、或は小手術を行ふ時は、この怖ろしい經驗が其後の遊戲の題材として採用される。尤もこの場合には、他の原因から快感を得てゐないとは云へないが、兎に角經驗が受動的であるのを、これを遊戲によつて能動的に變更するといふ事、それによつて

最初に不快だつた經驗を今度は遊び仲間に適用し、而して周圍の人に對して及ぼすのである。

斯く論じて來ると、遊びの動機といふ事には、或る特殊の模倣衝動などを假定して考へる必要はなくなるのである。これは見物人を對照としてゐる點が子供の遊びとは違ふが、例へば悲劇の場合の如きは、最も苦痛なる印象を見物人に與へざるを得ない。然るに見物人はこれによつて非常な享樂を感じてゐる。この事は、快不快原則の支配の下にあつても、それ自身不快なるものが、或る仕方によつては記憶の目的となり、又は精神的の働きの目的となすことが出來るといふ事を信じねばならぬ事になる。これは何う説明すべきであらうか。經濟的見地に基いた道德觀の理論によれば、最後に於て差引快感の多くなる場面を扱へば足りるであらうが、我々の目的の爲めには、その説明では役に立たぬのである。何故ならば、これらの目的は快感(追及)原則の存在と、その主權を假定すれば足りるからであつて、過去に於てはそれで濟んだが、快不快原則を超えた或物が働いてゐるといふ事に就いては、何等論及する處がないからである。その原則を超越したものは、恐らく快不快原則よりも早期に現はれて、快不快原則と共に、獨立して別個に働いてゐたのかも知れない。

第三章

二十五年間の努力の結果、精神分析の技術の直接の目的に、徹底的の變化がもたらされた。最初は分析醫師が患者の自覺し得ざる無意識を察知して、その種々なる構成要素の綜合を行ひ、それを機に乘じて患者に告げる事であつた。卽ち精神分析は註釋の術であつた。然るに、これでは治療上の效果が齎らされなかつたので、次には患者自身の記憶に基いて無意識の再綜合を行ひ、これを患者に確認させようと强ひる事であつた。この場合の努力は、患者の抵抗といふことが主要點であつて、從つて當時の技術としては。出來るだけ速かに無意識を曝露するといふことであつた。そして、それに患者の注意を呼び、人的影響によつて（こゝに於て轉嫁として働きを及ぼす暗示が必要となつた）患者にその抵抗を放棄させることを敎へるのだつた。

然し乍ら、其後に至つて此の目的、卽ち無意識を意識面にもたらす事は、この手段によつては十分に遂げ得られないといふ事が益々明かになつた。患者は抑壓されたものゝ總てを、恐らくはその主要な部分をも追憶することが出來ない爲めに、分析者は彼に示した結論が正確であるといふ確信が得られないのである。こゝに於て分析者は、それをむしろ過去の一斷片として患者に追憶させる代りに、

抑壓されてゐるものを現在の經驗として反覆させるといふ事に餘儀なくさせられたのである。この再現（反覆すること）は、患者には歡迎されないやうな眞實さで現はれて、その中には常に嬰兒時代の性的生活、換言すればエディポス・コンプレクス Edipuskomplex 及びその生産物の斷片を含んでゐる。そして轉嫁といふ事が醫師と患者との間に正規的に演ぜられる。治療がこゝまで達した時を早期の神經症が新しき神經症で置換されたといひ、その症狀を轉嫁神經症と稱してゐる。分析醫はこの轉嫁神經症の範圍を出來るだけ小範圍にとゞめ、且つ出來るだけ多くの記憶を、この中に引き出して、而して反覆の餘地を出來るだけ僅少ならしめむと努めるのである。この記憶と再現との間に生ずる關係は、色々の場合によつて異つてゐるが、一般に云へば、分析醫師はこの治療法の過程を消略することは出來ない。醫師は患者をしてその忘却された生活の或る斷片を再現せしめねばならぬ。そしてその斷片中に、或る程度まで殘留して活動せる作用を認めしめねばならぬ。この活動せる作用に現在の現實として現はれるものは、常に忘れられたる過去の反映であることがある。若しこの方法が滿足に遂げらるゝならば、患者は悟ることが出來、それによつて治療的效果が生ずる。その效果は患者のこの確信に基かねばならないのである。

【註】（一）『精神分析の技術』『追憶、反覆及び完成』（神經症學小論集四卷四四一頁、一九一八年）參照。

神經症患者の精神分析的治療中に於て現はるゝこの反覆強迫症を、更に明瞭になさむが爲めに、患者の抵抗と戰ひつゝ、吾々は無意識の抵抗に關したものを取扱ふものだといふ誤つた觀念を、全然放棄せねばならない。無意識的、卽ち抑壓された材料は、治療の努力に對しては何等の抵抗を示すものではなく、壓迫する力に打勝つて、自分の發路を開かうとしてゐる以外には何等の目的を持つてゐない。この發路は、意識面に向ふか、又は或る言行の手段によつて開放されるのである。また、治療に對する抵抗は、精神生活に於ける高い層、高い區域、卽ち嘗て抑壓をもたらした處の部分から生ずるのである。然し乍ら抵抗の動機、殊に抵抗そのものは、治療中には無意識とされてゐるのであるが故に、我々は自分の云ひ現し方の不十分なることを知つて、これを修正せねばならない。卽ち我々は意識と無意識との對照を論ぜずして、統一されてある自我と、抑壓されてある働きとの間の對照を論議するならば、この矛盾は容易に避けることが出來る。自我の眞髓と云はるゝ自我の多くは、明かにそれ自身が無意識のものである。唯その一小部分のみが前意識の部分に屬してゐる。斯樣に、單に叙述的の云ひ方を、組織的卽ち動的の云ひ方に換へるならば、被分析者の抵抗は、彼の自我から生ずるものと云ひ得る。これによつて反覆強迫症の原因は、無意識內の抑壓されたる要素であるとせざるを得ない。抑壓されたる要素は、恐らくは、治療の操作が抑壓を解き得る迄に進むに非ざれば、出顯され

ないやうになつてゐるのである。

意識及び前意識の自我の抵抗は、快不快原則の爲めに役立つといふことに疑ひはない。それは抑壓されたる材料の解放に際し、この場合に生ずる苦痛を避けむとするのである。我々は現實作用に訴へ斯かる苦痛感が認許されむことを努力してゐるのである。反覆强迫症は、抑壓されたるものゝ力を表現せむとするのであるが、これは快不快原則に對して、如何なる關係に據るものと見做すべきであらうか。反覆强迫症によつて復活されたる働きの大部分は、自我に對して不快感を齎す以外には、何等の役を持つてゐないことは明かである。何故ならば、それは抑壓されたる衝動の活動を曝露させようと助力してゐるからである。この不快なる事は既に說明され、且つその說明は快不快原則に據らずして與へられた。卽ち、心的作用の一區劃に對する苦痛は、同時に他の區劃に對しては滿足であるからである。然し乍ら此處に記述せむとする新らしき且つ奇なる事實は、反覆强迫症は何等快感の要素を含まざる過去の經驗の復活であるといふ事である。然かもこれは、その衝動のまゝの狀態に於てさへ抑壓されたる如何なる時期にあつても、決して快感を與へられるものではなかつたものである。

嬰兒時代の性的生活の反映は、それに關聯した願望と現實とが融和し得なかつた爲め、又子供時代の發達が不完全であつた爲め、遂に萎縮すべき運命を持つに至つた。それは最も悲慘なる狀態で、且

つ深き懊惱感に伴はれながら終りを告げたのである。そして愛情を損失したこと、愛情に失敗した事は、自身の感に、ナルチスス型負傷にも比すべき深き傷痕をとゞめた。これは自分の經驗及びマルチノウスキー氏によつて證明された處によると、この傷痕は、神經症患者の中に共通なる劣等コンプレクスに對して、重大なる要素を貢獻したのである。(一)斯くのごとく、幼兒の生理的發達としての性的自給は、極限せられてあつて、滿足なる終局を遂げなかつたのである。それが爲に、將來『自分は駄目だ、決して成功しない』といふ感を絕えず持つことになる。幼兒が親、殊に異性親に對して抱いた戀愛の羈絆は斷ち截られ、而して新らしく生れたものによつて起さるゝ嫉妬で終つた。これは愛する親が不誠實であるといふ誤らざる證據である。幼兒は其後苦心慘憺して、自分にも斯かる子供を得むと努めたが、矢張り無殘な失敗に終つた。同時に、嘗て與へられた愛情の一部の撤回、益々嚴格なる躾け、教育、苛酷なる言葉や折々の膺懲等によつて幼兒は十分なる譴責を味はされるに至つた。この時期の典型的愛情が終りを告ぐるに至つた時、此處に或少數の典型的人物が現はれるに至つたのである（譯者曰、神經症患者をいふ）。總てこれらの好ましからざる、又は苦痛感を受けたる時の狀態は、分析中の轉嫁の場合に神經症患者によつて繰返され、それが潑剌として再現してくるのである。この場合に、往々患者は治療を中絕する。そして彼等は譴責を受けたる時の感情を再現して、分析醫に向つ

て不穏當なる言辭を弄し、又は冷淡なる態度を採り、或は適した者に嫉妬を向け、且つ小兒時代に熱烈に抱懷してゐた願望の代償として、將來の或る大なる成果を約束させる。その成果は實現されなかつたものであつた。これらの總ての行動は毫も快感を與ふるものとは云へない。これが新しい經驗として再現するよりも、むしろ記憶として復活される方が、まだ苦痛が少ないと思ふのである。これは滿足を得むとする衝動の問題である。然し乍らこの經驗は、この滿足を感じさせる代りに苦痛を齎すのであるが、そんな事には何等の關係なしに追求される。そして行動は同じく無關心に繰返される。それは、實に力强い强迫なのである。

【註】（一） Marcinowski: Die erotische Quellen der Minderwertigkeitsgefühl. 參照。（Zeitschrift für Sexalwissenschaft 1918. Ⅳ.）

神經症患者が精神分析中に於て轉嫁の場合に示す症狀は、常人の生活中にも亦認められる。これは恰も追求してゐる運命の結果かと思はれる觀がある。この事は結局は超自然的容色を帶びるもので、精神分析では、最初から斯樣な症狀を持つてゐる者でも、大體に於ては自ら招いたものとして、子供時代の影響によつて決定されたものと見做してゐる。これが爲めに現はれる强迫症狀は神經症患者の反覆强迫症と毫も異らない。然るにこの人達は、症狀として現はれる筈の變態的衝突の何等の兆候さ

へも示さない人達である。そんな譯で對人關係なども常に同じ仕方で終る人々がある。例へば恩人が後に至つて色々な仕方であるが惡意で報いられて、忘恩の辛味を味はゝされる。又情をかけてやつた友人から、いつも裏切られる人がある。或は自分の眼にも他人の眼にも認めらるゝやうな權威を與へて置いた者を、其後間もなく自身で其人の權威を奪ひ、更に新規の人を求めて權威を授くる人がある。更に又戀人に對する戀愛關係が、いつも同じ過程や結果を來たす人がある。これらの人達が同じ事を無限に繰返すのは、決して怪しむに足りない事である。これは當人の自發的言動に留意すれば、その生活中に、同一の經驗を繰返さすべき不變の性格を認めることが出來るのである。猶一層不思議な事は、受動的にさういふ事が自己に振りかゝつてくる場合である。卽ち自分からは何等の努力はせずにゐて、然かも繰返し繰返し同じ運命に遭遇して失望する人がある。例へば或婦人が次ぎ次ぎに三人の男と婚姻して、その夫は悉く間もなく病死したので、三人の夫の最後の看護を爲したといふ話がある。タッソー Tasso は斯様な運命を詩的叙述をもつて叙事詩に書いた。(『聖都解放』Gerusalemme liberata) それは不思議な感を受ける。その叙述によると、英雄タングレッドは彼の戀人グロリンダを誤つて殺したのである。それはグロリンダは敵の武士の甲冑で身を假裝してタングレッドと戰つたからである。この娘の死屍が葬られた後、彼は不思議な魅せられたやうな森の中に深くわけ入つた。こ

こは十字軍の陣營であつた。そこで彼は劍を振つて大樹を切倒した時、大樹の幹から血が流れてグロリンダの聲が出た。グロリンダの靈は彼が切倒した大樹の中に宿つて、戀人に對して再び殘忍なる行爲をしたことを責めたのであつた。

既述の如く『轉嫁作用』の言動について、人間の運命の見地から考へた觀察によれば、快不快原則を超越したる反覆强迫症といふものが、我々の精神生活中に實際に存する事を假定し得るであらう。我々は今この驅使する力を戰爭神經症患者の夢及び子供の遊戲衝動と結付けたいと思ふ。勿論他の動機の混入せざる純な形に於ては、反覆强迫症の働きを認むる事は稀である。既に子供の遊びに就いても、その遊びの根原が許す他の註釋を指摘して置いた。そこには反覆强迫症と及び他の直接快感を與ふるが如き衝動の滿足とが、秘かに纒綿してゐたやうである。また轉嫁現象は、抑壓を保持せむが爲めに示される自我の抵抗に明かに役立つものである。そして自我は快不快原則を確保せむとしてゐるやうである。反覆强迫症は恰も抑壓を保持する自我を援けむが爲めに現はれるやうである。そしてこれを運命强迫症とも呼べよう。その結果新しい不思議な衝動を認容する必要はなくなるであらう。我々はこして最も疑ふべからざる場合は、戰爭神經症患者の夢である。が、他の場合にても綿密なる研究によれば既知の動機の働きによつては說明されない事を認容せねばならぬ。それ故に反覆强迫症を假定し

たに就いては、十分なる理由を有してゐるのである。これは快不快原則よりも更に原始的な、それ以上元素的な本能的のものである。そしてこれは快不快原則の土臺となるものである。然し乍ら我々の精神生活の中に存在する反覆强迫は、それが如何なる作用であるか、如何なる條件の下に發するか、又如何なる關係を快不快原則に對して有するかを知らむと欲するものである。快不快原則は我々が今日までは精神生活に於ける興奮の道筋を支配してゐるものと認めて來たつたのである。

第四章

次に述ぶる事は單に思索である。然し思索は或は重要なる意味を齎すやも測られない。各人は、各所有する特殊の心持ちによつてこれを承認したり、又は無視したりしよう。それを我々はむしろ好奇心から出發したる觀念の展開と稱して、それが何處に導いてゆくかを知らむと欲するのである。

精神分析的思索は、次のことに基づいてゐる。卽ち、意識の働きは、精神作用のうちの大部分を占むることは不可能で、たゞその中の特殊の作用にあづかるのみだといふ事を認め、こゝに立脚して無意識の作用の如何を硏究して得たる印象に依つて、思考されるのである。超心理學的に云へば、これは意識 Bewusstsein (B. W.) と名づけられたる特殊の區劃の作用であることを主張する。その區劃は本質的に外界より來る刺戟に對して知覺を生じ、そして快樂と苦痛感とは內界の精神機能によつて生ずるものであるが故に、それを我々は知覺意識區劃と呼ぶのである。この區劃は、外界と內界との境界にあらねばならず、且つ外界に面して居り、その內側には他の精神區劃を包擁して居らねばならぬ。

この假定は、何等の新しさを有してはゐない。腦解剖に於ける分位と同樣のものである。腦解剖に

よれば、腦皮質中に意識の中樞の存在を認めて居り、皮質は腦中樞を包んで腦の最外表部を形成してゐる。腦の解剖に於て何故に――解剖的の用語によれば――意識中樞が頭腦の深部若しくは底部に安全に置かれずして、却つて外表部に置かれてあるかは怪しむに足らない。恐らく我々の知覺意識區劃の位置に對してなした假定から、前記の解剖的事實を深く推論する事が出來るであらう。

知覺意識區劃に對して精神作用が與へらるゝ場合、意識のみが唯一の特質を有するものではない。精神分析學の經驗によれば、他の區劃に與へられた總ての刺戟と雖も、其處に恆久的痕跡を殘さねばならぬといふ事になる。この痕跡が記憶の記錄の基礎を作るのである。然しこれは意識されるや否やといふ事には無關係である。これらの記憶の記錄は、この痕跡を與へた精神作用が毫も意識に達しなかつた時と雖も、屢極めて強く且つ持續性をもつてゐるものである。然し乍ら我々は斯かる持續性を有する刺戟の痕跡が、知覺意識區劃それ自身にも持續されねばならぬといふ事は信じられない。(二)何故ならば、若しこの痕跡が知覺意識區劃に持續されるならば、意識は新しき記憶を包含するといふ能力が、直ちに制限されてしまはねばならぬことになる。これに反して、これらの痕跡が無意識になるものと假定すれば、一つの精神作用の區劃にあつて、意識の現象に伴はるべき無意識の作用の存在を說明せねばならぬ事になる。換言すれば、意識になり得る作用を示す他の區劃にまで、記憶の痕跡をゆ

だねるといふ假定にしたとて、これもこの說明には足らない。これは考慮を絕對に束縛するやうなことはしなくとも、意識になるといふ事と記憶の痕跡を殘すといふ事とは、同一區劃內に於ては、相互に相容れざる働きであることを考へさせられる事になる。

【註】（一）『ヒステリーの理論』（一八九五年）參照。

斯くて我々は次の如く云はざるを得ない。知覺意識區劃に於ては、刺戟の働きは意識されるが、その痕跡は殘らない。記憶を生ぜしめる總ての刺戟の痕跡は、この區劃に向つてきた刺戟が傳はつてゆくべき次の內側の區劃でなくてはならぬといふことである。この意味で、自分は一九〇〇年の夢の註釋の思索の處で、記憶の方法を記述して置いた。若し我々が意識の根原に就いて、他の根原から知り得ることの如何に僅少なるかを考へるならば、意識は記憶の痕跡の爲めに起るといふことで、その位置を放棄せねばならない。この言葉は從來ある程度まで受入れられたものであつた。

斯くして意識區劃は、刺戟に對して何等の痕跡を殘さゞるものと認め得る。斯樣な特質を有してゐるのである。この特質によつて、本質に持續的變化を齎すことなく、それが意識になるといふ事によつて、その刺戟は解放され消散されるのである。一般の精神區劃に比して、此の區劃の異點とされるのは、この區劃に示される因子といふことで始めて說明ができる。この因子は、他の精神區劃には存

在されずに、意識區劃と外界との直接の接觸を爲してゐる知覺意識區劃の曝露されたる地位に存在するものであらう。

我々は茲に或る未だ分化されないで受感性を有する物質として、原始的生物の存在を假定するならば、この生物の外界に面した側は漸次外界の刺戟によつて分化されてくる。そして刺戟を受納しようといふ獨得の機能を發するに至るであらう。胚芽の發達の過程が進化の歴史を繰返すといふ事に從ひ、中樞神經組織は外皮より生じ、灰白質は原型的皮質より出來、其處より本質的性質を繼承して來たものである。かくて、この物體の表面には、間斷なき外界の刺戟を受けて、この物體の或る深さまで恆久的の變化を受くるといふ事は、容易に考へらるゝのである。その結果、その刺戟は、深層に及ぶに從ひ、その過程が曲げられる。そして皮殼が作られ、これが遂に刺戟の結果として燃え固まり、刺戟を受くるに最も適したる狀態に變じ。同時にその組織は其後毫も變化されないものとなる。この觀念を意識區劃にあて嵌めてみると、結局次の事を意味する。卽ち該區劃の因子は、刺戟の通過に際しても、其後の恆久性には毫も變化を受けないのである。それは因子が既に極度まで變化を受けて了つたからである。然し乍らこの假定に基く時には、猶意識の現象を生ずる能力を保留せねばならなくなる。斯く物質が斯樣な變更を受け、それに達する刺戟が如何なる狀態にあるかといふ事に就いて

は、諸說一定せずして的確なる證明を下し難いのであるが、然し刺戟は、一つの因子から他の因子に送達せらるゝに際して、或程度の抵抗に打勝ち、その抵抗が漸次減退してゆく事によつて、刺戟が恒久的痕跡を殘すといふ事を假定するは難くない。意識區劃に於ては、一つの因子から他の因子に刺戟が傳達せらるゝに際して、その抵抗は消失するに至るであらう。此の概念は、ブロイエル氏の『精神區劃の因子に於ける固着されたる力(エネルギー)と流動エネルギーとの區別』に一致するであらう。(一)斯くして意識區劃の因子は、固定勢力を扱ふ事なく、唯開放さるゝやうな形になつてゐる流動勢力を取扱ふ事になつてゐるのである。然し我々の考ふる處では、この假定を確定的のものと見做さゞる方が可ならむと思ふ。兎に角我々の思索は、こゝに於て意識の根原を意識區劃の地位まで連絡を取つたものと主張できるであらう。而してこの區劃に於ける刺戟の持續に就ては、同樣に、意識の根原と結合せしむる事が出來たのである。

【註】(一)『ヒステリーの硏究』フロイド・ブロイエル共著(一八九五年)參照。

更に、受感性を有する外皮を持つた生物に就いて云ふならば、この生物の一塊は、最も力あるエネルギーの精神をもつて外界に浮遊してゐるものと假定すれば、若しそれに刺戟に對する保護が具備されてなかつたならば、外界より來る刺戟の作用によつて撲滅されるであらう。それ故生物は、その保

護を外皮によつて獲得するのである。この外皮は、生物に屬する組織であるが、或程度まで無生物の性質を受けるに至る。それは特殊の殼又は膜としての作用をなして、刺戟を防禦するのである。卽ち此の防禦作用あるが爲めに、外側の力は、その生物性を完全に保持せる次の層に對して、極めて僅少なる力を及ぼすに過ぎなくなる。

斯様に生物は、外皮によりて保護されてゐる爲めに、巨大なる刺戟も、これを無害にすることが出來るのである。これは外皮の死によつて、內側の物質を死から救つたのである。而して、外界の刺戟が、保護柵を通過して來る時に、危險程度の强さを現はさないことになる。何故ならば、有機物に對しては、刺戟を受くるよりも、刺戟に對して保護されるといふ事が主要條件だからである。保護柵はそれ自身に力を有し、內界からの力の轉換を行ひ、特殊の形で之を保護し、又外界より生ずる巨大なる力の破壞的影響を中和するのである。刺戟の受納は、外界の刺戟の方向、質及び質に就ての情報を受くるといふのが目的である。故に、それは外界の世界の印象の見本をとれば足りる。この見本を、云はゞ味はへばいゝのである。高級に發達した生物については、外界の刺戟を受くる仲介であつた受感外皮は、體の底に引込まれたが、その一部は共通の保護柵の直下の表面に殘された。此等の部分が感覺機を構成するのである。そして本質的に特殊の刺戟の受納に適するやうに配列される。又巨大な

る刺戟に對しては、更に新しき方法を用ひてゐる。その保護機關といふのは、不適當なる刺戟を防禦し、外界を咀嚼し、外界の見本を取るのみである。我々はこれを、外界に接觸して直ちに再び引込ます觸覺(アンテナ)に比較する事が出來る。

自分は此處で簡單に一つの問題に觸れたい。これは、最も完全な取扱ひを受けねばならぬものである。即ちカントの主張せる『時と空間は精神的作用には必ず伴ふものである』といふ事は、精神分析によつて得られた知識によつて裏書きされるであらう。我々は經驗によつて、無意識の心的作用には「時無し」といふことを發見した。即ち無意識の作用は、時の順位によつて配列されず、時の經過の影響を受けず、時の觀念は適用されないのである。「時無し」といふことは否定的の意味であつて、これは意識の精神作用と比較する時に、初めて明瞭にわかるのである。斯くして、我々の時に對する抽象概念は、全然、知覺意識區劃の作用によるもので、この區劃が、それ自身を知覺した事によつて、初めて時の觀念が生ずるのである。該區劃の作用の現れ方に於て、刺戟に對する猶一つの保護が示されるのであるが、この說明は或は明瞭を缺くやも知れざれど、これで止めて置く。

斯くて我々は、生物體は外界の刺戟に對する保護を備付けられてあるといふ論點に達したのである。これに先立つて我々は、外界の刺戟に擁護を示す部分の次層の皮質は、外界の刺戟を受納する機

能として分化されたものであることを知つた。この受感性を有する皮質は、(これは其後に於て意識區劃を構成するもの)又內側からの刺戟も受納する。卽ち、外界と內界との間に介在するこの區劃と、及びこの區劃が兩者に相互に作用する狀態の差は、該區劃及び總ての心的機制の働き方を決定する要素となるのである。外界に面しては、其處に刺戟を防ぐ柵があつて、爲めに來襲する大量の刺戟も、影響する處は僅少となる。然るに內側に對しては、何等の刺戟に對する保護を備へてゐない爲めに、深部より生ずる刺戟は、何等減退される事なく、直接に該區劃に殺到する。この刺戟の通過する道程の或特質として、此處に快不快感を發生するのである。この內側より生ずる刺戟は、その强度及び質(又は恐らく其の振幅)に於て、外界の刺戟よりも一層比例的に作用するのである。是等の狀態に就ては、確定された二つの事がある。第一には、內側よりの刺戟は、外側よりの刺戟に比して、快不快感が大部分を占めてゐるといふことである。この快不快感は、精神機制の作用に對して、その指示となるものである。第二には、內側よりの刺戟が齎らす大量の苦痛に對しては、或反應が起るのである。卽ち、大量の苦痛となるべき內側よりの刺戟を、恰も外側よりの刺戟の如く取扱ふ傾向があるといふことである。これは、外側の刺戟に對する防禦として存在せる柵の作用を、此の場合に適用せむとするのである。これが卽ち投出作用 Projektion の根原となるのである。この投出作用は、病的狀

態の發生の場合には、重大なる役割を爲すものである。

前述の事實によつて、我々は快不快原則の主權を理解する處に接近して來た感じがする。然し未だ、この說に背馳した種々の場合を說明するには足りない。で、もう一步進めようと思ふ。刺戟に對する柵を破壞する程の强大な外界の刺戟を、外傷的刺戟と呼ぶ。(自分の考へでは、外傷の概念は、他の場合に效果的である柵を、此の場合には打破されるといふ事に關した觀念に基いて、斯く呼ぶのであらう)外傷が起るといふ此の出來事は、明かに有機體の力の働きに、頗る廣汎に亙つた擾亂を起さしむるに疑ひない。そして、あらゆる防禦作用の働きを開始するに至る。然るに快不快原則は、此時に於ては何等の役を爲さない無用なものとなる。何故ならば、精神機制は、斯かる大量の洪水を最早防ぎきれないので、此處に他の働きが現はれる。卽ちこの働きは、漸入して來た刺戟の大量を、精神界に於て統御し、これを拘束し、而して相當の排出口を求めて、精神界より解放して了ふのである。

肉體的苦痛の特殊の不快感は、恐らく、刺戟に對する柵が、或部分に於て破壞された結果であらう。それが爲めに、末梢に於ける點より、中心精神機能に向ひ間斷なく刺戟が流れる。その刺戟の性質は、恰も內側より來るものと同じ事になる。それに對して精神生活は如何なる反應を示すであらうか。それは、打破された部分に向つて此の刺戟に相當する力があらゆる方面より集まつて充塡する。

換言すれば、其處に巨大なる逆充塡が發生することになり、その爲めに他部分の精神區劃は自己の所持せる力を削減されるに至る。その結果として、他部分の精神活動の廣汎に亙つた麻痺又は減退が起る。我々は、斯かる例によつて苦痛といふものゝ最初の型卽ち原型に關した超心理學的概念を作り得るのである。これよりして、最も多量に充塡された區劃でさへも、更に流れくる新しき力を受け、これを「不動」の充塡に轉換し、それを精神的に拘束するに至るといふ結論を得ることが出來る。この「不動」の充塡が强ければ强い程、その拘束する力も益々大となり、反對に充塡が低ければ、拘束力も準じて低いのである。故に、刺戟に對する柵が破壞されたる時ば、その影響する處は益々强烈となるのである。この見地に對して反對がある。卽ち刺戟部位に於ける周圍の力の充塡を强盛ならしむる事は、來襲する刺戟の直接の結果なることを說明できるといふことを楯として反對するが、その楯は反對の根據とはならない。若しそれが說明出來るとすれば、精神作用はその力の充塡を單に增すのみであり、そして苦痛の辛辣なる性質及び他の部分に於ける力の消失は、說明は出來なくなる。激烈なる力の解放によつて、苦痛を醫する事が出來るといふ事は、我々の此の說明によつて初めて可能である。何故ならば、この解放は反射運動によつて起るのである。といふのは、この解放は精神機制の介在なしに起るのである。超心理學的と稱する論議の總ての不確實性は、矢張りこれに基因してゐる。

卽ち、精神區劃を構成する因子の刺戟に對する示し振りに就いては、我々は全く無知であり且つそれに就て何等の假定をもなし得ないからである。かくて我々は、絕えず大なるX（エックス）を取扱ひ、そのXをあらゆる新しき公式中に移動してゆかねばならぬのである。然し、この刺戟に對する働き振りは、力の量の差で示さるゝ事は容易に承認でき、又質にも多種あること（それは振幅の方面にて）が容認される。かくのごとく、我々が此處に齎した新しき思索は、ブロイエルの提言に基づいてゐる。ブロイエルは、一つの精神區劃に於て力が充塡されるに當つて、其處に二種の方法の存する事を述べてゐる。一は、精神區劃（或はその因子）の充塡にして、これは自由に流れ、解放せむとしつゝあるもの、二は、不動の狀態に充塡されたるものである。恐らく精神機制中に流れ込む力が拘束される事は、自由に流るゝ力が、不動の狀態にまで換へらるゝ事であらう。

普通の外傷性神經症は、刺戟に對する柵が廣汎に亙つて破壞された結果であると見做して差支へないであらう。さうすると往時の無邪氣なショック說を再び更生させるやうな事になつて、其後に生じた威めしい心理學の見解に反對してゐるやうに見える。この見解といふのは、該症狀の病原を器械的力の結果とは見ずして、むしろ驚愕と及び生命の脅威とに歸してゐるのである。

然しこの相反する二說の見地は、相互に矛盾してはゐないが、然し精神分析學的概念では外傷性神

經症の說明をショック說の如き幼稚な說明とも決して一致させてはゐない。ショック說では、ショックの本質は直接に分子的構造に負傷を及ぼしたものであり、又は組織學的構造卽ち神經系統の本質に及ぼしたものであるといつてゐるが、我々はこれを外界の刺戟に對して備へられた精神機能としての柵の破壞といふことに考へ及ぼさねばならぬとし、及び刺戟に直面すべく餘儀なくされた仕事から受けるものと見做してゐる。此の場合の驚愕は我々にとつて意義を有してゐる。といふのは此のショックを齎す條件としては、相當なる準備をせんとした機能が失敗した事なのである。相當なる準備とは第一に刺戟を受くべき區劃に向つて、力の過剩充塡をせねばならぬといふことである。若しこの區劃の充塡が低い場合には、その結果として、進入する刺戟を拘束する事が出來なくなり、擁護柵は容易に破壞されてしまふ。それ故、刺戟に對する豫備及び刺戟を受くべき區劃の過剩充塡は、刺戟に對する最後の防禦線と見做すのである。外傷の多數の場合に於ては、準備せざる區劃と、過剩充塡されて完備せる區劃との差は、これが外傷の深淺度を定めることになる。然し乍ら或る程度を超えた强き外傷の場合（譯者曰、恐らく戰爭神經症を指す）には、最早この相違は重要なものではなくなる。かういふ外傷性神經の患者が、常に危險を受けた現場の夢を見るといふ事は、願望實現といふ夢の目的、卽ち快不快主義のもとに、幻覺によつてこの場面を見るのであつて、矢張り夢の作用を爲してゐるのであ

る。然し乍ら此の種の夢は、快不快原則の目的を果すに先立つて、他の目的を有してゐるといへる。即ちそれは豫感を喚起して、刺戟を操縱する力を復活しようとする企圖を持つてゐる。この豫感が喚起されなかつた爲に、外傷性神經症が惹起されたのである。斯ういふわけで、此の種の夢は、我々に精神作用の働き振りの眞相を見せて呉れる。この働き振りは、快不快原則には背馳することなしに、然かもそれに全然獨立して現はれたもので、快を追ひ不快を避けるといふ目的より以上に逆つて、猶早い時代の根本を持つてゐたのである。

此處に至つて、我々は始めて「夢は願望實現性を有する」といふ原則に、一つの除外例を作らねばならなくなつた。但し杞憂の夢 Angsttraum は除外の中に加へない事は、精細に亙つて繰返して述べた。膺懲の夢も、これと同樣である。何故といふに、これらの夢は禁斷された願望實現の代りに、それに相應した膺懲といふ事が示されてゐるからである。云ひかへれば、罰せられねばならないやうな衝動を心に持つた、その反應として表はれた罪惡感の願望實現であつて、要するに贖罪の願望實現である。然し乍ら前記の外傷性神經症患者の夢は、願望實現の部類に入るゝことは出來ない。更に又精神分析中に屢起る夢で、幼稚時代の精神的外傷の追憶をもたらす夢の如きも、同じく願望實現とは云はれない。これらの夢は、むしろ反覆强迫症の性質を帶びてゐて、これを分析してみると、忘れられ

て且つ抑壓された經驗を再現しようとする衝動（無意識的ではない）に基くことが解る。斯樣に精神作用を擾き亂すが如き願望が起り、それに刺戟されて睡眠が破られる。その願望を充すべき夢が、睡眠を守るといふ事は、夢の仕事として本原的のものではない。

夢は、全體の精神生活が快不快原則の主權を受け入れた後に、始めて願望現實の作用を示し得るのである。故に若し其處に快不快原則を超えた或物があるとするならば、願望實現といふ夢の傾向に對しても亦有史以前の過去があつたといふ事を承認せねばならぬ。然しこれは、其後發達して來た快不快原則とは、決して矛盾はしない。快不快原則が破壞された時には此處に一つの疑問が起る。卽ち外傷を與ふるが如き印象を、精神的に拘束せむが爲めに、反覆强迫症を來す如き夢は、分析の方法以前にこれを認むることが出來るであらうか。この解答は、認むることが出來るといふことである。

戰爭の神經症の症狀は、戰爭以外の場合にも生ずるであらうかといふ事は、旣に他の個所に於て說明した。この說明の要點は、自我の衝突によりて容易に起り得るのである。[一] 本書の第九頁に述べた事實、卽ち外傷（精神的）を受くると同時に重傷（肉體的）を受ける時には、神經症を發する機會が僅少だといふ事實は、精神分析的硏究に從事して、二つの狀態を參照すれば容易に理解し得るのである。第一の狀態は、器械的震盪は、性的亢奮の源泉の一と見做さねばならぬこと（一九二〇年『性說に關す

る三論文』四版の內、鞦韆及び汽車旅行の結果參照)。第二の狀態は、一時的の苦痛、その持續中及び熱發はリビドーの分布に大影響を及ぼすといふことである。斯くの如く、外傷の器械的力は、性的刺戟の形によつて力を解放し、この刺戟は、刺戟に對する準備を有せざりしが爲に外傷を受けたのである。然るに、若しこれと同時に肉體的危害を受ける時には、刺戟の過剩は拘束され、負傷部分に於てナルチスス的超過充塡を齎すことになる。(Zur Einführung des Nazissmus, Sammlung Kleiner Schriften zur Neurosenlehre IV. Folge 1918 參照)。リビドー說に於て未だ十分證明されてはないが、メランコリーの場合に現はれる過大なるリビドーの分布に於ける擾亂は、その間に發する肉體的疾病によつて、一時除去されるといふ事は周知の事實である。可なり進行せる早發性痴呆症の場合でも、同じく肉體的疾病によつて、症狀の一時的寬解が認められる事は少くないのである。

【註】(一)一九二一年發行國際精神分析學會雜誌二卷『精神分析と戰爭神經症』の序論を參照。

第五章

受感的皮質は、內界より生ずる刺戟に對して、保護作用を持つてゐない。その結果、その刺戟の傳達は經濟的意義を增し、外傷性神經症にも比すべき經濟的擾亂を齎らすことが屢ある。この內界の刺戟の最も豐富な源泉となつてゐるものは、有機體の所謂本能である。この本能は、體軀より生じて精神機能に傳達される力の總てを代表するもので、心理學研究中にあつて、最も重要であり、然かも最も不明瞭のものとなつてゐる。

本能より生ずる刺戟は、拘束された種類のものでなく、むしろ開放を求めんとしてゐる流動的神經衝動に一致せるものであると假定しても早計ではあるまい。この神經衝動について、最も信賴すべき知識は、夢の研究によつて得られたものである。無意識區劃に於ける作用と、前意識根元に於ける作用とは、全然異つてゐることは夢によつて發見された。無意識に於ける力の充塡は容易に完全に轉嫁され、轉移され、又凝縮される。若しこれらの充塡が前意識に起つた時には、完全なる充塡は得られない。晝間の前意識にある殘物が、無意識の原則に從つて夢の仕事に織込まれた事は、これは夢の顯在內容が示せる好知の特質の存在の理由となる。自分は無意識に於けるこの種の作用を精神一次型作

用と呼ぶ。これは覺醒中に示さるゝ二次型作用に對して命名したのである。總て本能から來る刺戟作用は、無意識區劃の全體に影響するが故に、この作用は一次型作用の法則に從つて示さるゝのであらうといふことは決して新しい事ではない。猶一次型作用は流動性充塡と一致し、二次型作用はブロイエルの拘束されたるもの、卽强直性充塡と一致するものである。高層の精神作用は一次型作用に達する本能の刺戟を拘束する事が特務である。これを爲し損ずるときは、外傷性神經症に類似したる症狀を發するに至る。快不快原則（及びその階段たる現實原則）が、阻止せらるゝ事なしに其の力を現し得る機會は、前記の拘束力の良好なる場合に限られる。斯樣な狀態になる迄は、他の精神作用の働きが優つてゐるのである。卽ちこの働きによつて、刺戟を制御し、又は拘束せむとする力が現はれるのであつて、これは快不快原則に背馳するものでなく、それに獨立して且つ一部それを無視して働くのである。

早期の小兒時代の精神的生活々動及び精神分析的經驗によつて證明される處によれば、前述の反覆强迫症の發現は、極めて高度の本能性を有してゐる。これを快不快原則に對照する時は、運命的性質を帶びてゐる。子供の遊戲の場合に、不快なる經驗と雖も遊びの中で繰返してゐるのを認めた。これは受動的經驗によつて行ふといふよりも、子供はこの遊戲によつて不快なる强き印象を更に完全に操

縱し得る力を得るといふ爲めである。子供は、それを反覆する度毎に、自ら期待してゐる操縱力を得るらしい。子供は、不快でない經驗と雖も之を反覆せむとして努力し、且つこの經驗の印象を出來るだけ正確に再生せむと固守する。然しながらこの特質は後に至つて漸次消滅する――といふのは頓智は二度目に聞く時は其の效果を失ひ、觀劇は初回の時より二回目の時の印象は少ない。成熟者は一書を讀了して間もなくこれを再讀するは困難である。それらと同じである。斬新といふ事は常に興味を感ずる。然し乍ら子供は一度爲したる遊戲を又行ふこと或は遊戲の反覆を大人から要求されても飽きない。遂には大人の方で飽きて止めさせる。例へば面白い噺を聞かされた子供は、他の新しい噺よりも古いその方を聞きたがる。それを精密に反覆させたがる。若し噺し手がその話を間違ひでもするならば子供の方から正されたゞされる。だから噺し手が新しい言辭を用ひて面白くしようとしても無駄である。この事は毫も快不快原則と矛盾してゐない。反覆卽ち同一なることを發見する事は、それ自らが快樂の源泉でなければならぬ。分析中に、一患者は分析者より幼年時代の出來事を轉嫁によつて繰返すべく强迫される。この轉嫁の場合にはあらゆる點に於て快不快原則が無視されてゐる事は明かである。この場合患者は小兒の如く振舞ふのである。そして原型的經驗は、拘束された形に於ては存在せず、且つ二次型作用を現はすやうにはなつてゐないといふ抑壓した經驗の痕跡を、我々は明かに示され

る。この拘束されて居らないといふ作用は、夢に於て表現される願望瞑想を織出させる力をもつてゐる。これは覺醒中の經驗から得た殘渣に拘泥してゐる爲めに出來るのである。患者の取扱ひが終末期に來つた時、醫師が患者を完全に引放さむとする時、この時に於て前記の反覆强迫症が治療的障碍となる事を屢經驗する。これは患者が分析に親しんでゐない爲めに、一種の恐怖を感じ、むしろ其儘に殘して置かむと欲するものを、自覺されむとする恐怖である。これは、運命的强迫症の發現に對する恐怖の土臺となるものである。

如何なる鹽梅にて、本能的作用が反覆强迫症に連絡されてゐるか。これに對して次の觀念が生ずる。卽ち我々は一般的の且つ今日迄明瞭に認められなかつた一つの證跡に逢着した。この證跡とは、換言すれば、本能の特質である。而してそれは恐らく總ての生物に認めらるゝものであらう。この見地より、本能の定義は次の如くならう。本能は總ての有機體に宿つてゐる傾向であつて、それは有機體として早期の狀態を再建設すべく餘儀なくせしむるものであると。早期の狀態とは、外側の擾き亂さむとする力を放棄すべく餘儀なくされるものに外ならない。これは有機的彈性とも呼ばれよう。換言すれば有機體に於ける隨性とも呼ばるゝものであらう。(一)

【註】(一) これと同樣な思索が旣に繰返して主張された事を自分は信ずる。

本能に關する斯ういふ概念は、非常に斬新なものと感じられる。何故ならば、從來は本能なるものは我々をして改革や發達に導く要素であると信じたからである。然るに今此處ではそれと正反對な事實を認めしめられてゐる。何かと云へば、本能は生物の保守的性質を表現するものであるといふことだ。動物の生活に於ては、本能は歷史的に條件づけられたといふことを確實せざるを得ない例に遭遇する。例へば或種類の魚は産卵期になると隔つた特殊の場所に、卵を生まむが爲めに遠い旅をする。多くの生物學者は、これは魚が幼稚時代に居つた個所(卽ち鄕里)を求めむが爲めであると註釋する。又、渡り鳥の移住的飛行もさうだと云つてゐる。こんな例はこれで十分である。何故ならば、我々は遺傳の現象や胎生學によつて、有機體は反覆を强迫されてゐるといふ最も明かな證據をもつてゐるからだ。生活してゐる動物の生殖細胞は、その發達の過程に於て、祖先累代の動物の總ての形態を(非常に迅速に且つ省略された方法ではあるが)更に繰返すべく餘儀なくされてゐる。これは、最短の距離を經て、最後の形態に成らうと急いでゐるのでなく、過程中のあらゆる細目を辿つてゆくのである。或る重大な場合を除く以外は、この發達の過程に對する力學的說明は不可能であるが、この歷史的事實は決して無視できないのである。之と同樣に、動物界に於ける可なり進歩した種族と雖も、ある機能が失はれた時に、それと確實に同じ機能を再生するといふ事實がある。これを以ても我々は再

現力の强大さを認めざるを得ないのである。

繰返しを强ひるといふ保守的本能の以外に、新しき構成と進步とを促がす本能の存在することをも認めねばならぬといふ意見があるが、それに對しては無視することは出來ない。この問題に就ては後に論じよう。先づ第一條件として我々は玆に、總ての本能の目的は早期の狀態を再現するのだといふ假定を建てゝ、この假定を終局まで辿らうと思ふ。これは非常に深遠にして寧ろ神祕的に類する結論を齎すなどと云はるゝかも知れぬが、我々は決して斯樣な神祕的な探檢を爲すものではなく、この假定に基いた硏究又は考慮を眞面目に辿らうとするのである。我々がこの結論に對して願ふところは、唯確實性のみである。

若しも總ての有機物の有する本能が、保守的のものであり、歷史的意義を有するものであり、且つ退行卽ち早期に有した或物の復活であるならば、我々は有機物の發達の導因を、外界、擾き亂す力、混亂せしむるが如き影響に歸さねばならぬ。若し總ての環境が同じであつたならば、原型生物はその發生した當時より其儘であつて毫も改變を爲さなかつたであらう。そして同じ生活を繰返すのみであつたらう。然し乍ら、若し斯かる動物が變形する事がありとせば、これは地球の進化や地球と太陽との關係等に基いて、生物の發達の上にその痕跡を殘さねばならぬ。保守的生物の本能は、その生活中

に是等の矯正されたる變更の總てのものを吸收し、これを貯藏して、而してこれを繰返すのであらう。斯くして生物は恰も變更及び進化の爲めに努力しつゝあるが如き錯覺的外觀を呈するであらう。彼等は事實、古く或は新らしく得た道筋によつて、古い狀態に達せむと單に努力しつゝあるのみである。總ての生物のこの終局の目的地は、次の言葉で現し得るであらう。若しも生命の終局が未だ嘗て達せざりし道であつたならば、これは本能の保守的性質に背馳するものでなければならぬ。總ての生物が長き發達の過程に於て辿りゆく道筋は、生物が久しき以前に捨て去つた處の最も古代の出發點でなければならぬ。若し我々が決して除外例を設くる事の出來ない經驗として、總ての生物はそれ自身の內側の原因から死なねばならぬこと、卽ち無機體に還元されねばならぬことを假定するならば、我は次の如く云ひ得る。『總ての生の到着點は死である』と。これを逆に云へば『總ての生物は嘗ては無生物であつた』と。

或る時代に於て、我々が全然想像することの出來ない或力の働きに基いて、生命の根原が無生物に發したと假定する。この無生物から生物が發したといふ假定は、其後に至つて此の有機體の重なり合つた或層に於て意識の現象を生じたと同一のものゝ原型であるだらう。斯くして無生物であつたものの內部に緊張(はりつめ)が起り、次いで、この緊張は、常にその平衡を得ようとする傾向を生ずる。この平衡を

得ようとする傾向が、即ち最初の本能なのである。そしてこれは無生物に還元しようとする傾向でなければならぬ。此の時代の生物は最も容易に死滅したであらう。恐らくその生命の期間は瞬時であつて、その壽命は該生物の化學的性質によつて決定されたであらう。爾來久しい間生物は間斷なく新たに創造され、又容易に滅亡されたのであつたが、遂に外界の影響は變更し、その結果本原的壽命の道程から漸次迂廻されるやうになり、この迂廻の道筋を辿るべく生存者は餘儀なくされたのであらう。かくして生物は死の到着點に達せむが爲めに、益々複雜し且つ迂廻せる道を辿る事になつたのである。これらの死に向ふ迂廻せる道程は、保守的本能によつて忠實に保留されて居る。これは現在我々が生命の現象として知る處のものに外ならない。若しも本能のこの唯一の保守的性質が事實として受取られるならば、生の根原及び終局に關して之れ以外の過程を得ることは不可能である。若しこれらの結論が我々の耳に奇怪に響くとするならば、有機物の生の現象の裏面に認められると稱される他の本能の集團に關しても、同樣に奇怪なる感を受けねばならぬ。總ての生物は自己保存本能を有してゐるが、これは唯一の目的として死を齎らすといふ役割をもつた本能の存在を假定する場合に、甚だしい矛盾を感じる。然し乍ら自己保存本能、權勢慾、及び自我擁護は次の見地よりみるときは何でもなくなる。即ち是等の本能は、死の道筋を辿り來つた以外の道筋をもつて、無生物に還元せむとする事

を絶對に拒否せむが爲めに、備へられたる本能の一部と見做される。そして全世界の生を脅威する邪魔物に反抗して自身を持續せむとする生物の謎的奮鬪は、生を保存せむとする目的以外には、何物に結び付く事も出來ないものである。が、是はこの見地に基づけば直ちに了解できる。總て生物は彼等自身の欲する仕方に於てのみ死なむと決してゐる。他の方法による死の仕方は欲しない。故にこれらの生命の擁護者（自己保存本能）は、本原的には死の使者に外ならないのである。かくして總ての生物は、極力近道によつて、云はゞ一足飛びに生命の到着點に達せしめむとする影響（卽ち危險）に抵抗するのである。この特質は智能的努力と反對に純なる本能の傾向と見做さなければならぬ。（一）

【註】（一）自己保存本能に對するこの極端なる見地を其後になされた批判に比較せよ。

然し乍ら、我々は此處に一考慮を要すべき點を認める。それによつて此の結論が全然正確だとは云へないことになるのである。それは神經症の理論が、これに獨特の地位を與へてゐると稱した性本能が、我々を此の見地以外の處へ導くのである。總ての本能は、生物を發達の途に驅使させる外界の勢力を拒否してゐるものばかりとは云はれない。猶今日に至るも本原的に低き程度に殘つてゐる生物もある。多數ではないが少數の生物は猶現在に於ても高等動物及高等植物が嘗て示してゐた原始的狀態に類似せる狀態を示してゐるのがある。同時に高等生物の有する複雜なる肉體を構成してゐるのがあ

る。その構成要素たる有機體は、自然的到着點に進みゆく道筋卽ち死の道程を辿つてはゐない。この種類の中でも、生殖細胞のごときは、恐らく生物の本原的組織を保留し、或一定期間の後に母體から分離する。然かも彼等は分離に際して、總ての遺傳的傾向及び新しく得たる本能的傾向をもつて充塡されてゐる。本原的組織を保留し、且つ遺傳的傾向及び新しく得たる本能的傾向を以つて、充塡するといふ此の二點は、恐らく是等の細胞が分離獨立して猶生存力を保留する所以であらう。而して彼等は或好期に接して發達を開始する。この發達は過去を繰返す周期的のものであつて、彼等の根原の基く處は此の繰返しに外ならぬのであつた。そしてこの反覆は、其の組織中に發達の起原より終局までの分質の一部を再得し、他の一部は新しい生殖細胞として再び發達の端緒につくものである。斯くして是等の生殖細胞は、生物の死に對して反對の作用を示し、生物の爲めに實質的不死性を獲得させるものゝ如くに見えるのである。尤もこれは唯死の道程を延長させる手段に外ならぬであらう。生の現象中に於て最も意義ある事實は、生殖細胞は不死性を得るに最も適したものであるといふことである。それは他の生殖細胞にして、それと趣きを異にするものとが混合することによつて不死性を得るからである。(譯者曰、これは卵と精液との混合をいふ)。

是等の構成要素となるべき肉體の部分(生殖細胞)を保存せむとする使命を帶べる本能、及び此の

種の肉體の部分が、外側の刺戟に對して未だ抵抗力を有せざる間に、他の生殖細胞と結合して終局の到着點に達せしむるまで安全なる擁護を與ふる處の本能の集團を認むる事が出來る。この集團を性本能と名づくる事が出來る。これ等の本能も、亦他の本能と同じ意味に於て保守的である。即ち彼等は生物の早期狀態を再現するといふ傾向を持つてゐる。けれども同時に外界の影響に對して特に高度の抵抗力を有してゐる。同時に、より廣い意味で更に一層保守的だとも云ひ得る。何故ならば彼等は長期間壽命を保留するからである。斯くして性本能は事實上生本能である。是等の本能は他の死に驅逐する種類の本能と背馳してゐるといふ事實は、この兩者の間に於ける矛盾を示してゐる。この矛盾性は神經症の理論の際に十分意義あることを認めたのである。この結果、生物は生死の間を往來してゐるといへるのである。即ち本能の一團は出來る丈け速かに生の終局地即ち死に達せむとしてゐる。他の一團はその途中に於ける或地點から遁れ去つて跡戻りを爲し、これによつて旅の期間の延長をはかつてゐる。勿論生物の初めに於ては、性感と異性同性の差とは存在してゐなかつたが、併し乍ら將來性本能として叙述さるべき本能は、最初から發現されてあり、これが『自我本能』としての役割に對し、恰度正反對の作用を示してゐるのであつて、この二段の本能は、決して其後の發達に依れるものではない。

我々は、玆に於て是等の思索の總てが全然準據する處のありや否やに就いて考へたい。性本能を除き、これと同樣に早期狀態の再現を目的とする本能を他に認める事が出來るであらうか。未だ嘗て有せざりし狀態を得んとする本能は、絕對にないであらうか。自分が此處に提案した性質に逆行するが如き滿足なる本能の例は、有機界に於ては認める事を得ない。植物及動物界に於て進步發達を遂げむとする一般的衝動の所在に就いては、決して證明する事は出來ない。尤も特殊の場面に向ふ發達の傾向は疑ひもなく存在してゐる。或生物が他の生物より高等なる發達を爲したと決定するのは、要するに我々の評價の仕方であることが屢々分明する。同時に生物學は、或特殊の發達は他の部分に於ける退行によつて屢々保證さるゝ事を吾々に示してゐる。且つ或種の動物では早期に於てはその發達が退行的であることを我々に教へるものが少なくない。發達及び退行の兩者は、共に現實に順應を强ひる外界の力の結果として生じたものと見做さるゝ。そして本能によつて採らるゝ役割は、此の兩者の場合に於ては、斯く矯正せらるゝ變更が、快樂の源泉として保留する場合に限られて示されてゐるらしい(一)。

【註】(一) フェレンチー氏は異つた論理によつて、是れと同樣の概念が可能であることを證明した。(一九一六年精神分析に關する氏の論文中の八章『現實觀念の發達過程』) 氏は曰く、『この考慮の過程を論理的に

追從してみると、我々は又生物界を支配する持續性又は退行性の觀念を得べく餘儀なくされる。而して發達に於ける進化の傾向及び現實順應性能等は、外側の刺戟に對する反應としてのみ顯示されてゐる。』

多くの人は、人類はそれ自身に完全なるものと成らうとする衝動を持つてゐるといふ信念を捨て切れないでゐる。かういふ衝動が今日智識の優秀や道德の醇化の頂上に現在を進めたものであつて、更にそれより人類は進歩して超人になるだらうと信じさせてゐる。然し乍ら自分は斯樣な內界の衝動が存在してゐるとは信じない。自分には斯かる慰藉的錯覺を保持してゆく道を發見できないのである。今日迄の人類の發達が、下等動物の發達に比して異つてゐるといふ事を說明する必要はない。人類の少數の間に認められる完全なる發達の道に向つて、間斷なく奮鬪しつゝあるといふ事は、本能の抑壓の結果として容易に說明し得られる。而して人類文化の最も價値あるものは、此の抑壓に基いてゐるのである。抑壓された本能は、それが完全なる滿足を得んとして、間斷なく奮鬪してゐる。この奮鬪は、原型的滿足の經驗の繰返しに外ならない。あらゆる代償、反應構成又は醇化といふものには、間斷なく發する張度を緩和する力などは毫もないのである。これ故に滿足を得た上に更に滿足を要求するといふ事は、如何なる狀態に於ても止まれぬ驅逐力として生じる。これは詩人の言葉の如く『前方

へ、不撓不屈で進め』(『ファウスト』のメフィスト)である。この道筋以外の方面に向ふ道、卽ち完全なる滿足を得むとして、この道を逆行するといふ事は、抑壓を保持する抵抗の爲めに閉鎖されてゐる。故に其處には前記の進みゆく道以外には道はないので、それのみが唯一の妨害されない道である。この道筋が進歩發達の道なのである。然しながら、この道を進んだからといつて決して終末に達する事は出來ないのである。神經症性恐怖症の症狀が展開さるゝに當つて示される働きは、本能の滿足を回避せむとする意圖に外ならない。而してこの働きは完全さを得ようとして發する外觀的衝動の原型である。が、これは總ての人間に對しては當嵌められない。動的狀態は一般には存在してゐるが、經濟的關係がこの現象に都合よくせしむるといふ事は、唯稀な場合にのみ起るのである。

第六章

我々の論議は、自我本能と性本能との間の鋭い對峙を認める事になつた。卽ち前者は生物を死に向つて驅逐し、後者は生物を生命保存に向はしめてゐる。この論議の結果は、多くの點に於て未だ完結してはゐない。のみならず我々は前者に對してのみ保守的卽ち退行的性質を附與してゐるのみであつて、これは反覆强迫症の一つに相當するものと云はねばならぬ。何故ならば我々の假定によれば、自我本能は無生物を活かす（生物化する）事によつて生じたもので、その目的としては無生の狀態を再現するにあるのである。然るに性本能にあつては、原始的生物の狀態を再生するには疑ひないが、異つた方面に分化された二種の細胞を、あらゆる手段によつて結合させようと努力してゐるのである。若しこの結合が起らなかつた時には、生殖細胞は、他の複細胞生物の細胞と同樣に死滅すべきものであるからである。たゞこの條件を充す場合に限り性的作用が生を延長して、それに不死の觀を呈するのである。生物體の發達の過程中に於ける反覆作用について、生殖的結合作用又は其の前驅たる二個の別々の原形體は如何なる重要さを有するであらうか。この問題については明答し難い。それが爲めに我々の論議の全體が誤謬なることの證明が下さるゝ時があるならば、寧ろそれに安んじよう。若し

この論議が破るゝ時は、自我（死）本能と性（生）本能との對峙が消滅するであらう。而してその結果、反覆强迫症は我々の附與した意義を失ふに至るであらう。

我々が挿入した假定に再び戻るとしよう。それによつて、我々はこの疑點を否定し得るかもしれない。我々は、總ての生物は内側の原因によつて死滅すべきものなりといふ假定から、旣に結論を握つた。が、この假定は證明し易くないので、餘り重要視してゐなかつた。然し斯樣な觀察を支持するやうな敎示は、多數の詩人から與へられた。我々も亦この觀察を保留しようと決心したのは、この觀察に基いた信仰から何か慰藉を受けてゐるからかも知れない。若し我々の最愛の人が死んだ後に、自分も亦死なねばならぬとするならば、何か偶然の出來事で死ぬよりも、むしろ冷酷無情なる自然律則、崇高なる宿命の爲めに死ぬる方が大なる滿足を得るであらう。偶然の出來事などは避け得らるゝ手段がある。此の生物の内界の律則の結果で必要上死なねばならぬといふやうな信仰は、恐らく我々が自身の爲めに作つた錯覺の一つと見做されるであらう。この錯覺によつて我々は生存の重荷に堪へることが出來るのである。この信仰は確かに本原的の信仰ではない。何故ならば『自然の死』といふ觀念は原始には持つてゐなかつたもので、彼等自身の間に起る死といふものは、すべて敵のためか或は惡靈の力であると考へてゐた。それ故に我々はこの信仰を試さむが爲めには、生物學的研究を怠つては

ならない。

我々が生物學的の考慮をしてみるならば、自然の死といふ問題に就いては、生物學者の中でも異論のあることを知る。死といふ觀念は、生物學者と雖も明瞭に說明し難いものである。少くとも高等動物間では、或る平均壽命は內界の原因から生ずる死に關聯してゐるといふ論がある。然し或る巨大な動物や若しくは大木の如きものは非常に永く壽命を保つてゐる。この事實は今茲に考慮の中に入れねばならぬ。これによれば、一定の壽命などといふ考へは取去られてしまふ。フリース W. Fliess 氏の誇大なる概念によると、總ての生の現象及び死の現象は、時間の經過といふ事（時の觀念）に關聯して居り、二つの生物體の相互關係の存在といふ事に起因してゐるといふ。それは何かといふと、一人の男性と一人の女性なる二つの物體は、太陽曆に相互關係を有してゐるといふ事である。然し乍ら、外界の力の影響は、殊に植物界に於て、如何に容易に、如何に廣汎に生の現象を改變し得るかといふ事、例へば各其の時代によつて壽命が伸縮するといふ事實を知るならば、これはフリースの主張を打破つて、氏の證明したと稱する原則の普遍性を疑はしめるのである。

ヴイスマン A. Weismann の著書にある生物間に於ける死と壽命との問題[一]は、我々に大なる興味を與へる。氏は、生物體を死すべき部分と不死の部分とに別つてゐる。死すべき部分は狹義に於てゾマ

Soma である。これは自然の死に遭遇すべきものである。之に反して生殖細胞は本質的に不死である。(一) 卽ちこれは好期に乘じて新しき個體に發達する性能を有するもので、換言すれば彼等自身を新しきゾマをもつて圍む力を有してゐる。

【註】(一)『生命の持續に就いて』一八八二年。『死と壽命に就いて』二版一八九二年。『生殖細胞』一八九二年等參照。

【註】(二)『死と壽命に就いて』二版二〇頁。『生命の持續に就いて』三八頁參照。

此處で注意すべきことは、非常に相違した思索より生じたる概念が、測らずも他の概念(ヴィスマンの論議をいふ)と一致したことである。生物を形態學的見地から研究したヴィスマンは、死の捕虜となるべき一つの要素卽ちゾマを認めてゐる。これは、つまり性的要素及び遺傳的要素とは全然別個の肉體である。氏は、同時に不死の部分卽ち生殖細胞 keimplasma をも認めてゐる。卽ちこれは種族の保存卽ち繁殖の目的に役立つのである。これに反して我々は、氏の如く生物質に注意を向けないで寧ろ生物質の内部に活動してゐる力に注意を向けてゐた。而して本能の中に二種あることを認むるに至つたのである。卽ち一つは生を死に導かむとする目的を有する死の本能、一つは生の再生の爲めに間斷なく努力して、この再生を營む性の本能である。之はヴィスマンの形態學說の動的推論の如く思

はれる。

この重要なる一致點は、我々がヴィスマンの死の問題に關する敍述を檢する時に消滅してしまふのである。何故ならば、ヴィスマンは、死すべきゾマと不死なる生殖細胞とを複細胞生物にのみ認めて、その差異を認容してゐる。然し單細胞生物にあつては個體と生殖細胞とは同一物である。氏は、その單細胞生物を本質的には不死だと稱して居り、死はたゞ複細胞生物にのみ起るものだと云つてゐる。そして、高級動物が受くべき死の運命は、自然的であり且つ內側の原因から生じてゐるのであつて、生物體の先天的性質から出てゐるのではない。死は生命の本質に絕對に基けるものと認める事は出來ない。死は寧ろ或る目的に役立つものとして創造されたものである。これは生命を、外界の狀態に順應させる現象に外ならぬ。何故なれば、肉體の細胞がゾマと生殖細胞とに分化された後は、個體の無限の壽命といふ事は全く不必要な贅物となるからである。故に複細胞生物內に、斯かる分化が現はれると共に死が起り、且つこれが必要となつた原因である。かくて高等動物のゾマは、或期間後に於て內側の原因から死すのである。然し原型生物は不死である。最初は繁殖の方法は死に伴はれなかつた。繁殖は成長と同樣に生物體の本源的性質である。成長によつて生物は發生したので、生命は地球上に現はれた後間斷なく持續されたのであると。

高等動物に自然の死を附與するが如き以上の論によつて、我々の論議を確める事は不可能である。死が、種族の晩期に至つて生じたものとするならば、この地球上に於て、原始的生物に死の本能をたどる事は最早出來なくなる。複細胞動物は、その原因が分化の缺闕又は新陳代謝の不完全に基くにも拘らず、内側の原因で間斷なく死んでゐる。これでは我々が玆に研究せむとするものに何等の興味が持てなくなる。死に對する斯かる概念及びこれより生じた考慮は、普通の人間の見地に近いもので、死の本能といふ前例のない假定には適合しないのである。

ヴィスマンの主張した論議は、自分の考ふる處によれば何等の適確な效果を與へない。多くの學者は却つてゲッテー Götte の見地（1883）を採用してゐる。彼は、死は繁殖の直接の結果だと認めてゐる。ハルトマン Hartmann は、死の本質は死屍を殘す事であるとは認めない。（氏の「死と繁殖」參照）。この死屍は嘗ては生物質の一片であつて死去したものである。然し彼は、死を個性發達の最終と見做してゐる。この意識によると原型生物も亦死すべきものである。この種の死は、常に繁殖を意味するのである。然し、これは云はゞ死は繁殖であるといふ事で覆ひ隱されたのである。何故ならば母體の全部は新しい個體の中に直接攝取されたものであるからである。（一）

【註】（一）『何故に死すか』（リプシュッツ）、『動植物の死と不死の問題』（ドフライン）參照。

我々の研究の興味は、單細胞生物の所謂不死なる事を實驗的に試験することに向けられて來た。米人ウッドラフ Woodruff は纖毛インフゾリア Cilialea infusolium（卽ち靴底微生物）の人工培養を試みた。この生物は分裂して二個體に繁殖するのである。氏は、この二個體に分裂した時にその一匹を新しい水に移し乍ら、これを三千二十九代まで繁殖させて實驗した。この最後の代の後裔は、祖先の生物の如くに活潑な活動力を有して、何等老朽の兆を示さなかつたのである。若しこの累代の個體をもつて何等かの證明が得られるとするならば、この原型動物の不死性といふ事は、實驗によつて證明されたと云ふことが出來る。

然し乍ら他の研究者はこれと異つた結果を齎した。マウパス、カルキンズ氏等 Maupas, Calkins はウッドラフ氏と反對の證明を得たのである。卽ちこれらのインフゾリアは、或代を經過した後に衰弱して、その大きさを減じ、その組織の一部を失ひ、更に若し或る補力の影響を受けねば死滅するに至る。この實驗に從へば、原型動物は恰も高等動物の如く老朽期に達して死ぬのである。これはヴィスマンの主張とは正反對である。ヴィスマンは、生物が死の運命を受くるに至つたのは、可なり進歩した時代に初めて見らるゝと云つた。

是等の研究の結果から、その正味を探ると、我々には二つの事實に氣がつく。それには確信が與へ

らるゝやうに思ふ。第一に、若し微生物がその老朽に先立つて他の微生物と混合する機會卽ち結合をなし、更に結合後分離する時には、微生物は老朽を免かれて『若返る』。この結合は疑ひもなく高等動物の性的繁殖の原型をなすものである。微生物は結合によつては、まだ繁殖の用はなさないで、唯二つの物質が混合するだけに止まる（ヴィスマンの混合 Weismann's Amphimixis）。結合の補力影響は或る種類の影響によつて置き換へられる事が出來る。例へば培養液の組織、溫度の上騰、振盪などによつて結合が補はれる。それには有名なるロェブ J. Loeb 氏の實驗を記憶してゐるが、彼は、うにの卵子に或る化學的刺戟を與へる事によつて、孵化後に於て初めて繁殖作用を起させることが出來た。

第二に、インフゾリアは自身の生活過程を終了した後に、自然死に遭遇するといふ事は恐らく事實であらう。何故なれば、ウドラフ氏の發見と氏以外の發見の人達との相違は、氏は後裔を新しき培養液に入れたことで、こゝに相違がある。氏は、後裔を新培養液中に移さなかつた時は、矢張り老朽狀態に陷ることを發見してをり、他の研究者もこれと同樣な報告をしてゐる。これによつて見れば、此の微生物は、自身が周圍の培養液中に排出した新陳代謝の產物によつて障害されるのである。猶氏は、確實に後裔の死を齎すものは、それ自身の新陳代謝の產物のみであることを證明し得た。それは、遠緣の種族の新陳代謝產物で飽和された溶液中にては、その微生物は非常によく繁殖し、自己の培養液

中にては、久しく放置されると、必ず死ぬるからである。斯くの如く、インフゾリアは同じ液體中に放置される時は、自己の新陳代謝産物を處理し兼ねる爲めに自然の死に至るのである。恐らく總ての高等動物と雖もこれと同樣に同じ狀態で死するのであらう。

この點に就て、一つの疑問が起る。卽ち原生物の硏究中、自然死に關する疑問に對して解答を求める事は、果して何等の役を爲す事であらうか。原生物の組織は重要なる狀態であつて、その中に存在してゐる物で、我々に隱蔽されてゐるものがあるかも知れぬ。これらの狀態は、たゞ高等動物だけがその形態學的表現を得むが爲めに現してゐるから分るのであるが、原生物では分り難い。然し、若し我々が形態學的見地を放棄して、動的見地を取るならば、原生物の自然死といふものが證據立てられるや否やといふことは、全然必要のないことである。といふのは原生物に於ては、その後に至つて不死と認められる物質が、死すべき運命を有する部分から未だ分離されてゐないものと見做されてゐる。生を死に導く本能的力は、原生物に於てもその發端から活動してゐたであらうが、その力は、生保存の力の爲に覆ひ隱されて居たのであらう。それが爲めに斯かる本能が存在するといふ直接の證據は立てられない。生物學者の硏究の結果は、我々の聞く處によれば、原生物間にも斯かる死を來すべき內側の作用を假定し得るとしてゐる。然しながらヴィスマンの說に從つて、原生物は不死なりとい

ふ證據があるとも、氏の云ふ所の『死は其後に至つて生物の運命として來されたのだ』といふ事は、死の外觀的表現に限つて當て嵌まるのであつて、決して死へ驅逐する力の存在を否定するものとはならない。そして生物學は、死の本能の認容を全然否定するだらうといふ期待は此處で充たされないのである。死の本能の存在を追求するに當つて、既述以外の理由がありとするならば、それを追求する途は我々に開かれてゐるのである。ヴィスマンのゾマと生殖細胞との區別と、我々の死の本能と生の本能との差との間に、顯著なる類似點を認めたが、その類似點は毫も破られずに其の價値を保留してゐるのである。

この本能的生活の微妙なる二元的概念に就いて、暫らく考慮を加へて見たい。ヘーリング E. Hering 氏の『生物の作用に關する學說』に依れば、總ての生物の作用中には、二種の相反せる働きが間斷なく營まれて居り、一は建設的(同化作用的)、二は破壞的(解離作用的)であると云ふ。我々はこの二つの生理作用中に、我々の二つの本能的傾向、即ち生本能と死本能との活動を認め得らるゝであらうか。若し認めらるゝとすれば、我々は知らず知らずにショウペンハウエル Schopenhauer の哲學の港に乘り入れたのである。氏は『死は生のまことの結果である』と云ひ、『それ故に生の目的は死である。同時に性本能は生きむとする意志の權化である』と云つた。

こゝで我々は大膽にもう一歩進まうと思ふ。生物學の一般的見地によれば無數の細胞が一個の生理作用を營む連絡、卽ち複細胞生物組織は、生物の壽命を延長せむが爲めの手段であると見做してゐる。それは一細胞が他の細胞の生を保護して居り、細胞の集團は一細胞が死する場合と雖も壽命を續けるのであつた。我々は又結合卽ち二個の單細胞の一時的混合は、兩者の保存と若返りとを爲させるものと認めた。そして精神分析によつて案出されたリビドー說 Libido-theorie を各細胞間の關係に當嵌めようと試みた。先づ、各細胞が他の細胞を性的對象として採るのは生的或は性本能の役目なりと假定せば、この作用は各細胞の死の本能を打消す力を持つてゐる。といふのは此の作用によつて刺戟を受けて、或る細胞は生命を保存し、或る細胞はこの保存を助け、更に又或る細胞はこのリビドー的作用を營まむが爲めに自ら犧牲になる。卽ち生殖細胞は、個人がそのリビドーを自我に集中する時に神經症學說によつて既述せる如くに、全然ナルチス型の態度を示すやうになる。そして對象物にリビドーを纒綿してゐる爲めに、毫もリビドーを他へ與へない。何故ならば生殖細胞は、そのリビドーを——生本能の活動の爲めに——將來の非常に巨大なる建設作用の爲めに備へむが爲めに獨占してゐるのである。かの生物を傷つくる惡性の腫瘍として生ずる細胞は、之と同意味に於てナルチス的と考へられるであらう。病理學では腫物の眞因を根元に於て先天的と見做して、胚芽的狀態であると認め

てゐる。かくして性本能のリビドーは詩人及哲學者の云へる愛 Eros に相當するであらう。この愛は、總ての生物を結合せしめてゐるものである。

此處に於て、我々のリビドー說の漸次發達した過程を復習すべき機會を得たのである。轉嫁神經症の分析によつて、第一に對象物に向けられる性本能と、及び次に未だ完全に認められない一種の本能で、假に自我本能と云はれるものとの間に、相互背馳を認めることが出來る。彼等の中に個體保存の役割をもつてゐるものを、我々は最初に認容せんことを要求してゐる。これ以外に如何なる差別を附するかは現在の處では云ひ難い。堅實なる心理學を設立せむが爲めには、本能の共通性及び本能間の差を或程度迄理解するくらゐ大切なことはない。然かも心理學の中に於て本能の問題ほど闇中摸索的のものはなかつた。各人は勝手に自分の欲するまゝに、本能或は根本的本能の數を羅列して使用してゐる。恰も古代の希臘哲學者が四要素卽ち地、空氣、火、水を扱つて論じた如くである。精神分析は本能に關する或種の假定を全然放棄する事が出來なかつた爲め、先づ通俗的に認められた區別を基礎として論據を置いた。それは飢と愛といふ言葉によつて現はされたものであつた。これは勝手に創つた新規のものではなかつた。この區別によつて、我々は神經症の分析の際に可なりの步調を進め得たのである。然し性感といふ概念（及び性本態の概念）は、確かにその意義を擴げる必要があつた。依

つて、これは單に繁殖作用の部分のみならず、それ以外のものにまで及ぼした。それがために、峻嚴なる且つ優秀なる、恐らくは單に僞善的なる世人から、反對の聲を喚起するに至つたのである。

　精神分析が心理學的研究の結果認めた自我に一歩踏込むことが出來た時に、次の進歩が齎らされるに至つた。この自我は、最初、抑壓し檢閱する作用であつて、防禦作用及び反應構成を齎し得るものとして認められた。リビドーの概念を狹義に解釋して、對象物に向けられたる性本能の力であると見做した點は、久しい間先見ある批判的見地から反對を受けた。然し乍らこれ等の批判は、この十分になされた說明を何處から得たかに就いては何も云はない。そして精神分析に對して何等の價値ある結論をこれから引出すことも出來ないでゐる。考慮が進められるに從つて、精神分析的思索は如何に正規的にリビドーが對象物から撤回されて、自我に向けられたかを認め得た（內向リビドー）。然し早期に於ける子供のリビドー發達の研究によつて、自我はリビドーの眞の且つ本原的の源泉であることが明らかにされた。この源泉からして對象物に擴げられたのである。自我は先づそれ自身を性的對象物の一つとして其處を占領し、且つ直ちに對象物中の最も好きものとして認めてしまつたのである。斯樣にしてリビドーが自我に附着してゐる場合を、ナルチス型と呼ばれるのである。[二] このナルチス型リビドーは、分析的意義から云へば性本能の力の表現であつた。そして其後に至つて**自己保存本能**と

して認められたのである。この本能の存在は最初から認容されてゐた。それが爲めに自我本能と性本能との間の區別が不完全になつた。といふのは自我本能の一部分はリビドー的質を有するものと認められた。そして自我の裡に於ても性本能は働いてゐるのである。この働きは恐らくは他のものゝ働きに加はつて現はされるであらう。然かも猶我々は、神經症は自我本能と性本能との衝突から生ずるといふ古い原則を守る上に差支へないであらう。たゞこの二種の本能の差を、本原的に質の差と考へてゐたが、今はそれを否定せざるを得ない。これは質の差ではなくて、むしろ地位的基礎によつて認められ得べきものである。特に精神分析的研究の眞の目的である轉嫁神經症では、その原因が自我と、對象物に對するリビドーの充塡とに見傚されてゐる。

〔註〕（1）Zur Einführung des Narzissmus. Jahrbuch der Psychoanalyse, Bd. VI, 1914, und Sammlung Kleiner Schriften zur Neurosenlehre, IV. Folge, 1918 參照。

我々は性本能を愛（エロス）として認めて論を進めてゆくのであるから、それには自己保存本能のリビドー性を益々高いものと認めざるを得ざるに至つた。愛（エロス）は總てのものを支持するもので、自我のナルチス型リビドーと物的細胞(ゾマ)の結合を齎らす處のリビドーとの總和から得らるゝ事を認めるのである。然し乍ら此處で、突然次の問題に直面する。その問題は、若しも自己保存本能も亦リビドー性を必要

とするのならば、我々はリビドー以外の他の本能は持たないであらう。リビドー以外の本能は無いことになる。さうなれば最初から精神分析は總ての說明を性論に基くものだと見做され、これに反對されたのは正當であるとしなければならない。さもなくばユング Jung の如くリビドーなる語は一般に本能的であるとせねばならなくなる。さうではなからうか。

以上のやうな結論は期待してゐなかつた。我々はこれと反對に、我々の出發點として、自我本能（死の本能）と性本能（生の本能）との間に明白なる區別を立てた。しかのみならず、我々は自我の自己保存本能をも、死の本能の中に加へたのである。尤も此の論點は其後我々は修正し撤回した。我々の見地は最初から二元的であつて、今日に至つて益々二元性を明瞭にした。何故なれば我々は最早二つの反對傾向を自我或は性本能とは呼ばずに、生と死との本能と呼んでゐる。これに反して、ユングのリビドー說は一元論で、彼は唯一の本能的力にリビドーなる語を用ひてゐる。が、これは混雜を來す故に我々は避けたいと思ふ。我々は自我の內に自己保存本能以外の本能を想像してゐるが、これを證明すべき處には到つてゐない。自我の分析は不幸にも未だ十分な進步を見ないので、この證據を得ることは甚だ困難である。自我の內に存するリビドー性本能は、或る特殊の方法で、我々がまだ知り得ない他の本能と混合してゐるのであらう。我々が明らかにナルチス型を認めた所以のものは、精神分析

者の心中には、自我本能がそれ自身の中にリビドー的要素を回收したのであらうといふ想像が既にあつたからである。然しこれは頗る漠然としてゐる爲めに、我々の反對論者は承認しないであらうが、今日迄の分析の結果では、實驗的にリビドー衝動の存在を證明したのみであるから、其他の本能は認められないのである。

現在のところ本能説は未だ明瞭になつてはゐないので、それに幾分でも光明を與へるやうな觀念は無暗に排斥したくない。我々は從來の説の分岐點として、生本能と死本能との對照を選んだ。對象物に對する愛そのものは、第二次として兩極性、卽ち愛の極（親切、優しさ）と憎みの極（加害的）とを示すのである。たとひ我々は永い間、性本能の中に加虐性的要素（一九五〇年以後の『性説に關する三論文』參照）を認めてゐたにせよ、兩極の一方より他方に辿りゆく關係から何物かを得たとするならば、如何なる結果を齎すであらうか。既に知つてゐる通り、加虐性的要素は、獨立した働きを持ち、且つ變態性慾として男女の性的傾向を支配せる性的發達の一つである　そして性感前期と稱した時期に當つて唯一の部分的本能として出たものである。そこで、如何なる關係で對象物を害せむとする加虐的衝動が、生命を支持すべき愛から發した事になつたのであらうか。この加虐性といふ言葉自身は、實際にナルチス型リビドーの影響によつて自我から分離した死の本能を暗示してはゐないだらうか。

自我から分離した死の本能は、唯對象物に對してのみ其の働きを示すのであらう。それ故に性的作用に役立つのである。リビドー發達の口唇時代に於ては、性的占有物を得ることは對象物を消盡することゝ同一事であつた。其後に至つて加虐的衝動が獨立し、遂に性的優秀時代（思春期）に至つては、生殖作用と共に性行爲の要求を追求せんが爲めに、性的對象を征服する作用を司るに至つたのである。かくて自我から追放されたる虐待性は、性本能のリビドー性要素を指導するものだと云ひ得るであらう。性的本能のリビドー的要素は對象物に向つて押しかけてゆく。若し本原的の加虐性が緩和されず又は他のものと混合せざる時には、戀愛生活によつて屢認められてゐる愛と憎みとの兩極が示されてくる。

若しこの假定が正しいとするならば、我々は死の本能の一例を、玆で證明する要求に應じる事ができる。但しこれは轉移を受けた例である。然しながら此の概念は明瞭ではなくて神祕的な印象を與へるものだ。それによつて、我々は難關から脫出しようともがいてゐるのだといふ疑惑を受けるが、止むを得ない。だが、この假定は決して新規なものではなく、この難關脫出の疑惑を受けなかつた以前から既に假定してゐたものだつたと云つて答辯して置かう。臨床的觀察によれば、虐待性の輔佐としての被虐性的部分本能は、要するに虐待性が自我それ自身の上に跳返つてきた（逆戻りした）ものと

して解釋せねばならないのである。(二)

【註】(一)『性說』四版(一九二〇年)及び『衝動と衝動運命』(小論集四號)參照。

然し乍ら本能が對象物から自我に逆戻りする事は、自我から對象物に向ふことゝ本質に於ては同じである。これは全然新しい觀念である。斯くして被虐性即ち本能が自己に逆戻りする事は、實際に於て早期の狀態に逆戻ること即ち退行現象なのである。被虐性に關して自分が與へたこの定義は、一面に於ては餘りに絕對的であるがために修正を要する。即ち被虐性は自分が嘗て否定せむとしたもの即ち第一次的のものとも亦言はれるであらう。(二)

【註】(一)この思索の大部分は Savina Spielrein : Die Destruktion als Ursache des Werdens. Jahrbuch der Psychoanalyse, IV, 1912 にて既に發表された。この著述は非常に價値あるこの觀念で滿たされてゐるが、自分には全然不明瞭である。この著者は虐待性的要素を破壞的なものと見做してゐるのである。猶 A. Stärcke : Inleidung by de Vertaling von S. Freud, De Sexuele deschavingsmoral etc. (1914) では他の方面よりリビドーの概念そのものを死に驅逐する衝動の生物學的概念と一致させようと試みた。尤もこれは單に理論に基いた假定に過ぎなかつた(Rank, 'Künstler, 參照)。これらの總ての企圖は本書にある如く、我々が未だ知らざる本能說を明かにすべき必要を示してゐる。

然し乍ら我々は此處で再び生支持の性本能を論じてみたい。我々は既に原生物の研究よりして、二

つの個體間の結合(性交)によつて分離した二個體が强固になり、且つ若返りするやうに、これと同じく亦二つの個體が結合しただけで分離しなくとも、その個體が强固になり且つ若返りすることを知つたのである。これが爲めにその生物の後裔は廢頽することがない。然かもこの後裔は、彼等自身の新陳代謝から生ずる有害なる產出物に對して、更に久しく持待する性能を持つてゐるやうである。自分はこの一つの觀察を性行爲の原型として採用できると信ずる。然し乍らたゞ僅かばかり相違したる細胞が、混合するといふだけの事で、何故に斯かる生の復活を齎し得るであらうか。これには原生物を結合させる代りに、化學的又は器械的刺戟を與へて行つた實驗によつてこの解答は與へられる。(前註の書を參照)これは新らしい刺戟の集團を導入すればよいのである。そしてこれは、個體の生理作用は內側の原因によつて化學的張度(はりつめ)を緩和させるといふ假定と極めて一致してゐる。これは卽ち死に導くといふことである。然るに異つた個性を有する生物體の結合の場合には、この張度が增加する。換言すれば更に新しい生命力の差を設くることになる。この差卽ち張度は、再び生命の現象によつて消盡されねばならなくなる。この二個體の生命力の差を消盡する仕方には色々ある。例へば精神生活の恐らく神經組織を含んだ支配力は、この張度(卽ち差)を絕えず同じ水平に保たうとしてゐること、或は內側の刺戟を除去しようとして奮鬪することであることを我々は認めてゐる(バルバラ・ロウ氏

の稱する寂滅原則）。この奮闘は快不快原則の表現であり、又我々が死の本能の存在を信ずる最も强き動機の一つである。

然し乍ら我々の論議の過程は、猶此處で一つの不安の觀で擾亂されてゐる。それは恰度性本能の場合の如く、我々に初めて死の本能の存在を認めさせて與れた反覆强迫症の性質を明かにすることが出來ないことである。尤も胎芽の發達過程は斯かる反覆現象の無數の例を提供してゐる。卽ち性的繁殖を目的とする二個の生殖細胞及びこの細胞の發達史は、それ自身が生物の最初の繰返しである。然し乍ら性本能によつて目的とされてゐる過程の主要權は、二つの細胞の混合である。この手段によつてのみ高級生物の生物體の不死が保證されるのである。

これを換言すれば、我々は性的繁殖の根原及び一般の性本能の源泉を究めねばならない。これは一般に人の躊躇する難問題であり、且つ專門家と雖も解決し得ないのである。それ故に此處に何等かの方面から我々の考慮の連鎖となつて、結付くやうな混亂せる諸說を消略して研究を進めたいと思ふ。

我々の見地では、繁殖の目的は發育現象の一部であると見做して、その神秘感を打消した（分裂、發芽、增殖による繁殖）性的に分化されたる生殖細胞によつて繁殖作用の起つたといふ事は、眞面目なるダーウィン式考慮に從へば、二つの原生物の偶然なる結合によつて、初めて他種混合から齎らさ

れる利益を知り、その利益を増大にせんが爲めに、これを支持しこれを利用するといふ仕方であると見做されるのである。性はそれ故に非常に古い時代の發生ではない。そして性的結合を目的とせる强力なる本能は、嘗て偶然に起つたもので、それが生物に有益であつた爲めに、其後繰返されるに至つたのである。

これと同樣な問題が、死に關しても生じて來る。卽ち原生物は、現に示してゐるもの以外に何等かの質を所持してゐるだらうか。或は高等動物に限つて認められてゐる力及び作用が、原始動物の中にも初めより現れてゐるものだらうか。これを解釋するに當つて、既述の性感といふ見地からは解決の材料を餘計は得られない。この見地に對しては、極めて單純なる生物の中にも既に働いてゐる生本能の存在を假定せねばならぬと云ふ事に對して、反對論が出るであらう。だからといつて此の假定を放棄するとせば、生の絕滅を防ぎ且つ死を困難ならしむる結合作用の如きは、保留されざるのみならず完成もされず、むしろ回避されて仕舞ふであらう。斯樣なわけで、我々が此處に支持してゐる死の本能の存在の假定を放棄しないとなれば、この死の本能は初めから生の本能と結び付いたものとせねばならない事になる。さうすると此處で我々は未知數を扱つた方程式を解釋するやうなことになる。この問題は、性感の根原について科學は殆んど說明してゐない爲めに、甚だ茫漠としたもので、假說の

光すら此處に達することが出來ないのである　或部面に於てこれが假說らしいものを見るが、それは極めて荒唐無稽なもので、科學的說明と云はむよりも寧ろ神話に屬すべきものである。で、それを此處に持出すべき理由は持たないのだが、その中に我々が要求してゐる或る一つの條件を滿してゐるものがあるので持出してみよう。その一條件とは、早期の狀態を再現する必要からその本能を生じたといふ事である。

そこで自分は勿論プラトーン Plato の說を參考にする。彼は對話篇中でアリストファーネス Aristophanes をして云はせてゐる。その言葉は性本能の根原に關するのみならず、該問題に關する最も重要な變型にまでも及ぼしてゐる。曰く『人間は嘗ては現在のものとは大部異つてゐた。本原的には初め三つの性 Sex があつた。それは男女の外に第三の性があつた。この第三性は男女性とも云はるべき兩性の結合物だつた。そしてこの人間には總てのものが重複してゐた。例へば四手四足を有し、二つの顏面、二つの性器を有してゐた。ツォイス神 Zeus はこの人間を梨を二つに割るやうに兩斷すべきことを他の者から薦められた。總てのものが兩斷された結果、各人は各半身を戀慕するやうになつた。この二個の半身は抱擁し、彼等の身體を密着させて再び同一體にならうと欲したのである。(二)』

【註】(一) 余はヰインのハインリヒ・ゴンペルツ教授 Prof. Heinrich Gomperz よりこのプラトーンの神話につい

て次の話を聞いた。この話を自分は氏の云はれた通りの言葉で抄錄しよう。『余はプラトーンの對話篇中のものと本質に於て同じやうな話を、ウパニシャド Upanishads の中に發見した事に注意を置きたい。The Brihad-Aranyake-Upanishad I. 4. 3 (Deüssen, 60 Uphanishads des Veda, S. 393) に於て世界の創造はアトマン Atman (自己或は自我) から出來たといふ事が述べてあつて次の句がある。「彼卽ち (アトマン) は何等の快樂をも經驗した事がなかつた爲め、それ故に何人(なにびと)でも一人である時は快樂を持つことが出來なかつた。それで彼は相手を慕つてゐた。彼が相手と抱擁した時、男女合せた丈けの大さになつた。そこで彼は自身を二つに割つて、そして夫婦を造つたのである。斯樣にして出來た身體は Yajnavalkya によれば自己の半分であつた。これと同じ理由で、この不足部分は婦人で充たされたのである。Die Brihad-Aranyaka-Upanishad は總ての Upanishad のもの丶中、最古のもので、專門家でも基督紀元前八百年後のものとは云つてゐない。現在多くの人の信ずる事には自分は反對である。プラトーンが彼の對話篇を作るに當つて、これらの印度思想に假令間接にでも據つたといふことを確然と否定することは好ましくない。何故ならば、それは再生說に對しても全然除外できないからである。プラトーンがこれに據つたといふ事は、最初ピタゴラスの云ひ出したことであつた。この考慮が偶然にも一致したといふ意義は別にそれによつて打消されはしない。何故ならばプラトーンは、何等かの手段によつて東洋の傳說から斯かる物語を採つたといふことは疑はしいが、然しこの言葉が重要な意味を持つてゐるといふことから考へれば、彼が斯樣な明かな例を示せる事實を知らなかつたとは云はれないのである。

ている。K. Ziegler 氏が Neue Jahrbücher für das Klassische Altertum 中にこの考慮の組織的研究を爲してゐる。これによりバビロン人の觀念を辿ることが出來る。

我々はこの詩人的哲學者の考慮に追隨して、生物體は生を受けた當時に二部分に切斷され、其後絶えず性本能の手段によつて再結合を求めてゐるといふ假定を爲し得ようか。また、性本能の中には無生物質の化學的吸引力が猶未だ繼續せるものがあり、この本能は原生物界より漸次あらゆる障害物を乘超え、生を脅す刺戟に充滿した環境中を奮闘して來り、そして保護層を構成すべく餘儀なくされたと假定し得ようか。そして斯く散在せる生物體の斷片が複細胞組織を作り、遂に極めて强められた形に於て再結合を欲する本能を生殖細胞に轉移するに至つたと假定し得ようか。自分はこの邊に於いて思索を止めねばならない。

然し自分は前記の思索に對して、此處に少しく批判的考慮を述べてこれを結びたいと思ふ。前述の如き見地を、自分は果して信ずるや否やと問はれるであらう。自分が若し信ずるとせば如何なる點までであるか。これに對する自分の解答は、自分は自らこれを信ずるのではない、他人にも亦これを信ぜしめむとするものでもない。正確にいへば自分は如何なる點まで信ずべきかは知つてゐない。感情的信念といふ言葉は此處では考慮する必要を認めない。何人と雖も考慮の一過程を辿り、考慮が導く

だけは進み得る。これは科學的好奇心又は單なる思索として追隨するものであつて、これによつて迷はされなければ可なりである。自分は自分の歩み來つた本能說に於ける第三歩調が、前に歩み來つた二道程の如き確實性を持つてゐないことは信ずる。この第三歩調といふのは、性感の概念を擴張してこれに基くナルチス說を建立することに外ならない。この新說は、理論に關する觀念から直接に得たもので、この種のものに免れ難い錯誤を有するといふことは、他のものと同樣に考へてゐる。この本能の退行的性質は、これも亦實際に觀察した材料を基礎としてゐる。即ち反復强迫症を扱つて基礎としたのである。然し自分はこの症狀を價値づけ過ぎてゐるのかも知れないが、斯かる觀念を造るには、觀察したる事實を順次に繰返し、純なる想像と結合せしむる以外には方法がないのである。それ故これを進めるには次第に實際の觀察から遠ざかつて行く理論を建てむとする事で、試れば試るほど益々最後の結果が信賴できないやうになる事を知つてゐる。然しその不確實さの程度は不明である。それ故思索の結果は、見事なる發見に到達するか或は莫迦々々しき迷路に入るかである。斯樣な企圖に對して、自分は所謂直覺なるものには信賴してゐない。思ふに直覺なるものは知識の或る偏見に基いてゐる。不幸にも偏見を有せざる人は極めて僅少である。唯重大なる問題、科學、生の問題等に就ては或は公平なる說を爲す人もあらうが、自分の信ずる處では何人でも心の深部にて、或る偏見の支配を受

け、思索の場合に知らず識らずこれに陥るのである。信ずべき根據の乏しい場合には、研究心に微温さを生じて考慮の結果に影響を及ぼしてくる。然しこれらの自己批判は種々の說を特に默過させようと强ひてゐるのではない。我々は觀察を分析する場合に、其の初步に於て矛盾せるが如き諸說ありとすれば、躊躇なくこれを排斥し得るのである。而して同樣に何人でも主張する說は、單に一時的價値の存することは認め得る。假に我々が生と死との本能に關して思索を是認する時に、種々雜多なる作用が起り、全く豫想外の、或は全く豫想し難きものに遭遇するとも、我々の心は擾亂されないであらう。例へば一つの本能が他の本能に驅逐され、又は自我に關した本能が對象物に向けられる如き事が起るとも、我々の心は驚かないであらう。この混亂は、科學的用語をもつて論ぜられねばならぬやうになつて來てゐるからである。といふのは心理學に特有なる比喩的表現を用ひてせねばならない。更に正確にいへば、下層の心の働きを研究する心理學であるからである。然らざる時は我々は、無意識に相應する假定を敍述する事は出來ず、且つ此の假定に就いては何等の言葉も云ふことが出來ない。若し我々が心理學的用語に代へるに生理學的又は化學的用語をもつてすることが出來るならば、恐らく敍述の缺點は除け得るだらう。勿論、生理學又は化學の用語と雖も比喩語には相違ないが、我々はこれに久しい間馴れて居り且つ比較的簡單な語だからである。

然し乍ら我々の思索は、生物學の材料を借用してくると、その不確實さが益々增大するに至るといふ事を明白にしたい。生物學は實に無限の可能性を含んでゐる。我々はそれによつて極めて豫想外の發見を齎してゐるのである。故に我々が此處に提出した疑問に對して、數十年の後に至つて如何なる發見に貢獻するかは全く豫想できない。恐らくこれらの發見は、總ての假定の人爲的基礎を覆す如きものであらう。若しさうだとすれば、本書に於て解決を企てゐる該問題に對して、今此處で解決すべき必要があらうか。又その結果を世界に公表せねばならないだらうか。然し自分の考へでは、本書によつて辿り來つた類推、關係及び連鎖の或物は、考慮の價値を有するものとして認める事には否定し得ないと思ふ。(二)

【註】(一) 自分は我々の用ひた用語を明瞭にする爲めに、こゝに二三言を費さうと思ふ。この用語はこの論議中に或程度まで展開されたのである。「性本能」といふことは、男女兩性といふことから及び繁殖に關する事項から知つたのであるが、この語の使用を續けて精神分析を研究してゐると、その結果では繁殖作用に關係してゐる事は左程重大なことではないことを認めた。ナルチス型リビドーの發見及び個々の細胞にリビドーの概念を當て嵌めて説明すると、性本能といふものは我々の爲めに生物の各分離された部分を相互に吸引して結合させる愛 Eros といふものに轉換されてきたのである。我々の思索は、生命の發端からこの愛が働いてゐて、それを「死の本能」に對する「生本能」として現したのであると

いふ事を考へさせられた、この死の本能は、無機體が生を受くる事（受精すること）によつて生じたのである。即ちこの思索は、發端から對峙してゐたこの二つの本能の假説に基いて、生の謎を解かうとしたのである。「自我本能」が斯様な轉換を受けたといふ事は恐らく了解に苦しむ處であらう。自我本能といふ用語の本原的の意味は、その目的として外界の對象を求めんとする性本能と區別される處の一種の本能的傾向（明瞭には分つてゐないが）を總てのものに應用したのである。性本能の表現は即ちリビドーに外ならぬのである。其後に至つて我々は自我の分析を試み、所謂自我本能なるものの一部も、それ自身をリビドーの對象物として取上げるといふ點に於て、又リビドー性を有するものだと認めたのである。それ故に自己保存本能（自我本能）のうち、このナルチス型本能は、リビドー的性本能と今は見做されるに至つた。かくして自我本能と性本能との對照は、今は自我本能と對象物本能との對照となつた。この兩本能は、その質に於てはリビドー的である。然し乍ら其後に至りこれに代つて新しい對照が出來た。それはリビドー的（即自我及對象物）本能と、その存在が自我によつて認められ、且つ恐らく破壊本能として認められる他の本能との對照である。我々の思索は、この對照を生本能（エロス）と死本能との對照に代へたのである。

第七章

早期狀態を再現せむとするこの傾向が、かくの如く實際に一般的傾向であるとするならば、精神生活に於ける大多數の作用は、快不快原則に獨立して存するものと認められても、決して怪しむに足りないであらう。この一般的傾向が總ての部分的本能に傳はり、それが爲めに總ての生物は發達の過程の或點まで逆行させられるであらう。然しながら快不快原則は未だ總ての範圍にまで及ぼしてゐるわけではないから、さういふ假定をなしたとて、必ずしもそれに反對したものとは云へない。我々は猶、本能的反復作用と快不快原則の支配下に於けるものとの關係問題を、未だ解決してはゐないのである。

精神作用の最初のもので且つ重要な作用の一つは、來襲し來る本能の刺戟を拘束するといふ事であつた。即ち二次型作用をもつて一次型作用に置換へることであつた。そして流動的力の充塡を、主として靜止的(强直的)充塡に置換へることであつた。この轉換中に發生する苦痛に就いては、何等の注意を拂ふ必要はないのである。それ故に、これによつて快不快原則は破らるゝことはない。尤もこの轉換は快不快原則に役立たんが爲めにも起ることがある。また拘束といふ事も快不快原則に導く準備

であつて、これに基いてこの原則が認容せられ、發現されるのである。

我々は從來まで明瞭な區別をつけなかつた作用と傾向とを明快に爲さうと思ふ。快不快原則は或作用に役立つ爲めの傾向に過ぎないもので、即ち全體としての精神機能を刺戟から救ふこと、換言すれば刺戟を能ふだけ不變に且つ低く保たしめる事である。我々は未だこれらの概念を確實なものとは認めないが、斯かる定義の下された作用は、總ての生物の最も普遍的な傾向であらうとは云ひ得る。それは總ての生物は無機狀態の平和を求めようとしてゐるからである。我々總ては、得らるゝ限りの最高快感を經驗してゐる。これは性行爲の快感である。これは極めて高潮に刺戟されたものを一時鎭靜させる事である。然し乍ら本能の刺戟を拘束するといふ事は準備的作用に過ぎない。その目的とする處は、刺戟を解放するに當つて得らるゝ快感によつて、終局の調節を測ることである。

これに就いては、快感及不快感は拘束されたる刺戟からも亦拘束されざる刺戟からも發するや否やといふ問題が生ずる。拘束されない即ち第一次型刺戟は、拘束された刺戟即ち第二次型刺戟に比して、快及不快の兩者により強い感覺を與ふることは疑ひのないことである。時の問題では一次型刺戟は早期時代に屬してゐる。即ち精神生活の發端であつて、まだ他の作用の起らなかつた時代のものである。此の時代に於ても猶ほ快不快原則が示されてなかつたとするならば、その後の過程にも設定さ

れなかつたであらうといふ結論は下し得る。そこで我々は一つの歸着點に達することが出來るのである。この歸着點の底に存するものは單一なものではなくて、精神生活の發端には快樂の追求が、後の時代よりも强烈に示されてゐたのである。たゞその追求が常に或る拘束を受けてゐた爲めに、その機能がむらにしか示されなかつたのである。生物が成熟の時代に達して初めて快不快原則が證明されて來たのである。然しこの原則と雖も他の總ての本能が受けるやうな制限は免るゝ事は出來ない。兎に角如何なる刺戟に逢遭して、この刺戟から快感及び不快感を生ずる事があつても、それらの感は常に二次型過程が示さるゝ場合と一次型過程が示さるゝ場合とを問はず、等しく其の存在を認めなければならないのである。

これによつて我々は更に研究を進ませる必要を感ずる。我々の意識は內側より快感及不快感を傳達されるのみならず、或る特殊な張度の感覺をも與へられる。この感覺は、それ自身では快感でもなく亦不快感でもない。我々がこの感覺で識別し得ることは、拘束された力であるか拘束されてない力であるか、又は絕對的量に關する張度、恐らくは充塡の程度の張度感であるか、或は或時間內に於ける充塡の量の變化であるかである。生本能には內側の知覺が特に深く關係してゐることを認めざるを得ない。何故なれば生本能の出現は平和の攪亂者として現はれ、この出現と共に間斷なく張度を嵩むる

狀態となるからである。この張度を解除することは快感として感ぜられるのである。死の本能はその作用を、目立たぬやうに（快感と見せて）顯はしてゐる。それ故に快不快原則は死の本能を直接援助してゐるやうに見える。又外側の刺戟に對しても無論監視の役を爲してゐる。この外側の刺戟は生本能と死本能との兩者によつて危險物と見做されてゐる。然し死の本能の特に監視してゐることは、內側から發する刺戟の增加である。この刺戟の增加は生を營む目的を有してゐるのである。これらの點に對して他の無數の問題が生じてくるのであるが、未だ解答は困難である。我々は此處に隱忍して、他の解決の手段及び研究の機會を待たねばならぬのである。同時に我々は漸時追求し來つたこの道程を、何等の成果が擧がらない場合には何時にても放棄する覺悟を持たねばならない。科學から期待されむが爲めに一信念を放棄した時に、『眞の信者』にのみ、その代償物を受くることが出來るのであるから、若し研究者がこの見地を益々擴張し且つこれを改修することが出來る時には、その效果は極めて多大であらうと思ふ。

當分の間、我々は科學的智識の進步の遲鈍なる事に向つては、次の如き詩人の言葉をもつて慰め得るより外に途はないのである。

第七章

快不快原則を超えて

我々は飛んで行けないところへは、
跳んで行かねばならぬ。

……………

聖書では
跳ぶのを罪としてゐない。

Makamen des Hariri (Rückert)

——（終）——

『快不快原則を超えて』の約說

この『快不快原則を超えて』はフロイドの著書の中で極めて難解だと稱されてゐる。それ故さういふ部分は、誤解の生じないやうにと思ひ直譯的にした爲め、或は意味の解し難いところがあるかもしれないが、一般には出來るだけ了解されるやうにと思ひ、平易に書いたつもりである。

その難解なものを、成るべく了解して讀んで貰ひ度い爲めに、譯者の老婆心から、各章の要領と筋道とを約說して置きたいと思ふ。

第一章は、精神作用は總て快不快原則に基いてゐるといふ事と、及びその原則だけでは說明し難い精神作用があるといふ事とを主として論じたものである。卽ち快感及び不快感は、精神生活中に發生する興奮の量の多寡に關係してゐると說明して、フェヒネルの『安定に向ふ傾向』に苦樂感を結合した特殊のものだと稱してゐる。然しこの快不快原則が精神生活の主權を占めてゐるものとすれば、我我の精神作用の大多數は、必然的に快感に伴はれねばならない筈だが、さういふ鹽梅にはなつてゐない。そこで一時現實原則に代つて貰はなければならない破目に陷る。卽ち最後に快感を得むが爲めに一時だけ苦痛を忍ぶといふ事になる。こんなわけで、何處までも快不快原則が精神作用を支配すると

いふ事が出來ない場合が認められるといふ事を論じてゐる。

第二章に於ては、この快不快原則の支配を受けない明瞭な事柄を提出してゐる。それは戰爭神經症の症狀である。恐らくフロイドは戰爭神經症の多數の例を扱ひ、それによつて快不快原則を超えた原則が存在してゐることに確信をもつたことゝ思へる。本書はこの點が實際的の主論であるらしい。戰爭神經症は過般の歐洲大戰の際に多數發生したもので、それは註に出てゐる著述を參照すると明瞭に了解できる事だが、戰爭の現場にあつて生命の危險を强度に經驗した將卒が、一種の恐怖性を帶びた神經症に罹つて戰地から歸還させられる。それが兵卒よりも將校の方が多く、殊に常に先頭に立つて敵前に進んで行かねばならぬ尉官に非常に多く生じた。それらの患者の枕頭を每夜襲ふものは惡夢であつて、その恐怖の爲めに目を醒まされるのである。遂には自殺を遂げるに至るものがあつた。當時、戰爭神經症患者が獨澳軍では治癒されて再び戰線に現はれる事を英軍では非常に不思議に感じて居た。その治療が精神分析によつて遂げられたことを知り、此處に初めて英國の學者が精神分析學を習得して、自國に採用するに至つたといふのである。これは餘事であるが、この戰爭神經症患者の夜每の惡夢は、快不快原則では容易に說明され難いものであつた。患者は每夜夢で恐るべき戰地に連れ戻されるのであるが、戰地の場面は決して患者の願望してゐる箇處ではないので、寧ろ忌避されてゐる

る箇處である。これではフロイドの主張した『夢は願望滿足』といふわけに行かなくなる。その以前から普通の恐怖の夢、うなされる夢の説明は困難であつたが、戰爭神經症患者の毎晩つゞく惡夢には、その願望滿足説を絶對なものとして考へることが出來なくなつたのである。同時に快不快原則にも基いてゐるものとは考へられなくなつたのである。それ故、こゝに於て本論で述べてある通り反復する强迫衝動の制し切れぬ威力を認めるに至つたのである。この反復强迫行爲の理由を説明するに當つて、子供の遊びを觀察して、受動的の不快なる經驗を、アプレアギーレン(再現)して能動的にすることだと云つてゐる。そして、自身に受けたその不快なる場面を、今度は自身の力で自由に操縦しようとすることだといつてゐる。操縦できれば今度は自身がその場面を支配することが出來、周圍の適當の人に對してそれを向けて、所謂復讐することが出來るのだと説明してゐる。

第三章になると、他の方面からも快不快原則を超えたものを提出して來てゐる。それは神經症患者が分析治療中に常に示す一つの現象たる轉嫁神經症である。この轉嫁神經症とは、分析が或程度迄進行すると惹起される症状であつて、主として忘脚されてゐた嬰兒時代の性的生活(即ちエヂポス結情(コンプレクス)などが含まれてゐるもの)を再現させて來る。即ち、此れを現在のものとして經驗するものである。この忘脚された過去を再現するといふ事は、抑壓されたものゝ力を表現する事であるから、自我

に對しては悉く不快なものばかりである。それ故又々快不快原則に基いてゐるとは云へないことになるのである。それから反復强迫症そのものは、何等快感の要素を含んでゐない過去の經驗の復活であると云へることになる。その理由の說明として、嬰兒時代に抱いた性的願望が悲慘なる最後を遂げ、それが劣等感の要素ともなつた事を論じて、如何に懊惱苦痛であつたかを說明し、この苦痛感が分析中に轉嫁神經症狀として潑剌として再現されるからであると云つてゐる。そしてこの嬰兒時代の懊惱苦痛を新らしき經驗として再現させるといふ事は、分析治療には何うしても避けられない技巧に屬してゐて、省略するわけには行かないといつてゐる。かういふ現象は、神經症患者のみならず常人の生活中にも猶少からず認められるものだといつて、例を擧げて說明してゐる。そしてこの反復强迫症を假定するに就ては、快不快原則よりも更に原始的な元素的なものがあつて、それは快不快原則の土臺の如きものになつてゐると論じてゐる。

第四章では、反復强迫症である處の外傷性神經症の發生に關する機構を論じてゐる。戰爭神經症も外傷神經症に屬してゐるもので、それらの症狀が反復强迫症狀となつてくる機構を、生物學の根原にまで遡上つて說明してゐるのである。そして外傷神經症患者の夢の說明にまで及ぼし、それも同じく快不快原則とは別箇の目的をもつたものであると結んでゐるのである。

それに就ては、原生物が漸次あらゆる障碍物を乗超え、生を脅かすが如き外界の刺戟を突破して來て、そしてその外皮に保護層を構成するに至つたといふ假定を下し、その構成された保護層が、外界の刺戟によつて破壞された場合に、外傷性神經症が惹起されるのだといつてゐる。保護層が破壞されたる場合には、力の拘束と解放とが現はれると解いた。即ち外界より一つの刺戟が來つた場合に、精神區劃に於ては、外皮の保護層によつて無害なものとなすことが出來る。處が外界の刺戟が、ある程度を超えて强大なものであつた場合には、その保護層が破壞されるといふ事は必然である。この場合に起る現象としては、第一に各所からこの破壞された部分に對して、受けた刺戟に相當するだけの力が該刺戟に對する防衞の爲め集る。即ちその周圍に力の充塡が起る。さうすると他の精神區劃ではそれが爲めに力の減退又は消失が起り、從つて精神活動の麻痺や減退が廣汎に互つて起つてくる。この場合に多量に力の充塡を受けた區域でさへも、更に流れくる新しい力を受けて、これによつてその充塡を不動性のものとなして精神的に拘束するといふことになるのである。即ち保護層が破壞されると力の充塡によつて刺戟を制禦し、拘束せむとする企てが生ずるのである。これが所謂反復强迫症となるのである。そして刺戟に對して豫感を起して相當なる準備行動が出來てゐた場合、即ち豫感によつて力の過剩充塡があつた場合には、外傷の程度も低くて濟むが、誘惑が缺けてゐたか或は無かつた爲

めに、過剰充塡が低いか或は無かつた時には、外傷の程度が强度となる。然し乍ら或程度を超えた强き刺戟の場合、例へば戰爭の外傷(勿論精神的の)の場合には、この準備行爲は役に立たなくなる。だから戰爭神經症患者が夢で每晩恐怖を感ずる理由は、夢によつて豫感を喚起して、刺戟に對する操縱力を復活させようとする企てであると見做してゐるのである。豫感が脫漏した爲めに外傷神經症が起されるのである。斯く論じ來つて、かゝる精神作用は快不快原則には違背することなしに、矢張り反復作用の傾向に基いてなされてゐるのであると論じてゐる。

第五章は、第四章に於て外界より來る刺戟に對して、反復强迫症狀の發現することを論じたるに對し、一步を進めて內界より來る刺戟に對する論議をなしてゐる。內界より來る刺戟の源泉となつてゐるものは、有機物の本能であると云つて、この本能は體軀から發生して精神機能に傳達される力の總ての代表であると論じてゐる。これを硏究するに當つて、資料となつたものは夢の現象だつた。夢によつて無意識に於ける作用と前意識に於ける作用とが全然異つてゐることを發見し、夢の仕事として施される轉嫁、轉位、壓縮等の現象を精神的一次作型用と呼ばれ、前意識で施される現象を精神的二次型作用と呼ばれるに則り、本能から來る刺戟も亦同じくこの一次型作用法則に從つて示されるものであると論じてゐる。それ故この一次型作用に達する本能の刺戟を、拘束すべき特務を持つた高層の精

神作用が、一朝その拘束に失敗する時は、外傷性神經症に類似した症狀を發するに至ると見做してゐる。卽ち反復强迫症が起ると稱してゐる。

この反復强迫症の現象は、極めて高度の本能性から發してゐるもので、それを快不快原則に對立させてみると、運命的性質を示してゐる。

そこでこの本能性なるものが、反復强迫症に連絡してゐる理由を明かにする爲めに、本能の定義を決定して來た。それは今迄論じて來た事を根據として定めたものである。卽ち本能は總ての有機體に宿つてゐる傾向であつて、有機體をして、その早い時代の狀態を再現させるやうに努力させてゐるものであると論じてゐる。さうしてその例を遺傳の現象や胎生學から引いて反復再現する强い力を有してゐることを說いた。そして總ての生物が辿りゆく道筋は、生物が旣に捨て去つた最も古代の出發點にゆくべき道であると云つて、生物の以前の狀態卽ち無生物に還元しようとする事が、本能の目的となつてゐると云つた。そして無生物より生物が發生したる狀態、更にそれより本能の發生する過程、その過程が現にその發生の當初より無生物に還元せむとする傾向より生じたものであると說き、最後に本能が無生物に還元せむとする傾向は、換言すれば死に到着せむとするに外ならぬと見做したのである。それ故當初の生物は生を得るや間もなく死滅してゐたものであつたが、外界の影響が變化して

來た爲めに、死滅の道程が延長され迂回されるやうになつて來た。それゆゑ直ちに死滅せんとしても得ざるに至り、死せむが爲めには迂回したる復雜したる道程を辿らねばならなくなつたのである。この迂回路は忠實に保守されて居つて、これが現在吾々の生命の現象となつたものであるとしてゐる。それ故吾々は過去に於て辿り來つた道筋をのみ辿らむと欲して、この道以外の道筋を經て無生物に還元せむとする內外の影響を悉く拒絕反抗するのである。かく內外の影響を拒絕して、過去の道筋を安全に辿らしめ、死の到着點に進ましむべき擁護者は所謂自己保存本能である。この本能の爲めに既定の道筋以外を辿ること、卽ち病死自殺によつて直接に死の到着點に達せむことには甚しき反抗を蒙るのである。故に自己保存本能は『死の本能』でなければならぬ。

更に一方に於ては、この死の道程を辿つてゐないものが發見された。それは生殖細胞である。生殖細胞は生物の本原的性質を保留して一定期間の後に分裂する。その分裂に際して、遺傳的の傾向と新らしく得たる本能的傾向とを持つて獨立する。この分裂が卽ち生物の發達であつて、この發達は過去を周期的に繰返す。卽ち分裂を常に繰返すのである。この繰返しといふことが生殖細胞の本原的性質であつて、これが爲めには、この細胞と他の生殖細胞と結合（卽ち精虫と卵の結合）によつて不死性を獲得するのであると論じ、この本能を性本能と見做してゐる。性本能はこの事實に明かなるごとく

生命の本能で、『生の本能』と認められる。

こゝに於てフロイドは、生物の本能を二大別して、自己保存本能である處の『死の本能』と、及び性の本能である處の『生の本能』とを說いたのである。この二種の本能が吾々の內界の衝動となつて絕えず刺戟を起すのである。然し乍らこれらの本能は、決して抑壓されることなしには滿足なる姿をもつて現はれることは出來ない。抑壓を受けた本能は、それが滿足を得むとして間斷なく奮鬪努力を傾倒してゐる。この奮鬪努力が現在人類の發達を齎し又文化を齎す所以となるものであつて、人類がそれ自身の中に、完全なるものにならむとするが如き衝動を有してゐると思ふのは慰藉的の錯覺である。それゆゑ下等動物の發達と何等異つてゐる處はないのだと論じた。これは人類が益進步發達して遂には超人になるだらうと信じてゐるナルチス的傾向の强い人に對して、辛辣なる皮肉を投げたのである。斯うしてフロイドは精神分析學によつて人間の自惚的錯覺を各方面から悉く折破してゐるのである。

この章で面白く感ぜられるのは、死の本能を唱道した事である。これによつて『總ての生の到着點は死である』といつたのは、佛敎で『生死一なり』と云つてゐるのに合致してゐる。

第六章に於ては、前章に於て論じた生本能と死本能とを、更に生物の形態學硏究と比較して精細に

論じてゐる。

それにはヴィスマンの著書『壽命に就いて』、『生と死とに就いて』、『胚芽細胞』等を對象として論じ、氏が生物を形態學的見地より論じて『死すべきゾマ』と『不死の性殖細胞』とを認めたるに對し著者は動的（ディナミッシ）の見地から『死本能なる自我本能』と『生本能なる性本能』とを認め、この兩者の概念が異つた道から出發し乍ら、測らずもその歸着點に於て一致を見たといつて微笑を洩らしてゐるのである。處がこの一致せる如く見えた兩者の概念が、ヴィスマンの叙述を檢査するときは必ずしも一致してゐないことを指摘した。それは前述の『死すべきゾマ』と『不死なる生殖細胞』とはこれを複細胞生物にのみ認めて、單細胞生物には認めないといつた事である。この事に對して、著者は痛切なる反對を縷々として費し、『生物は内側の原因によつて死滅すべきものなり』『單細胞動物も亦死すべきものなり』として各種の實驗を參照し、それによつて次の二つの結論を得てゐる。第一、老衰せる原生物が他の原生物と結合し、更に分裂する時は若返る。第二、原生物は自己の新陳代謝産物によつて死す。然し乍ら新しき培養液中に入れる時は死せずと。これにより生物が死を招く内側の原因を假定してゐるのである。猶ヘーリングの所謂アナボリック（建設）及びカタボリック（破壞）の兩說に對しても、同じく著者の生本能と死本能とが一致せるものと認め、遂にショーペンハウエル

の『死は生の結果なり』『生の目的は死なり』にまで比較させて來た。以上によつて著者は生本能と死本能との二大本能の説明を完結させたのである。

精神分析學が生物學及び哲學の領域にまでもディナミッシの見地から進入して行き、然かも堂々と彼等以上の明快なる説明を揭げて進んでゆきつゝあるは實に興味の盡きざる處である。

更に本章では『複細胞組織を形成する所以は、單細胞の壽命を延長せしむる手段である』と云ひ、それは二個の單細胞の一時的混合が『保存』『若返り』であるからだといつてゐる。これを更に有名なるリビドー說に當て嵌めて、各細胞が他の細胞を性的對象物として取扱つてゐること、及び斯く取扱ふのは性本能の役目であると假定したのである。それ故にリビドーは、各細胞間を結合せしめる所謂エロス(愛)に相當するものだと說明した。それよりリビドーと本能との關係を說明して、リビドーとは對象物に向けられたる性本能の力であると明快なる聯絡をつけたのである。

このリビドーの說明を更に進めむが爲めに、自我の問題に踏込んで行つた。自我は、轉嫁神經症の分析の際に、第一に對象物に向けられた性本能と、第二にそれに反抗してゐる或物、それは不明なものだが假に自我本能と呼ぶべきものを認めた。又精神分析によつて、リビドーが對象物より撤回されて自我に向けられた事を經驗し、又子供のリビドー發達の硏究によつて、リビドーの發生地が自我で

あることを明かにした。リビドーがこの自我を對象物として、纒綿した狀態を『ナルチス型』と呼び、これが性本能の表現となつたのである。そしてこの本能が將來自己保存本能として認められるやうになつたのである。こゝに於て自我本能と性本能との區別が不明瞭になつて來た。何故なれば自我本能の一部はリビドー性を有するものと認められたからである。そして自我の裡にも性本能が働いてゐるといふことになるからである。これは自我本能と性本能との差を質の差であると考へたからであつて、實際は質の差ではなく、精神區劃的に考へた差でなければならぬのであつた。即ち轉嫁神經症の場合で考へれば、一方は自我であり、一方は對象物に向けられたリビドーの充塡であるとした。

斯くて著者は前述の如く區別的に困難を感じた本能を明瞭にせむが爲めに、性本能、自我本能と呼ぶよりも、生の本能、死の本能と呼ぶべきであると主張した。そしてユングのリビドー說は一元論であつて、それは解釋に當つて非常に混雜を來すものだと云つた。そして自我の中に存するリビドー性本能は、我々が未だ知り得ざる他の本能と一緒になつて、或方法で混入してゐるものだらうと云つた。故に著者は、自我の中に撤回されて來たリビドー卽ちナルチス型だけは認めてゐて、それ以上のものは不明であると見做してゐるのである。

その生本能としての對象物に對する愛は、それ自身に兩極性を有してゐて、一は愛の極、一は憎惡

の極となるのである。その兩極を一方から他方に辿つてゆく關係よりして、性本能の加虐性要素及び被虐性要素が認められると云はれた。これには先づ生を支持するエロスから、何故に對象物を害さむとする加虐的衝動が發したかといふ疑問が生ずる。その說明として、對象物を虐待する傾向は、リビドーの發達を檢査する時には、口唇時代に於ては對象物を口內に食盡すことが性的占有であり、其後に至つては生殖作用と共に性的要求を追求せむが爲めに、性的對象物を征服せむとする作用となつてゐるのを見る。それらは悉く加虐的傾向と見做すことが出來るといつた。次いで更に、愛の一極としての性本能の被虐性的要素を認めるに至つたのは、その說明として、臨床的觀察により加虐性が對象物を離れて自我に逆戻りしたもの、自我を虐待することであると見做した。これによつて自我が虐待されるのである。この逆戻りは退行現象（卽ち發達の早期の狀態に戻ること）であると說明した。この退行によつて、被虐性要素を死の本能の一例だとして擧げ得ると稱してゐる。

以上によつて生本能とリビドーとの關係が明かになつたのであるが、更に問題を反復强迫症に戻して論じてゐる。卽ち二個の生殖細胞と其の發達とは最初の狀態を繰返すこと卽ち死の本能であつて、それは反復作用の性質と稱することが出來るが、その二種の生殖細胞の結合そのものを主要點と認めてゐる生本能の性質は何であるか。この結合は元來如何なる源泉より出發してゐるのであるか。

著者が生の本能とされてゐる二種の生殖細胞の結合について、その元來の性質を何故に茲に於て提言したかといふことは興味の多い問題である。これは換言すれば性的繁殖の根原及び性本能の源泉を究めることで、何故に性感を有するかといふ問題に到達するものである。これは又著者の反復作用に結び付くべき一條件を具備したものが存在してゐる爲に、提出したものであることは明かである。

この解說には今日迄專門家すら躊躇してゐる處だと前提して、まづダーウィンの說を擧げた。ダーウィンは二種の細胞の結合は偶然の機會によつて結合したもので、その偶然の結合が有益であつたが爲めに繰返すに至つたのだと解いてゐる。この論は唯紹介にしたに過ぎないもので、著者の云はむとする處は、次のプラトーンの對話篇であつたのだ。その對話篇には、著者の考へてゐる條件を具備したものがあつて、一概に神話的の談叢として輕視すべきものではなからうといつてゐる。その條件とは『本能は早期の狀態を再現する必要があつて生じたものである』といふことである。これが著者の反復作用に結び付くべき强大なる條件である。その條件を充してゐる神話的の談叢中には、人間には三種の性があつたこと、卽ち男女兩性の外に第三の性があつて、その第三性は總てのものが重復して居り、卽ち二つの顏面、四つの手、四つの足、二つの性器があつた。この人間をツォイスの大神が兩斷した爲めに、各半身は互ひに戀慕するやうになつたと記されてある。卽ち最初の狀態を再現したい

が爲めに、相互に結合せむことを望んでゐるのであるといふのである。

以上を總括して著者は次の如く提言してゐる。『我々は、詩人的哲學者の考慮した如くに、生物はその生を享けた當初に於て二部分に切斷されたもので、其後絕えず性本能の手段によつて再結合を求めつゝあるといふ假定を爲してよいだらうか。性本能の中には無生物質の化學吸引力が未だ猶存續して居り、この本能が原生物界から漸次あらゆる障碍物を乘超え、生を脅かす刺戟に充滿せる環境中を奮鬪し來り、遂に保護層を構成すべく餘儀なくされたと假定してよいだらうか。そして斯く散在せる生物體の斷片が複細胞組織を作り、遂に極めて强められたる形に於て再結合を欲する本能を生殖細胞に轉位するに至つたと假定してよいだらうか。』この著者の言葉は、本書の結論であつて、廣く世に問うたものであるが、その一面には決定的のものでないとはいへ、確固たる道程を經て來て提出したる問題で、殆んど決定に近づいたものと信じてよいと思ふ。

第七章に於ては、この『早期の狀態を再現せむとする傾向』が快不快原則を超えたものであることに就いて述べてゐる。而して本能的反復作用と快不快原則の支配內に於ける關係との問題は、いまだ完全に解決されたものでないとしてゐる。卽ち快不快原則の支配を認めないとは斷言出來ないと云つてゐる。猶その說明を精しくせむが爲めに、快不快原則は生物が無生物に還元せむとする傾向、卽ち

死の本能に對して、或る援助を與へむが爲めの傾向であると云つた。卽ち精神作用の張度を增加させようとしてゐる內外の刺戟に對して、或る監視の役割を果し、精神作用をして快感に據らしめむとしてゐるのであると解いた。そして快不快原則と本能的反復作用の關係を明かにしたのである。

强迫神經症の一例

一九〇九年精神分析學及精神病理學研究年報第一卷所載

次項には二種の問題を述べたいと思ふ。第一に、余は强迫症の一例から得た斷片的の話を述べよう。此の例は分析期間と影響とが多大であつたことや患者自身の印象などから見て、可なり重症のものだつたと見做してよからう。治療は約一ケ年續き、患者は人格を完全に恢復され、彼の禁制も取除かれたのであつた。第二には、この例から出發して、余が以前に分析した多數の患者を參照して得た强迫症の原因や、又それの心理的機制を、金言じみた説明を加へながら叙述して、一八九六年に公表した此問題に對する余の最初の觀察を此處で展開して行かうと思ふのである(一)。

【註】(一)『擁護性神經症に就いての再度の研究』(强迫症の質と機制)(一八九六)參照。

この種類の叙述には序言が必要なのだ。なぜならば序言がないと、これは完全に正確なもので、他人が見習ふほどの價値があると思つて發表したのだらうと考へる人があるかも知れぬからだ。實際余はこの研究に當つて、この問題に當然加へられるだらうと考へた妨害を内外から受けてゐる。それだから余は出來るならば更にこれ以上の材料を喜んで提供したいと思つてゐるのだが、この患者を取扱

つた事について綿密な狀態を申述べることは出來ない。何故かといへば、それは患者の生活狀態の微細な處まで立入らなくてはならない。都會人は余の醫學上の活動に特別の注意を集中して、うるさいほどの興味を向けてくるものだから、此の病例を忠實に叙述するなどといふことは、やつて行くわけには行かない。然し乍らかういふ場合によくやる取捨變更などは全然無要なことで、又面白くないことだと考へてゐる。然し取捨變更が少な過ぎると多衆の不謹愼な好奇心から患者を迷惑させる。また取捨變更が餘り多過ぎると明瞭な材料を目茶苦茶にする虞れがあるから、さうならぬやうにと餘計な犧牲を拂はなければならない。材料といふものは實際生活の細目な部分であつてこそ、初めて正確なものが得られるのである。それだから、患者の深い秘密をあばく事は、患者の最もつまらない精細な事を曝露させるよりも容易だといふ矛盾が出來てくる。何故かといへば秘密をあばいてもその患者の誰人なるかは一寸分らないが、精細なことを材料に取入れるとその患者の誰かといふことが容易に知られるからだ。

これはこの病例やその取扱ひ方の叙述を余が徹底的に消略したに就いての言譯であるが、猶余は強迫症の精神分析的研究に當つて、叙述の仕方が秩序のないものとなつたのはこれ以上の理由があるのだ。それはこの强迫症患者の重い症狀の構成されるに就いて、その複雜した部分までは徹底して檢べ

る事が出來なかつたといふ事を告白しなければならないのだ。又同時にたとへ余がそれをこゝに分析して明快にすることが出來ても、分析の助けによつてその構成を認めたり又確かにそれであるといふ事の解釋が出來たとしても、之れを明瞭にしてみせることは不可能だ。この複雜な構成は治療を重ねてゐる間に初めて追々と明瞭になつてくるものなのである。これを爲すに當つて非常な困難を感ずるのは患者の抵抗といふことで、またその抵抗がどんな格高で出てくるかである。それぱかりでなく、これの外にも更に强迫症そのものを了解することでさへ、決して容易でないことも公表して置かなければならないのだ。强迫症はヒステリーよりは容易である。だが人々は實際にはさうだとは思はなかつたであらう。强迫症患者のいふ言葉は、卽ち言葉そのものが症狀の秘密な考へを表現する手段であるが、それはヒステリー患者がいふ言葉の訛と同じなのだ。然し兩方を比較すると强迫症の言葉の方が辿り易い道筋をもつてゐることが解る。なぜならば强迫症の言葉は、我々普通の人が意識して話してゐる喋り方とさう違つてはゐないからだ。兩方の著明な差異としては、精神的の過程が一躍して肉體的の症狀となるといふヒステリー的の轉換が强迫症には缺けてゐることだ。この轉換といふ事はまだ十分には了解できてゐない。强迫症の研究の困難なのは、恐らくは我々が實際に證據立て得る程多數の强迫症と親しんでゐないからだらう。重症の强迫症に惱んでゐるものは、ヒステリー患者に比較

して治療を受けるものは僅少である。そして猶日常生活にあつてもその症狀を隱蔽してゐる。そして出來るだけ我慢して、やり切れなくなつた時に漸く治療を受けにくる。恰度彼等が肺結核患者であつたとしたら、養生院から入院を拒まれる位に惡くなつてから初めて來るのだ。余がこんな比較をする譯は、いま述べた慢性傳染病のやうに、强迫症の場合でもその初期のうちに手をつけたなら、その病氣の重症輕症に拘はりなく非常に巧妙なる效果が納められるからである。

斯ういふ狀態なので、この例も御承知の通り公表するに適當な範圍内だけの報告にとゞめて置いたのであるから、その不完全であることは止むを得ない。次項に揭げた一束の報告は可なり手を盡して集めたものだが、それでも滿足なものではない。だが、かういふ研究者の仕事に對して、その研究の出發點としては役に立つだらうと思ふし、又協力するといふ事から個人の努力では恐らくは得られないやうな成功を齎すことが出來ようかとも思ふ。

一、臨床記錄の抽出

余は大學教育を受けた一青年から訪問を受けた。その青年は子供時代から强迫症に惱んでゐるもので、この四年間は殊にそれが亢じて來たといふのである。その者の主な症狀としては、彼の非常に好んでゐる二人の人に、何事か事變が振りかゝつて來はせぬだらうかといふ心配であつた。この二人といふのは彼の父親(A)と崇拜してゐる婦人(B)とであつた。この症狀の外に、强迫的の衝動を自覺し出した。例へば剃刀を持出して自分の喉頭を切らうとするやうな衝動とか、又は些々たる事件に對して、時々『物忌み』などを感じて來た。この青年のいふ處によると、こんな强迫觀念と戰ふ爲めに自分は數年を弄費し、その結果彼の生活狀態は失敗に終つたといふ。それで種々な處置をやつてみたが何等の効果もなかつたが、某處の近くの治療所で受けた水置療法は稍微効を奏したといふ。この微効を奏したといふのは、彼の考へによると其處では正規的に性の滿足が出來たからだといつてゐるが、然し今はその機會を失つて性の滿足は得られず、得られても不規則的だといふ。彼は娼婦に對しては嫌惡を持つてゐて、自分の性的生活は阻止されてゐるといつた。自慰はあまりやらなかつたが、十六七歲の時に覺えて、爾來性的能力は尋常で、二十六歲の時に初めて性行爲を爲したといつてゐる。

この青年は余に頭腦明晰らしい印象を與へた。余はこの青年に性生活を話す時になぜそんなに力説したのかと聞いた。それは余の精神分析學の理論を研究したからだと答へた。然るに彼は余の著書を實際には一冊も讀んでゐない事が分つた。唯最近彼は余の著書の或る頁を見た時に、言葉の連想といふことで不思議な説明に出逢つたのだ(一) この連想は彼が余に相談しようと思つてゐた觀念に關係したことで、自分の『考への努力』の或物を追憶させたのであつた。

【註】(一) 日常生活の病理心理(一九〇四年)參照。

(A) 彼の父は實は數年前に既に死亡したもので、それに對して患者は杞憂を有してゐるのである。(譯者)

(B) これは患者の戀人である。本文中に「彼の婦人」「彼の愛人」と記載されてゐるは皆この人のことである。(同)

(a) 治療の開始

翌日余は彼に向つて、治療に當つてはその唯一の條件に服從せねばならぬことを誓はせた。これは

何かといふと、彼の頭腦に浮んだものは何でも、たとひそれが不快な事でも些々たる事でも、又は辻褄の合はぬ無意味なことでも、總てを告白せねばならぬといふ事を告げた。而して余は彼の喋舌り出すことには何んな話題であらうとも、話を開始してゆくやうに進めて行つた。(A) 彼は次のやうな話を試みた(一)。

【註】(一) 次に書いたことは治療を開始した晩に患者から書取つた備忘錄によつたもので、余が追憶できる限り患者の言葉をそのまゝ採錄した。治療中に患者のいふ言葉を書取るといふことは警戒しなくてはならないのだ。患者の言葉を一々筆記することは、病歷は正確には取れるが、一方患者の言葉に對する醫者の注意が減ぜられるといふ結果を生じて、償はれない程度の害となる。

彼の語る處によると、彼は非常に崇拜せる友人があつて、犯罪的の衝動に苦しめられる時には常にその友人を訪ねてゐた。彼は或日その友人に自分が犯人だつたら侮蔑するや否やと訊ねた。(B) 友人は彼を絕對に善人であると保證して、そんな考へを起すのは恐らく青年時代から、自分の生活の暗黑面ばかり見る習癖を持つてゐたからだらうといつて慰めた。患者の話では、彼にはもう一人の友人があつて、前の友人と同じく彼に對して感化力をもつてゐた。この友人は十九歲の學生であつた(當時患者は十四五歲だつた)。この學生はこの患者を非常に好いてゐて、その自重心を甚だしく賞讚した。だか

らこの友人には彼は恰度天才のやうに見えてゐた。この友人は其後になつてこの患者の教師となつた。それから突然に患者に對する態度が變つて、彼をまるで低能者のやうに取扱ひ出した。遂にこの友人は患者の姉妹の一人に目を付けるやうになつた。そこで彼が教師になつた理由は、その家庭に出入りする自由を得ようとしてやつた事だと分つた。この事件が彼の過去の生活に於ける一大打撃であつた。患者は更に休まずに次の話をつゞけた。

（註）（A）これは精神分析法の一つの技巧で「自由連想法」と稱するものである。（譯者）

（B）こゝにこの患者は犯罪感を有してゐることを第一に注意すべきである。最後まで重要な役割として見做される。（同）

（b）小兒の性感

『私の性生活は早い方でして、私が四五歳の時に經驗した一つの場面を覺えてゐます（私は六歳以後のことは何でも記憶してゐます）。この時の場面は數年後になつてから非常に明瞭に浮んで來ました。それはピーター孃といふ非常に美しい若い家庭教師を雇つてゐたのでした(C)。

【註】（一）嘗て精神分析者であつたアドラー氏 Dr. Alfred Adler は、患者によつて最初に告白されたものには特殊の重要さがあるといふことを述べたが（論文中にて）、それに注意を惹かれた。この患者の最初に云ふ言葉では、彼に感化力をもつてゐた友人（男子）といふことを强調してゐた。それは何かといふと同性愛的の選び方であつて、この友人を生活中の特に重大な役割を持たせて話してゐる。然るに間もなく患者の言葉は第二の動機に移つて來た。それは後になつて非常な重要なものとなつたもので、所謂男女間の衝突と男女間の對峙とである。患者は美しい家庭敎師を呼ぶのに親しい名で呼んだといふ事には深い意味がある。といふのは此の婦人の名前は男(A)のクリスト敎名であつた。ヴィーンの中產階級では、家庭敎師をクリスト敎名で呼ぶことが流行してゐるので、普通に記憶されてゐるのは矢張りクリスト敎名である。

『或る夕方、彼女は薄着で長椅子に橫になつて讀書してゐました。私はその傍に寢てゐて、裾の方にくゞらせて吳れと云つたのです。彼女は誰にも云はないやうにといつて承知したので、私は脚の方へもぐつたのです。その時私は非常に奇異に感じたのでした。それからといふものは私は婦人のからだを見たいといふ烈しい好奇心に襲はれて苦しみました。私はこの家庭敎師が入浴しにくるのを湯殿で待ち兼ねてゐて、强い興奮を感じたことを記憶してゐます（當時私は家庭敎師や姉妹などと一緒に入浴することを許されてゐました）。六歲頃からは色々な事を覺えてゐます。その頃私の家では又一人の

家庭教師がゐて、これも若くて美しい人でした。この人は臀部に腫物が出來てゐて、夜になるとその腫物を出して見せる癖があつたのです。私はそれを好奇心で待つてゐました。入浴する時も以前の家庭教師と同じやうでした。ですがリナ孃（後の家庭教師）は前の家庭教師よりも内氣でした（余が此の時發した質問に答へて）平常私は彼女の室では寢ませんで、大抵は兩親の室で寢ました。私が七歳の時に起つた出來事を記憶してゐます（この出來事は實はその一年後に起つた事を、後になつて患者は了解した）。私達即ち家庭教師と女中と又一人の女中と私と、それから私より一年半下の弟などが一緒に或る晩一室で坐つてゐました。若い婦人たちは喋舌つてゐましたが、突然リナ孃が『小さい子供なら夫れは出來るけれどポール（私の名です）は無器用だからきつと駄目です』と云つたのに私は氣が付きました。何の意味だか私には分らなかつたが、併し私が侮辱されたやうな氣がしたので泣き出したのです。するとリナ孃は私を慰めて呉れて、一人の娘の話をして呉れました。その娘は、自分が監督してゐた小さい子供と何かしてゐた爲めに、數ヶ月間牢屋に入つたといふ事でした。私はリナ孃が實際自分で惡いことをしたと信じなかつたのです。むしろ私の方から進んで彼女に色々な事を仕懸けたのでした。その室に入つたりからだに觸れたりしたが拒絶されなかつたのです。彼女は非常に怜悧で明かに性的願望を持つてゐました。二十三歳で既に子供が出來て、其後間もなく其の子供の父と

婚姻してホーフラート夫人となつてゐます（墺太利のホーフラートとは著名な醫師、法律家、大學教授、官吏等に授けらるゝ肩書である）。現に私は街を歩いてゐて時々彼女に逢ふことがあります。』

『私は六歳の時にもう Elektion を感じたのです。が、一度も自分の母に知らせなかつたのです。その頃私は斯ういふ時に或る疑惑を解かうとしたのでした。といふのはこの問題と私の考へや好奇心との間に何か關係があるらしく感じたからです。猶この頃私の兩親は私の考へてゐる事を分つてゐるのだといふ一種の病的觀念を私は持つたのです。私はこの事を兩親に大きな聲で知らしたのですが、私には自分のその聲が少しも聞えずに仕舞つたといふ空想でこれを説明しました。これは病氣の初めだらうと思ふのです。當時私は婦人といふものゝ魅力に打たれて、この人達の裸體を見たいといふ強い願望を持つてゐました。然しそんな願望などを持つてゐると、何か氣味惡い出來事でも起りはしないかといふ氣がしてゐました。ですから私はそんな考へが起らぬやうに極力防がうと思つたのです。』

余はこゝで一問を出したら、彼は恐怖の例を擧げて答へた。『例へば私の父親が死ぬのではないかといふやうな氣味惡さです。父親が死ぬのではないかといふ考へは、非常に前から永い間私の心にいつぱいになつてゐるのです。これには一番苦しめられてゐます。』

この話の處に來て、余はこの患者の强迫恐怖の的になつたといふ父親は既に數年前に死亡したもの

だと聞いて驚いたのである。

この患者の六七歳時代に起つた出來事、即ち患者が治療の初めに於て叙述したことは、彼が信じてゐる通りその病氣の初めではなくて、現に病氣そのものだつた。この病狀は立派な强迫神經症であつた。神經症として缺けた點は少しもなくて、今後の症狀の種子であり原型であつた。この原型によつて其後の複雜してきた構成が明瞭になつたのだ。この幼年時代の症狀は、前述の如く性的本能の部分要素即ち愉視症(B)(愉視本能)に支配されて、それが爲めに自分の好きな女性に對して熱烈な愉視的な願望が間斷なく起つたのである。この影響はその後に起つた强迫觀念に相當してゐるもので、それまでは强迫性は帶びてなかつた。何故ならば其頃の自我は愉視することに對して干渉もせず反對もせず、何等關係のないものと見做してゐたからだ。然しこの願望に對して反對の態度は、何處かの叢淵から活動しかけてゐて、それが起る時には何時でも煩悶してゐた(C)。即ちこの幼年色魔の心中には爭鬪のあることが明かに示されてゐたのだ。つまり强迫願望と一緒に、强迫恐怖が密接に結合してゐた。といふのは彼が斯樣な願望を起す度毎に、何か氣味惡き事件が起りはせぬかといふ恐怖が附き纒つてゐたのだ。この恐るべきものといふのは、疾うから彼の優柔不斷の性格で蔽はれてゐたのだ。この性格は後になつて一般神經症の必然的な症狀として示されるものなのである。併しながら子供の斯ういふ優柔不

斷の性質の裏面に、何が隱されてあるかといふ事を觀破するのは困難なことではない。患者（强迫神經症）に對して、漠然とした抽象的な考へでなくて、具體的な例を擧げさせて云はせるなら、それは本源的で且つ實際的の出來事だといふ事が確言し得る。この本源的の出來事は常に抽象的な考への裏面に隱れようとしてゐるのだ。だから我々のこの患者の强迫恐怖は、それを本源的の意味に註釋すると次のやうな意味になるのだ。『私が一婦人の裸體になる處を見ようと願望するならば、私の父は死なねばならぬ。』この苦悶は氣味惡さと迷信的の色彩とが加味されてゐて、脅威されてゐる惡事を防がむとする衝動の先驅なのであつた。この衝動は後に至つて患者が取り入れた防禦手段になつたのである。

【註】（一）然し煩悶といふ事を考慮せずして强迫症を說明せむとした企てもあつた。

斯くて我々は次のことを發見した。それは卽ち性慾、それに對する嫌惡、未だ强迫性を帶びるに至らざる願望、それに對する爭鬪、その結果として生じた强迫性を帶びた恐怖、苦悶及び防禦行動を遂行すべく餘儀なくされる事等である。强迫神經症の目錄はこれで完全になつた譯だが、猶これ以外に認められるものに妄想構成或は譫妄 Delirium などがある。この譫妄といふのは『自身が高聲で呼んだのだから、兩親は自分の考へてゐる事を承知はしてゐる筈だ。然し自分には自分の叫んだ聲が聞え

なかつた』といふ奇妙な内容を持つたものである。子供がこんな不思議なる精神作用に類似したものを持つてゐるといふ事は、前述のことに當嵌めてみればよく分るのだ。このやうな精神作用は無意識の作用だとして述べてゐるが、こんな漠然たる問題に科學的の解釋が附けられるのだから省くことは出來ない。『私は自分の考へを高聲で述べるのだが私には聞えない』といふ事は、この患者は自分の考慮を全然知らないで、その考慮を働かせたといふ我々の所謂外界投出 Projektion のやうに思はれる。それは抑壓されてゐたものを精神の中で知覺したのであらう。

何故かといへば、この子供の初期の神經症は、成熟者の複雜した神經症と同じく一見荒唐無稽なものであることは分る。子供が斯樣な淫猥な願望を持つ時は、その父親は死なねばならないといふ子供の觀念は何ういふ意味であらうか。單に莫迦々々しい事だといつて看過すべきであるか。又はこの言葉を解釋して、それは早期時代に經驗した出來事又は前提の必然的の結果だと見做せる手段があるだらうか。

他の方面で爲された研究の智識をこの子供の神經症に適用してみると、他の場合と同じやうに、この子供は六歲にならないうちから旣に心中に葛藤が起つて、抑壓作用を作つたのだらうといふ疑問を持たざるを得ない。この葛藤と抑壓とは、其の後健忘にかゝつて仕舞つて、その結果殘渣としてこの

强迫恐怖といふ特殊な内容を殘すやうになつたのである。後章に於て、余はこの忘却された經驗を患者に追憶させて、何の程度まで再現させる事が出來るかを述べて見よう。こゝには患者の嬰兒時代の健忘が恰度六歲の時まで續いたといふ事に注意をしなければならぬ。これは恐らく偶然のことではないだらう。

斯くの如く子供時代に發する慢性强迫神經症が、氣味惡さの豫感と又それを防禦しようとする行動とで現はれたといふのは、余に取つて珍らしい事ではなかつた。まだ他に澤山の例があるが、この例は極めて典型的であつた。然しこの症狀が唯一の型だといふのではない。第二回の分析中に起つた出來事をいふ前に、余は患者の早期の性的經驗の問題に就て二三の語を加へようと思ふ。この經驗は經驗そのものが重大であるばかりでなく、其後に及ぼした結果も亦重大であつたのである。然し余が或る機會に於て分析した强迫神經症の例も、この點については略類似してゐたことを云つて置きたい。又强迫症狀はヒステリー症狀とは違つて、常に性的活動が早熟だといふ特質を持つてゐる。そしてヒステリーに比べると、症狀を構成してゐる要素が患者の幼稚時代の性的生活に存在してゐて、現在の性的生活の中には存在してゐない事が明白になつてゐる。猶ほ强迫症患者の現在の生活狀態は、一見しては普通の健康人とは全然異つてゐないやうに見えるのが多い。そしてこゝに出した例よりも、病

的要素や異狀さが極めて僅少なものと見えるのが普通である。

（註）（A）　呼んだキリスト名が男名だつたことは即ち同性愛の傾向を持つてゐた所以だとの意。（譯者）

（B）　愉視症 Scoptophilia は俗にいふ覗き症でそれによつて一部の性的願望を充すのである。（同）

（C）　大強迫恐怖

（患者の言葉）『私が今日あなたの處に治療を受けに來ようと決心したに就いては、直接の原因があるのです。私は以前には色々な種類の强迫觀念で惱まされ苦しまされてゐたのですが、これが大演習に行つてゐるうちに全くカラリと直つたのです。私は將校達に自分のやうな人間は色んな事を學び得るばかりでなく、色んな事に持耐力を持つてゐることを見せてやりました。或日私達が其處から短距離の行軍をやつた時、休憩中に私は鼻眼鏡を紛失しました。探せば分るとは知つてゐたのですが、出發に遲れるのを氣遣つて探さずに行つたのです。先方に到着してからヴィーンの市のかゝりつけの眼科醫に電報を出して、次便で代りの眼鏡を送つて吳れるやうに賴みました。眼鏡を紛失した時、私は二

人の將校の間に坐つてゐました　その中の一人はチェック・スロバキア人の名前の大尉で、私にとつては重要な關係者となつてゐます。私にはこの大尉が何となく恐ろしかつたのです。といふわけは、大尉は殘忍なことが好きだつたからです。私は彼を惡人だとは思ひませんでしたが、將校食堂で食事中に彼は體刑の採用の必要を繰返して主張したので、私はそれに對してひどい激論をしたことがありま す。それで、その休憩中に話し合つた時も、大尉は體刑の書物の話を私にしてくれました。それは東部の某地でやつてゐるといふ特に殘忍な體刑の話でした。』

こゝまで語つて患者は椅子から立上り、この精しい話を喋らせて呉れろと懇願した。そこで余は、自分は殘忍な事は好まないと云ひ、彼を强ひて苦しめようとは思はないが、自分の力に及ばないものは與へることが出來ないと告げてやつた。余の力の及ばぬ事を行ふは、月を採つて與へるやうなものである。然し精神分析の治療の規則として、抵抗に打勝つには或る問題に就ての考慮を省くわけには行かぬ（余は治療の開始に當つて彼に抵抗の意味を說明してやつた。すると患者は自分の裡にも抵抗があるかも知れないと答へた。そこで若し彼が自身のこの經驗を精細に物語るなら、その抵抗を打破ることが出來るのだと說明してやつた）。然し余は彼から與へられた暗示の意味を察知せむが爲めには、あらゆる努力を惜しまないことをいつてやつた。恐らく彼は杙刺し(くひざし)の刑（肛門より棒を入れて突

き刺す刑）のことを考へてゐたのではないかと余は思つた。『いゝえ、處刑者は縛られたのです』から云つた最後の言葉は、如何やうに縛られたか分らぬ曖昧な言葉だつた。彼の臀部に鍋が被ぶさつて其の中に鼠が這入り込んだ。それから……患者は此處で言葉を切つて、非常な恐ろしさを感じたらしい表情を示し、一方には又抵抗の樣子を示した。そこで余は『鼠が肛門に這入つたのだらう』と云つてやつた。

患者はこの話の間、重要な話題になる度毎に非常に奇妙な複雜な表情をした。余はこの表情は、彼がまだ自覺してゐない自身の快感に對して抱いた一つの恐怖のためだ、と註釋することが出來た。彼は物を云ふに極めて困難な樣子で更に語を續けた。『その時私は、この出來事は自分に非常に親しい人に起つてゐる事だなといふ觀念が私の心に浮んだのです(一)。』そこで余は單刀直入に質問を發した。それに對して彼は、この處刑を執行した人は彼自身ではなかつた事、そして全然彼には無關心のやうに決行されたことを答へた。色々に患者を勵ましてから漸く彼の云つた『觀念』といふ語に關係のある人物が、彼の愛してゐる婦人であつたことを知り得たのだ。

【註】（一）彼が『觀念』といつた事は、この語より更に强く且つ意味の多い願望（むしろ恐怖）が明かに檢閲の下に處せられた事を顯はしてゐる。余は彼が奇妙な優柔不斷さで語つた總ての言葉を不幸にも書き現

はせない。

彼はこゝで物語を止めて、こんな考へは彼には全然無關係なもので、嫌惡を催す如きものだと云つた。そしてこんな考への連鎖が連續して出て來るのは、非常な速力で彼の心中に閃いて來るのだと云つた。こんな觀念が心中に起る時には、一種の呪文のやうな『潔め』といふ氣持が一緒に起つて來て、彼の瞑想が充たされさうになると、それを防がうとする防禦行動となつて現はれるのであつた。彼は更に語を次いで、大尉からこの恐るべき處刑の物語を聞いて、これらの觀念が腦裏に浮んだ時、彼はいつもの呪文を使つてこの二つの觀念を拂去ることが出來たといつた。(この呪文といふのは否定の身振りを加味した『併し』といふ意味と『お前は何んな事を考へてゐるのか』といふ意味とであつた。)

余は患者がこゝで云つた『二つの觀念』と云ふ事に就いて合點が出來なかつた。恐らく讀者にもこの譯は分らなかつたであらう。患者が觀念といつたのは唯一度だけで、鼠の處刑を受けた婦人の話のところで云つたのみだつた。だから余はこの觀念と同時に起つた第二の觀念を餘儀なく認容しなければならなくなつた。考へてみるとそれは處刑の觀念が又彼の父にも當嵌められることだつた。さうすると彼の父は數年前に死去してゐるので、この方の强迫恐怖は第一の觀念よりも更に莫迦らしさが多いわけだつた。だから彼はそれを告白しまいとして暫時あせつたのであつた。

彼は更に語を次いで、その晩大尉から彼は小包郵便を渡されて『(一)A中尉がこの代價(二)を拂つたのだ。君はその代價を返濟しなければならないぞ』と云はれた。その小包は患者が電報で註文した鼻眼鏡であつた。處がこの瞬間に彼の心中では或る御裁可が出てゐた。何かと云へば、彼はこの返濟をしてはならない。若しそれをすると何か不吉なことが起るぞ（卽ち鼠の瞑想が彼の父や彼の崇敬した婦人に對して實現される）といふ氣持ちだつた。處が間もなく慣用手段が初まつて、この御裁可を打消さうとする命令が誓ひといふ形式で現はれて來(A)た。その命令とは『汝はA中尉に 3.80 クラウンを返濟せねばならぬぞ』といふのだ。彼はこの言葉を口のなかで獨語したのだ。

【註】(一) 名前は此處では關係のないことゆゑA中尉とした。
(二) この代價は新しい眼鏡の引換郵便物の代金である。

演習終了後二日間を彼はA中尉に立換金を返濟せんが爲めに消費したが、色々な外部かららしい事情の爲めに、次ぎ次ぎに障害が起つて妨げられた。それは第一に、彼は郵便局に用足しに行く將校に賴んで返濟して貰はうとしたが、この將校はA中尉に逢はなかつたと云つて金を戻して呉れた。それで彼は安堵した。なぜ安堵したかと云へば、彼がこの誓ひを果さうとする行爲は、返濟してはならぬといふ御裁可に悖るからだ。第二に彼は探してゐたA中尉に逢つたが、A中尉は拂つた覺えがないと

稱して金を受取らなかつた。この中尉は郵便に就いては何事も知らない、それはB中尉がやつた事だと云つた。この話には患者も殆んど當惑してしまつた。誓ひを果すことが出來なくなつて仕舞つたからだ。が、これで見るとこの誓ひは全く間違つた根柢から立てられたものだつた。患者は當惑したあげくに奇妙な手段を考へ出した。それは何だと云ふと、AB兩中尉と一緒に郵便局に行つて、A中尉は其處にゐる若い婦人に 3.80 クラウンを與へ、この若い婦人はその金を更にB中尉に與へる。つまりこれで患者は 3.80 クラウンをA中尉とB中尉とに支拂ふことになる。かうすれば誓ひの言葉に合致させることが出來るといふ事だつた。

この點に就いて、讀者は最早こんな順序をこれ以上聞かうとしないだらうとは勿論余も承知してゐる」何といつてもこの精細な物語りやそれに對する患者のやり方は矛盾だらけで、全く閉口する事だからだ。彼は繰返してこの話をしてゐたが、四回目に至つて余は初めてこの茫漠たる物語の意味を認めて、その中から彼の記憶の錯誤や轉位作用などを發く事が出來たのだつた。余は今此處にこれらの精細なることを叙述する手數を避けたい。いづれこの本質は後になつて明瞭になることだ。余は唯ここで患者が二回目の分析の終りに、まるで心が極度に錯亂して迷つたやうな振舞ひをしたといふ事を申して置きたい。彼は何遍も繰返して余のことを大尉と呼んだ。思ふに、これは分析の最初に余はM

大尉の如き殘忍な事は好まないと云ひ、且つ余は無益に彼を苦しめるといふ意向は持たないと云つた爲であらう。

第三回目の分析中に彼から得た唯一の情報は、彼の愛人に何事かの災難が惹起されむといふ恐れを、毎回の分析中に持つてゐたといふことであつた。これは最初から現在までの分析中にいつも起つてゐた事だつた。彼は罪に對する膺懲は現世のみならず未來永劫までも續くのではないかといふ考へを起してゐた。彼は十四五歲の頃までは熱心なる宗教信者であつたが、其後漸次無宗教者となつて現在に至つた。彼は自分の信仰と强迫觀念との矛盾を考へて、それを妥協させる爲めに次のやうな質問を自身に起した。『お前は來世に就いて何んな事が分つてゐるのだ。何も分つてゐないではないか。だから何をしたつて恐るゝことはないぞ。大いにやるべしだ。』こんな論法は、强迫症を除いては明晰な頭腦の持主なる彼に取つて、何等の障害にはならなかつたらう。こんな譯で、彼は宗教的態度から利益を得るやうな問題に直面した時でも、自分自身を無理に押しつけて、何等利益の理由もない問題だといつて放棄したのであつた。

第三回目の分析中、患者は自分の强迫症的の誓ひを果さうとして、彼獨特の努力をした物語を話し終へた。演習の終る前夜、將校の最後の會食が催された時、患者は食事中に答辭を述べねばならなか

つた。それは『豫備軍隊の諸君』に對してのべられた健康の祝辭に答へるものだつた。答辭はうまく出來た。彼は恰も夢心地であつたが、その心の裏面には絕えず例の誓ひで苦しめられてゐた。其の夜は煩悶で送つた。腦裏に一つの議論が出ると又それに反對論が出て始終往來してゐた。この論點の主となつたものは、勿論彼が例の誓の基礎として採つた前提が卽ちA中尉が彼の爲めに代金を拂つたといふ事が間違ひだつたといふ事であつた。處がまだ彼は、A中尉が翌朝彼と共にP市の鐵道驛に乘馬で行く事になつてゐるから、事件は終つたのではないといふ考へを起して煩悶を慰めてゐた。そこで彼はこの機會を利用して例の誓ひを果さうとしてゐた。然るに其の機會が來たにも拘らずそれを果さうとはせずに、A中尉に先に行つて貰ひ、自分はその後から從卒を使ひに出して、午後A中尉を訪問するからと云つてやつたのである。彼は午前九時に驛に行き、驛に荷物をあづけ、そこの小さな町で種々の用事を足し、午後になつてA中尉を訪問しようと計畫を立てた。當時A中尉はP市から約一時間位かゝる一村に居た。問題の郵便局の所在地までは汽車で猶三時間かゝるのだ。それ故彼はこの複雜した旅程の案を遂行するとすゐと、P市からヴィーンまで夜行列車に乘られると思つてゐた。彼の心中に爭鬪を起してゐた觀念は、自分は卑怯であり、又この代金をAに受取らせるやうにAを强要する不快さ及びAから自分のこんな態度を笑はれるだらうと思ふ不快さから逃れようとすることであつ

た事は明かだつた。そしてこの考へは、何故に彼が誓ひを無視せむとしたかの理由であつた。同時に又一方は彼が此の誓ひを果すといふことも卑怯なことだと考へた。それは彼が强迫症狀のために擾亂された平和を、再び得ようと欲してゐることだと解釋したからだ。患者は更に附け加へて云つた。彼は考へが何れとも決定しない場合には、たま〳〵出逢つた事柄を恰も神の手によつて定められた出來事として、それによつて彼の行動を決定するといふ習癖を持つてゐた。だから停車場で赤帽から『十時の列車で行きますか』と訊かれた時に彼は『然り』と答へた。そしてその言葉通り十時の汽車で出發したのだ。こんな風に彼は運命に基く事なら心を安んずる事が出來た。彼は食堂車の晝食の座席を申込まうと考へてゐた。次の驛で列車は停車した。處が彼は突然こんな考へを起した。此處で下車して次の下り列車に乘込めばP市に戻るにはたつぷり時間がある。P市にはA中尉が居るし、其處から汽車で三時間すれば例の郵便局へ行けると考へた。處が又折角のこの考案の邪魔をしたものがあつた。それは晝食の座席を申込んで置いた食堂車の給仕に對して取消をいふ遠慮であつた。だが彼はその考案はまだ放棄したのではなく、次の驛に再び停車するまで延ばしたのであつた。こんな調子で彼は次驛より次驛へと行く間に心を惱まし、遂に下車することが出來ない驛に來て仕舞つた。下車できないといふ理由は彼の親戚が其處に住んでゐたからだつた。たうとう彼はその儘直行してヴィーンに

行き、其處で友人に逢つてこの問題の處決を依賴して解決をつけて貰つてから、夜行でP市に赴かうと決心したのである。余はこの點に對して果して出來ることかと疑つた。これに對して彼は自分の汽車が到着して今度他の列車が出るまでは半時間の餘裕があると答へた。併し乍ら彼がヴィーンに到着して、友人と面會せむとして飲食店に行つた時に友人は居なかつた。それで十一時過ぎに漸く友人の家に着いたのだつた。彼は其夜友人に逢つて今迄の一部始終を話したのである。友人は彼の樣子を見て何うも强迫症になつてゐはせぬかと疑はざるを得ないので、驚き乍ら手を擧げたのであつた。だがその夜彼は慰められて熟睡する事が出來た。翌朝患者はこの友人に伴はれて 3.80 クラウンを某郵便局に送金せんが爲めに出掛けたのだつた。某郵便局とは眼鏡の小包が着いた局である。

この最後の叙述の中から、余は患者の物語中に示された種々な歪んだ行爲を整理する端緒を發見することが出來た。患者はこの友人から慰められて常識が恢復して來た後、例の少額の金子をA中尉やB中尉に送らずに直接郵便局に送つたのである。これで彼は小包の代金は誰に借りたものではなく郵便局の事務員に借りただけだといふことを悟つたのである。併しこの事は彼は汽車旅行に出發する前に知つてゐた筈である。實際は大尉がAに支拂へと云つたり又彼が自分で例の誓をした以前に知つてゐた事は分つてゐたのである。何故なら彼はあの殘忍な大尉に逢ふ二三時間前に、もう一人の大尉に

自分を紹介した。その時その大尉からこの事柄の眞相を聞いたのである。この大尉は患者の名を聞いた時に、郵便局の話を思ひ出したので、彼に聞かせた。少し前に郵便局に行つたら其處に若い婦人がゐて彼にH中尉（患者の名）を知つてゐるかと訊ねた。H中尉に小包が屆いてゐるから配達した時に代金を拂ふやうにと云はれたが、この大尉はそんな人は知らぬと返答した。併しこの若い婦人はこの未知の中尉を信用して立換へて置かうと云つたのだ。患者の手に眼鏡の小包が入るやうになつたのは斯樣な行きさつがあつたからであつた。殘忍な大尉が患者にこの小包を渡した時に、間違つてA中尉に3.80クラウンを支拂へといつたのだ。その時患者はそれは間違ひだとは知つた筈である。それにも拘らず彼はこの間違ひに基いた誓を立て、そして自ら苦しむ事になつたのである。この誓ひを立てるに就いては、彼は或物を禁壓したのだ。それは恰度余に對して患者がこれを物語るのを禁壓した如くに、他の大尉と自分を信用して吳れた郵便局の若い婦人とを抑壓したのである。この連鎖が整へられた時に、彼の態度は以前よりも更に無意味に混亂して來た。

彼はその友人の許から歸宅した時には、疑惑の心は更に昂まつて來た。友人から說得された事は、自身の考へてゐた事と毫も異なつてはゐない事を知つた。友人から得た一時的の慰安は、友人の人格から影響されたものだといふ事を確信した。彼が醫師の診斷を受けようと決心したのは、次の如き巧

妙なる方法で彼の妄覺の中に織込まれてゐた。彼は自分の健康を恢復せむが爲めに、A中尉に對して考へたやうな行動をなす事は必要であるといふ證明書を醫師から貰はうと思つた。さうすれば、A中尉は患者から3.80クラウンを受取ることを承諾しない譯には行くまいと考へたのである。余の著書の一冊が彼の手に入つて、而して余の診察を受けむと決心したのは此の時であつた。余から證明書を得むとすることは問題ではない。要するに余に要求する總てのことは、彼の强迫症狀より逃れさせて貰ふことであつたらう。數ケ月の後に、彼の抵抗が極めて高くあらはれた時、彼は再び兎も角もP市に旅立ちしてA中尉を探し、彼に金を返濟する場面を演じようとする强迫を感じて止まなかつたのである。

（註）（A）「御裁可」といひ「誓ひ」といふは、何れも彼の心中に强迫的に湧き上つてくる觀念で、それに使驅されずには居られないものである。兩者は互ひに相反する働きを示してゐる。（譯者）

（d）治療に誘導すること

讀者はこれより直ちに余が鼠に關する患者の奇なる、且つ無意味なる强迫症狀を明かにするだらう

と期待してはいけない。精神分析の眞の技巧は、分析者は先づ好奇心を禁壓せねばならぬことであり、又治療中に患者をして自由に話題を進められるやうにして置かねばならぬことである。それ故四回目の分析の時に余は次の如き言葉で患者を迎へた。『今日は何んな事から始めようか』患者は答へて『私は今日は最も重要と思ふもので、初めから自分を苦しめたものをお話しします。』そして彼は九年前に死んだ父の最後の病症に就いて永々と物語つた。或る夕、病症が危篤に近づいたと思つた時に、彼は危險は超えただらうかと醫師に訊ねた。醫師は『明後日の晩』と答へた。然し彼の腦裏には明後日より生きないなどとは思はれなかつた。彼は其の夜十一時半に一時間程眠りに就いた。午前一時に目を醒ました時、友人なる醫師から父の死んだことが報ぜられた。彼は父の臨終に居なかつた事について自ら呵責の念に堪へられなかつた。重態になつた時に病父が彼の名を呼んだと看護婦から聞いた時、彼は益々この呵責を強く感じた。看護婦の話では、看護婦が病床に近寄つて行つた時に、病人は『そこに來たのはポールか』といつたといふ。患者は自分が自已呵責に苦しめられるやうに、彼の母や姉妹等も亦同じく自已呵責に苦しんでゐるやうに見えた。然し彼はこれについて何事も云はなかつた。初めのうちは呵責の念は餘計ではなかつた。暫くの間は父が死んだとは思へなかつた。何か面白い戯談を聞いた時には、父に話してやらなければいけないと思つた。彼の空想は父に關係ある事ばかりで

あつて、例へば戸をノックする者があると、や、父が來たなと思つたり、或は室に入らうとする時は父が居はせぬかといふ氣持ちがあつた。父の死んだ事は決して忘れてはゐないのだが、こんな幻影を見るのだと思つてゐた。が、毫も恐怖は感ぜず、寧ろ幻影を見たいといふ慾望が强かつた。彼が臨終に逢はなかつた怠慢を思ひ當つたのは父の死後十八ヶ月後であつた。この怠慢感は繰返し起つて非常に彼を苦しめ、遂に自身を罪人扱ひにするやうになつた。これが起つたのは結婚した叔母が死んだので、彼がその家を弔問した時であつた。爾來彼の强迫觀念の構成分子として死後の世界が含まれるやうになつた。斯樣な强迫症狀の展開してゆく直接の結果、彼は甚だしく仕事の能力が削減された(一)。

【註】(一) 患者が其後告げたこの出來事の精細によつて、余は彼の受けた印象を理解することが出來た。彼の叔父は妻の死を悲しんで、次のやうに叫んだ。『ほかの男たちはあらゆる遊蕩をしたんだが、自分は唯この女の爲めにのみ生きてゐたんだつた。』この叔父の言葉を彼は自分の父の事を云つたものだと解して、父の夫婦關係が誠實であつたかを疑ひ出した。そこで叔父は、自分の言葉は決してそんな意味を含んでゐない事を極力說明したのであつたが、彼は自分の受けたこの影響を打消すことが出來なかつた。

此時この患者の自暴自棄にならむとするのを防いだ唯一のものは、友人から與へられた慰めであつた。この友人は患者の自己呵責心が實際よりも非常に誇張されたものだと說いて、その呵責心を拂除

けようとしたのだつた。此處に於て余は彼に精神分析の治療の原則をかいつまんで說いてやつた。そして說得してやつた。感情とその感情の內容である觀念とが連合してゐる時（この場合では自己呵責とその自己呵責を起した出來事）素人はこの出來事に對して感情が大き過ぎる、卽ち誇張されてゐると稱し、その結果として自己呵責を齎すといふ推論は（卽ち患者は罪人であるといふ推論は）誤つてゐると思ふであらう。が、これに對して分析者はかう云ふ。『いや、さうではない。感情は正しいものだ。罪惡感そのものは排除すべきではない。それは他の內容に屬するものであつて、自覺することの出來ない無意識のものであるから、これは探し出さなければならぬものだ。旣に知られた、自覺できる內容の觀念は、間違つた連合をなして、本當の場所に侵入して來たゞけである。我々は內容の觀念なしには大なる感情を有する筈はない。それ故もし內容の觀念が缺けてゐる時には、この場所に適した他の內容觀念をその代りに取入れるのである。これは恰も警官が眞の犯人を捕へられなかつた時には、その代りに誤つて無垢の人を捕縛するのと同じである。斯樣に間違つた連合が存在してゐるといふ事實によつて、我々は苦痛の觀念を除去するに當り、理窟の力では全然駄目だといふことを初めて諒解できる。余はこの問題に關して、この新しい見地を容認するならば、直ちに難解なる問題に逢着するだらうと患者に云つた。何故ならば患者は實際に父に對して罪惡を犯してゐないといふことを知

つてゐるにも拘はらず、父に對する犯罪行爲の自己呵責を感じるのは、如何にして容認されるであらうか。

次回に於て患者は、余の先に述べた事に非常な興味を感じたが、二三の疑問が生じたと言つた。それは、自己呵責の念即ち自分が罪人であるといふ觀念は正しいものであるといふ事を教へられたが、それで治療的效果があるといふのは何ういふ理由かといふ事だつた。それに對して余は、治療的效果があるといふのは、その觀念を知らせる事ではなくて、自己呵責の觀念が實際に結び付いてゐる所の無意識の內容を發見する事だと說明した。患者は自らの質問は恰度この點に向けられてゐたのだと言つた。

余はそれから無意識と意識との心理的差異に就て二三の短い說明をあたへ、又意識してゐる物は何でも時を經るに從つて磨滅するものであるが、無意識のものは比較的に不變であるといふ事實を話した。そして余の室內にある古器物を例に上げて說明して次のやうに言つた。『此等の古器物は實際に或る墓の中から、そればかり殘つて居たのを、發見したものである。埋沒せられて、保存せられてゐたのである。ポンペイの滅亡は發掘されなかつたらその儘であつたらうが、發掘されてから漸く始まつたのである』と。次に患者は、發見されたものに對して人はどんな態度を持つか、その證據としては

何があるかと訊いた。或者は確かに自己呵責の念に打ち克つだけの態度を持つだらうし、又或者はさうでは無からうと患者は思つて居たのだ。余は否と答へて言つた。その事情の性質の如何なる場合であつても、分析の進行中には、感情の大部分は操縱を受けてゐるものである。(一)ポンペイを保存する爲めにあらゆる努力は拂はれた。併し人々は其の一方に於て此の患者の有してゐると同樣の呵責の念から逃れようとあせつて居たのであると。患者は、自己呵責の念といふものは、人自身の心の中の道德的主義法則に違背した事に依てのみ發生するもので、決して外側の原因から生ずるものでないと考へてゐたと言つた。余も亦それには同感の意を表示し、更に人は單に外的の法則を破つた時には、動もすれば自から(みづ)を英雄と見なす事があるものだと話した。患者は、斯かる事はすでに人格分裂が行はれてゐる時に於てのみ有り得る事だと言つた。そして斯くの如き人は、人格の復歸を成就する事が出來るであらうか、出來るとすれば、その人は人生に成功を獵す事が出來るだらうし、否、恐らくは大概の人々よりも更に大なる成功を成し遂げる事が出來るであらうと言つた。余は患者の此の人格分裂の考へには全く同感である事を答へた。患者はこの新しい對比、即ち道德的自己と、惡自己との對比を余が既に擧げたる意識と無意識との對比に一致せしめさへすればよいのである。道德的自己は意識的であり、惡自己は無意識的である(二)。患者の言ふ所によると、患者は自己を道德的人間だと考へてゐ

たのであるが、子供の時には道徳的自己でない。もう一方の自己から出た行爲を爲した事があつた事を、可成り確かに記憶して居た。余は患者に言つた。患者は此の時恰度、無意識の主なる特性の一つ卽ち無意識と子供との關係に偶然にも言及して來たのである、と。そして更に次の如く說明をした。無意識は子供であつた。それは自己の一部であり、幼年時代に於て自己から分離し、其の後の自己發展の段階には與らず、その結果として抑制されて居たものである。此の患者の病症構成を作つた無意識的の考への責任を負ふべきものは、此の抑制された無意識に由來してゐるものなのである。余は更に語をついで、今度は無意識の特性をもう一つ發見する事が出來るだらう。これは自分一人で發見出來たら、大變結構なのだがと言つた。患者はこれに對して直接關聯した事ではもう何も話す事は無いが、その代りこんなに長い間持續して來た變調を改める事が出來るかどうか疑問だと言つた。殊に、來世に就いて自分が考へて居る觀念は、論理を以て反駁する事は不可能であるから、如何にして消滅させる事が出來ようかと言つた。余は彼に話して、自分は今、彼の病症の重態な事や彼の病症の構成の意味などについて論じてゐるのではない。併し彼の年の若い事や、人物の率直なる事が、彼には非常に好都合であると云つてやり、猶これに就いて自分は彼に對して好意を持つてゐる事を話した所、彼は大いに喜んだ樣子であつた。

【註】(一)これはすべて極めて大ざつぱに考へて眞實な事である。併し此の事が此の問題の第一門なのである。

次回に彼が余の許に來た時、この患者は先づ、少年時代に起つた或る事を語り始めた。彼は前にも話した通り、七歳の頃から、彼の兩親が彼の思つてゐる事を推量して知つてゐはしまいかといふ心配を持つて居た。そして實際に此の恐怖は彼の生涯中に執着く附きまとつて居たのだつた。十二歳の時彼は友人の妹である一少女を戀するやうになつた。(彼は余の質問に答へて、彼の戀は性的のものではなかつた。彼はその少女の裸體を見たいといふ慾望などは持たなかつた。何故ならその少女は餘り小さかつたからであつたと云つた。)併しこの少女は彼が望んで居た程に彼に對して愛情を示して吳れなかつた。それで彼は、若しも自分の身に何事か不幸が起つたなら、さうしたら彼女は自分に優しくしてくれるだらうと考へ出した。その不幸といふのは、例へば彼の父が死んだならなどといふ考へが彼の心中に迫つてきた。彼は直ちにその考へを非常な努力を以て追ひ拂つた。こんな譯で今でさへも彼は心の中に起つた考へを慾望だなどと見做す事は出來ないのであつた。それは慾望ではなくて、明らかに思考の一聯絡に過ぎないものだと言つてゐた(二)余は之に反對して、彼に斯う訊ねた。それが慾望でないなら何故彼はそれを否認し拒絕したのかと。患者はそれは單にその觀念の內容、即ち父が死ぬかも知れないといふ考への爲めであると答へた。彼はこの言葉を恰も不敬罪に問はれる場合のや

うに考へた。不敬罪の場合といふのは、例へば『天皇は阿呆である』と自分が直接云ふ場合でも、或はこの言葉を曲げて、『若し誰かゞ天皇は阿呆であるといふものがあるなら』と他人が云つた言葉のやうにしていふ場合でも、その言葉に對して責任を持たなければならない。こんな間接な言葉を用ひても同様に不敬罪に處せられねばならないだらうと私は言つて說明した。余は又斯う言ひ足した。彼が斯くも熱心に排斥してゐる觀念を、余は斯かる排斥が不可能である所の文に書きはめる事が出來る。例へば『若しも私の父が死んだなら、私は父の墓前に自殺するであらう』といふやうにと云つた。すると彼は非常に混惑したが、併し余が反對するのを決して止めようとはしなかつた。余は此の『父が死ぬ』といふ觀念は今始まつたものでは無く、もつとずつと以前に其の緒を發したものだから、またいつかその由來を辿つて見ようではないかと言つて、此の議論を打ち切る事にした。彼は次いで、此れと恰度同じ考へが再び浮んだ事があると話し出した。それは恰度彼の父の死の六ヶ月前であつた。この時には彼は旣に戀人を有して居たが、財政上の障碍があつて、結婚が出來ないでゐたのであつた(三)。其の時、彼の心に起つた考へは、若しも父が死んだなら自分らは彼女と結婚する事が出來る位の財産を得るだらうと言ふ事だつた。この考へを拂ひ退ける爲めに、彼は父が何も遺さないでくれゝばよいがと望むほどになつた。さうすれば彼の受ける重大な損失に對して、何の報償も得ないでよい

のであるからと考へた。更にまたこれと同じ考へが三度目に、それはもつとずつと穏やかな形を取つて、恰度父の死ぬ日に彼に浮んで來た。其の時彼は『自分は今一番愛してゐるものを失ふのだ』と思つた。するとその直ぐ次ぎに、今度は斯ういふ矛盾した考へが起つた。『否、然うではない。お前にはもつともつと失つては辛い人があるのだ(三)』と。こんな考へが起つたので彼は非常に驚いた。何故なら、父の死は、彼の願望の目的では決してあり得よう筈はなく、たゞ彼は父の死を怖れてゐたものであると自分みづから信じてゐたからだ。彼がこれ等を熱心に述べた後で、余は彼に新しい一つの學說を示したらよからうと思つた。精神分析の學說に從つて、余は彼に話した。總べて恐怖は現在抑壓されてゐる願望に相當してゐるものだ(B) それ故吾々は彼が主張した事は、その正反對なのだとして信じなければならない。この事はまたもう一つの學說的要件、即ち無意識は意識の正反對でなければならぬといふ事に當て嵌るものであると敎へた。これを聞いて彼は非常に心をさわがして信じようとしなかつた。彼は自分の父を世界中の何物よりも愛して居たのに、何うしてそんな願望など持てるものか。若し、自分の幸福となるべき物を全部すてゝ仕舞つても、父の生命を救ふ事が出來るといふのなら、必ず然うするのだがと大變不思議に思つてゐた。余は彼に答へて、彼が持つてゐるその樣な強い愛こそ、確かに抑制されてゐる憎惡の條件だと言つた。彼が、好きでも嫌ひでもない無頓着で居る人々に

對した場合には、彼は適度な好感と、同樣に適度な憎惡との傾向を、平行して保つ事が決して困難ではないのである。例へば彼が役人であつたとしたら、自分の上役に對して、長上としては優れた人であるが、同時に法律家としては詭辯家であり、裁判官としては不人情であると考へる事が出來るであらう。シエークスピアはシーザーに就いて、ブルータスをして恰度これと同じ樣な事を言はせてゐる。『シーザーは吾を愛した。故に吾はシーザーの爲めに泣いたのである。シーザーは幸運であつた。故に吾はそれを喜んだのである。シーザーは勇壯であつた。故に吾は彼を尊敬する。彼は併し野心を有してゐた。故に吾は彼を弑したのである』と。併し此の言葉は既に吾々に奇妙な感じを與へてゐる。吾々はシーザーに對するブルータスの感情は、もつと深いものであつたらうと想像して居たからだ。これが若し彼にとつて更に親しい間柄の人の場合だとすると、例へば彼の妻に對する如き場合だつたなら、彼は自分の感情が、何物をも混じられない純なものである事を望んだであらう。從つて彼は、人間として彼女の缺點を見逃すだらう。その缺點は、彼女に對する愛を損ずるかも知れないゆゑ、彼はその缺點に對しては盲目であるかの如く無視するだらう。故に彼の抱いてゐた憎惡が（こんな名稱を用ふるのは此の感情を漫畫扱ひにする嫌ひがあるが）意識される事を妨げてゐるものは、彼の愛情の熱烈さである。きつと此の憎惡には、何等かの根源がなければならぬ。だから其の根源を發

見する事が確かに一問題である。此の患者の述べた所によると、彼の兩親が彼の考へを察知してゐるだらうといふ恐れを彼が抱いて居た時を指してゐる。又一面に於て、余は此の患者に斯う問ふ事が出來る。それは、恰度二つの相反してゐる衝動が存在する時には、何れか一つが勝つものだが、彼の此の熱愛は、何故憎惡を撲滅させることが出來ないのであらうかといふ事だ。憎惡は何かその源泉から流れ出るものであり、そして憎惡を不滅ならしめてゐる或る特殊の原因に結ばれて居るものである。といふ事は吾々が單にそれを假定する事が出來る。斯く考へ來ると、一方に於て、此種の或る聯結が彼の生きてゐる父に對する憎惡を持續せしむると同時に、他方では、患者の強い愛がその憎惡の意識面に表はれて來る事を妨害して居るのである。それ故に此の憎惡感は、單に無意識に存在するのみであつて、時々、ほんの瞬時の間、意識に閃めきかける事が出來るのみである。

【註】（一）強迫症患者は此の種の婉曲辭法に滿足する者のみではない。
（二）それは恰度十年前であつた。
（三）此處に於て彼の愛の二對象物、即ち父とその婦人との兩者の對立が明らかに示されてゐる。

患者は此の説は可なり肯定できるものだと認めた。併し少しも信じはしなかつたのである。勿論信じないのは當然である（二）。患者は又尋ねた。此の種の考へはどうして時々起つたり薄らいだりするの

であらうか。十二歳の時初めて起り、二十歳の時に再び現はれ、又その後二年經つて後、今度は今に到るまで其の考へが有るのは何うしてであらうかといつた。患者は彼の敵意が或る間隔を置いて消滅するといふ事が信じられなかつた。その期間に於て彼には自責の念が少しも兆さなかつたのである。余はそれに答へて、彼は人から質問を受けるとすぐに答へられる。それゆゑ彼は自分の談話をもつと永く續ける爲めには、人から仕向けられさへすれば宜しいのだと言つた。これには患者は稍合點の行かない様子であつたが、再び話を始めた。彼は父に取つて最もよき友であつたし、父はまた彼にとつて最もよき友であつた。唯二三の點に就て、此の父と子とは常に相互ひに離反してゐた。(此れは何ういふ意味であらうか?)けれども此の父子の間には、彼と最も親しい友人との親密さよりも、より以上に深い親密さがあつた。彼が先きに話した自分の觀念の話の中に出て來た婦人、即ちその婦人を愛したが爲めに父を輕んじた。その婦人に就いていへば、その婦人を愛してゐたのは實際なのである。要するといつても彼は少年時代に絶えず持つてゐた性的愛を眞實に感じてゐたのではなかつた。要するに彼は青年期よりも少年期に於て、はるかに強い性的衝動を持つてゐたのだつた。此處に於て余は今此の患者は、吾々の期待してゐた答へを出し、且つ同時に無意識の第三特性をも發見したと思ふ旨を告げた。これによつて此の患者のもつた父に對する敵意が、其の不滅性を發した源泉としては、性的

欲望の性質を帶びた何ものかである事は明らかになり、此の點に於て、患者はその父を幾分か妨害物のやうに感じてゐたことが分るのであつた。余は語を繼いで、性慾と小兒的愛との間の爭鬪のうち、此の種のものは代表的なものである。彼が先きに話した、彼の憎惡感が時々薄らぐ事があるといふのは、彼の性感の早熟な激發が、激發した直後には減少する爲めである。彼の敵意が、古の狀態の復活によつて再び顯はるゝのは、彼が更に又激しい性慾におそはれた時に起るのであると言つた。余は此處に於て、余自身がこの患者を少年時代や性の問題などに導いたのではない、患者自身が、自由意志に依つて此の兩問題に觸れて來たのだといふ事を患者に承認させた。彼は更にたづねて、彼がこの婦人を愛してゐた時に、父の妨害によつて一瞬の間も父に對する愛が壓迫され苦しめられるなどといふ事も、又そんな考へすらも無かつたのは何故だつたかと云つた。余は答へた。不在の人を破壞する事は殆んど出來得ざる事である。斯やうな考へは、彼が否定してゐた欲望（敵意感）が其の時初めて顯はれたものならば、可能であつたかも知れないが、併しその慾望は實際は長い間から抑制されてゐる慾望であつて、その慾望に對しては、彼は以前に爲してゐたと同樣の態度を取るより外は出來なく、從つてその慾望を破壞する事は出來ないのである。此の慾望（卽ち彼の父を妨害物として取り除き度いといふ）はその緒を今よりも事情の大いに異つてゐた時代に發してゐる。卽ち、恐らくは彼が父より

も性的に欲してゐた人を愛してた時代、或は彼がまだ明確な決斷力を持たなかつた時代に發したものであらう。故にそれは彼の極めて幼少の時、即十六歳にも達しなかつた時で、彼の記憶が漸く連續するやうになりかけた時だつたに違ひない。そして其の時以來、同じ樣な狀態が續いて來たに相違ないのだ。斯く余は一片の推定を爲して、これを以て吾々は談話を暫らく中止したのである。

【註】（一） 斯かる議論の目的は確信を作る事では無く、抑壓せられてゐたコンプレクス（結情）を意識にもたらす爲め、またその爭鬪を意識的精神活動の世界に誘導するため、また無意識から新しい精神形式を出す事を容易ならしむる爲めである。確信の感は、患者自からが再現した材料を研究した後、初めて得らるゝものであつて、患者が全き確信を得ない間はその材料は限りなく有るものと考へられる。

次にこの患者が余の許に來た時、それは恰度七回目に當つてゐたが、彼は再び同じ問題を提出した。そして彼はどうしても、父に對してあんな慾望を抱いたとは信じられないといつた。彼はサドマンの物語りを記憶してゐた。その物語りは彼に非常に深い印象をあたへたのである。それは斯うである。或る婦人が自分の妹の病床に附添うてゐたが、『此の妹が死んで呉れゝばよい。さうしたら妹の夫と自分は結婚出來るのだが』といふ願望を起した。それで此の婦人は、此のやうな卑しい考へをおこした罪によつて生きてゐる事は出來ないと考へて、自殺をはかつたのである。患者は此の話はよく理

解出來ると言つた。もし彼の考へた死に相當するものとしても、それは正しい事だと言つた。何故なら彼は死を受くるに最も相當してゐるからだ(二)。余は、病人といふものは自分の病症について或る滿足を感じてゐるものであるから、實際に於て患者は或る程度まで病氣の恢復に對して抵抗するものだと言つた。吾々のやつてゐるこの治療には、常にこの患者がたえず抵抗を示してゐるのだといふ事實を、忘れてはならないのである。故に余は、繰り返し〳〵彼に此の事實を思ひ出さしめねばならなかつた。

【註】(一) 患者がこれを罪の感と認めたのは、彼の父に對して斯かる惡い慾望を決して持つてゐなかつたといふことと、非常な矛盾を示してゐる。これは抑制せられてゐた材料が意識に出てきた反動としてよくある例である。初めに事實を否認して『否』といつた言葉に次いで、直ちにその事實の確證が來るのである。尤もそれは、先づ初めには單に間接的なものに過ぎないものである。

彼は語を續けて云つた。それは此處に一つの罪惡行爲があつて、自分ではそれを自分が爲した事を明瞭に思ひ出す事は出來るのだが、自分がその行爲を爲したと認める事は出來なかつた、といふ話である。彼はニーチェ Nietzsche (三)の言葉『自分の記憶は「自分がこれを爲した」と言ふ。併し自分の誇は「自分はこんな事をした筈はない」と言ふので、その言葉を固持してゐるが、併し遂には記憶の方

が讓歩して仕舞つた』といふのを引用した。けれど彼は自分の記憶はこの點に於ては決して讓歩しないと言つた。余は答へて、その譯は彼が自分を罰するために、自己を責める事に快感を覺ゆる故だと言つた。患者は言葉をついで『私に一人の弟があります。その弟を本當は私は大好きなのです。しかしこの弟は、今私を大變に困らせてゐます。といふのは、弟は實に途方もない結婚をしたがつてゐるのです。それで私は、初めは彼の結婚を妨げるために弟を殺してやらうかとさへ思ひました。その弟と私とは、子供の時から隨分喧嘩をしたものです。併し一方ではお互ひに愛し合つてゐて、離れる事が出來なかつたのです。併し弟は私よりもずつと强くて、容子もよかつた爲めに、皆から好かれてゐましたから、私は明らかに嫉妬をおこしてゐたのです。』『さうです。君はこの前リナ孃に就いても嫉妬の話をした事があつた。』『それゆゑ、そんな時には(それは私がまだ學校に上らない頃で、學校は八歲からですから、まだ八歲にならぬ頃だつたのです。)私は斯うしてやつたのです。私達は並製の玩具の銃を二人とも持つてゐました。私は自分の銃の中に込矢を塡めて、弟に「銃身を見上げると何か見えるぞ」と言つたのです。そして彼が銃身を覗いてゐるときに、私はその引金を引いたのです。弟は額を彈たれましたが傷は出來ませんでした。しかし本當は私は弟を傷つけようといふ計畫だつたのです。後になつて私は殆ど氣も狂はんばかりになつて、地面に身を投げ出し、何故こんな事をしたの

だらうかと、我と我身に訊ねたのです。併しやつぱり私は自分でそれを行つたのでした。』余は、自分の問題を此の際に進めて行つた。余はこんなに彼が恐怖した行爲を記憶してゐたのなら、彼と父との間には、もつともつと以前に起つた事で、今は最早忘れ去つてしまつてゐるこれと同樣な事件があつたかも知れない。それを否認することは出來ないだらうと彼に言つた。患者は余に、自分が非常に崇拜してゐた婦人に對して、復讐してやらうといふ衝動のあつた事に氣が附いたといつた。實際その婦人は他人を愛することなどは容易に出來なかつた。併し自分が將來屬すべき一人の人のためには、全自身を保護して守つてゐたのであつた。その婦人は彼を愛してはゐなかつた。彼がその事を確かに知つた時、自分が將來に於て非常に富裕になつて、他の婦人と結婚し、その婦人と手を携へて、先きの女の許を訪ねて行つて感情を害してやらうか、と意識的に空想した事があつた。併し其所でその空想は破られた。何故かといへば、もう一人の婦人即ち彼の妻は、全く彼には無關心であつたことを彼は認めねばならなかつた故である。斯くて彼の心は混亂してきて、たうとう彼の心の中には、此の婦人は死ぬべき筈であつた（復讐によつて）といふ事が明らかに分つてきたのである。此の空想が、自分の弟に對して企てた行爲の時と同樣に、自分にとつて特に怖ろしく思はれる卑怯の性質だといふことを認めた(三)。更に會話を進めて行く中に、余は患者が彼の性質の斯樣な特異性について、何れの場合

でも決して責任を負ふべき者ではない事を、論理的に考へねばならぬと教へた。何故なら、これらの許すべからざる衝動は、彼の幼年時代に始まつたもので、彼の無意識の中に殘つてゐる所の彼の幼年期の性質から出て來たものに過ぎない。それ故道德的責任は、子供には適用出來ぬといふ事を知らねばならないのである。余はまた、人間が道德的責任をもつて彼の幼年期の素質の全部より外れて育つてゆくのは、單に發展の一過程に過ぎないのであると言ひ足した(三)。併し彼は、彼の惡衝動の總てがこの原因から發生してゐるといふ事に就いては疑問を持つてゐると言つた。故に余は此の治療を進めてゆく中に、それを彼に證明しようと約束をした。

【註】（一） Jenseits von Gut und Böse, IV. 68. 參照。

（二） 彼の此の性質に就いては、後章に於て說明する。

（三） 余は此の論を茲に提出したのは、斯かる論の無效なることを余自身に示す爲めである。余は、他の精神療法者が、斯かる武器を用ひて神經症と戰つて成功したと主張するを了解する事が出來ない。

彼は話を續けて、彼の父の死後、彼の症狀は非常に强くなつてきた事を告げた。余は彼が父の死を悲しんだことが、病氣を强くさせた原因だとした點に於ては、彼の意見と同意であると答へた。彼の悲しみは、いはゞ彼の病氣の中に悲しみの病的表現をなしたものである。普通の悲歎は一年か二年續

けば癒えるものだが、彼の如き病的の悲歎は際限なく續くだらうと話してやつた。

以上が、余として詳細に且つ又繼續的に報告する事の出來る治療記録である。治療法の解釋的部分に、大體に於て適合するものである。此の治療は全部で十一ヶ月以上も續いた。

【註】（A）分析を受けてゐる間は、患者は分析者から感情を操縦されてゐるものである。（譯者）

（B）即ち「父の死」といふ願望が抑壓されて無意識に存する場合には、その願望は意識面に於ては「父の死」といふ恐怖となつて現はれるものである。（同）

（e）强迫觀念とその說明

强迫觀念といふものは、知られて居る通り、恰も夢の如く、動機もなければ意味もないやうに見えるものである。第一の問題は、此の觀念を理解され易く、又明らかにさせるために、これに對してその意味と人間の精神生活中の位置とを如何にして與へようかといふ事である。此の觀念を轉譯しようとする問題は解決し難いのである。併し吾々は其の迷想に迷はされてはならぬ。最も强烈なる、又最も變態なる强迫的觀念でも、これを十分深く調査研究する時は拂ひ除け得るものである。此の解決と

しては、その强迫觀念を患者の經驗の時間的關係內に導く事、卽ちいつ或る一つの强迫觀念が最初に表はれたか、又如何なる外的事情の場合にそれが再發するかを質問して、それによつて成し遂げられるのである。屢々ある事であるが、强迫觀念が永久的に確立する事の出來ない時には、その觀念を除去する事もそれに準じて簡單に出來るのである。一旦强迫觀念と患者の經驗との關係が發見されるならば、吾々の取扱つてゐる病理組織中の不可解のもの、又は知る價値のある何物にでも容易に接觸する事が出來るといふことを、容易に信じ得るのである。卽ちこの觀念の意味、原因及び患者の精神の重き動機力から出顯するもの等に、容易に接する事ができるのである。

特に明瞭な一例として、余の患者に非常に屢々現はれた自殺衝動の一つから始めよう。此の例は、話してゆく中に自然に殆んど分析されてゆくのである。此の患者は余に話した。彼は婦人が留守であつたゝめに、幾週間か勉强の出來なかつた事があつた。その婦人は祖母が重病なので看護に行つたのであつた。恰度彼が難しい勉强の最中に、ふと斯ういふ考へが彼に起つた。『自分が此學期の試驗を、出來るだけ早く受けられる時に受けろと命ぜられたなら、自分はどうにかしてそれに從ふ事が出來るだらうけれども、若し剃刀で自分の咽喉を切れといふ命令が出たなら、どうしよう?』と。彼はすぐにその時もうその命令が下されてゐたやうな氣がした。そして大急ぎで戶棚に行つて剃刀を出さうと

した。が、その時ふと又考へた。『否、こんな簡單な事ではなかつた。自分は行つてあの老婆を殺さなくてはいけないのだ(二)』かう思つた時、彼は恐怖の爲めに氣が變になつて、地面に倒れてしまつた。

【註】(一) こゝの意味では、『まづ最初に』といふ字が挿入さるべきである。

此の例に於ては、强迫觀念と患者の生活との聯絡は、患者の物語りの最初に含まれてゐる。彼は、その婦人と結婚が出來るやうにと、一生懸命に試驗勉强をしてゐた時、その婦人は留守になつたのであつた。彼は勉强しながら、その居ない婦人に對する戀しさに堪へられなくなつた。そして彼女の留守の原因に思ひ到つたのである。それで今や彼の念頭には或る感じが擡ち上つたのである。彼が正常な健全な人であつたなら、彼女の祖母に對して、迷惑か何かを感じたゞけであらう。即ち自分がこんなに彼女を戀しく思つてゐる時に、お祖母さんは何故に病氣などになつたのか、と感じたであらう。これと似てゐるが、併しこれよりか遙かに强い何物かゞ此の患者の心に浮んだのだと我々は考へねばならぬ。即ちそれは彼女を慕ふ心持ちと結びつく事の出來る無意識の憤怒である。その感情は現はれて次の如き叫びとなるのである。『おゝ自分は行つて、自分の戀人をぬすんだ老婆を殺してやり度い。』それから次いで次の如き命令が下される。『こんな亂暴な殺人的な怒りを起した懲罰として、そんな自

分を殺して了へ』と。斯くして此の全過程は、强迫症患者の意識の中に、最も烈しい感情と、そして反對の順序に、卽ち先きに懲罰命令、後に罪的勃發の陳述とを伴つて這入つて行くのである。(A)余の此の說明は、無理であると考へたり、假說的要素を多分に含んで居ると思つてはならぬ。

尙一つの衝動で、間接的な自殺衝動と見做されるもので、もつと長時間續くものがあるが、その說明はさう容易ではない。なぜならば、その衝動と患者の經驗との關係は、吾々の意識に非常にかけ離れてゐる所の、純粹なる外的關係の陰に巧妙に隱蔽されてゐるからである。或る日患者が夏休みに家を離れてゐた時、自分はあんまり肥滿(dick)しすぎてゐるから、瘦せなくてはいけないといふ考へが起つて來た。それで彼はプディングがまだ運ばれない中に食卓から立上り、八月の太陽が赫々として照つてゐる中を、帽子も冠らず表通りに飛び出したのである。そして駈足で山に躍り上り、たうとう終には汗びつしよりになつて、仕方なくて止めたのである。或る時には彼の自殺意思が、此のやせ度いといふ熱望の後から、何の變裝もなしに出現した。といふのは彼が險しい絕壁の端に立つて居た時、突然に跳び込まうとする命令を受けたのであつた。跳んだなら確かに死んでしまつたに違ひない。患者は此の無意味な强迫行爲を何とも說明する事が出來ないでゐたが、突然心に思ひ付いた事は恰度その時に患者の戀人も亦その同じ場所に來てゐた事だつた。然かも彼女は英國人の從兄と一緒で

あつて、その從兄は彼女に對して非常に慇懃であつた。患者は此の人に對して嫉妬を感じてゐたのであつた。此の從兄の名はリチャード Richard と言つたが、英國でよく行はれてゐる習慣に依つてディックDick といふ名で知られてゐた。であるから此の患者は、此のディックを殺し度いと思つたのであつた。患者はディックが、どうにも堪まらない位ねたましく、ディックに對して憤怒を感じて居た。斯ういふ理由で患者は罰としての肥滿制減法（肥滿＝ディック）を自分に行つたのである。此の强迫衝動は、先きに述べた直接自殺命令とは大變に異なつたものに見えるであらう。併しそれにも拘らず此の兩者は、共通な一つの重大な特性を有してゐるのである。何故なら、此の兩者は共に患者の意識にまで達し得なかつた激しい憤怒の情の反動として起つたもので、その憤怒とは患者の戀愛の妨害者として出現した人に對して向けられたものである(一)。

【註】（一）名前及び言語が無意識思想と（衝動であつても又は空想であつても）その徵候との聯絡をとるために使はれるのは、强迫症に於けるよりも、ヒステリー症に於ける方がより屢々であり、またより勝手である。併し余は今更に一つの例を思ひ出した。恰度これと同じリチャードといふ名が、余がかつてずつと以前に分析した患者に依つて同じ樣に用ひられてゐたのである。其の患者は自分の兄と喧嘩した後、自分の財産を捨てゝしまふに一番よい方法を一心に考へた。そして最早金錢等とは緣を切つてしまひ度いものだと公言した。その患者の兄の名はリチャード（Richard）であり、佛語で Richard は金

持といふ意味なのである。

併し此の患者は、この强迫症とは別箇の强迫症を持つてゐる。(それも亦根原は戀人たる婦人であるが)それは此れと違つた機構を示して異なる本能より出發してゐる。此の患者は彼の戀人が彼のゐる避暑地に滯在してゐる期間中、彼の肥滿制滅の熱望の外に、色々な他の强迫症狀をこと〴〵く現はしたのである。そして、此等の强迫症は、少なくとも幾分かは戀人に直接關係を有してゐたのである。或る日、彼は彼女とボートに乘つて出かけてゐた。その日は强い風が吹いてゐた。彼は彼女に帽子を冠せてやらなければならなかつた。何故なら彼の心中には、彼女に對して何事もないやうにせよとの命令が形成されたからだ(二)。これは一種の擁護强迫症であつて、これは此の外にもつと他の結果を起した。又或る時彼等は雷雨の際に一緖に坐つてゐたが、その時彼は非常に恐怖を起して、何故だか彼にも分らなかつたが、焰光と續いて起る雷鳴との間に四十か五十位まで數へねばならぬやうな氣になつて苦しんだ。彼女が出立する日には、彼は道端にあつた石に足をたゝきつけたが、それを道の隅に片づけねば居られなかつた。何故なら彼女の馬車が二三時間の中にはこの道を通つて行くだらうし、この石にぶつかつては困る事になるだらうと考へついたからだ。併し、二三分間も經つた時には、彼は此んな事を馬鹿らしい事だと思つて、再びその道に戻つて、石を道の眞中のもとの場所に置き戻さ

ずにはゐられなかつたのである。彼女の出立後、彼は飽くまで物を識らむと欲する强迫願望におそはれて、彼の友達仲間の嫌はれ者となつた。彼は自分に話しかけられたどんな言葉でも、その一句切り一句切りの正確な意味を了解しようと努めた。さうでもせねば無上に貴い寶でも取り逃すかのやうだつた。それゆゑ彼は絶えず『今仰言つたのは何でしたか』と訊いてゐた。そして二度目に繰り返して聞いた事が、最初に聞いたのとは異つてゐる樣に思はれて、いつでも彼は不滿でならなかつた。

【註】（一）此の場合、『自分が批難されるやうな事が起らぬ樣に』と附け加へれば意味が完全にならぬ。

彼の病氣から起つた此等の症狀は、その時彼と彼女との二人の關係を支配して居た事柄から起つてゐたのであつた。夏休み前に彼はヴィーンに於て彼女に暇乞ひをした時、彼女から言はれた言葉を誤解したのである。卽ち彼女が同伴者の前で彼を拒みたかつたのだと解釋した。それが爲めに彼は非常に不愉快になつてゐた。彼女が夏休みの避暑地に來た時、此の問題を論ずる機會があつたので、彼女は、彼が誤解したあの言葉は反つて彼が笑罵されない樣にと思つて言つたのだと證明してやる事が出來た。これで彼は再び愉快になつたのであつた。此の事件の最も明瞭なる諷刺は、物を識らむと欲する强迫願望に含まれてゐる。『かういふ經驗をした後は、若し不必要な苦しみを嘗めたくないと思ふなら、決して二度と誰をも誤解してはならぬ』と彼は恰も獨言をしてゐるかの樣な工合であつた。斯う

決心したのは、單なる一例から全般化されたといふ譯ではなかつたのである。が、多分この婦人の留守のためであらう。一個の非常に價値ある例から、すべての他のより低く弱い場合に移されたものである。此の强迫症は、單に彼女から與へられた說明によつて、滿足した事からだけで起つたものとは言へない。これは未だ何か他の事を表現してゐたにちがひないのだ。何故なら、それには彼が聞いた事が、正確にくり返されたかどうかとの疑問が殘つてゐる。

このほか先きに述べた色々な强迫的命令に基いて、吾々は更に猶一つの要素を硏究してみようと思ふ。彼の擁護强迫は、後悔の表現として、その反對の衝動卽ち彼が戀人の釋明を聞かぬ前に、彼女に對して抱いた敵意ある衝動の、その反動だけで生じたものである。彼が雷雨の時に感じた勘定强迫症狀は、彼が提出したある材料の助けによつて、何者かゞ死の危險にあるといふ恐怖に對する防禦法だと解釋する事が出來る。吾々が最初に硏究した强迫症の分析では、吾々の患者の憎惡衝動を、特に激烈なるものとして、又意味なき憤怒として認める樣にと、旣に警めて置いた。それゆゑ今吾々は彼等(患者と婦人)の和解の後でさへも、此の婦人に對する患者の憤怒は殘つてゐて、强迫症の形成にあづかつたのであると考へる。彼が聞いた事が正確であるか否かといふ强い疑問は、彼が今度はこの戀人の言つた事を本當に理解したかどうか、又彼女の言葉を自分に對する愛情の證據として考へてよい

かどうかといふ、まだ心にかくれてゐる疑惑が表現されたものである。彼の飽くまで物を識らむとする強迫願望の中に含まれてゐる疑ひは、彼女の愛に對する疑問である。愛と憎惡との戰が、胸の中に怒り荒れてゐて、此の兩感情の對象は一人の同じ人なのである。此の爭鬪は、彼が彼女の馬車の通るべき道から石を取り除き、後に又その石を元の場所に置き戻して、馬車がそれに躓き、彼女が怪我をするやうに企てた事によつて、その愛の行爲を棄てた強迫的象徴的の行爲といふ整然たる形で表はされてゐる。此の強迫行爲の第二の部分即ち石を舊位置に戻すことを、單にその額面にあらはれてゐる通りの病的行爲に對する非難的の拋棄であると解釋したなら、吾々はそれに就て正確なる判斷を下すことは出來ないであらう。その行爲が強迫の觀念に伴はれたといふ事實は、それがそれ自身病的行爲の一部分だといふ事を表はしてゐる。[B] 假令その行爲は最初の行爲をさせた動機とは反對の動機によつて決心されたものであつたとは云へ、矢張り病的行爲である。

二つの相續いた事實が起つて、その第二のものが第一のものを打消すやうな、此の例の樣な強迫的行爲は、強迫神經症としては代表的の事柄である。患者の意識ではそれらの行爲を誤解するのが當然であつて、その行爲を說明するために、つまり合理的にするために第二次的動機を持ち出して來るのである[二]。併し此等の行爲の本當の意味は、大體に於て相等しい二箇の相反してゐる衝動の爭鬪なの

である。これまでのことで余は相變らず此の相反對してゐることの起る事は、愛と憎惡との關係から出てゐるものであるといふことを認めてゐるのだ。此の種の强迫行爲は、理論上からは特に興味深いものである。何故なら、それらの行爲は徵候形成の新しい型を示してゐるからだ。ヒステリーに於てきまつて起る事は、相反抗してゐる兩傾向を同時に發現させ得る妥協が成立つといふことである。云ひ換へれば一つの石で二羽の雀を殺すのである(三)。處が此處では相反せる二つの傾向が滿足を別々にする。卽ち一方が先きに一方が後にするのである。とは言ふものゝ、この相反せる兩者の間には或る種の論理的聯絡(すべての論理を無視せるもの)をなさんとする事があるものである(三)。

【註】(一)『日常生活の理窟附け』一九〇八年(アーネスト・ジョーンズ)參照。

(二)『ヒステリー性空想及その兩性愛の關係』(一九〇八年文集二卷)參照。

(三)もう一人の强迫症患者が次の話しを余になした。彼は或る日シェーンブルンの公園を步いてゐた。その時地面に橫たはつてゐた枝で足を打ち附けた。彼はその枝を拾ひ上げて小逕の傍の籬の中に投げ込んだ。處が家へ歸る途中で、その投げ込んだ枝が若しや籬から幾分か突出てゐて、自分の後から來る人に怪我をさせはしまいかといふ不安が突發した。彼はどうしても電車から飛び下りて、その公園に急ぎ戻られば我慢が出來なかつた。そして先刻の場所の處に行つて、その枝を又以前の場所に戻さないでは居られなかつた。その枝は、患者が入れた籬の中よりも、以前の道路にあつた方がどの位危險

か知れないといふ事は、誰だつて分ることである。この二度目の憎惡的な行爲即ち彼が強迫を感じて爲した行爲は、彼の意識的の考から見る時は、最初の博愛的な行爲に實際に附屬してゐた動機を衣として裝うてゐたのであつた。

愛と憎惡との爭鬪が、此の患者に於ては他の徵候から見ても同樣にあらはれてゐる。彼は信仰が復活する時には、いつでも自分で祈りを上げるのであつたが、その祈りは段々長い時間がかゝつて、遂には一時間半も續くやうになつた。此の理由は、逆結果といふやうになつて、何かゞいつも自分の信仰深い祈りの言葉の中に這入つてきて、その祈りが反對にひつくり返されてしまふ樣に感じられたからである。例へば彼が『神よ我を守り給へ』と祈るときには、惡魔が急いでそこに『勿れ』といふ言葉を挿し挾むやうな氣がされた。さうすると彼の心中では祈つてゐるのではなくて、呪つてゐるのではないかといふ考へがふと起つた。なぜかと云へば、その時には祈りとは反對の言葉が必ず這入つて來るだらうと思つたからだ。彼の祈りによつて抑制されてゐた最初の原の意思が、彼の此の最後の觀念を通つて首を出してきたのである。彼はたうとう祈りを止めて、色々の祈禱の頭文字や音綴等から工合よく作られた短い祈禱文を唱へて、此の困惑からやつと逃れることが出來た。彼はその祈禱文を何も餘處から這入り込む隙のない樣に早口で唱へたのだつた。

患者は曾つて或る夢を余に話した。その夢は、患者が分析者に對する轉嫁作用に關して、これと同じ爭鬪を表はしてゐた。その夢は斯うであつた。余の母が死んだので彼は悔みを述べ度いと思つてゐたが、余が以前さういふ樣な場合によく無作法にも笑ひ出した事が度々あつたので、今度も笑はれやしまいかと心配した。そして彼は p. c. とかいたカードを余の許に置いて行つた方がよからうと考へた。處が彼がそれを書いてゐる中に、その字は p. f. と代つてしまつたと言ふのである。この患者が戀人に對する色々の感情の對抗してゐるといふ事は、餘りに著しい爲めに、それを意識的認知から全然逃れ去る事は出來ないでゐるのだ。此感情相互の對抗が示されてゐる强迫觀念を考究してみると、患者は自分の逆衝動を十分正當に理解してゐないといふことが解る。彼はその婦人から十年前に最初の結婚を拒絕されたのであつた。それ以後、彼は自分の知る所では、彼女を强烈に愛してゐると思ふ時と、又彼女に無頓着だと思ふ時との、この兩時代を代る代るに過ぎて來ねばならなかつた。斯うしてゐる中に、彼は求婚が成功しかけた時に採るべき或る方法を採らうとする際になると、いつでも反抗の心が先づ初まつて來る。自分は彼女の事など介つては居られないのだといふ確信をもつた態度で始まつて來る。だが實際はこんな確信は何時でも直ぐに崩れてしまふのであつた。或る時彼女が重い病氣で床に就いてゐたので、彼はそれを非常に深く心配をしてゐた時、彼女の寢顏を打守りなが

ら、彼女が永久に斯うして寢てゐて呉れゝばよいがといふ願望がふと起つた。彼は此の觀念を巧妙にも一片の詭辯を以て說明してゐる。卽ち彼は、彼女が幾度も幾度も重ねて病氣になりはしないかといふ堪へられない恐怖心から襲はれる爲めに、その恐怖から解放されむとして、彼女が永久に病氣であれと願つたのみであつたと言つてゐる(一)。時々彼は空想に耽つた。それは彼が自身で復讐の空想だと考へて、愧づかしく思つてゐた。例へば此の婦人が求婚者の社會的地位を非常に重んじてゐるといふ事を信じてゐたので、彼はこの婦人が何か官廳に勤めてゐる樣な人と結婚したといふ空想を自分で作り上げた。そして、彼自身もその人の勤めてゐる同じ役所に勤めてゐて、彼女の夫よりも早く昇進して、その夫を彼の部下にしてしまつた。空想は更に進んで行つた。或る時此の男が何か不正な行爲をした。此の時この婦人は彼の足下にひれ伏して、どうか夫を助けてくれと嘆願した。彼は、その願を受け入れてやつた。そしてこの時彼女に言つた。自分は彼女を愛してゐたが故にこの役所にはいつたのだ。なぜなら斯ういふ事があるだらうと前から豫知してゐたのだ。そして、もう彼女の夫が助けられた今となつては、自分の使命は果されたのであるから、自分はこの役所を退くと。

【註】(一)此の强迫觀念を助成するに至つたもう一つの動機は、彼女が彼の目論みには無力であるといふことを知り度いといふ慾望であつたといふことは、疑ひを挿むことの出來ない事である。

彼は猶更に一つの空想を話した。それは、その空想中で彼は彼女のために大いに盡したけれども、彼女にはそれを自分が爲したといふことを知らせなかつたといふのである。この空想では、彼は單に彼の愛情を認めたゞけで、デユマの『モンテクリスト伯』にならつて、彼の復讐慾を抑制せんと計畫した寛容の原因及目的を十分に了解する事が出來なかつたのである。その上彼は時々彼の崇敬する婦人に對して、何か惡い事をしたいといふ可成り明らかな衝動に驅られる事があるのを自分でも認めると言つた。此の衝動は、この婦人がそこに居る時には概して起らないでゐるが、その婦人の留守の時ばかりに顯はれるのであつた。

（註）（A）この强迫思考の發現の順序が何故に前後せるかに就いては二二八頁を參照すべし。（譯者）

（B）第一の行爲（石を片附けること）も亦第二の行爲（石を舊位に戻すこと）も共に相反する强迫行爲であるとの意。（同）

（f）强迫神經症の起因

或る日、患者がある事件について余に語つた。偶然にもその事件が彼の病氣の刺戟的原因であつ

て、又少なくとも彼の六年前に發生して現今まで固着してゐる病症の直接起因として余は認めたのであつた。患者自身は自分が重大なる何物かを提供したなどとは氣付かなかつた。彼は此の事件を今まで重要だと考へたやうなことは更になかつたといふ。併しそれを彼は忘れはしなかつたのである。彼の此の態度は、理論上考究する價値があるのだ。

ヒステリーの場合では、病症の刺戟的原因は幼年期の經驗と同樣に、健忘に依るものだといふ規則がある。幼年期の經驗の助けによつて、病症の刺戟的原因はその感情を肉體的徵候に變ずる事が出來るのである。(A)健忘は完全でない時でも、最近にうけた外傷的の刺戟的原因を紛亂させて、少くともその中の最も重要な分子を忘れさせて仕舞ふのである。この健忘といふことによつて、吾々はそれまでに起つた抑壓の證據を見ることが出來るのである。强迫神經症の場合はこれと異つてゐる。神經症は幼年期の素因が健忘である場合もあらう。だが、それは時々は不完全な健忘なのである。併し此の病氣の直接の起因は、それではなくて記憶の中に存してゐるのである。抑制する場合にはもつと異つた機構であつて、そして實際はもつと簡單な機構を使ふものだ。外傷は忘れられてしまはずに、その感情纒綿から抽出されるものである。それ故に意識に殘つてゐるものは全く無色のもので、重大視されてゐない觀念內容である。ヒステリーの場合に起るものと、强迫神經症の場合に起るものとの差異

は、吾々が現象の背後に再現することの出來る心理的過程中に存するのである。その結果は殆んどいつも同じである。何故ならば、その無味無色な記憶の內容は殆んど再生されぬものであり、患者の精神活動には與からぬものであるからである。抑壓の此の二つの種類の間に差別をつける爲めには、吾人は表面上には何の賴る物もないのである。が、たゞ患者が或る場合にはいつも物を知つてゐる樣な感じがあり、又或る場合にはそれをずつと前に忘れてしまつた樣な感じがあるといふ事を、確言する事があるばかりである(二)

【註】(一) 强迫神經症患者には二通りの自覺がある。患者が彼の外傷を知つてゐるといふことは、それを知らないと言ふことと同樣に理窟に叶つてゐる。患者はそれを忘れてゐないといふ事に於てそれを知つてゐるので、患者はその意味を氣附かゐでゐるといふ事に於て知らないのである。日常生活にも斯る事はよくある。ショーペンハウエルがいつも行く料理店で、彼にいつも給仕をする給仕人は、或る意味で彼を知つてゐるといへる。しかしこれ以外の時では、フランクフォルトにあつても、それ以外の處にあつても知られてゐないのである。しかしその給仕人等は、今日吾々が、ショウペンハウエルを知つてゐると言つてた意味では、知つてゐないのである。

此の理由で、自己呵責の念に苦しめられてゐ乍ら、彼等の感情を間違つた原因に結びつけてゐる强迫症患者が、それが自分の自己呵責の原因になつてゐるとは知らずに、その本當の原因となつてゐる

話を醫師に話す事は決して珍しい事ではない。その事柄を話し乍ら、患者等は時々驚きを加へ、又時には誇らしい樣子をさへする。そして『併し私はそんな事は何とも思はなかつた』といふのである。恰度かういふ事が余の所に來た最初の强迫神經症患者にあつた。そして多年前に余に此の病氣の性質を洞察させた患者であつた。この患者は官吏で、種々良心の咎めに苦しめられてゐた。シエーンブルンの公園の枝の話しで、余が先きに例を上げたのは此の男の事である。余は彼が診察料として拂つたフロリンの紙幣が實に淸潔で滑らかであつた事におどろいた。(これはオーストリアで、銀貨の出來る前であつた。)余は嘗て彼に、官吏は國庫から引出してくる手の切れさうな新しいフロリン紙幣で分ると云つた。その時彼はそのフロリンはちつとも新しいものではない。自宅で火のしをかけて來たからだと言つた。彼はその理由を說明して、人に汚れたフロリン紙幣を渡すといふことは彼の良心の許さぬ處だ。何故ならその紙幣にはあらゆる黴菌が附着してゐて、受取つた人に害を及ぼすかも知れないからだと云つた。この時余は神經症と性的生活との關係について、漠然たる疑惑をすでに抱いてゐたので、彼に他の場合には斯ういふ問題については如何であるかと訊ねた。彼は稍得意らしく答へた。『それはよろしいです。その點では決して工合の惡い事はありません。私は尊敬すべき家族の中で親愛なる伯父さんの役をしてゐます。時々、その地位を利用して、或る若い少女を一人誘つて一日田舍に

遠足などにゆきます。その時都合をつけて汽車におくれる様にして、ひと晩郊外ですごさねばならぬ様にさせます。私はいつも二部屋借ります。しかしその少女が床に入りますと私も彼女の所に入つて、指で彼女に觸ります。』『でも汚ない手で觸つたりして、その少女を害しはしないかと思はないのですか？』余から斯う問はれて彼は非常に怒つた。『害ですつて？ 何の害をするでせう。どんな少女にだつて、一人にだつて害などしませんよ。彼等はみんな喜んでゐました。その少女達で今はもう結婚したものもありますが、何の害などありはしなかつたのです。』彼は余の抗議を惡く取つて、最早その後は訪ねて來なかつた。併し余は、紙幣に對する彼の潔癖と、少女に對する彼の無分別とを對照してみて、少女に對する自責の感情が、紙幣に對する潔癖となつて置換されたものと考へて解釋した。何故に轉換されたかといふのは明瞭に分る。若しも此の患者の自己呵責が、少女に對する行爲からだとして其處に止まつてゐたなら、彼は多分幼年期の有力なる決定（自己呵責）に强ひられて、それが爲めに性的滿足の形を破棄したであらう。故にこの轉換は、彼の病氣から、非常な利益を彼が引出した事を證明するのである。（パラノイア症狀より得らるゝ利益）[B]。

併し余は、余の患者の病氣の刺戟的原因のもつと詳細なる試驗に戻らう。患者の母は、遠緣に當る金持の家族に育てられた。この家族は大きな工業商會を經營してゐた。彼の父は結婚した時には實業

にたづさはつてゐたので、彼の結婚は彼を非常に安樂な地位においた。患者は、彼の兩親の間に交された輕い對話から、（この兩親の結婚は非常に幸福であつた。）彼の父親が彼の母親と知己にならぬ前に、身分の低い貧しい、けれど美しい少女に求婚した事を知つた。これまでが此の話の序言である。父の死後此の患者の母はある日彼にかう話した。母は金持ちの親戚と相談して來たといつて、彼女の從兄が、彼（患者）が學校を卒業したら從兄の娘と結婚させると宣言したといふこと、それから從兄の商會の實業關係から、彼には大變よい職業の口が得らるゝといつたことを話した。この家族の計畫は患者の心の中に、自分が彼女の貧しさにも係らず愛してきた少女に忠實であるべきか、又父の跡をふんで、自分に當てがはれた美しい富める親戚の立派な少女を取るべきかといふ爭鬪が起つた。彼は此の爭鬪、實をいへば彼の愛と、父の願望の强い影響との間の爭鬪を解決せんとして、終に病氣になつたのである。否もつと正確にいへば、實際の生活に於てその問題の解決といふ仕事を、病氣になつて避けたのだといへる（一）。

【註】（一）彼が病氣に逃げ込んだといふことは、彼が自分と父とを同一視してゐたことに依つて出來るものだといふことは、立派に主張されて差支へない。此の同一視は、彼の感情を少年時代の殘物に退行せしめ得たのである。

此の考察が正確である證據として、彼の病氣の主なる結果は頑固にもいつまで經つても働けないことであつた。その爲めに彼は何年も彼の教育を延ばすことが出來た。併し此の樣な病氣の結果は、少しも意圖的ではなかつた。病氣の結果と思はれたことは、實際は病氣にかゝる原因であり、動機であつた。

豫期してゐた如く、此患者は先づ余のその問題の解釋を受け入れなかつた。彼は結婚の計畫が、こんな結果を起す筈がないと言つた。當時その問題は彼にはほんの僅かの印象もあたへなかつたと言つた。併し更に進んでゆく内に、彼は餘儀なく余の疑の眞實さを信ずる樣に、而も非常に强く信ずる樣になつた。轉嫁瞑想の力を借りて、彼は自分の忘れてゐた過去の一小話を、恰も新しい現在の出來事の樣に經驗したのである。此の患者の治療中に、或る不明瞭な困難な期間があつた。それは終には斯ういふ事だと解つた。彼が余の家の階段で一少女に出合つたことがあつた。それを彼は余の娘だと直ぐに思つたのだつた。その少女を大變氣に入つた。余が彼に對して親切で信じ難き程忍耐强いのは、自分を娘の婿に欲しい爲めなのだらうといふ想像を彼は描いてゐた。同時に彼は余の財產や地位を彼の心中に置いてゐた模型と一致するやうな標準に高めたのであつた。併し彼の自ら愛する婦人に對する消えざる愛は、この誘惑と戰つたのだ。彼がなした非常なる抵抗と、激しい罵詈とを通り越してか

ら後、彼はもはや轉嫁瞑想と過去の實際の事情との間が完全に類似してゐるといふ、驚くべき力に對して盲目でなくなる事が出來た。此の時期に於て彼が見た夢の一つを繰り返して、彼がこの問題を何う取扱つてゐるかの例としよう。彼は夢で、余の娘が二つの眼の代りに二かたまりの糞をつけて、彼の前に立つてゐるのを見た。夢の語を理解出來る人は、此の意味を容易に解釋するであらう。此の意味は、彼は彼女の美しい瞳（美貌の意）のために結婚するのではなく、彼女の持參金を目當にしてゐるのであるといふ意味である。

（註）（A）例へばヒステリー球、運動痲痺等の如き症狀はそれであつて、神經症と區別される點である。即ち、神經症は肉體症狀を起さないのである。（譯者）

（B）少女に對する行爲の自責感が轉換されずに其處に殘つてゐたならば、それが爲めに性的障碍の症狀を發したのだつたらうが、紙幣の方に轉換されたので、本人としては非常な利益を得たのであるとの意。（同）

（G）父性コンプレクス及び鼠の觀念の解除

この患者が大人になつてから罹つたこの病氣には、起因として一條の絲がこの患者の幼年期までつながつてゐる。彼は自分で知つてゐた否疑つてゐた父の狀態と、同じやうな狀態に自分が置かれてゐる

るのだと悟つた。その爲めに自分を父と『同一視』する事が出來たのである。併し死んだ父親は、これとは異つた他の形式で彼の病症の中に包含されてゐるのだ。彼の病氣の根本に存在してゐる爭鬪の本體は、父の慾望の強い影響と彼自身の偏つた戀愛との爭鬪であつた。此の患者が最初の治療の時に報告した事を考へてみるならば、この爭鬪は非常に古くから存在してゐて、彼の幼年時代に既に發生してゐたのではないかといふ疑問を禁じ得ない。

話によれば彼の父は非常に優れた人であつた。結婚前に既に下士官であつて、此時代の彼の生活の遺物として率直な軍人的態度を有してをり、眞正直な言葉を用ふる癖を持つてゐた。何れの墓石にも故人の德が色々と刻まれるものだが、そんな德の外に猶また愉快なユーモアを持つて居り、又友人に對する親切さなどで知られてゐた。短氣で亂暴であつた事は、確に他の性質とは矛盾してゐるが、それはむしろ父の性質を完全に補つてゐるものとして必要なものだつた。父は此性質で子供らがまだ小さくて惡戲盛りであつた時に隨分と折檻したのである。併し子供らが成長すると、餘處の父親とは違つて、自分を侵すべからざる權威者のやうに振舞ふなどといふ樣な事はなく、善良な率直さを以て、自分の生涯の小失敗や不幸などを話して聞かせたりした。息子と一緒になつて最も親しい友達のやうな生活をしてゐた。(但し或る一點については然うではなかつた。)といつても決して誇張ではない。息

者は幼ない少年だつた時、この父の死といふ事に就ての考へが、彼の心を常にない過分の强さで占領した事や、また彼の少年期の强迫觀念の記述中にこれ等の考へ（父の死に就て）が表はれてゐる事などは、確かにこの或る一點に關聯してゐた。また彼が或る少女の同情を望んで、もつと親切にして貰ひ度いために、父の死を願望したといふのは、たゞこれと同じ關聯に依るのみである。

　この父と子供との間に、性感に關することで何か原因があつたこと、又子供の早熟な戀愛生活に對して父が何か妨害物になつたといふ事には、最早疑問の餘地はないのだ。父の死後數年を經て彼が最初の性交を經驗した時、一つの觀念が浮んだ『これは素晴らしい事だ。この爲めには誰でも父を殺すことがあるかも知れない』と。これは同じく彼の少年期の强迫觀念の反響であり說明であつた。猶又彼の父は死ぬ僅か前に、この患者に對して强い感情を作らせるやうな妨害をしたのだ。父は、患者がいつも婦人と一緒にゐるのを氣がついて、不謹愼だと云つたり、それだから自分で莫迦な耻づかしい思ひをするのだと云つたりして、その婦人から離れるやうに戒めたのだつた。

　次にこの患者の性的活動力たる自慰的（オナニッシ）の方面の歷史を調べてみると、この申し分のない證據の上に更に新材料を加へることが出來る。今日迄正當に了解されてゐなかつたこの問題について、醫者の意見と患者の意見との間に相容れない部分があるのだ。患者は誰でも皆自分達の病氣の根本であり起因

であるのは自慰 Onanie であると決めてゐる。彼等は自慰を思春期の自瀆 Masturbation だと解してゐる。醫者は大概のところ何ういふ解釋法をとつてよいか決定し難い。然し神經症患者のみならず健康な人でも、思春期には自慰の期間を通過するものだといふ知識から考へて、醫者の大部分は患者のいふ事を誇張だと見做して受け容れないのだ。余の考へでは、醫者よりも患者の方が正しい見解をもつてゐると思ふのだ。なぜなら醫者は主要な點を見逃すやうな場合があるが、患者の陳述には眞理の微かな閃めきを持つてゐるものだ。患者が陳述する問題は、患者自身が解釋してゐる意味から云へば、確かに實際と一致しないものだらう。例へば思春期の自慰（これは此の時期の代表的事件として特筆され得るもの）が總ての精神障碍を起させる責任を持つてゐると考へてゐるやうに。だから彼等の問題は解釋してやる必要があるのだ。思春期の自慰は事實上幼年期の自慰の復活に過ぎないものだ。この問題は今日迄おろそかにされて來た。幼年期の自慰は普通三歳から四五歳までの間に頂點となる。それは幼兒の性的素質の表示であつて、後から起る神經症の病原論はその中から探し出すことが出來る。こんな變裝された方法で、患者は自分の病氣を幼年期の性感のせゐにしてゐるのだ。だがそれは確かにその通りで正しいのである。これに反して吾々が自慰の問題を治療上（クリニッシ）のものとして取扱はうとしたり、又はこの問題が多種多様な性的分子、或はその分子から發生するどんな種類の空想の解放を

も表示し得るといふ事を忘れたならば、この問題は解決が不可能となる。自慰が有害だといふ事は、極く小程度まで自治的である。といふ譯は、自身の性質で何うでもなるのである。そのうち實際の有害として認められる部分は、性生活の病原を起させる意義のうちの一部にしか當らないものだ。多くの人々が自慰を行つて無害(或る程度の)だつたといふ事實は、その人が教養的に許される範圍內で性的素質と性的生活の發展過程上、自慰を許してゐるのだといふ事を單に示してゐるに過ぎないのである(一)。處が或る種の人々は、性的素質がもつと都合惡く、又は性的生活の發展が障碍されて來た爲めに、性感に惱んで病氣になる。卽ち彼等は自身の性的分子の必要なる抑制又は亢進を、禁制するか又は代償構成を爲すかにあらざれば遂げられないのである。

【註】(一)『性說に關する三論文』(フロイド)參照。

余の許に現在來てゐる此の患者には非常に著しい自慰の行動があつた。彼は思春期に於ては特に記述する程にはこれに耽らなかつた。それ故考へ方に依つては神經症に罹らずに濟んだかも知れなかつた。併し彼は父の死後間もなく、恰度二十一歲の時に自慰の衝動が起つて來た。彼はそれの滿足にふけることを、その度每に恥ぢて、すぐにその習慣を止めたが、その後ずつと、それは極めて稀な珍らしい時にだけに起つて來た。それは彼が特に愉快な時を過した時とか、特に氣持のよい讀書をした時

とかに起つたと言つた。例へば、ある氣持よい夏の午後、ヴィーンの街の中央で、騎手が非常に上手に角笛を吹いてゐたのを聞いてゐた時のことだつた。街の中で角笛を吹くのは許されないので、巡査が來てそれを止めたが、それまで彼はそれを聞いてゐて、そしてその衝動を起した。又ある時は、彼がゲーテの『詩と眞理』をよんだ時であつた。この物語りで、嫉妬深い主婦が自分の次にゲーテに接吻した或る女を嫉妬し、その女にあたへた呪ひの中から如何にしてゲーテは逃れ出たか、そしてゲーテはその呪ひに暫らくは抑へられてゐたが、遂には喜びに充ちて愛する人に幾度も〳〵接吻をあたへたといふことを讀んだ時であつた。

此の患者には、此等のやうに美しい向上的の場面に當つて、恰度自分が自瀆してゐるやうな衝動を受けるのは少しも不思議ではないと思はれた。併し余は、此等の二つの場合の中には共通した何物かが、卽ち禁止と命令に對する反抗とが含まれてゐるといふ事を指示せずには居られなかつた。

吾々は又同じ問題に關聯して、患者が試驗勉强をしてゐたら、父がまだ生きてゐて、いつでも再び現はれるかもしれないといふ彼の好きな空想を走らせてゐた時の、奇妙な行動を考へねばならぬ。彼は自分の勉强はいつも出來るだけ夜遲くにしてゐた。夜の十二時から一時の間に、彼は勉强を中止して、恰も父が外に立つてでもゐるかの樣に、玄關の扉をあけた。それから戾つてきて廣間に這入り、

自身の Penis を出して鏡で眺めるのであつた。此の狂人的行動は、彼が幽靈も墓を出るといふ時間に父の訪問を豫期してゐるかの様な行爲だとして考へて見るなら、それは明瞭に分る事である。彼は概して父の生存中は勉强を怠けてゐた。これを時々父は困つたものとしてゐた。今は、父が幽靈になつて歸つてくれば、父は子の一心に勉强してゐるのをみて喜ぶだらう。併し彼のもう一方の行動を見れば、喜ぶ譯には行かないのである。故に此の點に於て父に反抗してゐる筈である。斯く彼は一つの不可解なる强迫行動に於て、彼が父に對する關係の二方面を表はしてゐる。それは恰度これに次いで石に對する强迫行動を彼の戀人に對して爲したと同じことである。

此等の徵證や同種類の材料から出發して、余は一つの解釋を提供したのである。それは、此の患者が六歲未滿の時、自慰に關係した或る性的不行狀をなして、父から非常に折檻されたといふ事である。余の推定によれば、この罰はたしかに彼の自慰を止めさせたのだ。併し裏面に於て彼は父に對する根深い不滿を殘し、父が患者の性的快樂の妨害者だといふ感を常に持たせる事となつたのだ。余の非常に驚いた事には、患者は余に斯ういふ事を話した。それは、彼は極めて幼少の時にそんな事があつたといふ事を母から幾度も聞いたといふ事である。母はその著しい結果のためにそれを忘れなかつたが、彼自身はそんな記憶は何もないといふ。その話といふのは、彼が幼少の時で、その時日は恰度

彼の死んだ姉の病氣の時と同時であつたので明らかに分つてゐた。彼は何か惡戲をしたので父からひどく打たれた。この子供は大變怒つて打たれ乍らも父に對して惡口をついた。しかし何も惡い言葉を知らなかつたので、考へついた物の名を何でも言つて叫んだ。『羊！』『タオル！』『皿！』とかいふ樣に。彼の父は子供が本氣になつて怒つたのに驚いて、打つのを止めて叫んだ。『この子はずつと立派な人になるか又はずつと惡人になるぞ〔二〕』と。患者は其時の光景は彼の父にも彼にも同樣に永久の印象をあたへたらうと信じてゐた。患者は彼の父はその後決して彼を打たなかつたと言つてゐる。彼の性質が幾分か變つて來たのもこの經驗の故であると言つた。それ以後彼は自分の怒りの亂暴さを恐れた爲めか大變臆病になつた。その上、彼は一生涯打たれる事を恐れ、彼の兄弟の一人が打たれてゐる時などには、恐れと憤りに充たされて逃げ隠れるのが常であつた。

【註】〔一〕此の善惡の岐路はその可能性を洞らしはしなかつた。彼の父は此の樣な早熟な感情から齎らされる共通な結果たる神經症の事を見逃してゐたのであつた。

其後患者は母に再び訊ねてみたら、その話は確かだと云はれ、更に當時三歳と四歳の間であつた事が分り、彼は誰かを嚙んだために罰せられたのだといふ事も分つた。母はそれ以上の詳細な事は覺えてゐないが、彼が傷つけた相手は多分乳母だつたらうと微かに記憶してゐると云はれた。母の話には

彼の不行儀が性的性質のものであつたといふ暗示はなかつた(二)。

【註】(一) 精神分析に於て、此種の事には度々出會ふ。即ち患者の幼年期の性的活動力が、その頂點に達して何か不幸や罰などを受ける時は、その結果屢々禍を來すといふ極めて初期の幼年期に見られる事件である。これらの事柄は夢の中に朧げに起り易い。併し、時にはその事柄が非常に明瞭になり、分析者はそれを確かに把握したやうに考へるのだが、それだけでは決して最後の解釋を得る事は出來ないのである。分析者は非常な熟練と愼重さを以てせねば、問題の光景が實際に起つたものか否かを決定させずに終つてしまふ。吾々が此の光景の幾つかの倒錯が、(それは屢々相互ひに相違してゐるものであるが)患者の無意識的空想中に探し當てられるといふ事を認めたなら、吾々は正しい解釋の道筋に置かれたとしてよいのである。若しも吾々が此等の事の歴史的眞實を判斷するに迷ひ度くないならば、人人の幼年期の記憶は、後年(概して思春期)になつて固められるといふ事、及びその記憶は國々がその初期の歴史に就て傳説を作つてゐる過程と同じやうに、總ての點に於てそれと類似した模造の複雜な過程を意味してゐるといふことを理解して居なければならぬ。こゝに於て人々は成長するにつれて自分の幼年期についての空想中に自發的性的活動力の思ひ出を打消さうと努めること、及びそれは恰も眞の歴史家が過去を現在の見地から眺めるのと同じく、彼等は自己の記憶の跡を、對象愛にまで引上げてなすといふことが明瞭となるのである。この事は、なぜこれらの空想が誘惑と攻擊とに充たされてゐるか、又その空想中に於てこの事實が自發的の性的活動力、及びそれを刺戟するところの愛撫や罰に限られてゐるかといふ事の説明となつてゐる。更に個人は自身の幼年時代に就ての空想を構成

する時には、自身の記憶を性化するものだといふ事が明瞭に分る。即ち彼は平凡な經驗を自身の性的活動に關係させ、彼の性的興味をその經驗にまで擴げて來るのである。併しさうする時に、彼は實際に存在してゐる所の關係の跡を恐らくは辿つてゐるのである。余の『五歳の男子に於ける恐怖症の分析』を記憶してゐる人には、余が幼年期の性感を思春期の性的興味に過ぎないものとして退化せしめてしまふのは、余が幼年期性感の重要さを輕視してゐる理由であるといふ事を說明しないでも分るだらう。余は單に、幼年期の性的活動力の描寫を曲解するやうな一聯の空想を晴らすために、或る專門的忠告をなし度かつたのみである。

今の例に於けるが如く、個人の有記憶前の過去の話が基礎となつてゐる事實を、大人になつた人の確固たる證明に依つて、成立させる事の出來るやうな幸な位置に置かれる場合は殆んど無いのである。若しあつたにしても、この患者の母の述べた言葉は、種々の可能への道を開いてくれてゐる。母がその子供のその爲めに罰せられた事柄の性的性質を宣告しなかつたのは、母自身が監督者たる地位にあつたといふ理由からであらう。何故なら、すべての兩親にとつて、子供の監督者たる以上最も熱心に消滅を望んでゐることは、子供の過去の性的要素である。併し子供が性的性質を帶びない普通の惡戲をした爲めに、その乳母や母自身から叱られるといふ事もあり得るし、また子供の反動が非常に激しいので、父親から折檻されるといふ事も有り得るものである。此の場合の空想では、乳母や召使とかは、それよりも一段と高い地位の母に置き換へられるのが普通である。此の種の話に就て患者の夢をより深く解釋すると、患者の精神中に實に叙事詩的想像によつて產み出されたやうなものが存在

してゐることが認められる。彼の母及び姉妹又は姉妹の早死等に對する性的願望は、此の若い勇士が父から受ける折檻と關聯してゐる。然し此の空想といふ織物の絲を手操つて、それを解くことは不可能である。此の療治の成功には確かにこれが妨げとなつてゐるものである。患者が恢復し、彼の正常なる生活がその主張を通さんとして來ると、彼の前には長い間顧みられなかつた、また治療の繼續とは兩立しない所の多くの仕事が出て來る。といつてそれを分析の間隙が出來たとして、余に批難をあたへる事は出來ぬ。精神分析の科學的結果は、現在では治療的目的の副産物にすぎない。故にかゝる治療が失敗する場合に、最も多くの發見が爲される事が度々ある。

幼年期の性的生活の内容は、それが優勢な性的分子であれば、自發的性的活動の中に存在し、又は對象愛の痕跡中に存在し、又は强迫症のコンプレクスの核心だと呼ばるゝやうなコムプレクスの中に存在してゐる。そのコンプレクスは好奇心發生以後の小兒の最も初期の衝動、卽ち兩親や兄弟姉妹に對する愛情も敵意も同時に含んでゐるコンプレクスである。子供の性的生活の內容が均等であるといふ事は、後年に到つて帶びてくる所の變化的傾向の不變的性質と共に、眞の經驗が如何に大に、又如何に少く空想構成にあづからうとも拘らず、幼年期頃に構成されたる空想を一般に特性づける所の絕えざる同一性とをそれによつて容易に說明できようと思ふ。子供の父が性的反對者の役割を當てられる事や、又自發的性的活動力の妨害者の役をなす事は、全く幼年期のコンプレクスの核心となるものの特性のためである。そして實際の事件が、通常非常に大なる程度まで、この事を惹起させる責任があるものである。

此の幼年期の光景に就ての議論は註の中に見出されたであらう。今余の言ひ度い事は、此の光景の現出が初めて此の患者を感動させて、彼は自分の有記憶前に非常に愛してゐた父に對して非常な怒りに襲そはれた（この怒りは後に潜伏してしまつたが）といふ事を信ずる事が出來なかつたといふ事である。余はこの事が實は、もつと大きな効果をあたへるかと思つてゐた。何故なら、これは患者に數度話され、然かも父親自身からも話されてゐた事であつて、この事の實在的事實には何等疑惑のあり得る筈はなかつたからだ。併し乍ら彼は、强迫神經症者の如き非常に怜悧な人々をいつも混惑させる所の『不合理である』といふ事の理由で、その物語りの證據的價値に反對して、彼自身その光景を記憶しないといふ事實を云ひ張つた。彼が、父との關係は本當は此の無意識の補足の請求を餘儀なくせねばならなかつたのだといふ確信に達するには、たゞ轉嫁といふ苦しい路を通つて行くより外に方法がなかつた。間もなく物事はさういふ一點に達したのである。それは何ういふことかといふと、彼の夢で、又は目ざめた時の空想で、又は彼の聯想で、彼は余と余の家族に對して最も亂暴な汚ない惡口をあびせ初めたのであつた。併し彼が愼重に行動してゐる時には、彼は余に對しては非常な尊敬を拂つてゐた。彼が余に對して、此等の侮辱をくり返してゐた時の行動は、殆んど自暴自棄に陷つた人の態度であつた。彼は常に斯うたづねた。『どうしてあなたの樣な立派な紳士が、私の樣な卑しい役にも

立たぬ奴に侮辱されてゐるのですか。私を追出して下さい。それが私には相當してゐるのです。』彼はこんな事を言ひ乍ら長椅子から立上つて室内を歩きまはるのであつた。最初彼はこの習慣を自身の感情が細かいためであると說明してゐた。彼は自分がそこに安樂に横はつてゐる間は、こんな怖ろしい言葉を言ふ氣には決してなれないと云つた。併し間もなく彼はもつと有力な說明を發見した。それは彼は余から打たれる事を怖れて、余の接近するのを避けるためだと云つた。若し彼が長椅子に臥てゐるやうな時には、限りもない大きな折檻から逃れようとして、非常な恐怖を抱いてゐる者のやうな恰好をして、手で頭をおほひ、腕の中に顔を埋めて、急に飛上り、顔は苦痛でゆがめ、走つて大急ぎで逃げ去つたであらう。彼は、父が非常に激情家であつて怒り出したら止め樣もなかつたのを思ひ出した。斯くしてこんな苦痛の學修を經てゐるうちに、患者は少しづつ自分で持つことが出來なかつた確信の感を持てるやうになつて來た。それは無關心の人々にとつては、眞理は殆んど自明の理であるのだけれど、患者には容易に確信を持てなかつたのだ。而して今や、彼のねずみの觀念の解決に到る道は明らかになつた。治療はその轉換點に達して來た。そして今まで差控へられてゐた色々の材料は悉く有用になつてきた。そして色々の事件の全聯鎖が可能になつてきた。

すでに述べた通り、こゝの記述は最も簡單に大略な事柄を述べて滿足する事としよう。明らかに最

初に解決さるべき問題は、チェックの大尉が物語つた二つの話が、卽ちかの鼠の話とA中尉に金を返せと云つた事とが、何故にこの患者にあのやうな激動的影響をあたへたか。そして何故にこの様な激烈な病的反動を起したかといふ事である。この推定はかうである。それはそのコンプレクスに關聯した感情の問題である。その話は患者の無意識の內の或る神經過敏の部分にぶつかつたのである。さう證明されるのである。この患者は軍事上の事に關しては何時もさうであるが、彼は、長年の兵役生活をして軍人時代の話をいつも聞かせて吳れた父と、無意識に同一視したのである。そこへ偶然にも斯うい事が起つた。（偶然といふものは、恰度言葉づかひが冗談を言ふのに役立つやうに、徵候形成に役立つものである。）それは彼の父の小さな冒險が、此の大尉の要求と共通した重要要素をもつてゐたといふ事である。といふのは彼の父は、下士官といふ資格で少額の金の管理をしてゐた事があつた。その金を或る時カルタ遊びで費つてしまつた。（斯く、彼は Spielratte (二)であつた。）友達の一人がその金を立替へてくれなかつたなら、父は隨分と容易ならぬ立場に陷らねばならなかつたのである。父は軍隊を去つてから裕福になつた時、彼の友に金を返さうとして、その友が困つてゐはしまいかと探しまはつたが、その友の行方は知れなかつた。此の患者は父がその金を返せたかどうかに就いては、はつきり覺えてゐない。彼は父の若い時の此の罪惡を思ひ起すのが苦痛だつた。何故なら、表面的には兎

も角として無意識の中には父の性質に對する憎惡非難が充ちてゐたからだ。大尉が、『3.80クラウンをA中尉に返濟せよ』といつた言葉は、彼の耳には此の父の返濟してゐない借金の事を言つたかと思はれる樣にひゞいたのである。

【註】（一）文字上から云へば、『遊ぶ・鼠』であるが、獨逸語では『賭事をする者』といふ意味の慣用語。

併し、Zの郵便局で若い婦人が自ら彼に就て稱讃的の言語を云つて（二）、その小包の料金を立換へて吳れたといふ報知を受けた時、彼は又全く別の方面で彼の父の事を尙更强く『同一視』したのであつた。分析の途中で彼は或る新しい報告をもたらした。それは、その郵便局のある小さい町の宿屋に、美しい娘がゐたことである。この娘は此の若い士官にとつて確かに勵ましであつたにちがひない。だから彼は演習が終つたら又この町に歸つて來て、仕合せにも彼女に會へればいゝなと思つてゐた。併し、郵便局にも若い婦人の競爭者がゐるのだ。父の結婚當時の話しの通りに、彼も自分の軍隊生活が終つたらこの二人の內どちらを選ばうかと躊躇した。吾々は彼がヴィーンに行かうか、又は郵便局のある所に歸らうかと考へた不思議な不決心や、及び彼が現に旅行をしてゐながらも歸らうかといふ誘惑が絕えずあつた事（九十三頁參照）等が、吾々が最初に考へたやうに無意味なものでない事が、是に於て直ちに解るのである。彼の意識的精神には、郵便局の所在地Zから引張られてゐる引力は、A

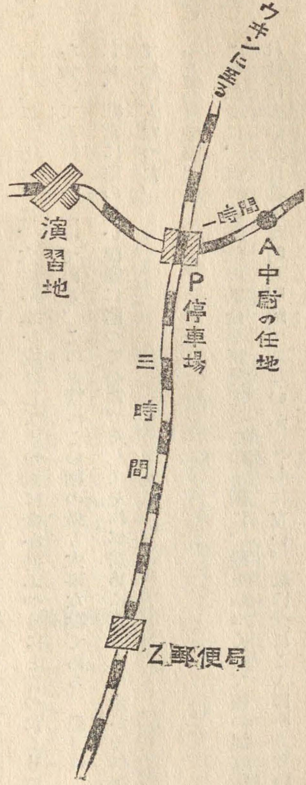
中尉に會つて彼をうながしてゐる誓を果す必要からだといふ事で說明する事が出來る。併し本當は、彼を引付けたものは郵便局の若い婦人であつて、中尉はその同じ所に住んで軍事郵便の職に務めてゐた故、單に彼女の代用物の役をなしてゐたのである。そして後に患者が、郵便局に勤務してゐるのはA中尉ではなくてB中尉だといふ事を聞いた時、患者はB中尉までも同じ樣にその結合にまき入れてしまつた。彼はその時無我夢中(二)になつて、二人の士官に連續して、非常に親切な二人の娘の間に感じてゐた躊躇の感を再生する事が出來た(三)。

【註】(一) 忘れてはならぬ事は、大尉が思ひ違ひしてA中尉に金を拂ふやうにと言つたより以前に、彼は此の事を知つてゐたといふ事である。この事情がこの話の最も大事な點である。患者はこれを隱蔽してゐたため、非常に望のない混亂に陷つてゐた。そしてそれが爲めに暫らくは余がそれ全體の意味を考へ出す妨げとなつた。

(二) 一九九頁參照。

(三) この患者は、彼の鼻眼鏡の料金を再拂するこの小話に、最上をつくして彼の混亂狀態を披瀝した。それ故に多分余自身の說明も明瞭ではないかもしれない。故に余はこゝに小さな地圖を描いて、ストラッヘイ夫婦が演習後の位置を明らかにした圖面を示さう。余の通譯者がかういふ事を言つたが、それは正當な事だらう。それは、A中尉は郵便局の所在地Zに以前住んでゐてその軍事郵便局を管理してゐた。併し最後の二三日間はその職をB中尉にゆづつて、他の村に轉ぜられたといふ事である。こ

れが明瞭に分つてゐないと、此の患者の態度は依然として不明になつてしまふ。この殘酷な大尉はこの轉任を知らなかつた。それで料金はA中尉に拂はればならぬと云つた理由が分るのである。



大尉の鼠の物語りによつて生じたる結果を說明するに當り、吾々は分析の過程をもつと委しく辿らねばならぬ。患者は先づ初めに非常に澤山な聯結的材料を提供した。併しそれは、彼の强迫症の機構の說明には何の助けにもならなかつた。鼠に依つて作られた刑罰の觀念は、患者の多くの本能を刺戟したのである。そして患者の追憶の全部を呼び起したのであつた。それ故大尉が鼠の話しをした時から、金を拂ふやうに賴んだ時までの短い期間中に、鼠は一聯の表徵的の意味となつた。そしてその次

の期間中には新しい意味が絶えずそれに加へられて行つた。余は此の事全部に就ては大變不完全な説明しか出來ないと白狀せねばならぬ。鼠の刑罰が他の何物にも增して攪亂したものは、患者の肛門性感であつた。これは患者の幼年時代に於て非常に重要なる役割を演じたもので、蟲といふものから絕えず刺戟をうけて多年肛門性感の活動性を保持してゐたのであつた。さうしてゐる間に鼠といふことは『金(かね)』といふ意味を持つやうになつた(一)。患者は、raten(月賦拂)といふ聯想を有する Ratten(鼠)といふ字を再び考へて、これに關する症狀を示した。

患者は彼の强迫的譫妄狀態に於いて、自身で一定のねずみの通貨を作つたのだ。例へば余が或る質問に答へて、彼に一時間の診察費を告げた時に彼は獨言を言つた。(それはその後六ヶ月經てから余は知つた。)『そんなに澤山のフロリン、そんなに澤山の鼠』と。彼は父の遺產のまはりに段々少しづつ集つて來た金の興味の全コムプレクスを此の言葉に譯したのだ。そのわけは、その問題に聯結してゐた彼の總ての觀念は、Raten から Ratten といふ言葉の橋によつて彼の强迫生活に持ち運ばれ、彼の無意識に征服されたのである。更に大尉が彼に小包料金の支拂を賴んだ事は、彼の父が賭事をして借りた負債につゞいてゐる所の Spielratten といふ語呂的の橋によつて、鼠の金(かね)といふ意を强めたのである。

【註】（一）『性格と肛門性感』フロイド文集（一九〇八年）參照。

併し患者は鼠が危險な傳染病の運搬者だといふ事は知り拔いてゐた。それゆゑ彼は鼠を彼の黴毒傳染に對する恐怖の表徵とした。（軍隊に於ては尤もな事である。）此の恐怖は、患者が父の軍隊生活中に送つた生活樣式について抱いた總べての疑を隱してしまつた。又他の意味では Penis それ自身が黴毒傳染病の運搬者である。それで彼は鼠を男の性器と考へる事が出來た。斯く認めるのに、まだもう一つの理由がある。それは、Penis（特に小兒の）は容易に蟲に擬せられ得る。大尉の話は、恰度彼が子供の時に彼の肛門の中に大きな丸い蟲がゐたやうに、誰人かの肛門內に鼠がもぐり込むといふ話であつた。かく二度迄も鼠が Penis の意味となつてゐる譯は、肛門性感があつたからである。又さう考へないでも、鼠は不潔な動物で、排泄物を食べたり、下水の中に住んだりしてゐる(一)。此の新しい意味によつて鼠譫妄狀態の範圍が如何に大きく開展し得るかといふ事は、もはや說明する必要はないだらう。何故なら、『あんなに澤山の鼠、あんなに澤山のフロリン』といつた言葉は、彼が特に嫌つてゐた婦人職業の優れた特性描寫である。又他方に於て、大尉の話中の鼠に代ふるに Penis を持ち出した事は、患者が父と自分の愛人とを關聯して考へるに到つた時、彼に取つて特に嫌惡感を起さしめずには置かなかつたところの肛門性交の狀態から生じた事であるといふ事は、決して關係のない事ではな

い。大尉が彼に返金を賴んだ後で、患者の精神中に形成された強迫感の中に、これと同じ狀態が再現したといふことを考へる時、吾々は南方スラーヴに於て使用されてゐる『或る呪ひ』を、餘儀なく思ひ起すであらう(二)。此の全材料と、更により多くの材料とは、隱蔽された記憶『結婚』といふものゝ背後にある鼠論の織物の中に織込まれてゐるのである。

【註】(一) 若しも讀者が神經症者の精神中には、斯る想像の躍動がありうるといふ事に反對し度いと思ふなら、余は讀者に藝術家も亦屢々これと同樣な氣まぐれな空想に更けるものだといふ事を思ひ起させる事が出來よう。例へば、Le Poitevin の Diableries érotiques の如き。

(二) 此等の呪ひの正確な言葉はクラウス F. S. Krauss の編輯による定期刊行物 Anthropophyteia に揭載されてゐる。

此の話をした患者自身の話し方により、またその話を余に聞かせた時の顏の表情によつて現はされた通りに、此の鼠刑罰の話は彼の早期に抑制されたる利己的及び性的殘酷の衝動を猛然として燃え上らせたのである。併しこれまでの豐富な材料も強迫觀念の意味を說明する迄には至らなかつた。併し或る日イブセンの『小アイヨルフ』Little Eyolf の鼠婆さんが分析に上り、次の如き推定をされるに至つた。卽ち彼の強迫的譫妄狀態によつて採られた多くの形のうちで、鼠は猶もう一つの意味を有してゐる。卽ち『子供』といふ意味を有してゐるといふ事である(一)。この新意味の源を考究して、余は直

ちに最初の、又最も重大な根原の或物に思ひ到つた。嘗つて患者が父の墓参に行つた時、一つの大きな動物が（それを彼は鼠と思つた）父の墓の上を馳けて通つたのを見た(二)。彼はその動物が實際に父の墓の中から出て來て、恰もその時まで父の死骸をむさぼつてゐた所だつたと思つた。鼠といふ觀念は、それが鋭い齒を有してゐてその齒で嚙つたり咬んだりするといふ事實と離すべからざる關係がある(三)。併し鼠は鋭い齒を有し、慾張りで、汚なくて、それで罰せられないでゐるのではない。必ず罰を受けてゐる。人から殘酷にいぢめられ、無慈悲にも殺されてゐる。患者は度々それを見て怖しく思つた事がある。患者は度々哀れな物に對して憐憫の情をもつた。併し患者は自分自身がその樣な見苦しい汚ない小さなもので、怒つた時には人に嚙みつくので、その爲めに隨分とひどく罰せられた事もあつた。（一七七頁參照）彼は本當に鼠に生寫しであると言へる。大尉が彼に話しをしてきかせたのは、運命が彼を聯想的試練に會はせたやうなものである。運命はコンプレクスを刺戟する言葉を呼び出し、彼はそれに强迫觀念を以て反動したのである。

【註】（一）イプセンの鼠婆さんは、鼠を最初に水の中におびき入れ、二度目には同じ樣にして町の子供を決して家へかへらせぬ樣に誘ひ出したかのパイド、パイパーの傳説から、たしかに引出されたものである。『小アイヨルフ』も亦この樣にして、鼠婆さんの魔力のために水の中に身を投げたのである。傳説に

は、鼠は概して嫌惡すべき動物として表はれるよりも、むしろ何だか薄氣味わるい動物として現れてゐる。卽ち『地下の動物』とも言ひ得べきものとして表はれるものである。そして、死人の靈を表はすのが常であつた。

（二）これは確かに鼬でゐつた。ヴキーンの主なる墓地（中央墓地）には隨分鼬が居る。

（三）メフイストフエレスが魔力ゐるペンタグラム（☆）で守られてゐる扉を通り度いと思つた時に言つた言葉を對照せよ。

『此の閾の魔力を破つて通るには、鼠の齒が必要だ。

（彼はそこでねずみを呪ひ呼び出す。）

もう一咬み。それでよい。』

（ゲーテのフアウスト、第一部）

（四）『脹れたねずみに、

彼は自分の生うつしの姿を見る。』

（ゲーテのフアウスト、第一部）

Auerbach の Cellar の場面。

彼の最初の最も重要な經驗に依れば、鼠は子供らである。恰度此の時に彼は一片の報告をもつて來た。彼は非常に長い間その報告の文脈とは遠ざかつてゐたが、今になつてその報告は彼が子供に感ぜ

ずにはゐられない興味を十分に說明してゐる。彼が長年間崇敬してゐた婦人で、まだ結婚しようといふ決心はつかないでゐたその人は、婦人科的手術で兩卵巢を除去され、それで子供は出來ないと宣告されてゐたのである。彼は子供が大變好きなので、この理由で、實際躊躇してゐたのであつた。是に於て、初めて彼の强迫觀念が形成された過程の解釋し難い部分を了解する事が出來るやうになつたのである。幼兒の性についての學說と表象主義の助けとを借りて（夢の解釋から學ぶ事が出來る如き）全事實は釋明され、意味をつけられるのである。午後の休憩中に（この時彼は鼻眼鏡を亡くした）大尉が患者に鼠刑罰の事を話した時、患者は最初にこの話の殘酷で淫蕩的なのにびつくりした。併し直ぐ後で、彼が誰かを嚙んだといふ、彼の幼年時代の光景にそれが關聯されて思ひ浮んで來た。此の樣な刑罰を防ぐ事の出來た大尉を、彼は自分の父を以て置き換へた。斯くして、彼は元の場合に殘酷なる父に對して爆發した激怒を、再び爆發させて大尉自身の上に注いだのである。彼の意識の中にほんの一瞬間表はれた觀念、即ち彼の愛する誰人かの身にこれと同じ樣な事が起るかも知れぬといふ考へは、恐らくはその物語りの語り手に向けられたる、併しこの場合では語り手と置換られた彼の父に向けられたる『汝も同樣の事を受けねばならぬ』といふ願望と解釋されるであらう。一日半經つて後(一)、大尉が小包を彼に渡し、A中尉に 3.80 クラウンを拂ふやうに賴んだ時、患者はすでに彼の殘

酷な目上の者が間違ひをしてゐるのであつて、負債を負うてゐる人は、郵便局の若い婦人のみだと氣附いてゐたのである。故に、その時、彼の心には、容易く何か嘲弄的の答へが浮んだかも知れなかつた。例へば『へえ、さうですかな』とか、『君のお祖母さんに拂ひなさい』とか、『はい必ずお拂ひ致します』とか、何の强迫力にも從はないやうな答へをするかもしれなかつた。併し左樣ではなくて、彼の父性コムプレクスと及び彼の幼年時代のその光景の記憶とから、次のやうな答へが彼の心の中には作られたのである。『はい私の父か、又はあの婦人かに子供が出來たならA中尉にお拂ひします』とか『私の父やあの婦人に子供が出來る事と同じ確かさで、私はA中尉にお拂ひしませう』等といふ答である。簡單に言へば、嘲笑的誓言が、決して果されない所の馬鹿げた條件と並べられたのである(二)。

【註】(一) 彼は最初に、鼻眼鏡が着いたのはその夕方ではなかつたといつた。彼が註文した鼻眼鏡が同じ日に着くなどといふことは有り得ない。患者は此の期間を回顧して、短縮したのであつた。なぜなら、その期間は彼の決定的精神聯絡が開始された時で、抑壓されてゐたあの挿話、即ち士官から郵便局の若い婦人の親しみ易い態度を聞いたその挿話が生じた時なのであつた。

(二) 此の荒唐無稽なことは、恰も夢に於けるが如く强迫的思考が嘲弄的の言葉となつたのである。フロイドの Die Traumdeutung (1900) 七章二九五頁參照。

併しながら是に於て、今や犯罪がなされたのである。卽ち彼は最も愛すべき二人の人、彼の父と彼

の婦人とを辱しめたのである。この行爲には罰が要求された。その刑罰は、彼が果す事の出來ない或る誓ひで、又彼の目上の人の惡氣から出た要求に對する文字通りの服從をなすといふ、或る誓ひに彼自身を縛らねばならぬ事なのであつた。その誓ひは次の如くである。『今度は汝は本當にその金をA中尉に拂はねばならぬ』。この强迫的服從によつて、彼は大尉の願ひ（A中尉に支拂へといふ）は誤まれる前提に基づいてゐるといふ良き理解を抑へつけてしまつた。『さうだ、汝は汝の父の代理者が要求した通りに、その金をAに返濟しなければならぬ』と。このやうに王様も亦誤られてはいけない。若し王様が彼の臣下の一人を間違つた稱號で呼んだなら、その臣はその後ずつとその間違つた稱號をつけてゐるものである。

之等の事柄をほんの朧げながらも理解することが患者の意識には出來かけて來た。併し大尉の命令に對する反抗やその反抗が反對なものに突然變つた事などは、兩方とも彼の意識内に表はれてゐた。最初には彼はその金を拂ふまい。若し拂へばあれが（とは鼠刑罰の事）起るぞといふ考へが起つた。それから次には彼の反抗の罰として、此の考へがその反對の誓ひに變更されてきたのであつた。

更に進んで、吾々は此の患者の大强迫觀念の形式が起るに就いての一般的條件を描いてみよう。彼のリビドーは、長期の節制や又若い士官が婦人の仲間に入るといつも受ける親しい歡迎などによつて

餘程增加されてゐた。そのうへ彼が演習に出發した時には、彼と彼の婦人との間に或る冷やかさがあつた。彼のリビドの强烈になつた事は、從つて父の權威に對して行つた往時の爭鬪を、今又新たに爲さむとする傾向を彼に與へたのである。それがため彼は他の婦人たちと性行爲をなさむといふ考へを敢へて持つやうになつて來た。父に對する記憶は不忠實にも段々弱くなり、かの婦人に對する價値は段々疑はれて來た。その樣な氣分になつて彼はこの二人をはづかしめるやうになつたのである。そしてその爲めに自分を罰したのである。この時に彼は昔の模範(モデル)に從つたのだ。演習が終つて彼がヴィーンに旅行しようか、それとも止つてゐて彼の誓ひを果さうかと迷つてゐた時、彼は極く初まりから心を亂されてゐた二つの爭鬪を、一つの繪で表現したのである。二つの爭鬪とは、彼が父に從順であらうかどうしようか、又彼の愛する婦人に對して忠實であらうかどうしようかといふ事である(二)

【註】(一) 嘗て彼の父に對して服從することが、婦人を棄てる事と一致した事があつた。それをこゝで注目する事は興味無い事ではなからう。もしも彼が止まつてAに金を返したとしたら、彼は父に償ひをなしたであらう。併し同時に、もつと美しい他の婦人の方を好んで、彼は婦人を棄てたであつたらう。此の爭鬪に於て彼の婦人は、たしかに患者の正常な良き思慮の助けによつて、勝利を得たのである。

余は刑罰の註釋について一言加へたい。その註釋とは、『他の方面より考へれば鼠刑罰は彼等の兩方

共に行はれるであらう』といふ意味である。それは余が他處で論じた二つの小兒の性論の影響に根ざしてゐる。この論の內の一つは、赤坊は肛門より出て來るといふ說と、もう一つのは第一の論から論理的に續いてくるもので、男も女と同樣に子供を生む事が出來るといふのである。夢の註釋に用ひる專門的規則に從へば、直腸から出て來るといふ考へは、その反對の直腸に這ひ込む（恰度鼠刑罰に於けるが如く）といふ考へに相當し、又反對に、直腸に這ひ込むといふのは直腸から出てくるといふのと一致するのである。

【註】（一）『小兒の性說に就いて』（一九〇八年）文集二卷參照。

吾々は此の場合に示された斯かる烈しい强迫觀念が、もつと簡單な方法で、又何か他の方法で取り去られるだらうと考へるのは正當ではない。吾々が以上述べた解決に到達した時、患者の鼠譫妄狀態は消失したのである。

II 理論

(a) 强迫形成の或る一般的特性(一)

一八九六年に於て、余は强迫觀念を、抑制の下より變形して再發したる叱責、即ち小兒期に於て快感を以て行はれた性的行爲に必ず伴つて來たその叱責であると定義を下した(二)。此の定義は、その構成的要素には異議なきものであるが、形式的基礎に於ては批判される餘地があるかと考へられる。此の定義は、餘りにも統一といふことを目標としすぎた。そしてその標本として、强迫神經症患者自身の常習言行を取つたのだ。その時この强迫神經症患者は無際限を好む特性によつて强迫觀念の名の下に非常に多種多樣の心理形成を持つてゐたのである(三)。それは實際『强迫的考へ』と言つた方がもつと正確だらう。强迫構成物は明瞭にしてみれば精神の働きの何れの種類のものにも相當すると云へるのだ。それは判然と慾望、誘惑、衝動、回想、疑惑、命令、禁止などに種類別する事が出來る。患者は誰でも此等の區別を分らせまいやうにと努め、これらの精神の働きから感情的指標を取り去つて、その殘りを單に强迫觀念として見なさうとしてゐる。余が今取扱つて居る患者は、此の型の行爲を示

してゐる。それは彼が初めの頃に、彼の一慾望を單なる『一聯の思想』の標準に引下げようとした時である。(一〇四頁參照)

【註】(一)此の章及次の章に取扱はれてゐる問題中の或る點は、强迫神經症の文集の中で既に述べた。レーウェンフェルド Löwenfeld の究め盡せる研究 Die psychischen Zwangserscheinungen 1904. からも拔萃する事が出來る。

(二)『擁護神經精神症の再度の研究』(一八九六)文集一卷一六二頁參照。

(三)余の定義に於ける此の缺陷は、本書中に於ても幾分か訂正されてゐる。卽ち次の文句が揭げられてゐる。『復活された記憶と、その上に建てられた自責とは、不變のまゝで意識に表はれる事は決して無い。意識に表はれ、意識生活に於て病原的記憶に代はるところの强迫觀念と强迫感情とは、抑壓された觀念と抑壓する觀念との間の互讓的(和解的)形成物である。』卽ち定義に於ては『變形して』といふことに特に力を置かればならないのである。

更に斷つて置かねばならぬ事は、强迫的考への現象學でさへも、今までは未だ十分な注意を拂はれて居なかつた事である。患者が彼の心中に無理に進入してきた强迫觀念に反抗して爲し續けた第二次的爭鬪中に於て、心理的構成物は特にある名を附せらるゝに相應した表現をなしたのである。(患者が演習の歸りに心を占領してゐた連續的思想は其の一例である。)これらの思想は、强迫的考へに反抗し

て起る所の、純粹に合理的な思慮ではないのであつて、實際二種の考への間種（混成物）である。これらの思想は、爭つてゐる所の强迫の前提の確かなものを受け入れ、斯くして理性といふ武器を使ひ乍ら、病理的思想の臺の上に建てられてゆくのである。斯かる構成物は譫妄狀態といふ名を與へられるに相應してゐると思ふ。この區別を明瞭にする爲め、余は一例を擧げよう。この例は、患者の症狀記錄中の適當な文中に入れて差支へないものである。余は旣に患者が試驗勉强をしてゐた時、彼が爲した狂氣じみた行爲、卽ち夜更けまで勉强を爲した後、彼がいつも玄關の扉を開けて、父の幽靈を迎へようとし、それから彼の性器を鏡に映して眺めたといふことを記述した。（一七五頁）彼は『若しも父がまだ生きてゐたとしたら、この事全部を見て何と言ふであらうか』と自分に問うて、自分を正氣に歸らしめようと努めた。併し此の論は、此の合理的な形に促進せられた以上は何の效果もなかつた。『若しも彼がまたこんな無意味な事をする樣になつたなら、次の世に於て彼の父に何か禍が起るだらう』といふ譫妄的脅威に、彼が幽靈の觀念を變へるまでは幽靈は除かれないものである。

第一と第二の防禦的爭鬪の區別は確かに確固たる基礎を有してゐる。併し患者自身が自分自身の强迫觀念の用語を知らないといふ事を吾々が發見する時、吾々はその區別の價値が、思ひがけなくも減少せる事を發見するのである。これは不合理の樣に思はるゝかも知れぬが、しかし、完全な常識であ

る。精神分析の經過中に勇氣を得るのは、患者のみではなくて病氣そのものも同樣に然うである。病症は大膽になつて行つて、以前よりももつと明瞭に物を言ふやうになる。比喩をもつて言へば、患者は今まで自分自身の病的產物には恐れて眼をそらして居たのであつたが、今度はそれに注意を向けるやうになり、それに對してもつと明瞭なもつと細密な觀察をなすやうになるのである(二)。

【註】(一) 多くの患者は强迫觀念の內容を云ひ表す事が全然出來ない位に注意を轉向させる。また幾度もく繰返して爲してゐ乍ら、その强迫的行動を言ひ述べる事が出來ない位に、彼等の注意を轉向するものである。

この他、强迫神經症形成に對するもつと明確なる知識を得るには二つの特別なる方法がある。第一は、經驗に依つて分る。卽ち强迫命令(又は何にても)は、覺醒中はたゞ恰も切斷された電文の如くに切り取られたり歪められたりした形でのみ知られてゐるが、その實際の原文は夢の中で明らかに表はれるといふ事である。斯やうな原文は夢の中では談話の形で表はれる。それ故夢の中の談話は覺醒中に於ける談話から來たものだといふ規則に一つの例外を作るのである(二)。第二には、病歷例の分析試驗を進めて行く中には、數多の强迫が相續いて起つても、それは屢々(その强迫の表現は同一ではなくても)究極は同じ一つのものであるといふ確信を得る事が出來る樣になるのである。强迫は最初

に表はれた場合には振ひ落す事も出來ようが、それが二度目には歪んだ形になつて戻つて來るので氣が附かなくなる。そして多分その防禦的爭鬪に於ては以前よりも遙かに有力に强迫そのものを保持する事が出來るやうにならう。それは確かにその强迫が變形して表はれたといふ理由に依る。併し最初に表はれた形は正しい形であつて、屢々その意味をかなり明らかに表はすものである。吾々が非常な苦心のもとに意味の察知し得ざる强迫觀念を明瞭に解釋した時、患者は余等の構成した考へ、慾望、又は誘惑と恰度同じやうなものが、自分の强迫觀念の起るより以前に實際に起つて、併しそれは存續しなかつたといふ事を余等に語る事が屢々あつたのである。吾々が、現在の患者の病歴から此の例を擧げるとすれば、非常に長時間に亙つて枝葉の問題に立ち入ることになるのである。

【註】（一）Freud, Die Traumdeutung(1900) 七版二八三頁を參照。

それ故に公然と强迫觀念として述べられてゐる所のものは、その最初の强迫言行の歪みに於て、最初の防禦的爭鬪の跡が表現されてゐるものだ。强迫の歪みは强迫を長續きさせる。何故なら意識的考へがその歪みのためにその强迫を正解しないからである。恰度それは夢と同じである。何故なら、夢も亦、互讓と歪みとの產物であり、眼醒めた時の考へに依つて誤解されるからである。

此の意識の誤解は、强迫觀念その物に關して働くのみならず、第二次的防禦的爭鬪、例へば防禦的

定則の如きものに闘しても亦働いてゐるものである。此の適例を二つばかり示さう。吾々の患者は、いつも防禦的定則として、aber（けれども）といふ言葉を極めて早口で發音し、それと同時に否認の手振りを示してゐた。或る時此の患者は余に話した。此の定則は近頃變つて、もう aber とは發音しないで abér といふのだといつた。此の新方法の理由をたづねた所、彼は斯う宣言した。第二音綴の無音の e は、彼に取つては非常に恐ろしい外來の及び反對要素の侵入して來る感があつて、何か不安の感をあたへられる。故に彼は、e にアクセントをつける様にしたのだと云つた。併しこの說明は强迫神經症型の優秀な見本ではあるが、實際は單に理窟附けに過ぎないものである。本當は abér といふのは、同じ發音の Abwéhr（防禦）といふ語に接近してゐるのである。Abwéhr といふ語は、患者が吾々の精神分析の理論的議論中で學んだ言葉である。又ある時は患者は余に如何なる惡魔に對しても有效な省略語である所の主な魔法語について話をした。彼は祈禱する時の最も有力な慈悲ある言葉の頭文字を寄せ集めて、その語を作つたのであつた。そしてその終りにアーメン amen と附け足したのであつた。余は、その言葉そのものをこゝに出す事は出來ない。その理由は、後で直ぐに明瞭に解るであらう。何故なら患者がそれを余に話した時に、余はその語が彼の婦人の名前のアナグラムであるといふ事を感知せずには居られなかつた。即ち彼女の名前には S といふ字が入つてゐた。それでその

Sの字を一番後に、卽ちアーメン amen の前につけた。さうすると彼は自分の Samen（精液）を愛してゐる婦人につけたのである。卽ち想像でもつて彼は婦人を相手に自瀆したのである。併し彼自身はこの非常に明瞭な關聯を少しも氣付かなかつた。彼の防禦力は、抑壓されてゐた力に欺かれたのである。この事も亦、防避されようとしてゐる事は、結局はそれを防避するために使ふ方法そのもの丶中に、常に表示されるものだといふ好き一例である。

强迫思考は歪みを受けたものであつて、それは恰度夢の思考が夢の顯著な內容となる前に蒙るのと同樣の歪みであるといふ事は、旣に述べた通りである。それ故に此の歪みの技巧は吾々に取つて興味深いものであらう。吾々が解釋し明瞭にした幾連續かの强迫によつて、强迫の色々の樣式を發表しようとも、妨害する物は何物もないのである。併し此の例を公表する事については、或る條件に支配されてゐる爲め、今は極く僅かの標本をしか載せる事が出來ない。この患者の强迫の中で、鼠の大觀念の如く構成の複雜な、又解釋に困難なものはない。その他の强迫に於ては非常に簡單な技巧が使はれてゐる。卽ち省略又は略辭に依つた歪みであつて、此の技巧は特に冗談の場合に適用され得るものだ。併し余の現在の患者に於ては、此の技巧は事柄が理解されるのを防ぐ爲めに使用されて、それに大變に役に立つた働きをなした。

例へば、患者の最も古くて最も得意な强迫は（その强迫は諫言又は警戒に關したもの）次の樣であつた。『もしも、自分が此の婦人と結婚したならば自分の父に何か不幸が起るだらう（次の世に於て。）』といふ强迫である。この言葉の中に、吾々は今までは飛び拔かしてゐたが、分析に依つて吾々には知られてゐた中間の文句を挿入したなら、次の如き一聯の思考を得るだらう。『若し父が生きてゐたなら、私のこの婦人と結婚しようといふ意圖に對して、恰度私の幼年時代にあつた一光景の時の如く、父は非常に怒る事だらう。さうすれば私も亦再び父に對して憤り、出來得る限りの禍ひを父の上に望むだらう。有り難い事には、私の慾望の全能に依つて、その禍ひは確かに父の上に來るだらう』と。

こゝに又一例がある。その解決は省略語を充塡して出來たのである。これも警戒又は禁制的の性質のものであつた。患者には愛らしい一人の姪があつて、患者はその子が大好きであつた。或日こんな考へが彼に起つた。『若しも汝が性交にふけるなら、エルラの身に何事か起るだらう。』それは卽ちエルラ（姪の名）は死ぬだらうといふ事だつた。この省略語を補つたなら次の事になるであらう。『汝は假令知らぬ人とでも性交をするならば、汝は汝の結婚生活に於てはいつでも子供を得る事は出來ない（彼の婦人が不姙だから）といふ事を思ひ出さずにはゐられないだらう。これは汝を非常に悲しませる。そのために、汝は小さいエルラを見るたびに汝の姉を嫉妬するやうになる。そして汝は、エルラを姉

に與へるのを嫌ふ。この嫉妬的衝動は必ずこの子供の死を來すことになるであらう(二)。

【註】(一) 余の著書『機智』Der witz(1905)(四版六三頁)の中の一例は、此の省略技巧が冗談をいふ時に使はれてゐる。その方法を讀者は思ひ起すだらう。『ヴヰーンに機智のうまい喧嘩好きの新聞記者が居つた。非常に辛辣な罵詈をするので、その爲めに彼の攻擊を受けた人々から、度々酷い目に逢はされた事があつた。或る時、彼のいつもの反對者の一人が何か新たに惡行をなして議論されて居た時、誰かゞ斯う云つた。『もしXが之をきいたら、彼はまたきつと耳を撲たれるだらう』と。一寸聞くと馬鹿げたこの語も、若し吾々がこの二句の間に斯ういふ言葉を入れたら變ではなくなる。即ち『聞いたら』の後に『彼は必ずその人の事について酷評を下すだらう。だから』といふ文句を入れるのである。此の省略的の冗談は、形の上から見ても又その內容の上から見ても、同じく本文に引用した最初の例と同樣であると氣付くであらう。

略辭に依る歪みの技巧は、强迫神經症の代表的なものであるらしい。余は他の患者の强迫思考の中でも、同樣にこれに出會つた。その一例は極めて明らかな例であるが、構成上に於ては鼠觀念と同じであるために非常に興味があつた。これは疑惑の例であつて、主として强迫行爲に苦しんでゐた婦人である。この婦人はニューレンベルグで夫と共に散步に出掛け、ある店に入つて子供の物を色々と買物した。その買物中に櫛が一つあつた。夫は餘り買物が長くかゝるので、途中の骨董屋に或る貨幣が

あつたのに氣がついてゐたので、それを買ひに行つてゐるからと妻君に告げた。そして買物をすませたら、此處へ來るからと附足した。併しその婦人には、彼が隨分長い時間買物に行つて居た樣に思はれた。それで彼が歸つて來た時、婦人は何處に行つて居たのかと聞いた。彼は『なに、先刻話した骨董屋に行つて居たのだ』と答へた。これと同時に、婦人は自分が今子供の爲めに買つた櫛を、實際いつも持つてゐたのだか何うだつたかといふ苦しい疑惑に襲はれた。彼女には勿論こんな疑問に對して簡單な精神的の連鎖などを發見する事は出來なかつた。たゞ此の疑ひは何かと置換へられて感じたものだらうと見做して、無意識の思考を完全な連鎖とするには、次の如くに再構成するより他はないのであつた。卽ち、『若し貴男がその骨董屋に居たゞけなら、そして私がそれを本當に信じようとするなら、私はたつた先刻買つたばかりのこの櫛が、今まで何年も私の持ち物であつたといふ事も、同樣に信じてもよいのだ』と。こゝでもつて此の婦人は、嘲弄的な皮肉な對比物を持ち出したのである。それは恰度余の患者が『これらの二人（父と婦人）が子供をもつ事が確かなら、それと同じ位確かに自分はAに金を返さう』と考へたのと同樣である。此の婦人の場合に於ては、その疑は彼女の無意識的嫉妬に因つてゐる。彼女は自分の夫が骨董屋に行つたといふ期間を、戀愛的な訪問に過したものと考へるやうになつたのである。

余は此の紙上で、强迫思考の心理的意義を論じようとはしないが、斯かる論はその結果に於て非常に價値のあるものである。そして猶ヒステリーや催眠狀態の現象の研究よりも以上に、意識及無意識の性質について吾々の觀念を明かに爲すものである。哲學者や心理學者は、無意識に就ての立派なる理論的見解を、又聞き知識を基礎とし又は彼等自身の在來の定義から考へて發展させてゆくのであるが、彼等が先づ强迫思考の現象の第一步の研究に依て得らるゝ如き確かな印象に從つて行くならば、それは最も望ましい事なのである。若しさうする事が、彼等の從來の仕事の方法よりも、左程骨の折れるものでないならば、吾々は彼等にそれを願ひ度いとまで思つてゐる。余はこゝでは附け加へて置くのは、たゞ强迫神經症に於ては、無意識的精神過程は、屢々純粹の歪められない形のまゝで意識内に侵入する事があるといふ事と、又その侵入は、思考の無意識的過程の如何なる段階に於ても起り得るもので、且つその侵入の際には、强迫觀念は大部分は非常に長い間に形成されたものと認められるといふ事である。分析者が患者の助けを借りて、强迫觀念が最初に起つた時日を發見しようとする時に、患者は分析の進行につれて益々遠い過去にその時日を置かねばならなくなり、絕えず强迫觀念が起つた最初の時日を、新しく〳〵見出すといふ驚くべき事情は、これによつて說明されるのである。

(b) 强迫神經症の或る心理的特性

現實、迷信、及び死に對する彼等の態度

此章に於て、余は强迫神經症の二三の精神的特性を扱ふ積りである。その特性は、それ自身は何等重要でないものゝ様に見えるが、それは更に重要なる理解に達する途上にあるのである。この特性は余の現在の患者に著しく表はれてゐる。併し余は、その特性が彼自身の個人的特性に歸す事の出來ないものではあるが、彼の無秩序には關係あるものである事を知つてゐる。そしてその特性は、他の强迫症患者に於ては、可成り代表的に出會へるものである事を知つてゐる。

余の患者は非常に迷信家であつた。しかし彼は高等の教育を受けて知識のある聰明な人であつたから、こんなつまらぬ事は何も信じないといふ事を、時々余に證明する事が出來たのであつた。斯く彼は迷信家であつたと同時に、又迷信家でない處もあつた。彼の態度は、無教育者の如き自分等の信仰と自分等とを同一物に感じてゐる迷信に比較してみると、明らかに差別があつた。彼は時々全く迷信に陥る事はあるけれど、彼の迷信は强迫的思考から起るものである事を理解してゐた様であつた。此の矛盾した、然かも動揺した態度の意味は、余が今から述べようとする假説の見解から考へたならば

最も容易く了解する事が出來る。患者が此の問題に就て虚心坦懷な態度を持つてゐたといふ事は實は本當の事ではなくて、患者はそれについて二つの別々な矛盾した確信をもつてゐるのが、實際なのだといふ事を假定するに余は躊躇しない。之等の二つの見解の間に於ける患者の動搖は、かなり明瞭に心中の擾亂に對する瞬時の態度から起るものであつた。之等の强迫の一つを打ち負かすと、直ぐ彼は優越感を以て彼の輕信を笑ふのであつた。そして彼の此の確固さを動かす如き事は何事も起らなかつた。併し彼がまだ明瞭にされてない他の一つの强迫、又はこれと同じものである所のもの、即ち抵抗に出逢つた時には、彼の此の輕信的信仰を支持するために不思議な合致が起るのであつた。

併し彼の迷信は敎育ある人の迷信であつた。金曜日を忌んだり、十三の數を恐れたりする樣なくだらぬ迷信は持たなかつた。たゞ彼は、豫告や豫言的の夢を信じた。彼は何故か解らぬけれど、恰度その時考へて居た人に出會ふ事が絕えずあつたし、長年忘れてゐて突然思ひ出した人から、恰度手紙をもらつたりする事があつた。これと同時に、彼は正直にも（否むしろ彼の公然たる信仰に忠實であつたのだ）不思議な豫告が、何の結果も齎らさなかつた例も忘れなかつた。例へば或る時、夏休みに他處に出掛けた時、彼はヴィーンに再び生きて歸る事はないだらうと、實際確かに感じたのであつた。彼はまた豫告の大多數は、特に個人的重要さをもつてゐない事を認めた。又彼が長い間思ひ出さなく

て、ほんの二三分前に思ひ出した知人に出逢つた時にも、彼自身とこの奇蹟的な出現者の間にはこれ以上何事も起らなかつた事を認めた。彼は生涯の重大なる事々は、すべて彼に何の豫告もなしに起つた事、及び例へば父の死なども不意に起つて全く彼を驚かした事等も、當然否認する事は出來なかつた。併しこの樣な論議も、彼の確信に於ける齟齬には何等の效力もなかつた。これらの論は單に彼の迷信の强迫性を證するに役立つのみで、その事は旣に彼の迷信が、彼の抵抗の增減に從つて生じたり又は消えたりする方法から推理されてゐた事である。

勿論余は彼のもつと遠い過去のすべての奇蹟的物語りの理論的說明をしようといふのではない。併し彼の治療期間に於て起つた同じやうな事に就て、余は彼自身が確かに此等の奇蹟の製造に與つてゐるといふ事を彼に證明してやる事が出來た。そして彼が使つた方法をも指示してやる事が出來た。終りになつて、此等の不思議な事をした小奇術的なわざを發見するために、患者は余に助力をしてくれた。豫告や豫感が眞實になつて現はれるといふ信仰を此の患者が持つに至つたに就ては、興味ある幼時の根原を余は發見したのである。それは彼の思ひ出によつて明らかに曝露された。幼少の折、何事か爲す豫定の場合、その時日が定まると度々患者の母は、『その日では私は出來ない。その日では私は臥床（ベッド）に寢なければならないだらう』といふのが常であつた。そして、實際其の日が來ると彼女は確か

に臥床に就いたのであつた。

患者は、彼の迷信の支柱となつてゐる此の種の經驗を見出す『必要』があつたといふ事は誰かである。且つ彼はさういふ理由で、吾々もよく出合つてゐるが日常生活に於ける『偶然の一致事』に沒頭し、その一致事の不足を彼の無意識の力で補つてゐたのである。余は多くの他の强迫症患者に於ても之と同樣の必要に出會つた事があつた。そして、それ以外のもつと多くの患者にもこの必要の存在がありはしないかと思つた。余は强迫神經症の心理的特性の見地から、これは容易く説明が出來ると思ふ。此の病氣に於ては既に説明した如く(一六四頁參照)、抑制は健忘に依つて行はれるのではなく、感情の撤退に依つてもたらさるゝもので、原因的の連接が分離する事で爲されるのである。これらの抑制されたる連結は、或る朧げなる形になつて存續する樣に見える。(余はこの形を他の處で眼內知覺に喩へた(一)。)そしてその連結は投出作用 Projektion の過程を取つて外部の世界に移される。そしてその外部世界に現はれる事によつて、意識から消されたといふ證據となるのである。

【註】(一) 日常生活の精神病理(一九〇五年)十版、二八七頁參照。

矢張り强迫神經症患者の有するもう一つの精神的必要で、ある點に於ては今擧げた患者に關係してゐるものは、彼等の生活の『不確實性の必要』即ち疑ひの必要である。此の特性を考究することは深

く本能の調査にまで達せねばならぬ。不確實といふものゝ創造は、神經症がその患者を現實から追ひ出し、世の中から離れさせようとして用ひる方法の一つであつて、總ての精神神經症的障碍の對象物の中の一つである。患者自身が確實さを避けて疑惑の中に居る樣にする爲めに、患者はどの樣な努力をなすかは明瞭過ぎる事である。或る患者は此の傾向を柱時計や懷中時計に對する嫌惡といふ事で明らかに示した。それは時計は少くとも一日の時間を確實に示すからだ。且つ又患者がこの樣な疑惑を拂ふやうな道具（例へば時計の如き）を無效にするために、無意識的策略を用ふるといふ傾向を示した。余の現在の患者は、彼の爭鬪を決定するのに役立つやうな事實の知識は、如何なるものでも回避するといふ事に非常な才能を發揮してゐる。だからこの患者は彼の結婚問題に最も關係の深い彼の婦人に就ての事柄には無智であつた。彼は表向きは誰が彼女に手術を行つたか、その手術は片方であつたか兩方であつたかといふ事は知らなかつた。彼は忘れた物を思ひ出し、見逃した事を見出すやうに強ひられねばならなかつた。

強迫神經症者が感ずる『不確實』と『疑惑』とに對する偏愛は、すべての人類が不確實な意見をもつてゐる問題や、及び吾々の知識も判斷も必然的に疑ひに向けられるやうな問題の方へとわざ〳〵選擇して彼等の考へを導いて行くのである。此の種類の問題の主なるものは、父たる事、壽命の長さ、

死後の生及び記憶である。記憶に就いては、吾々は記憶の確實さに對する何等の證明なしにでも、それを信ずる習慣をもつてゐる(一)。

【註】(一) リヒテンベルグ Lichtenberg 曰く。『天文學者が月に住む者の有るか無いかを知つてゐるその確實さは、自分の父が誰であるかを知つてゐるのと同じ程度の確實さであつて、彼の母は誰であるかを知つてゐる程の正確さではない』と。文明は非常に進步し、人々は彼等の推理を彼等の判斷の證明と同じ標準に置き、婦人家長制度より一步ふみ出して男子家長制度に到る事に決したのであつた。大きな人の上に小さな人の乘つてゐる有史以前の象は父系の表示である。アテーナは母はなかつたが、ツォイスの頭から飛び出したのである。法廷で證する人、即ち證人 witness は、獨逸語では、Zeuge (文字通りの意味では begetter 父)といふが、その役目は生殖の行爲に於て男子によつて爲される故である。象形文字に於ても witness といふ字は男性器で繪の如く表はされてゐる。

强迫神經症に於ては、記憶の不確實は、徵候の形成の一助として出來るだけ廣い範圍に用ひられてゐる。吾々は壽命や死後の生命の問題が、患者の思想の實際の內容內に於て演じてゐる役割を直ぐに知ることが出來る。併し余は今、一つの適當なる轉換として、余の患者に於ける特別の迷信的特性の一ツを先づ考へて見よう。その特性については既に述べた事もあるし、そのために讀者を一人ならず困らした事もある。(二〇四頁エルラの項參照)

余は患者が、善きにも惡しきにも係らず自分の思想、感覺、慾望等に歸した所の『全能』(A)を引照しよう。此の全能の觀念は妄想であり、强迫神經症の範圍を越えてゐるといふ事は確かに宣言し度い事であると余は思ふ。併し余はもう一人の患者に、之と同じ確信をもつた者に出會つた事がある。この人は旣に以前に健康に復して正常な生活を送つて居る。實にすべての强迫神經症者は、此の確信をもつてゐるかの如く振舞ふのである。此等の患者が自分の力を買ひ被りすぎてゐる事について、何等かの說明をなさねばならぬのが吾々の任務である。此の信仰は、幼年時代の誇大妄想狂の遺物を率直に承認したものであるといふ事を、吾々は有無をいはさずに想定して、患者に彼の確信の根柢を求めようとするのである。それに答へて患者は二つの經驗を擧げた。患者は自分の病氣が初めて水治療院で快くなり、又快くなつたのはそこにきた時だけであつたのだが、その水療院に二度目に行つた時、彼はもと自分のゐた部屋に置いて貰ふ樣に賴んだ。何故なら、その部屋の位置は看護婦の一人との關係に好都合だつたからである。所がその部屋は生憎塞がつて居て、老教授が入つてゐるといふ事だつた。これを聞いて彼は自分の治療の成功の見込みが非常に減らされたと思つた。その反動として老教授に對して意地惡い考へを起して『彼は中氣の發作か何かで急に死んでしまへばよいに』と思つた。二週間後に彼は、死骸の觀念に亂されて眠から覺めた。朝になるとその教授は本當に中氣の發作を起

して死んで、自分の部屋に運ばれたといふ事を彼は聞いた。その運ばれた時間が恰度彼が眼をさました時間だつたといふ。第二の經驗は、年は若くはないが、愛されたいと望んでゐる一人の未婚婦人に關した事だつた。その婦人は彼に非常に注意を注ぎ、ある時彼に對して明らさまに愛して貰へるだらうかどうかと聞いた。彼ははつきりせぬ遁辭の挨拶をした。二三日經つてから彼女が窓から身を投げたといふ事を彼は聞いた。彼はそれから自責の念に驅られた。そして若し彼女を愛してやつたなら、自分の力で彼女の生命を救へたらうにと思つた。この樣にして彼は自分の愛と憎惡との『全能』を信ずる樣になつたのであつた。吾々は愛の全能を否定せずに、これらの例は兩方とも死に關してゐるといふ事を指示する事が出來る。且つ又次の如き明瞭な說明を與へる事が出來る。卽ち他の强迫神經症患者と同樣に、此の患者も外界に對する彼の憎惡感情の効力を大きく見すぎる事を强ひられてゐる。何故なら、彼の憎惡感情の內的の精神的効力の大部分は、彼の意識的知識から逃げ出てしまつたからだといふ說明である。彼の愛は——否むしろ彼の憎惡は——實際に壓倒的である。彼がその根原を理解する事が出來なくて、又それに對して空しく防禦を努めてゐる所の、その强迫思想を創造したものは、確かにこの愛と憎惡とである(二)。

【註】(一) 思想の、否もつと正確に言へば慾望の全能は、原始時代の人々の精神生活に於ける本質的要素として

今まで認められて來た。(『トーテムとタブー』參照)

此の患者は、死といふ問題に對して非常に奇妙な態度をもつてゐた。誰でも死ぬと彼はいつでも大に同情した。そして葬式には信心深く參列した。それ故彼は兄弟姉妹たちから『死屍の鳥』といふ異名をつけられてゐた(B)。彼は想像中で絶えず人々を亡い者にしてゐた。それでその遺族に心からなる同情を示さうとしてゞある。彼が三歳から四歳の間に起つた一人の姉の死は、彼の空想の大部分を占めてゐた。それは其の期間内の彼の子供つぽい不行狀と密接な關係を持つ樣になつた。その上、彼の心は如何に小さい時から父の死に就ての考へで占有されてゐたかも吾々は知つてゐる。そして又彼の病氣そのものが、その事件(父の死)に對する反動だと考へる事も出來る。その事件に對して彼はその五ケ年も前から强迫的慾望をもつてゐたのだ。彼の强迫恐怖が不思議な擴張をして、次の世界にまで達したといふ事は、彼が父に對して持つた死の願望に對する報償に外ならないのだ。それは父の死後十八ケ月經つて、父の死に對する彼の悲しみが復活した時に起つたのだ。そしてそれは現實に反抗し、近頃になつて總ての空想中に表はれてきた慾望を尊敬して――彼の父の死といふ事實を否定するために工夫されたものである。即ち數箇所(一九九頁及び二〇四頁)に於ける、『次の世界に於て』といふ語は、『若しも父がまだ生きてゐたとしたなら』といふ語に翻譯されてゐるのである。

他の强迫神經症者の行爲を見ても、假令余の今の患者のやうに幼時に死といふ現象に直面こそしなかつたけれど、余の今の患者と大した差異はないのである。彼等の思想は他の人達の壽命とか死の可能性などによつて、絕えず占領されてゐるのである。先づ初めに彼等の迷信的傾向はこれ以外の內容は持たず、これ以外の根源は何もないだらうと思ふのだ。併し此等の神經症患者は、主として彼等が未解決で殘しておいた爭鬪を解決してくれるものとして、死の可能性といふ助力を必要としてゐるのだ。彼等の主なる特性は、決斷をする事が出來ない事である。特に愛の問題に於てはさうである。彼等は如何なる決斷でも出來るだけは延引させようとする。何れの人に決めようか、又ある人に對して如何なる方法を取らうかといふ事が定まらない時は、彼等はどうしても昔の獨逸の法廷を模範にして選ばねばならないのである。獨逸の法廷に於てはその論爭に判決が下らない前に、訴訟は訴訟當事者の死によつて終らせられるのである。斯くの如く彼等の生活に入り來るすべての爭鬪に於て、彼等は自身にとりて重要なる人々又は大概は愛してゐる人々の死が、惹起されはしないかと用心してゐる。彼等の兩親の內の一人とか、競爭者だとか、何れに定めようかと迷つてゐる二人の愛人の中の一人とか、といふ人の死である。併し恰度此の點に於て、强迫神經症に於ける死のコンプレクス論は强迫神經症の本能的生活の問題に接觸して來た。それで吾々は今度はその問題に向はう。

（註）（A）全能の觀念は發達の過程に經て來る全能念慮であつて、發達と共に放棄されてしまふものであるが、それが殘留してゐるのである。（譯者）
（B）不吉の鳥といふ意味ならむ。（同）

（C）强迫神經症の本能的生活及び强迫と疑惑との根原

心理的力の相互作用のもとに强迫神經症は成立したものであるが、その心理作用の了解を得たいならば、患者が大人になつた時も又子供の時も同樣に、病氣を起したその刺戟的原因となつた問題について、患者から聞いた所の事に戻らねばならぬ。彼は二十代の時、愛人ではない他の婦人に對して結婚しようといふ誘惑に出會つて病氣になつた。そして彼は結婚に必要なすべての準備を延期させて、此の爭闘の決定を避けた。この延期させる法は、彼の神經症から與へられたのである。彼の愛人と他の少女との選定に當つての躊躇は、父の感化と、愛人に對する愛との爭闘に縮めることが出來る。言葉を換へて云へば、彼の父と彼の性的對象物との間の爭闘的選擇、即ち患者の追憶や强迫觀念から判

斷して彼の遠い少年時代にすでに存在してゐたところの爭鬪的選擇に縮められ得る。彼は一生涯、愛人と父とに關しては、間違ひもなく愛と憎みとの爭鬪を經續せねばならなかつたのである。彼の復讐の空想や物を識りたい强迫及び路傍の石を除く事等の强迫的現象は、彼の感情が調子外れだといふ事の證據となつてゐる。これらの現象は或る程度までは理解し得べきものであり又正常なものである。彼の婦人は、最初には拒絶し後には冷淡であつたので、彼が彼女に敵意をおこしたのは幾分か許さるべきことである。然し彼と父との關係は、吾々が彼の强迫思考の飜譯から了解した通り、やはり感情の不調によつて支配されてゐた。彼の父にも亦吾々が確かに證明し得る如く、彼の子供時代にもつた敵意に、ある言ひ譯をあたへたにちがひない。彼の婦人に對する態度は、愛情と敵意との混合物であつて、彼の意識的認知範圍內に於て非常に發展した。甚だしい時には彼は自身の否定的感情の程度と力とに就いて自身を欺いたりした。併し之に反して、彼が自分の父に對して抱いた敵意は、一度は强く意識した事はあつたけれど、彼の認知範圍から旣に以前に消失してゐた。その敵意が再び彼の意識に戾つてくるのは、最も激しい抵抗に反抗してゐる時のみである。彼が幼時父に對して持つた憎惡を抑壓したといふ事は、彼の其後の生涯を神經症の支配下に置いた原因として、認める事が出來るだらう。

此處で箇々に擧げた患者の感情の爭鬪は、互ひに獨立せるものではなく、一對になつて一緒に相結ばれてゐるものである。彼の婦人に對する憎惡は父に對する愛着と一對になり、彼の父に對する憎惡は婦人への愛着と一對になつてゐるのである。併し此の單純化から起つた二つの感情の爭鬪、即ち彼の父に對する關係と、婦人に對する關係との反對性、及び此等の二つの關係の範圍內に於ける愛と憎惡との間の矛盾は、その內容に於ても根源に於ても相互に何等の關聯はないのである。此等の二爭鬪のうち、第一のものは總ての人の愛の對象の選擇の際に常に起る所のもので、男性女性何れかの選擇に對して起る正常なる動搖に相當するものである。これは古くからよく云はれてゐる『お父さんとお母さんとどつちが好き?』といふ質問によつて、子供の心に最初に氣付かせられる事である。これは兩性に對する彼の感情の比較的の强さが何うであらうとも、又彼が終には決定すべき性的目標が何であらうとも、彼の一生に附き纏つてゆくものである。併し普通は此の反對性は間もなくその嚴しい矛盾性を消失する。頑固な『此れか彼れか』といふ特性を消失する。正常な人に於ても、一方の性をより一層尊敬することは、片方の評價を下げる事によつていつも目立たせることが出來るのであるが、其處には『兩者の不同』といふ要求を滿足させる餘地が見出されるのである。

愛憎間のもう一つの爭鬪は、吾々に更に不思議な感を起させるものがある。愛の始まりは屢々憎惡

と認められる事があり、又愛はその滿足を拒まれたなら、容易く幾分は憎惡に變へられる事を知つてゐる。もつと激しい段階に於ける愛に於ては、二つの相反した感情は、恰も互ひに競爭してゐるが如く、暫らくの間は相竝んで存在し得ると詩人は言つてゐる。併し愛と憎惡とは長年の間共存して、兩者とも同一人に向けられ、然も兩者とも最强の程度のものであることは、驚かざるを得ないことである。實は吾々はこの强烈な愛は、旣に以前に憎惡を征服してしまつたか、或は憎惡に征服されてしまつたらうと豫測してゐたのであつた。處がこの二つの反對物が存續してゐるといふ事は、極めて特殊の心理的狀態の下に、無意識內に於る狀態の共力に依てのみ出來得るのである。卽ち愛は憎惡を征服する事には成功しなかつたが、憎惡を無意識內に追ひ下げる事は出來たのである。そして憎惡は、無意識內に在つて意識の働きによつて破壞される危險から遁れて存續する事が出來、又成長する事さへ出來たのである。斯樣な狀態になると、意識的の愛は、槪して反動として特に非常な强大なものとなる。そして憎惡を永久的に壓倒して行けるだけの强さを常に持つことが出來るやうにして置くのである。戀愛生活に於ける斯かる不思議な狀態の出現に就いて必要なる條件となつてゐるものは、極めて初期卽ち幼年時代の有記憶以前の或る時期に、この二つの相反する愛憎が分離し、その一つが――多くの場合は憎惡が――抑壓されてゐる事から起るのである(二)。

【註】（一）初めの診療期に於ける此點に就ての論と比較せよ（一〇四頁參照）。ブロイレルはその後この感情群を記述するに當つて、雙存性 Ambivalent といふ適當なる語を紹介した。余の『强迫神經症の素質』文集（一九一三年）を參照せよ。

吾々が强迫神經症患者の多數を研究してみるならば、余が今此の患者に於て發見した如き愛と憎惡との關係は、强迫神經症の特性中で最も屢々起るものであり、最も顯著で從つて最も重要な特性であるといふ印象を感じないわけには行くまいと思ふ。併し神經症の選擇の問題を、本能生活との關係に容れようとする誘惑が如何にあらうとも、斯かる過程を避くる理由は十分にある。何故なら吾々は如何なる神經症に於ても、症狀の背後には同じ抑制された本能を見出すといふ事を忘れてはならぬ。結局無意識に於て愛により抑制されてゐる憎惡は、ヒステリー及びパラノイアの發病にあづかる所が非常に多大である。此處に於て、一定の結論を作らうとするには、愛の性質をあまり知らな過ぎるのである。そして特に愛に於ける『陰性』の要素(こ)と、リビドーの加虐的成分との關係は、全く不分明になつてゐる。それ故これより得るものは、一時的の假りの說明にすぎないものと考へねばならぬ。故に吾々は次の如く考へる事が出來る。卽ち余等の今述べてゐるこの無意識的憎惡の場合には、愛の加虐的成分はその構成的原因によつて特に强く發展し、從つて早期の而かも完全な抑制を受けたものと

考へ得るのである。そして吾々の觀察した神經症的現象は、一方に於てはその反動として誇大された愛情の意識的感覺から生じ、又他方に於ては、憎惡の形となつて無意識の中に存してゐる加虐性から生ずるといふ事を、吾々は考へ得るのである。

【註】（一）『ツンポヂウム』Symposium の中て、アルチビアデスがソクラテスに就て言つてゐる『何度となく余は彼が死ればよいがと思つた。けれど、それでゐながら余は、若しも彼が死なればならなくなつたら嬉しいどころか、どんなに悲しむかは解つてゐる。だから余は全く途方にくれてゐるのである』と。

（Jowett の譯）

愛と憎惡との此の顯著なる關係は、如何なる方法で說明されようとも、その關係の存在は、吾々の此の患者の例によつてしたる觀察によつて疑ひもなく確立されるのである。吾々が强迫神經症の不可解な過程を追求してゆく場合に、その過程を此の今述べた如き、一つの要素に關聯せしめて行くならば、容易に追求できるものだといふ事を發見したのは喜ばしい事である。若し强い愛が、それと殆んど同程度に强い憎惡によつて反抗され、同時にその憎惡と離れ得ざる樣に結びつけられてゐたならばその直後に來る結果としては、意志の部分的の脫力と、また愛の動機力によつて起される所の行爲の決斷力の喪失とが起るのである。併し此の決斷力の喪失は長い間單一の行爲の集合だけに限られてゐる

るものではない。なぜならば、第一に愛人の行爲で一つの主要なる動機に關係してゐないものがあらうとは思はれないからである。第二には性的事柄に於いて、人々は標準としての力を有してゐるもので、他の反射行爲のすべてが皆それを標準としてゐるのである。第三には、『轉位』の装置を十分に使ふのは强迫神經症患者の心理的固有の特性である。それ故に決斷力の喪力は、患者の行爲の全範圍に亙つて開展してゐるのである。

是に於て吾々は强迫神經症患者の精神生活の中に出會ふが如き、强迫と疑惑とに就いて説明ができよう。疑惑は患者自身の不決斷の内的知覺に一致したものである。彼の不決斷は、憎惡が愛を抑制する結果であつて、如何に意圖された行爲であつても、それを占有してその決行を妨げるのである。疑といふのは、本當は彼自身の精神内にて最も確實であるべき筈の『愛に對しての疑』である。そして疑は、他の總べての物の上に散り擴がり、特に最も無意味な最もつまらぬものに置換へられ易いものである(二)。自己の愛に對して疑をもつ人は、それよりも更に小さい物に對して疑を持つだらう。否むしろ疑はねばならぬのである(三)。

【註】(一) 冗談をいふ時の技巧としての『瑣事に依れる代理』の使用を參照。(Freud, Der Witz(1905) 四版六五頁。

(二) ハムレットがオフィリヤに向つて歌つた戀歌の中にも斯ういふのがある。

『星が火である事を疑ひ、
太陽が動くのを疑ひ、
眞理がいつはりであると疑つても、
吾が愛は決して疑ふな。』

患者自身に、自分の保護的方法が不確實だと感じさせ、その不確實さを追拂ふために、その保護的方法を絶えず繰返させるものは此の疑惑なのである。彼の愛に就いては、彼の初めから抑止された決斷の實行不能と同じ樣に、彼の保護的行爲そのものをも結局は實行不能に終らせてしまふのは、矢張り此の疑惑である。研究の初めに於て、余は强迫神經症患者及び殆んど正常と思はれる人の不確實さについては、猶ほ一つの更に一般的の根原を假定するに到つた。例へば、もし余が手紙を書いてゐる時、他人より質問を受けて妨げられたとすれば、後刻その妨げのために書き落しはなかつたかといふ全く當然な不確實さを感じて、再び讀み返さねばならぬのである。これと同じく强迫神經症患者が、例へば祈禱の時に感ずる不確實さは、絶えず祈禱中に混入して妨害してゐる無意識的空想に依るものと考へられる。此の假說は正しい。しかし、吾々がもつと初めに述べた事と容易く一致する。彼の保

護的方法を持續したかどうかといふ患者の不確實さは、無意識的空想が妨害する影響だといふ事は眞實である。併しこれらの空想の內容は、明らかにこれと反對の衝動であつて、それを避けるのが祈禱の目的であつたのである。或る時――それは、余の今の患者に非常に明らかであつた。何故なら、邪魔をする要素は決して無意識の儘では居らず明らさまに表はれて來るからである。祈禱で患者が使ひたかつた言葉は『神よ彼女を守り給へ』といふのであつた。併し反對の『勿れ』といふ語が突然に無意識の中から出てきて祈禱の文句の中に入つた。彼はこれは呪ひの仕事であると解した。(一六〇頁參照) 若しその『勿れ』が云ひ出されずにあつたなら、患者は自分が不確實の狀態にあるのだと氣が付き、祈禱を限りなく延ばしたであらう。併しその『勿れ』は明瞭になつてきたので、彼は祈禱を止めたのである。併し止める前に、彼は他の强迫症患者の如く、その反對の感じの入込むのを防がうとしてあらゆる手段を試みた。例へば祈禱を短くしたり、早口に云つたりした。これと同樣に、他の患者もこれらの保護的行爲を他の物から離さうと努めるのである。併し長い間には此等の技巧的手段も何等の役には立たなくなる。若し愛の衝動が或る瑣々たる行爲に置換へて成功したとしても、すぐに敵意の衝動が起つて愛の新しい地位にとつて代り、愛が爲した所の事をすべて取り除いてしまふのである。

强迫症患者が、精神生活の安全中に弱點を指摘する事が出來たなら、といふのは、記憶といふ事の信用できぬ事を明らかに知つたなら、此の發見によつて患者は自分の疑ひをあらゆるものに擴げるやうになる。即ち既に爲してしまつた行爲の上にも、或は今迄には愛と憎惡のコムプレクスに關係のなかつた行爲の上にも、又は全過去の上にまでも疑ひをかける事が出來る樣になるのである。余は、かの婦人の例をこゝで思ひ出せる。彼女は或る店で櫛を買つたが、夫に疑ひを持つ樣になつてから、彼女はその櫛を今まで長い間持つてゐたのではないかと、實際に疑ひ出したのであつた。此の婦人は、明らさまに次のやうに語つてゐたのではないだらうか。『若し私があなたの愛を疑ふ事が出來るなら、(これは夫に對する彼女の愛の疑の出現に他ならぬ。)私はこれも疑ふ事が出來る。そして何でも彼でも疑ふ事が出來る。』と。そしてこの言葉は、吾々に神經症的疑惑の隱れた意味をあらはしてゐるではあるまいか。

强迫は他方に於ては、疑の報償として、及び疑を證明する所の禁止の、ゆるし難き條件の緩和としての試みである。若し患者が『轉位』の助けによつて遂に禁止せられた目的の一つを決斷する事に成功したならば、その目的はどうしても爲し遂げられねばならぬのである。此の目的は彼の本源的のものではない事は事實であるが、その目的の中に堰き止められたる力は、その目的が代用さるべき行爲

となつて解放されるための出口を見出す機會を見逃す事は出來ない。斯くして此の力は、愛情衝動或は敵意衝動が、その解放の道の支配を奪ふ事に從つて、ある時は命令として、或る時は禁制として感じられるのである。若し偶々、强迫的命令が從はれないやうな場合には、緊張は耐へ難いものとなり、非常な不安の形となつて患者に認められる。併し代用さるべき行爲に至る道は、たとへ轉位が極めて些小なものに行はれるのであつても、非常に競爭されてゐるので、斯かる行爲は、概して避けようとされてゐる所の衝動に近い聯絡を採つてゐる所の保護方法の形をとつてのみ成しとげられるのである。

更に一種の『退行』Regression によつて、最後の決定と準備的行爲とが置き代り、卽ち思考は行爲に置換へられ、代理的行爲の代りにその行爲に先立つた或る思想が、强迫の全力を以て自己存在を主張するのである。此の行爲から思考へ逆行するこの『退行』は、多少著しいものである。それ故に强迫神經症の一例は、强迫思考（卽ち强迫觀念）や强迫行爲の特性を、この言葉（卽ち强迫觀念とか强迫行爲とかいふ言葉）のもつと狹い意味に於て表はすのである。併し斯かる强迫行爲は、二つの反對衝動間に於ける互讓形成の形で一種の和解を構成する故にのみ可能であるのである。何故なら强迫行爲は、（病氣が長引けば長引くほど明瞭である。）段々と幼時の性的行爲である自慰的性質に接近してゆく

傾向があるからである。斯樣にして、神經症の形を採つて愛の行爲があらゆるものに成し遂げられてゆく。併しそれは『退行』の新しい種類の助力を借りてのみ成しとげられてゆくのである。なぜならこの樣な行爲は、もう一人の人卽ち愛と憎惡との對象物には最早や關係はないので、幼時に起るが如き自己愛的行爲であるからである。

行爲から思考へ戻る最初の『退行』は、神經症の發生に關係ある他の一つの要件に依て容易くさせられてゐる。强迫症患者の病歷は偸視症的及び好奇心的本能 scoptophilische und epistemophilische Instinkt の早期發達及び早期抑制を殆んど明らかに表はしてゐる。そして吾々も知れる通り、此の患者の幼年期の性的活動力の一部は、その本能によつて支配されてゐたのである(一)。

【註】(一) 强迫症患者に於ける知的能力の平均が非常に高いといふ事は、此の事實に關係してゐる。

强迫神經症の發生に於て、加虐的な本能的成分のあづかる所が多大だつたといふ事は吾々は既に述べた。好奇心本能が、强迫神經症患者の性質中に非常に優勢に含まれてゐる時には、不滿といふ事が主要な徵候となる。そして思想の過程そのものが性化される。思想の內容に正常に附隨してゐる所の性的快感が、思考そのものゝ行爲と置換へられるのである。そして一聯の思想が決斷に達した時の滿足は、性的滿足として經驗されるのである。好奇心本能が關係してゐる種々の形の强迫神經症に於て

は、好奇心本能の思考過程に對する關係は、その本能が行爲に出ようとして無益に努力してゐる力を引寄せ、それを他の種の愉快なる滿足を得る可能性のある思想の範圍に轉入させるのに非常に都合よくさせるのである。斯樣に好奇心本能の助けに依つて代理になるやうな行爲は、今度はそれ自身が思考の豫備的行爲に置換へられることになる。その結果として全過程はその特性もろともに新たなる世界に轉移される。それは恰もアメリカに於て、時々全家屋が一ケ所から他所へ移される事があるのと同樣である。

さて、これから余は上記の論を基礎として、强迫神經症の容態に强迫的性質を與へる所の、今まで長年研究されてきた心理的特性を決定しようと思ふ。思考過程が强迫的であるといふのは、精神系統の運動神經末端に於て、或る禁止（相反する衝動の爭鬪による）の結果として思考過程が、質についても量についても、行爲のためにのみで常に置換へられてあつた所の精力を消費して行はれる時である。即ち換言すれば、强迫的思考とは或る行爲を逆に表す作用をなす所の思考であると云へる。思考の過程といふものは、感情を解放したり、又外部の世界を改變したりするための行爲ではなくて、恐らくは、より高い標準にて、精力のより小さい轉位を以て（經濟的根本をもつて）導かれるものであるといふ余の考へには、誰も疑問を抱かぬであらうと思ふ。

斯かる大なる烈しさを以て、意識の内に進入してきた强迫思考は、次にはそれを解放せんとせる意識的思考の努力に對して、防備堅固にされねばならぬ。吾々も旣に知つてゐる如く、强迫思考が意識的にならぬ前に受けた『歪みの作用』に依て、此の防備はなされるのである。併しこれのみが唯一の方法ではない。加ふるに箇々別々の强迫觀念は、歪められたのみならず、最もたやすく理解される最初の位置から他の位置に殆んど移されてゐる。此の結果を考究してみると、まづ第一に、病氣の狀態とそれから生ずる强迫との間に、ある一間隔の時間が嵌め込まれて、その原因關係の意識的研究を迷はせようとしてゐるのである。第二には、强迫の內容が一般化される事によつて、それ自身の一定位置から取り出されるのである。余の患者の『識りたい强迫』はこのよい例である。（一五六頁參照）併しもう一人の患者の例はもつと適當な例であらう。これは一人の婦人が自分の身につける飾物は、もう決して附けてはならぬと自分で禁じてゐた。併し此の嚴しい禁止の原因は、唯ある特別の一つの寶石に關してゐるたゞけだつた。彼女は自分の母がその寶石を所有してゐるのを羨ましがつた。そしていつかはそれが自分に讓られる事を望んでゐたのである。終りに、若し吾々が內容の『歪み』と、言葉の『歪み』との區別を知りたいなら、意識がそれを解かんとする試みに對して、それを强迫が防ぎ守らむとする方法がもう一つあることを知らねばならぬ。それは、不定の卽ち曖昧の言葉使ひの選擇

である。誤解された後は、その言葉使ひは患者の譫妄狀態の中に進んで行き、患者の强迫がそれ以上の如何なる發展或は代理の經過を取つたにしても、それは誤解の上に基礎をおくものであるから、原語の正當の意味を基礎としてゐないのである。併しよく觀察してみれば、譫妄狀態といふものは現在意識內にない所の强迫的事柄や言葉に、絕えず新しい關係を作りやすい傾向を有するものである。

余は再び、强迫神經症者の本能的生活に戾つて、それについて再び附言し度いと思ふ。余の患者は彼の他のすべての特性以外に、嗅覺過敏 renifleur (osphresiolagniac) であつた。彼の話によれば、子供の時に恰度犬のやうに人を誰でも嗅ぎ分けたものであつた。大人になつてからでさへも、彼は他の多くの人々よりも、嗅覺は鋭かつた(二)。余は、ヒステリーの患者と矢張り强迫神經症患者で、これと同じ特性を持つたものに出會つた事があつた。そして余は、子供時代以來消滅した嗅覺過敏の傾向は神經症の發生に與る所があることを認める樣になつた(三)。是に於て余は嗅覺の萎縮(これは人が直立の姿勢を取るやうになつて明らかに生じた結果である。)と、その結果としての彼の嗅覺過敏の器官的抑壓とが、彼の神經症の感受性の發源に大いに關係があつたか否かといふ一般的の質問を起し度く思ふ。これは文明の進步と共に抑壓の犧牲となるものは、何故に確かに性的生活であるのかといふ事の說明を幾分かあたへるであらう。何故なら吾々は、下等動物に於ては性的不能と嗅覺の作用との間に

親密なる關係の存することを昔から熟知してゐるからである。

【註】（一）彼は子供の時に、非常に強い弄糞症的傾向を有してゐたことを附記する事が出來る。この點について彼の肛門性感のあつたことはすでに認められる。（一八六頁參照）

（二）例へば祟物症 Fetishism の形に就いて等。

余は此の論を終るに際して希望を述べ度い。余の本論は何れの點に於ても不完全ではあるが、少なくとも他の研究者が、此の問題の更に深い研究に依つて强迫神經症の上に更に明解を加ふる刺戟とならむ事を望むのである。この神經症の特性は何であるか、ヒステリーとの差は何であるかといふことは、余の考へでは本能的生活の中に於て見出されるのではなく、心理的關係に在るのであると思ふ。

余は余の患者と別るゝに際して、彼について余が感じた所を紙にかき殘した。それは、彼が恰も三重人格に分裂されてゐたかの樣である。即ち一つの無意識的人格と、彼の意識が兩者の間を往來し得た所の、二つの前意識的人格とに分裂してゐた樣である。彼の無意識は、初期に於て抑制せられ、惡衝動として述べられた激情の衝動を含んでゐた。正常な狀態の時は彼は親切で快活で物解りがよかつた。即ち聰明なる優秀なる人物であつた。併し彼の第三精神組織に於ては迷信と禁慾主義とに伏してゐた。斯くの如く彼は二つの信條と、二つの異つた人生觀とを有する事が出來た。此の第二の前意識

的人格は、主として彼の抑制されたる慾望に對する反應構成を含んでゐる。そしてこの第二の人格は若し病氣がもつと長引いた時には、正常の人格を呑みつくしてしまふかも知れぬといふ事が容易く豫測される。余は今、强迫行爲に非常に惱んでゐる婦人を研究する機會を有してゐる。彼女も同樣に樂天的な活氣ある人格と、非常に陰鬱な禁慾的な人格とに分裂されてゐた。彼女はその第一の人格を彼女の表向きの自我として表はした。併し實際は彼女は第二の人格に支配されてゐたのであつた。これらの心理的組織は、兩方とも彼女の意識に接近してゐた。併し彼女の禁慾的人格の裏には、『彼女の存在』の無意識部分が認められ得る。卽ちそれは彼女にとつては、知られてゐないもので、且つ昔からの長い間抑制せられた『或目的に對して進む衝動』から成り立つてゐる『彼女の存在』の無意識部分である(一)。

【註】(一)　患者の精神的健康は、余が此處に報告したる所の分析によつて恢復した。彼は多くの他の立派な有望な靑年等と共に、世界大戰に於て戰死したのである。

―終―

附錄

一、神經症及精神症

二、精神分析法

バチラー・オブ・アーツ

矢部八重吉

一、神經症及び精神症

環境に順應する性能を持つてゐる意識面の心（主として理性、德性）と背馳してゐる爲めに、一致兩立することが出來ないで、無意識境に抑壓せられてしまつた心の働きは、若しそれが本能に基くものであつたならば、間斷なく本能から流れ來る力、即ちリビドーに纒綿されて、意識面の心又は言動の動機、即ち願望をつくつて、そこに殘留するものである。そしてこの殘留してゐる願望は早晩實現するにあらざれば、決してそのリビドーを消散させるわけには行かないのである。それゆゑに若し意識面の抑壓や又その抵抗の爲、直接に實現することは妨げられるが、間接に迂廻して歪められて、その願望は實現するのである。迂廻といふことは抑壓する働きと抑壓される働き（意識面の心と無意識の心）との讓り合ひで、即ち互讓に據つて齎らされるのである。互讓の結果としては、互讓した兩者の要素を各その互讓した割合で含んでゐるのである。換言すれば抑壓する意識面の心も抑壓される無意識の心も、それぞれ讓り合つた比率で混合してゐるのである。この合成の結果として願望は歪められ、假裝又は象徵せられて實現するのである。斯くして抑壓せられた無意識の願望は假裝され象徵されて實現するのであるから、この假裝や象徵を解いて見ると、我々は常に意識面の心の裏に無意識の心が潛

在してゐるのを認めるのである。かうした假裝象徵の解き方が、即ち精神分析の施法なのである。

抑壓せられた心の働きが假裝され、象徵されて意識面に現はれた時、即ち無意識の願望が迂廻して實現した時に（意識面の心として）、若しこの假裝、象徵を解いて、願望の眞相を意識面の心に看破させるならば、その時はこの願望に纏綿してゐるリビドーを消散させる事が出來るのである。消散といふ事は、其の本源の願望からリビドーを抽出し、これを他の意識面の心に移す事によつて出來るのである。意識面の動機は主として理性や德性に基いたもの、即ち合理的、德的、社會的のものであつて、自然及び社會といふ環境に順應する性能を示すものである。これはリビドーの醇化に基いたものである。醇化されないリビドーは抑壓された心に纏綿して、常に迂廻の道程を辿つて、假裝、象徵の下に意識面の心又は言動の動機として實現しようとするのである。尙ほ抑壓され、抵抗の蓋をもつて閉された無意識の心は、間斷なくリビドーの流れを喚ぶのであるから、その流れは終に堰止められて氾濫を起すに至るのである。道程が迂廻させられるのはこれが爲めである。堰止められた流れは元の古い溝渠に就き易い、即ち迂廻の道程はこの溝渠でなければならないのである。斯くしてリビドーの流れは逆轉されて、一度辿つた道程ではあるが今は廢墟となつた溝渠に流れ込んで、これを再び活かすに至るのである。この現象をリビドーの退行と云つて、成熟した人が幼兒の心を再現し、文化人が野蠻

人の心を復活するのはこの現象に據るのである。これが神經症や其の他の一切の精神變調の基礎となつてゐるのである。

總べての精神の變調はリビドーの退行に基いてゐる。そして、退行の仕方及びその程度に依つて、その概括的の區分をする事が出來る。退行が感情だけに止まらずして更に智能にも及ぼし、其の範圍が擴大して且つ其の程度が深くなつてゐるものを精神症と呼ぶのである。また退行が主として感情だけに止まり、その範圍が局限せられ、且つ程度が淺いものを神經症と稱するのである。精神症は所謂發狂であつて、その中の主なるものは癡呆症であり、癡呆症は更に早發性、老耄性、妄想性及痲痺性とに區分されてゐる。神經症もまた其の示す症候に依つて、神經衰弱症、ヒステリー、癲癇、恐怖症、强迫症、妄想症等の名稱が附けられるのである。尙ほ他の一つの分類法では機構的と機能的とに區分してゐる。前者は肉體組織に基き、後者は精神作用に因るものである。癡呆症は大腦の組織、殊に大腦皮質の崩壞によるものと見做されてゐて機構的のものと考へられ、神經症は機能的のものと看做されてゐる。神經症は更に物的基因を有するものと、單に精神作用に基因するものとに分けられ、前者は性的生活の障礙の爲めの有害物の蓄積によつて起り、後者は幼兒時代に受けた精神的外傷(驚愕《ショック》)又は定著に因するのである。物的基因に據るものの例としては神經衰弱症(フロイドの眞性神經衰弱症、

ジャネーの精神衰弱症）及び杞憂性神經症などが擧げられ、精神的基因に據るものとしてはヒステリー症及强迫症などが擧げられる。

總ての神經症及精神症は、抑壓の一部の失敗に起因するものと見做されてゐる。若し抑壓がリビドーの流れを幼兒的卽ち變的反社會的溝渠から、德的、社會的溝渠に導く事に成功して、これを醇化することが出來た時には、健全なる方法に據つて、恒久性を有する其の吐け口が見出されるのである。が、これに反して醇化され損なつたリビドーは常に變態的吐け口を求めることになる。變態的吐け口は抑壓する意識面の働きと抑壓される無意識の願望――卽ちリビドーに纒綿された心の働との間の讓り合ひに據つて齎らされる。これは互讓の作用である。互讓はそれ故に兩者の要素を含んでゐる。そして兩者は相互に背馳してゐて、一致兩立の出來ない心の働であるが故に、互讓の結果で表現された症候は、常に矛盾、正反對の要素を含んでゐる。斯樣なわけで症候は二重の意味に註釋されるのである。と云ふのは、抑壓する力も抑壓される力とは相互に中和されるとか、又は相殺されるといふやうな合成の結果を生ずる事は決してないのである。それ故に症候は無意識の願望實現であると同時に、それに對する意識面の禁制の表現と見られるのである。死にたいが命は惜しい、見たいが恐ろしい、可愛いが憎い、と云ふやうな兩極性の心の働き、雙存性の感情、心持だけで自覺されるもの、又はそ

の精神作用の肉體轉換として現はるるもの、これらは皆精神變調の症候なのである、意識面の德性倫理性の基いてゐる理想我（又は超我）の一部は、無意識境にあつては本能に基く無意識の粗野的蠻的衝動に對して飽くまで苛酷な壓迫を加へてゐるのである。卽ち無意識境にある願望と理想我との間には常に軋轢葛藤が生じ易いので、然かもそれは極めて激烈な衝突であるらしい。なぜならば、理想我と蠻的願望との隔りは、理想我と意識面の働きを構成してをる現實我との間の隔りに比して頗る多大であるからである。然かもこの衝突は無意識で行はれるのだから、自覺することが困難である。自覺することの出來る衝突は煩悶精神苦として感じられる。煩悶精神苦は神經症の兆候である。自覺されない衝突は無意識に於て行はれる願望と理想我との間の激烈なる種類のものであつて、その症狀は深く且つ重いものである。斯樣な症狀は何等の前兆もなく突如として發露される事がある。卽ち精神症狀（發狂）はこの部類に屬するのである。

無意識に於て行はれる理想我と蠻的願望との衝突は、時として薄々自覺される事がある。これは所謂、良心の呵責とか自己膺懲とか或は罪の感となるのである。これらの精神作用も肉體轉換を起す時には勿論生理的症狀として現はされるのである。例へば轉換性ヒステリーの症狀である痙攣、痲痺、心悸亢進、その他の發作症狀は、自己膺懲を意味してゐると同時に、無意識の願望實現をも意味して

ゐるものである。ヒステリー症は性的願望の抑壓に因するものであるといふ事は、精神分析を行つて見ると解る。それ故にその發作は象徴的の性行爲であつて、即ち假裝された性的願望の滿足なのである。假裝は欺瞞を目的としてゐる（勿論無意識的即ち故意ではないが）。この場合の欺瞞は總ての過程を逆に繰り返す事によつて示されてゐる。それは時の場合でも亦行動の場合でもさうである。例へば、普通の性行爲の場合では最後に現はれる筈の高潮（オルガズム）が、ヒステリー發作の場合に於ては逆になつて最初に示されて、そして漸時興奮が低められてゆくのである。これと同樣に抱擁すべき處が反撥の形となり、前に屈むべき處が後に反る（一般に認められる發作中の彎曲（ゆみなり））ことになるのである。この逆になつた狀態を反對に矯めてみると、恰度性行爲中の動作となるのである。こんなわけでヒステリー患者はその發作中に願望（性的）實現の型を見せてゐるのである。無意識的にまた假裝の下にその芝居を演じてをるのである。然かも發作は毫も普通の願望滿足に伴ふやうな快感などは感ぜられずに、寧ろ肉體的及精神的苦痛となつて感ぜられるのである。これは願望實現と同時に其れに對する意識面の禁制や無意識にある理想我の膺懲を受けるからである。ヒステリー症は理想我の强いもの、即ち性倫理性が高すぎるものが罹り易いのである。この種の人は性的願望を不淨視して、『思ふだに穢らはしい』ものと見做してゐるのである。『思ふだに穢しい』考へは思はないでも濟むやうになる。と云ふ

のは、意識面から抑壓され、無意識に陥され、忘れてしまふからである。が、斯樣に忘れてしまつたからと云つて、何時までも涼しい顏をして澄してはをられないのである。なぜなれば、無意識に陥された性的衝動は間斷なく本能からのリビドーの扶養を受けて、これに纒綿され蓄積され、終に强迫的に、假裝の下に、そして互讓の結果、ヒステリー發作の形を取つて、願望として實現されて來るからである。

願望の實現及それに對する膺懲の表現であるヒステリーの發作は、發作そのものに於て、この兩者の目的を各その互讓した程度に逆比例して、成し遂げるのである。卽ちヒステリー患者は其の作用の中で、性的願望の要素の內で讓り合はなかつた部分に對しては、遺憾なく其の願望を滿すのである。願望滿足は肉體的にも精神的にも緊張を解き、慰藉を與へて呉れるのである。それゆゑ發作後の患者はけろりとをさまつて、一時症狀が癒つたやうに感じるのである。これは性行爲に伴つてゐる生理作用、例へば生殖腺及甲狀腺の働きが喚起されて、各その內分泌液が血行機關に瀰漫してくるからである。內分泌液は我々の元氣を振興して健全を保たしめるものである。昔から婦人の癪（ヒステリーの發作）は男子の力でなければ收まらないと云はれて居るが、これは現實に近い異性の力は發作の過程を早めて願望をたやすく滿足させ得る效があると同時に、この言葉の象徵的意味が性的能力卽ち性的

願望を滿たしてやる力である事を證するからであらう。

發作は症狀の一時的發顯である。それゆゑ發作そのものを以てその基因となつてゐる結情（コンプレックス）に欝積してゐるリビドーを消散させる（卽ち願望滿足させる）手段であるとするならば、その症狀はその根原、卽ち病原を除去する一方法と看做され得るのである。卽ち症狀は病因を緩和しようとする試みと見做されるのである。然しながらその症候を滯りなく發露せしめてみても、ただリビドーを消散させる效力があるのみであつて、その症狀を起す本體である處の結情（願望の源泉）を破壞するにあらざれば平癒は一時的であつて決して恒久性を持つわけには行かない。それ故にヒステリー症は發作を繰り返す事だけでは治し得ないのである。發作は精神作用が肉體的、卽ち生理的症狀として轉換したものである。これは人爲的の操作で、例へば催眠暗示によつてその發顯を妨げる事も出來るし、又は自生的の作用に因つて終息してしまふ事もある。こんな場合には一見症狀が癒つたやうに觀えるが、實際は肉體へ轉換する道が塞れたのみであつて、結情が除去されたのではないから、その症狀は又異つた形で現はれてくるのである。換言すれば肉體の症狀が精神の症狀で置換へられてくるのである。これを代償ヒステリー症と呼んでゐる。

代償ヒステリー症は、所謂强迫症なのである。肉體轉換への道を塞がれたリビドーは意識面にその

吐け口を求めて來るのである。が、その本體である無意識の結情を離れて、單獨に意識面に浮んで來たリビドーは、意識の働きに寄寓して、そこで寄生的存續をなすのである。これが强迫觀念である。强迫觀念は論理の力、理窟附、其の他あらゆる意志の努力に抵抗して我々に其の自覺を强ふるのである。卽ち思はざらんとしても思はざるを得ず、忘れんとしても忘れ難いのである。これは無意識の結情に基いてゐる爲だからである。結情は實體であつて、自覺出來る觀念は其の影に外ならない。意志の努力は此の影に注意を集中するばかりである。注意の集中といふことは意識の光りの焦點を作つてしまふ。その影は光りが增すに從つて愈明瞭になる。それ故に强迫觀念は、これを驅逐しようと、意識的に努力すればする程益頑强に持續されるのである。意識面の働きに轉位（戸惑ひ）したリビドーはその本體である無意識の結情を意識面に呼ぶにあらざれば、これを還元する事が出來ないのである。言ひ換へれば『忘れようとしても忘れる事の出來ない』强迫觀念は『思ひ出さうとしても思ひ出す事の出來ない』無意識の結情に土臺を置いてゐるのである。

無意識の結情が意識面に投ずる影である處の强迫症狀は色々な形で現はれて來る。そして現はれる形に依つて種々な名稱が附けられてゐる。例へば强迫恐怖、强迫疑念、强迫信念及それらが意識面の動機となつて、言動に現はれる强迫言動等がある。更に强迫言動の中には宗教的儀式や一見無意味な

る戒律の迷信的固執、潔癖、洗滌症等がある。尙ほ肉體轉換として現はれた症狀(轉換性ヒステリー)と強迫症狀(代償ヒステリー)との混合によつて現はれる症候の中には密迫恐怖症、外出恐怖症、赤面恐怖症、舞臺恐怖症、職業忌避症等がある。斯樣に種々雜多な狀態で現はれる症狀と雖も、ひとたびその各箇の原因を究めて見ると、それ〴〵明確なる決定要素に基いてゐる事が分るのである。これは精神分析によつて知ることが出來る。精神分析の施法に據ると、肉體轉換症狀と其の代償として現はるゝ強迫症狀とは同一の決定要素に起因して居り、且つ同一の意識を有する事が理解出來るのである。それ故に若しヒステリー症が性的願望の抑壓に基いてゐて、この願望實現が劇化され(肉體に轉換すること)、實演(其の發作すること)されるものとすれば、その筋書、又は脚本、又は其の資材とも云ふべき史譚、小說が強迫症候にあたるものであらう。更に譬へてみれば、ヒステリーの發作を劇の實演だとするなら、強迫症候は脚本朗讀か若しくはラディオ放送劇だと云へよう。實演される劇の色々な場面が言葉で敍述されたものが脚本朗讀である如く、肉體症狀として現はれる發作の種々な場面が精神作用で表現されたものが強迫症狀に相當するであらう。

肉體症狀が強迫症狀と同一なもの、換言すればこの兩者が數理的等價の符合をもつて結合し得るものだといふことを證明するのは何うして出來るかと云ふに、これは二つの數があつて、その各が第三

の數に等しき時には、此の二數は相互に等しいのであると云ふ公理に據るのである。肉體症狀の對象、卽ちそれに等しいものは、無意識にある結情に辿る事が出來、そして强迫症狀の對象、卽ちそれに等しいものも亦無意識にある結情に辿る事が出來るのであり、そしてこの結情は、兩者の場合に同一のものである事を、我々は精神分析に據つて發見したのである。斯くして、肉體症狀を精神作用(强迫症候)に轉譯する辭書を、我々は無意識の働き中に見出したといふわけである。そして、この結果我々は肉體症狀を精神作用の術語で、又精神作用を肉體症狀の術語で讀解する事が出來るのである。抑壓された無意識の結情(卽ち願望)が互讓の下に意識面の心に、又は直接に(意識面を經由する事なく)言動に現はれたものが、精神變調であるとすると、これと同樣な現象が、例へば睡眠中に起る時には、我々は此の現象を同一な原因に基いた同一な變調と看做すことが出來るであらう。卽ち、夢、睡語及夢遊などは精神變調の症狀と見られるであらう。これらの睡眠中の現象を精神分析して見ると、我々は其の動因を無意識の結情に辿る事が出來、そしてこの動因は肉體症狀又は其の代償たる强迫症狀の動因と同じものである事を發見し得るのである。卽ち夢は睡眠中の精神變調症狀であつて、精神變調症狀は覺醒中の夢であると云ふことが出來る。換言すれば、夢を見る心持は精神變調者の心持であり、精神變調者は醒めない夢を見つゞけてゐて、覺醒中に睡語を云つたり、夢遊したりしてゐ

るものと看做すことが出來るのである。

斯くして、肉體症狀とその代償である處の强迫症狀とは同一の動因に基くものであるが、唯その表現の仕方が異つてゐるのみである。かういふ事實を我々に理解せしめた精神分析は、更に我々に第三の心的現象、卽ち夢といふものも亦同一の動因を有してゐる事を敎へて吳れたのである。それ故に、夢の硏究は精神變調の硏究となり、夢の註釋は肉體症狀及强迫症狀の註釋として役立つことになるのである。このことは、夢の意味を知る事に據つて我々は症狀の意味を知ることが出來るのである。この理解、この知り方は無意識にある辭書に據つて飜譯すればよいのである。症狀は抑壓する働きも抑壓される働き（結情叉願望）との間の互讓によつて示されるので、同じやうに夢も意識面の心と無意識の願望との間の互讓によつて出來た產物と見てよいのである。それ故に、夢は願望の實現であるといへる。これは、無意識の側から見た場合にさう云へるのであつて、意識面の方から見た場合ではない。願望は意識面の心、德性、理性、卽ち意志などといふものに反して實現するのである。換言すれば、抑壓を受けながら、嫌惡、悶々のうちにそれが滿たされるのである。嫌惡は恐怖の弱いものである。この兩者は時とすると區別し難いものである。例へば『雷嫌ひ』と云ふ人は實は雷を恐れる人であり、『女嫌ひ』と云ふ男は實際は女を怖がる男である場合が多い。これと同樣に、厭な夢は恐しい夢

心の働との間の互讓の產物であつて、畢竟するに精神變調の症狀に外ならないのである。これに對する自己呵責、膺懲の表現と見られるであらう。これが卽ち抑壓する心の働きと抑壓される卽ち惡夢である事が屢々ある。夢は意識面の禁制、卽ち德的禁斷を犯した願望の實現であり、同時に

若し惡夢が精神變調の症狀であるとするならば、普通の夢は如何に看做されるものであらうか。普通の夢も矢張り同樣視されてよいのである。何となれば總べて夢は願望の實現であつて、そしてこの實現は直接意識面（卽ち內界）の禁制、又は間接環境（卽ち外界）の壓迫を受けなければならないからである。願望は互讓に據るにあらざれば、常に夢として意識せられないのである。そして、此の互讓のやり方には時と場合とに依つて色々な難易があり、この難易の差によつて夢の種類が色々に決定されるのである。一般に云ふと、互讓の爲され方が困難であると惡夢を生じ、これが容易であると平穩な夢となるのである。互讓の爲され方が困難な場合とは如何なる場合かと云ふに、抑壓する力が强大であり、同時に抑壓される願望も亦補强されて居り、そして抑壓が破られむとする脅威に迫られる時である。この場合に於ては抑壓する方では出來得るだけ最少の讓與をなさうとして居り、抑壓される願望の方は出來るだけ最大の認識を意識面の心に要請してゐるのである。この爭闘の結果、抑壓する力は往々其の主要部分を削がれるのであつて、その互讓は大體に於て無意識の願望の側が有利な地

位を占める事になるのである。これが惡夢なのである。尙ほ抑壓する力は其の互讓の手段として、願望が實現するに先つて、これに歪みや假裝などを强ひるのであるが、抑壓する力が削がれる爲めにその强制力が乏しくなる。その結果として願望は歪められる事も僅少となり、假裝される事も稀薄となつて、稍や露骨な狀態で自覺されることになるのである。この時に於て意識面の心は斯く剝き出しに示される願望を堪忍して直面する度量に甚だ乏しいのであるから、抑壓はます〳〵加はるのである。それ故に惡夢は、歪みの少ない假裝の薄い願望實現として見做され得るのである。惡夢に相當するやうな覺醒中の症狀としては强迫恐怖症、杞憂性神經症などがそれである。

神經症及び其の他一切の精神の變調を、リビドーの流れの逆轉、その退行と見る時には、其の起因に關して更に猶一つの見地を立てる事が出來る。逆轉したリビドーの流れが、一度廢墟となつた嬰兒時代の溝渠に流れ込み、これを再び活かすに至ると云ふことは一體どう云ふ譯であるか。これは嬰兒時代にリビドーの定着が起つたからだと云へる。我々の心的發達はどうして爲されるかといへば、リビドーが低き心の作用から高き作用へと轉位する事に據つて遂げらるゝのである。此の轉位が何らかの原因によつて妨げられると、妨げられた部分の心の作用は、其の部分の點だけが發達し損なふのである。この發達の或る階段に取殘されたリビドーはその取殘された箇所に於て、定着したものとなる

のである。そして心的發達は上へ〱と層を重ぬる事で完成されるものと見做されるのであるから、嬰兒時代にリビドーの定着を起した心の或る層は、我々が成熟後に於て、下積となつて殘留するのである。下積になつてゐる心の作用は無意識の心である。無意識の心は常に意識面の心又は言動の動機となるのであるから、我々は成熟後と雖も、猶ほ或る程度まではリビドーの定着を起してゐる下積の心の作用からして、直接又は間接の支配を受けなければならないのである。

總ての人々は決して完全な心的發達を遂げてゐるものではない。と云ふのは、心の或る部分に對しては、明かにリビドーの定着を起してゐるからである。例へば、智能に於ては立派な大人であるが感情に於ては小兒の發達程度しか爲してゐないものがあり、又感情に於ては十分成熟してゐながら、智能に於ては幼稚なものがある。また智能或は感情の中でも、或る方面だけは成熟者に屬してゐるが、他の方面では嬰兒に屬するものもある。發達した心と未發達な心、即ち大人の心と子供の心とはどう云ふ規準によつて定めるかと云ふに、これは環境順應性能に據るのである。換言すれば、大人の心は現實を受諾する心であり、子供の心はこれを拒否する心であると云へるであらう。卽ちリビドーの定着が起つてゐると、それが定着した部分の心の働に於て常に環境順應性能が缺けてゐて、この缺陷が示されてゐる程度だけ、現實を受諾しない性格が示されるのである。云ひ換へれば現實に處する力が

乏しくなるのである。斯樣に現實に順應しない心の働きは、恰度リビドーが定着した幼兒時代の狀態その儘を示すのである。例へば世に學者、文人、藝術家などと稱される人で、その智能、或る種の感情の傾向、才幹、技量等が卓絕拔群であるにも拘はらず、所謂『常識』に乏しくして世に處したり人に接する術に極めて拙い人がある。彼等は、この『常識』の點に於て、六七歲の小供なのである。智能の一部及感情の或る傾向に於て、リビドーが定着を起して心の發達が阻止せられた狀態であつて、卽ち精神的不具者である。これは嬰兒時代の全能念慮及びナルチシズムに纏綿したリビドーの定着に因るのである。精神分析ではこの種の人物をナルチス型神經症者の中に入れてゐるのである。我が儘、頑迷、傍若無人の振舞、癇癖、短氣等はこの全能念慮に屬してゐて、感傷深き思遣り、淚脆い同情、厭世悲觀等は哺乳時代に無限の愛を母に求めたナルチシズムの遺物である。リビドーの定着が起つてゐると、これらの念慮や遺物を一掃しきれないのである。そして、その定着したリビドーは精神分析の施法に據るにあらざれば無意識の結情（卽ち願望を宿す動機）となつて、長く遺るのであるから、我我の終生の運命は此れに因つて決定されるのである。三つ兒の魂は百歲を定命するのである。全能念慮及ナルチシズムが醇化され損なつて（卽ちそのリビドーが定着して）、無意識に遺るとすると、成熟後これが抑壓の抵抗を破つて、意識面に再現しようとする衝動を發してくるのである。この衝動に對

する防衞作用として理窟附といふことが出てくる。この理窟附は意識出來ない眞の動機でない替玉を捏造して、その替玉をもつて滿足して永久に動機の眞相の承認を拒絕しようとすることである。卽ちナルチス型神經症等は、飽くまで自己の有する全能念慮の自覺を避けて、自分の行へる我が儘、不平傍若無人の振舞等を、他の理由に歸する。例へば他人は自分を誤解してゐるとか、世間は自分を認めて吳れないとか、世擧げて濁り我一人淸しとか云つて理窟づけてゐる。又は自ら非常識たる事を以て任じ、他人を公然と侮蔑するのを以て自らの威嚴を保つ唯一の手段であると誤信してゐるのである。若し理窟づけに、更に猶ほ一つの防衞作用である處の投出作用が加はると、自己全能念慮及ナルチシズムを放棄して、これを他人に轉嫁してしまひ、我儘、頑迷、沒曉漢は自分ではない他人であるといつてこれを對手に塗り附けるのである。神經症が斯樣な症狀を展開するやうになると、遂には他人との折合が取れなくなり、それを知つて孤獨蟄居を選ぶやうになるのである。これが卽ち超然主義といふやつである。超然主義はナルチス型症狀であつて嬰兒の全能念慮に對する定着に基づくのである。この症狀が殊に拔群者とか著名な學者、文人等に頗る多く示されてゐる。そして世人が彼等のナルチシズムを傷けむことを只管おそれてこれを敬ひ、迎合して別扱ひすることは、彼等の症狀をますます嵩じさせるのみである。なぜなれば、神經症者はその症狀を尊重してそれを放棄する事を諾はないか

らである。彼等はその症狀を寧ろ誇りとなして、これを癒さんとするあらゆる手段に反抗するのである。そして自分らを特別扱ひにしてくれるもの、換言すれば變態者・精神的不具者あつかひをしてくれる人を欣ぶのである。

定着したリビドーは、この定着を起した時代の心の働きに、その現示の範圍を極限されてゐるのである。上へ上へと層を重ねる事に據つて、發達すべき筈の心の働きは、その發達の過程に於て、リビドーの轉位を受け損なふのである。これに反してリビドーが定着した心の或層は飽くまでもその活動を持續しようとするのである。然しながら定着を起さないで常態の發達を遂げた部分の心の働きは、かゝる幼兒的（即ちリビドーが定着した）リビドーの現示振りを一致融合出來ないものとして壓迫するのである。この壓迫は意識面の抑壓として及び無意識の幼兒的心の働が動機となつて意識面に來襲しようとする脅威に對しての防衞作用として示されるのである。この抑壓及防衞作用が持續されてゐる間は、一見常態と異らない心の働を示してゐるものであるが、一朝この作用が鈍るとか又は狂ふことになると、忽ちリビドーの定着を受けた下層の（即ち幼兒時代の）心の働を現はして來るのである。これが即ち精神作用の退行といふことであつて、神經症及精神症は常にこの退行に起因するものと見做されるのである。退行はリビドーが定着を起した箇所、其の時代、即ち心の發達の過程の中で

それに相當する層に達するまで戻るのである。この進行振りは、癡呆症(發狂)を見るのが最も適當な例である。例へば早發性癡呆症の多數は四五歲(抑壓期)頃の幼兒の心の層まで退き、老耄性癡呆症は二三歲の嬰兒まで戻るのである。症狀の深さは呆け方で分る。呆方の最も深いものは痲痺性癡呆症である。これは往々乳兒時代まで退行してゆき、糞便を弄したり又は野獸同樣の監禁を必要とする程下層の心の働きを示すやうになるのである。甚だしい退行になると老耄性の場合であつて、それは出產前卽ち子宮內にあつた狀態まで退行するものもある。こんな場合の症狀は、勿論足腰を立たすことは出來ないで、たゞ蹲踞してゐるのみである。

意識面の抑壓及防衞作用が鈍り、それによつて精神作用の退行が生ずると云ふのは、如何なる徑路に據るのであらうか。これは環境順應性能を有する心の働きが、この性能を持たない心の働きで、置換へられる時に辿る道筋である。心の働きの發達は環境順應性能を增す事に據つて遂げられるのであるから、上層の働きは此の性能を多く有して居り、下層の働きはこれを有する事が僅少なのである。前者は現實に處する力を有し、後者はこの力に乏しいのである。現實に處する力に乏しい心の働きは、瞑想(ファンタジー)と呼ばれてゐる。それで心の働きを環境順應性能の多寡に依つて區別すると、一は現實を受諾する心(普通意識面の働き)であり。他はこれを拒否する心、卽ち瞑想(普通無意識の働き)である

とされてゐる。總て心の働はリビドーに纒綿されて初めて活動することが出來、これが撤退される時は枯渇してしまふのである。リビドーは心の働きの驅使力である。上層の心、即ち現實を受諾する心は外界に對象物を有する心であり、下層の心即ち現實を拒否する心(瞑想)はこれを持つてゐない心である。それ故に、若しリビドーが主として上層の心の働きに纒綿してゐる時には、我々は現實に處する力、即ち環境順應性能をあらはし得るのであるが、若しこれが上層の働きから撤退されて、下層の働きに移動する時には、我々は此の性能を低め又は失ふに至るのである。前者の場合には、リビドーが外界の對象物に對し指向けらるゝのであるから、これを外向リビドーと稱し、後者の場合には、內界の瞑想に對し指向けらるゝのであるから、內向リビドーと呼んでゐる。外向リビドーは成熟者及精神常態者の特徵であり、內向リビドーは幼兒及精神變調者の兆候である。

リビドーの內向は如何にして起されるであらうか。これは外界の對象物を失つた場合であつて、新たにリビドーを指向くべき他の對象物を見附け損なつた場合である。リビドーが新對象物を見附け損なふは、如何なる理由によるであらうか。それはリビドーが甲の對象物から乙の對象物へ轉位する能力を失つてゐるからである。換言すれば、リビドーが撓性を缺いて居て融通が利かなくなつてゐるからである。リビドーに撓性が缺けてゐる時には代償物をもつて滿足する事が出來ないのである。甲を

失へば直ちに乙を求めてこれにリビドーを注ぎ、そこに趣味感興を持ち得る度量があること、郷に行けば郷に從ひ得る容器、貴に驕らず賤に悶えず、富に淫せず、貧に安じ得る性格などは皆これ環境順應性能である。これに反してリビドーに撓性が乏しいと事に處し變に臨む每に失意落膽し、自暴自棄して哀傷不幸の運命に弄ばれるのである。これ皆リビドーの內向であつて、卽ち神經症及精神症の兆候なのである。

リビドーに撓性が乏しいと云ふのは、何に基くのであらうか。それは幼兒時代の心の働きに定着が起つてゐるからだと云はねばならない。定着が起つてゐると、リビドーが下層（卽ち幼兒時代）の心の働きから上層（卽ち成熟者）の心の働きへ轉位する事が妨げられるのである。折に觸れ機に乘じて定着を受けてゐる心の働きにリビドーが再纏綿して幼兒時代に嘗つてリビドーが流れた古き溝渠に再び就くのである。これは卽ち精神作用の退行であつて神經症及精神症である。定着を受けてゐる心の働きにリビドーが、再纏綿するといふ其の折及其の機會は外界に指向けられたリビドー（外向リビドー）が其の對象物を失ひ、其れに對する代償物を見附け損なつた時に齎らされるのである。指向くべき標的を見失つたリビドーは幼兒時代の心の働き、環境順應性能に乏しい下敷の心、卽ち現實を無視する瞑想に纏綿してこれを復活し、そこに隱遁するのである。換言すれば、精神變調者は現實の世界

を棄てゝ、瞑想の世界に遊ぶものである。

原因を知れば結果を操る事が出來るのである。我々は神經症及精神症の原因が幼兒時代の心の働きに於けるリビドーの定着であることを知つた。如何にしてこの定着を避け、そしてその結果として生ずる精神變調を未然に防止し得るかは、精神分析學の教ふる處である。尙ほ既成の結果を見て、其の原因に迦り、その原因を除去すること、卽ち精神變調の治療は、精神分析の施法に據つて出來るのである。この施法は下積となつてゐる心の働き卽ち無意識の底深く沈んでゐる心の働きに定着せるリビドーの鐵鎖を切斷することである。リビドーの定着を受けた心の働き及びその集團は所謂無意識の結情をつくつて、意識面の働き及び言動の動機、卽ち願望の源泉となつてゐるのである。この結情の變更、改造若しくは破壞は、精神分析の期する處なのである。

二、精神分析法

精神分析學の研究によつて、精神變調者と常態者との相違は、種類の差でなくて寧ろ程度の差である事が解つた。變調といふことは常態が單に誇張されたのみであつて、決して新しい特徴が加はつたものではない。それゆゑ此の場合に見られる總べての症狀は、それが短縮されたものとなつて常態者に認められるのである。斯くして變態症狀は恰も常態症狀を顯微鏡に懸けて見るが如きものなのである。直接肉眼で認めることの出來ない容態が、自然といふ顯微鏡下に置かれた狀態にある變調者に於いては、明瞭に且つ顯著に觀察出來るのである。精神分析法はもと〳〵は變調症狀を癒し、即ち神經症や精神症の治療を期待してゐたのであつたが、前述の事實から考へて、變調症狀に對して爲すべき技工はそのまゝ常態のものにも適用することが出來て、相當の效果を收め得る事が解つたのである。勿論變調と常態との間は暈されてゐて明確な線をもつてこれを區分する事は出來ないが、症狀が論爭の餘地なきまでに顯著になつたものを玆に假りに變調と呼び、左程でないものを常態と呼ぶならば、後者の中には種々なる偏癖、傾向、性格を有する人物が含まれてくるのである。これ等の偏癖、傾向、性格はあながち變調とか病的とか云つてしまふことは出來ないが、不合理的又は反社會的のものは、生存

上。世に處するに當つて本人自身にとつて非常なる不利益であつて、人に嫌はれ、社會に排されるやうな結果を齎らすやうになる。この種の人物は世間に可なり多くあつて、殆んど總ての人はその生涯の或る時代に於ては此の缺陷を薄々と或は明かに自覺する事が少なくない。それで精神分析の施法には變調症狀に對して行ふものと、好ましからざる偏癖に對して行ふものとの二つの場合がある。この場合、前者を病的分析と呼んで、後者を性格分析と稱するのである。勿論、兩者の場合に於ける技工の原則には毫も異なる處はないのであるが、唯分析の期間に長短の差があるだけである。一般に云ふと病的分析は短期で終る事が出來るが、性格分析は可なり長引く。それは分析が困難だからである。病的分析のうちで最も困難とされてゐるものは精神症（發狂）である。神經症は比較的容易である。神經症が嵩じて精神症に近寄つたものは境界病症と云はれて、或る種の妄想症はこれに含まれてゐる。此の場合、神經症の嵩じたものであるか又は癡呆症（發狂）の初期であるかは區別し難いのである。性格分析は精神症又はその境界病症の分析の場合と殆んど同じ程度の困難に遭遇するものとされてゐる。

精神分析の施法は墺國ヴィーン市ジグムンド・フロイド教授の創意によるものであつて、その最初の研究は、ブロイアーとフロイドとの共著『ヒステリーの研究』と云ふ書物で、千八百九十五年、即ち

三十五年前に公にされたものである。フロイドは嘗つて著名なる佛蘭西の精神病學者シャルコットの門に遊んで催眠法の研究中、師シャルコットがヒステリー患者に催眠法を施し、任意にその發作を喚起させ得る事を證明したのを根據として、歸國してから舊師ブロイアーと共同してこの現象の研究を續行したのであつた。その結果として幾多の新事實が發見されたのであつたが、その中で最も重要なるものであつて、現に精神分析學說の根本概念となつたものは左の事實であつたのである。卽ちヒステリー患者に催眠法を施して過去の記憶を復活させ、この記憶をそれに纏綿してゐる感情と共に言語や行動によつて、表はせるやうにする時には、その症狀が癒ゆるといふ事實であつた。フロイドはこの事實の起因として『感情の括約』といふことを提唱し、ヒステリー患者は括約された感情で纏綿されてゐる過去の追憶に惱んでゐるものである、と主張したのである。そして、彼れは催眠法に據れる記憶の復活法を感情の抽出と呼んだのである。その後彼れは、中年の神經症患者の一婦人の來訪を受け、その患者の意に任せて數十分間自分の症狀に就いて自由に語らせて置く以外に何らの治療をも試みなかつたに拘らず、患者は訪問談話し行くたび每に幾分か症狀の輕快を覺えて來て、遂にこの『談話治療法』によつて全治するに至つたといふ經驗に鑑み、催眠法といふものが強ち必要なものでない事を知つたのである。それのみならず、催眠法が絕對に出來ない患者が頗る多いのである。例へば、恐怖

症、强迫症の如きは催眠法を頑强に拒否するものである。フロイドは嘗つてこの種の患者を試みに舊師シャルコットの許に同行して催眠法を依頼してみたが、當時歐米に比肩するものがない催眠法の大家と云はれたシャルコットでさへ、數回試みたが全く奏功しなかつたのである。其の後フロイドは多數の患者を取扱つた經驗から、催眠法は全然不要であるといふばかりでなく、反つて有害であることを認めて、これを其の技工中より除外することになつた。そして前記の「談話治療法」が精神的洗滌法(カサーチック)の基礎となつたのである。この精神的洗滌法の方法は、患者をして出來るだけ身神の緊張を解かしめ、心を症狀に集中させ、その間に念頭に浮び來る總ての考へを正直に何らの拘束や批判などを加へる事なしに告白させるのである。念頭に浮んでくる思考は、症狀には何らの關係もないもの、全く不合理で馬鹿々々しく思ふもの、辻褄のとれぬもの、又は恥づべきもの、外聞の惡いもの、若しくは嫌ふべき恐るべきものであつても、それを決して抑制したり忌避したりしてはならない。何故かと云へばそれらの思考は、定命觀を基礎とした科學である處の心理學の見地から見ると、必ず一定の原因、即ち動機（無意識にある）に基いてゐるものであつて、何らかの意味を持つてゐるからである。

動機といふものは緊密に症狀に關聯してゐるものであつて、その意味を知ることが出來れば症狀の基く動因（即ち病根）を推知する事が出來るのである。症狀に心を集中してゐる間、念頭に浮んでく

る思考を自由聯想と稱し、その仕方を自由聯想法と稱してゐる。

自由聯想法は次のやうに行はれる。

患者を長椅子に凭らせ、或は横臥させて、出來るだけ安樂な地位に寛ろいだ態度を取らせて置く。そして症狀の主なるもの例へば痙攣とか筋肉搐搦（肉體的轉換）とか、又は煩悶とか恐怖（代償的ヒステリー症）とか云ふやうな患者の持つてゐる症狀に心を集中させる。そして症狀を一心に念じさせて置く。その間なるべく努力することを避け、强ひて考へようとせずに、自然に浮んで來る思考を少しも憚かる事なく、恥づる事なく、恐るゝ事なく、全く無我無心の子供の心持になつて一切を語るのだといふことを告げる。そして分析者は患者の側面か或は後方に座を占めて、なるべく顏と顏とを見合はさないやうにし、殊に視線を合す事は避ける。これは患者に催眠影響や暗示を與へるのを防ぐ爲めである。なぜかといへば精神分析では催眠や暗示の反對なことを行ふものだからである。催眠や暗示では或る觀念を植付けるのであるが、精神分析では無意識に潛んでゐる觀念の塊（かたまり）卽ち結情（コンプレクス）を除去するのである。云はゞ邪念を取去るのであるからである。

前述の方法に依つて自由聯想法を受ける患者は、恐らくは、殊に初めての場合には暫らくの間全く沈默して仕舞ふか、或はこの法を繰返して强ひられると『何にも考へは浮びません』と答へるのが普

通である。患者は、分析者に對する禮儀の爲めに何か話頭を得ようとして雜談や批判などを試み、又は『考へが浮んで來ない』理由に就いて言譯がましい事を云ふのであるが、これ等は皆抑壓されてゐる色々な無意識の心が意識面に引出されようとするのに對して起つてくる抵抗と看做して、患者の機嫌を損ぜぬ限りは可成無視しなければならない。と云ふのは、抵抗の表現そのものに對して直接應答する事になると、それは却つて抵抗を强めることになるからである。殊に如何やうな題目に關しても、分析者は患者に對して長い說得や議論を試みてはならないのである。分析施法は精神分析學の講義ではないので、患者が精神分析學の知識を得れば得る程、彼れの無意識はこれを利用して抵抗防禦の具に備へて、自己の結情(コンプレクス)の放擲を拒むのである。分析は分析者と患者との間の奮鬪であるから、議論や說得をして精神分析學の知識を與へることは敵に武器を供する事となるのである。

分析の際に最も大なる障礙となるものは抵抗である、抵抗さへ破壞し得れば、分析は大半成功したといつてもよい。何となれば、抵抗がなくなれば無意識の結情(コンプレクス)は歪めらるゝ事なく、假裝象徵される事なく、自由に意識面に浮び、意識面の働きである理性、德性の中に織込まれて、意識面に於ける感情の轉位(戸惑、卽ち迷ひ)を解き、結情に纏綿してゐるリビドーを消散又は醇化させることが出來るからである。斯やうなわけで分析者の努力は主として抵抗を破壞することに向けられるのである。

抵抗の破壊は分析の過程中に起る轉嫁と稱する現象を利用して成し遂げられるのである。

轉嫁といふのは患者が自分の無意識の中に抑壓してゐて、直接意識面の心では自覺出來なくなつてゐる心の働きを投出（プロエクチオン）して、これを分析者になすりつける現象を云ふのである。この投出される無意識の心は、多くは抑壓前期の經驗や記憶であつて、主として父母から受けた印象である。これを轉嫁された分析者は、患者の無意識に宿る父又は母の心像（イマゴ）(面影)と同一化されてその名代となるのである(勿論無意識的に)。換言すれば、患者は嬰兒時代に父又は母に對して示した反應卽ち態度を分析者に對して再現し、當時の經驗や記憶を復活して同時にそれに隨伴してゐた感情を甦生し、これらを現在のものとして再び味ふのである。

斯く甦生した感情は勿論雙存性的であるから、敬愛と憎惡とを含んでゐる。敬愛の側で現はれた轉嫁を積極轉嫁といひ、憎惡の側で現はれた轉嫁を消極轉嫁と呼んでゐる。分析を完結せんが爲めには此の兩極の轉嫁が起つて來なければならない。分析者はその努力に成功せんが爲めには、患者の愛慕信賴、敬服の的となるのみでなく、更にまた憎惡、不信、侮蔑の對象とならねばならないのである。そしてこれらの轉嫁から完全に解放されて治療を終つた患者は、爾後、治療を開始した當時に持つてゐた無頓着な感情を再得して分析者と別れねばならないのである。若し患者がその後も引續いて分析

者に對して恩愛を感じたり、禮に來たり謝狀を送つたり又は口實を設けて訪問したり『未練を遺したり』或は憎惡、嫌厭を持續するやうな事があるならば、それは轉嫁が完全に解けてゐないで、病根は尙ほ未だ全く除去されてゐないものと看做さねばならないのである。要するに患者は分析を受くる前と同じやうな感情で、即ち全然『あかの他人』となつて、分析者と手を切らねばならないのである。

轉嫁作用は如何なる具合に働いて抵抗の破壞に與るのであらうか。これは抑壓せられて無意識に陷され、抵抗の蓋を以て蔽はれた過去の經驗や記憶を、分析者を對象として、これに轉嫁し、現在のものとして再び經驗し、それに纏綿してゐる感情（リビドー）を抽出（アブレアクト）し、同時に無意識に結情をつくつて過去をして現在に累させて居るもの（即ち邪念）を、分析者と云ふ鏡に照して、患者に認めさせると云ふ事實なのである。患者が分析者に轉嫁する過去の經驗や記憶及びそれに纏綿してゐる感情等は、患者は現在のものだと信じて、その原因が分析者にあるものだとして仕舞ふのである。だが、これは投出作用や轉嫁作用に基いた一つの錯覺に外ならないのである。この錯覺が訂正されてしまはない間は、分析者の鏡に映つて再現した過去の光景は、實は自分のものであつて、自分が嘗つて演じた過去の場面であつたのだと認めるわけには行かないのである。轉嫁を解くといふ事はこの錯覺の訂正である。錯覺は『迷ひ』である。それゆゑ轉嫁が完全に解かれてゐない患者は『迷は』ざるを得ない

のである。患者が平癒後尙ほ分析者に對して恩愛を感じ又は憎惡を懷くのは未だ全く『迷ひ』が解けてゐないからである。精神分析の目的は飽くまで『迷ひ』を解いて患者を悟道に導くのである。

患者の『迷ひ』を解いて悟道に導くこと、卽ち轉嫁を解くには、如何なる手段に據るべきであらうか。それは註釋の方法に據らねばならない。註釋によつて假裝や象徵を解き、意識面の心に憑據つてゐる感情を、その本體である無意識の結情に還元することである。還元といふ事は意識面に於て行はれなければならない。卽ち無意識の結情は意識面に引き出されなければ駄目である。結情は抑壓された心の働きであつて、抑壓の抵抗さへ除去されるならば自然に意識面に『浮ぶ』ものである。『浮ばせば迷ひは解ける』のである。然し『浮んだ』心の働きは、それが「浮んで」くる途で遭遇したる抵抗の强弱によつて、要される註釋に深淺があるのである。なぜならば假裝、象徵の程度は抵抗の强弱に依るものであつて、抵抗が强ければ假裝、象徵の程度は濃くなり、弱ければこれが薄いのである。假裝、象徵が濃ければ、註釋も深くなければならぬし、それが薄ければ淺くて濟むのである。註釋が正しいものか何うかといふ事は、患者がこれを受諾して、その結果、症狀が緩和するか若しくは平癒されるか何うかに依つて定まるのである。然し患者が受諾しても平癒しなかつた場合には、その註釋は誤つてゐたものと看做され得るのである。

誤つてゐる註釋を受諾した患者は、催眠法や其の他の影響で暗示を受けたものと少しも異らない。暗示が效果あるものだとすれば、それは一時的のもので、精神分析の場合のやうな恒久性の效果はないのである。若し又患者が註釋を拒否するやうな場合があつても、これは强ち註釋が誤つてゐるからだといふ斷言は出來ない。何故かと云へば、患者が未だ抑壓の抵抗を示しゐる間は、註釋の正否に拘らず、拒否するからである。かういふ場合の拒否は防禦作用、卽ち反應構成なのである。それゆゑ若し拒否が力强くなり、力說せられ、峻拒の形で表はれ、殊に感情（主として怒るとか又は恐れるとか）が一緒に出る時には、その註釋は確實性を有するもの、換言すれば、無意識の結情に近いもの、『圖星を指した』ものであると見て差支へないであらう。

抵抗を破り又は抵抗をなるべく低く持續させて分析を成功させようとするには、患者に對する分析者の態度が大切なことである。分析者は患者が轉嫁を起して來ても、これに對して逆轉嫁を起してはならない。患者が轉嫁に隨伴させたものと同一の感情を患者に對して見せてはならない。卽ち、患者の愛慕に對し愛慕を以て報い、憎惡に對し憎惡をもつて報ゆる事を避けなければならない。換言すれば、分析者が患者に對する態度は、全く煩惱を解脫した名僧智識の態度たることを要するのである。が、斯樣な態度は、努めて寛宥、濶達たらんとして示したもの又は故意に冷靜を裝うたものでは駄目

である。初め努力したり又は故意に示した態度でも、その習癖が作られるときにはその動機が遂に無意識に陷されて全く自覺出來なくなる。卽ち僞善的態度が無自覺で現はれる。僞善者と罵られるものの中には全く無自覺に不知不識に人に詐り己れを欺いてゐるものがある。虛言、妄言を永く使つてゐると、遂には自からそれを眞であると信ずるやうになる。『噓から出た誠』と云ふことに眞理があるのは精神分析でたやすく證明出來る。分析を受くる患者で殊に妄想症やナルチス型の症狀に惱んでゐるものは、自己欺瞞の策術には達人なのである。例へばナルチス症狀の一つである露出症に對する反應構成は謙遜とか內氣等であらはれる。この場合の反應構成は露出願望に對する第一次の抑壓と見られよう。謙遜とか內氣に對して第二次の抑壓がおこると、不謙遜、粗暴、傍若無人の振舞等を敢へて行ふやうになり、これに更に第三次の抑壓が加はると、これを投出して他人に轉嫁して仕舞ひ、自分では斯樣な態度をしてゐるものを見ると忌み嫌ふやうになるのである。これが所謂毛嫌ひと云はれてゐるものであつて、ナルチス症狀である。ナルチス症狀は自己愛の現示である。自己愛は人に『好かれ度い』『好い子になりたい』『憎まれたくない』と云ふ願望であらはれて來る。この願望が强いと、『人に嫌はれまいか厭やがられはしまいか』といふ念慮に驅られて、己れの態度、身振りを非常に氣にかけて、その爲めに憂き身をやつすのである。傲慢不遜や氣取り度い願望を抑壓して外面には謹愼謙讓

を裝つてゐるものも、心の底には、即ち無意識には自惚れ（ナルチス症狀）が潜んでゐる爲めに、何かの拍子で、詰らぬ事で『感情を損なふ』のである。『感情を損なふ』と云ふことはナルチス結情が攪亂されるからである。尙ほ抑壓された心の働きは投出され易いから、これを他人に塗附け（轉嫁）て、他人を嫌ひ排斥するのである。『彼奴は傲慢不遜だ』とか、『あの人は氣取りやだ』とか、『氣障だ』とか云ふ批難は多くは他人でなく自己に適中するのである。斯うなると、ナルチス症狀は更に嵩じて來る。と云ふのは、第二次、第三次と抑壓を重ねることだからである。そして遂には『氣取らないやうに』と氣取り『氣障に思はれないやうに』と氣障に振舞ふのである。恰度『己れは決して噓を吐かない』といつて噓吐くのと同じである。ナルチス結情に基づく自己欺瞞は美辭麗句によつて援けられると、更に巧妙となつて益々劇的光彩を帶びるやうになる。例へば誠心誠意以て事に當るとか、熱誠鬼神を泣かしむとか、俯仰天地に愧ぢずとか云ふ事が附け加へられると、欺瞞の城塞は益々難攻不落となる。

精神分析者が患者に對して示す逆轉嫁を防がうとするには、決して欺瞞即ち抑壓に據つて出來るものではない。例へば、患者に信頼を植附けようとする手段、努めて隱忍自重しようとする事、又は人格の高いことで患者を感銘させようとする術策、或は職業的自尊心等に據つて逆轉嫁を制止しようと

する企ては、全く無效なのである。斯樣な企ては皆抑壓である。そして前述の手段や努力は抑壓に基づいてゐる意識面の心であるが、その眞の動機となつてゐるものは無意識にあるナルチス結情である事は、我々は精神分析に據り確認し得るのである。分析者が患者に對する態度として逆轉嫁を制御するといふ事は、分析者が分析を行ふに當つて第一に要する資格の一つである。逆轉嫁の制御は、廣い意味でいふと感情の制御である。感情の制御は精神分析の目的の主要部分となつてゐる。それ故に分析者は先づこれを自己に適用して、その無意識に藏する結情、卽ち邪念を除去しなければならない。自己分析をやらねばならぬ。分析者の役割は、無意識の底深く埋沒して居る心の障害物を取り除くと云ふ點に於て、恰も外科醫が異物、例へば銃丸が彈込まれてある肉體の部分を切開して此れを抽出する場合に比考する事が出來る。外科醫はその道具として刀（メス）を用ひるが、この刀は患者に對し傳染を防がんが爲めに常に消毒して錆止めをして置かねばならぬ。分析者が用ふる刀は自己の精神作用である。それ故に、これを常に清淨無垢に保たねばならない。この保存法は不斷の自己分析である。斯くして、分析者は實踐躬行者たる必要があるのであつて、『醫者の不養生、儒者の不行跡』と云ふ事は、如何なる口實の下にも、苟くも精神分析者たるを以て任ずるものには容認出來ないのである。

無意識の心が意識面に現はれようとするに對して、これを飽くまで防止しようとする抵抗は常に一

定不變の力で働いて居るかと云ふに、決してさうでない。これは時々緩められるのである。この緩みは睡眠中に生ずるのである。即ち夢は抵抗が緩められた時に無意識の心が、假裝、象徵の下に意識せられたものであるから、夢の註釋は無意識に達する最良の手段とされるのである。從つて自由聯想は夢の現在內容を出發點として着手するのが極めて便宜なのである。然し或る患者は、夢を全然見ないとか、又は忘れて了ふといつて容易に自分の夢を語らない。だが、睡眠中は殆んど斷えず夢を見てるもので、夢を見ないと云ふのは、夢を忘れるからである。これは精神分析を行ひ、その記憶を復活させる事に依つて證明出來る。夢を忘れるとか、又は夢を全然見ないと主張する程、それほど深い忘れ方をする理由は、畢竟するに、强い抵抗があることを意味してゐる。それ故に夢を記憶しようとする努力は常に抵抗の破壞に貢獻することになる。忘れた夢を思出させ、その現在內容を復活させる事はユングの考案に據る語句聯想法によつて出來る。この方法は廣範圍に及ぶ語句を百ばかり選び出し、これを順次に患者に讀み聞かせ、そして各語に就いて聯想を取り、それを暗示（ヒント）として追憶を起させるものである。

夢の分析には、必ずしも夢の全部を記憶に復活させる必要はない。その斷片であつても足りるのである。若し一斷片でも覺醒後に記憶して居るか又は記憶に復活し得た時には、これを出發點として旣

述の聯想法を適用するのである。若し大部分が記憶されてゐる時は、それを數片に切り離つて、各その斷片について適宜な處置をとるのである。數多の斷片の中、どんなものが最も重要であり且つ信頼できる資料を分析に供するかと云ふに、それはその中の朦朧とした點、不合理な點、曖昧な點が重大なのである。何故ならば夢の目的としては歪み、假裝、象徵の手段に據つて意識面の心を誤魔化すのであるから、一番譯のわからない樣になつて現はれる個所が一番肝腎な部分なのである。のみならず夢の假裝の極めて重要なる手段である轉位作用（卽ち主客轉倒）は、重要なものを極めて詰らぬものに見せ、詰らぬものを大袈裟に見せるからである。覺醒後の記憶に如何にありありと殘る夢であつても、其の中には必ずぼんやりした處、辻褄の合はない事柄が含まれてあり、そして斯樣なものこそ記憶から脫出し易いのであるから、覺醒後の腦裡に殘る夢の場面には、處々に窪みが出來る、卽ち夢の記憶中には必ず斑が出來る。この窪みや斑は聯想に據つて補充することが出來るのである。

夢の斷片に心を集中するといふ事は、これを一心不亂に念じて何事も思はないと云ふ事で、換言すれば、無念無想の境に入つて只管その事をのみ思ふのである。そして斯く念じつゝある間、努力する事なく自づから『浮び』來る思慮に對しては、何らの批判を試みる事なく、且つ取捨する事なく、自由に口外するのである。斯樣な鹽梅で出て來る考慮は、夢の斷片に必ず間接、直接何らかの關係を有

してゐるものと見ねばならぬ。このことは科學としての心理學は、他の一般科學と同樣に、嚴格なる定命觀を基礎とするものであるから、原因なき結果は決して認めないのである。我々の一擧一動、一言一句、一思一慮には常にそれ〴〵相應な原因即ち動機がなければならない。如何なる心の働き、例令それが夢であらうとも、空想であらうとも、若しくは瞬時間腦裡に極めて微々と閃いて忽ち永久に消え失せる念慮と雖も、又は『變な』心持、何々のやうな氣持でさへも、これを神神分析を行つて見ると立派な原因に辿る事が出來るのである。即ち心の働きには絕對に偶然と云ふべきものはないのである。哲學や宗教で『自由意志』と云つてゐるものは心理學では全然認めないのである。斯く夢の斷片から得らるゝ聯想は、常に其の斷片と密接な關係を有してゐて、原因結果の聯鎖をなしてをるものである。そしてこの聯鎖が平滑に行はれるか否かといふ事は、意識面の心にかゝつてゐて、意識面の心が働けば働く程益々掻き亂され、複雜化されるのである。批判力、取捨力、考へ出さうとする努力、これらの熟慮、考察は意識面の働きであるから、これが出てくると聯想は狂はされ、歪められる。その結果として、無意識の結情が意識面に現れて自覺されようとする時には愈々抵抗を增してくるのである。それ故もし患者が夢を見ないとか、又は忘れたとか、或は分析中に聯想が尠しも『浮ばない』と云ひ張る時には、これも一種の抵抗だと看做して冷靜にその機會を待つて、決して强ひたりして努力考慮を

費さしてはならないのである。

前述の狀態のやうにして自由聯想によつて得られた思慮が、如何に荒唐無稽に見え、辻褄の合はぬもの、又は聯想の出發點として採つた夢の斷片に全く緣の無いやうに見ゆるものであつても、それは夢の現在內容に對する其の潛在內容と、卽ち夢の表現の眞の動因である其の眞相と密接な關聯の存在するものである。そして、精神症及び神經症の症狀は、その精神作用として存するもの（例へば、煩悶、恐怖、癇癖、强迫觀念等）又はその肉體的轉換（例へば、痙攣、痲痺、搐搦、神經痛、强迫言動等）を起した場合の何れを問はず、夢と同一の機制に基くのであるから、夢の斷片から得られた聯想は、症狀を出發點として進められた聯想と合致して來るものでなければならない。この合致は聯想の確實性を定める規準であり、そして、斯やうに合致した點に適順する樣な夢又は症狀の註釋は、患者のたやすく受諾する處となるのである。患者が受諾した註釋であつて、それが正しいものであるならば、症狀は直に又は時を逐うて癒えるのである。

症狀又は夢を聯想の出發點として集め得た思慮は、元來は無意識のものであつたが、これが綜合されて正しい註釋を受けて患者に受諾された時には、爾後患者はこれを意識面の心となしてその中に織込み、咀嚼し盡すのである。換言すれば、無意識の結情は意識面に引出され、意識面の心（主に理性

徳性）の光に照されて崩壞するのである。それに纏綿してゐたリビドーは、その流れの方向を轉換され、從來の病的又は反社會的の吐け口を放棄して、健全にして且つ社會的なる道程を辿る事となるのである。更に換言すれば、嬰兒時代に定着を起して發達を妨げられてゐた心の働きの傾向が、その定着した個所で、その原型の儘、間斷なくリビドーの扶養を受けて、意識面の心又は言動の動機をつくつてをつたもの、卽ち、結情となつてゐたものは、此處に初めて除去されるのである。そしてその結果、リビドーの流れは古き（嬰兒時代の）溝を捨て、新しき溝に就くのである。これリビドーの醇化（ズブリマチオン）である。

症狀又は夢の意味が註釋に依つて、患者に受け容れられて症候が癒ゆると云ふ事實、卽ち、精神分析が奏效すると云ふ事を、更に他の見地から觀る時には、症狀の平癒は心の働きの間の軋轢、葛藤が解決された爲だとも云はれるであらう。心は靈魂と云ふが如き單個な獨存的なもので出來てゐるものではなく、多數の働きの傾向が集合してゐるものと見られてゐる。これらの傾向中には相互に容認し合はぬもの、一致兩立の出來ざるものがあつて、その結果、軋轢葛藤を生ずるのである。二つの傾向の軋轢葛藤は、その何れかゞ現場から驅逐されるまでは持續されるのである。この葛藤が意識面に於て起り、環境順應性能を有する心の傾向が、これに反する心の傾向と軋轢してこれを意識面より驅逐

するに至つた時に、この作用を抑壓と呼ぶのである。環境順應性能を有してゐる心の傾向で、現に意識されてゐる働き、又は何時でも意識され得るやうになつてゐる卽ち前意識にある働きは、これを現實我と呼ばれてゐる。現實我の一部が分化し、特に高き德性、理性の現示に資してをるものは、超我若くは理想我と稱されてゐる。現實我は常に現意識及び前意識の働きを構成してをるに反し、理想我の一部は無意識に、一部は意識面にあるものとされてゐるのである。猶ほ理想我は現實我を一致兩立し難いものとして壓迫するのみでなく、現實我が一致出來ないものとして無意識に抑壓した心の傾向までも、一層峻烈に壓迫してゐるのである。斯くして、極めて激烈なる葛藤が無意識に於て理想我と他の本能的衝動に基く心の傾向との間に行はれるのである。そして無意識にある理想我は、所謂良心といふべきもの〻基因となるのであるから、この種の葛藤は時としては『良心の呵責』として自覺されるのである。無意識に抑壓せられた心の傾向は、常にリビドーに纏綿されて、意識面の心や言動などの動機、卽ち願望を形成してゐるのであるから、この願望が外界（卽ち環境）又は內界（卽ち精神作用）の刺戟に出逢ふ時には、何時にても實現しようとする傾向を示すものである。この傾向を抑壓し壓迫するものは、現實我、又は理想我である。それ故に現實我又は理想我の力が十分であつて、抑壓、又は壓迫を完全に持續し得る間は、精神作用は外見上常態を帶びてゐるが、ひとたびその力が弱

めらるゝ時は、抑壓、又は壓迫は一部失敗に歸して、願望と現實我又は理想我との間に軋轢葛藤を生じ、その結果として願望は互讓の下に實現するのである。これが症狀となるのである。互讓といふのは軋轢してゐる兩者が、各その要求の一部を讓り、他の一部を滿たす事で行はれるのである。即ち、その結果として生ずる症狀の中には、抑壓又は壓迫される心の傾向と、これを受容れる心の傾向との兩要素が含まれてゐて、これらが表現されてゐるのである。さういふわけで症狀の註釋は常に二つの相反した立場から爲すことが出來る。一つは無意識の願望滿足であり、一つはこれを制禦しようとする心の現はれである。例へば、ヒステリーの典型的發作は、抑壓せられた性的願望が假裝のもとに滿足されたものと見ても宜しく、或は不倫な願望に對する自己膺懲（又は良心の呵責）と看做しても宜しいのである。症狀の一つの要素が假裝の下に於ける願望滿足であるとすると、この願望がむき出しのまゝ、即ち假裝されずに現はるゝ時は、その願望は意識される事となり、現實我が症狀の裏面にある仕掛を看破するから、症狀は症狀たる性質を失ひ、願望は何らの障礙なく、意識面の心として實現し、その目的を遂ぐるのである。そして、現實我はこの際に願望に纒綿してゐるリビドーを抽出して、他の方向に轉換し、環境に適應するやうに利用する事が出來るのである。換言すれば現實我が若し無意識の動機（願望）の眞相を看破する事が出來た時には、これを任意に改變して自由に操縦する事が出

來るのである。症狀の註釋が正確であつて、これが患者に受諾された時は、恰度この狀態が齎らせられるのである。

精神分析の施法によつて、症狀が癒えると云ふ事實を、更に猶ほ他の見地から說明すると、症狀はリビドーの轉位に基くのであるから、これを還元すれば、除去されると云ふ事になるのである。轉位といふ事はリビドーがその本原的に纒綿してゐる本體である無意識の結情（心の働）から游離して、單獨に意識面に『浮び』、意識面の他の心の働きに附著して寄生的存續を爲すのに因してをる。意識面に『浮んだ』リビドーは感情として自覺することが出來る。轉位とは即ち感情の『戸惑ひ』である。感情の『戸惑ひ』は『迷ひ』を生ずる。『迷ひ』は感情を還元すれば解けるのである。意識面に『浮んだ』リビドーは、これを再び無意識に追ひ込んで、其處に永久に封鎖して置く事は出來ない。還元させるには無意識にある本體を意識面に呼び寄せ、意識面で行はせるのでなければ駄目である。無意識にある本體は抑壓せられた心の傾向であるから、その抑壓を解き、此の傾向を意識すれば可いのである。斯ういふ狀態は、症狀を出發點として得られた聯想を一括し、其の註釋を試み、そして若しこの註釋が正しきものであつて、患者が受諾した場合に限つて齎らされるのである。

この說明を例證しようとするには、强迫症狀を取扱つてみると明瞭にする事が出來る。抑壓されて

直接の手段による滿足が拒まれた性的願望に纏綿してゐたリビドーが、肉體に分布せられて肉體的轉換として症狀を現はしたものが所謂轉換性神經症であり、この分布が妨げられ、リビドーの轉位に基く精神作用として示されたものが、所謂代償性神經症である。斯う見る時は、前者はヒステリー症、後者は强迫症で代表されるのである。即ちヒステリー症及び强迫症は同一の基因を持つて居り、唯その表現振りを異にするのみである。それゆゑ精神分析の技巧は兩者に對して共通なもので足りるのである。何故なればこの技巧は表面に現はれてゐる症狀には少しも觸れて居ないで、裏面に潛んでゐる結情を處置すれば可いのだからである。從來の精神治療醫學は主として暗示療法であつた。暗示療法は觀念の種子を植込むのであるが、精神分析は恰度これと反對に、有害なる觀念の種子を引抜くのである。換言すれば、分析は『邪念』を去り、『迷ひ』を解くのを目的としてゐるが、暗示は催眠狀態の下に又は意識を沒却せざる範圍に於て常に『迷ひ』を强ふるのである。催眠施法者又は暗示治療者はこの點に於て、患者に對し特別の態度を見せなければならぬ。即ち暗示をして效果を生ぜしめんが爲めに患者を威壓し、心服せしむるやうに振舞はなければならない。斯樣に振舞ふのは堂々たる風貌凛凛たる容儀を示し、芝居じみた見えをも切らねばならぬ。精神分析者は斯樣な欺瞞態度は全く無效なことを知るのみならず、また治療にはそれが全然不必要なことをも認めたのである。と云ふのは、事

實上今日まで精神變調の平癒は暗示療法よりも寧ろ宗教的操作に負ふ處が多かつたからである。そして宗教的方便の中には、精神分析の技巧に近いものがあつたからだとも云はれるであらう。のみならず、暗示療法の目標としてゐる處は症狀そのものである。症狀は云はゞ影であり、その實體は無意識にある結情である。影を追ひ廻つて實體に觸れなかつたら、その努力は全く徒勞といはねばならぬ。暗示療法はこの種の努力に當つてゐる。が、そんな努力は無效に終るばかりでなく、却つて往々有害な結果を生む事がある。それは、暗示に據つて症狀を甲の個所から乙の個所へと移す事が出來る。又は一つの形で出てゐるものを、他の形に變らせる事が出來るからである。窪んだ護謨毬を壓してその窪みをあちこちに移すやうに、又は前門の狼を逐つて後門に虎を入るゝが如きものが催眠暗示である。この手段は、時に依つて比較的安全な個所から危險な個所へと症狀を逐ひやることがある。例へば顏面の痙攣、搐搦(チック)を癒さうとしてこれを心臟へ移し、心臟狹窄又は痲痺を起す事があり、ヒステリーの發作(肉體的轉換)を治さうとして、これを杞憂性(アングスト)ヒステリーに更へて鬱憂、煩悶の結果、患者を自殺に導く事があるのである。

斯くして、精神分析の施法には、催眠及び暗示の影響は害があつても決して益の無いものとして出來るだけ避けるのである。殊に强迫症狀の取扱ひには、直接その結情、即ち病原に觸れ、その象徵的

表現（卽ち皮相的現示）に外ならない症狀の取扱を避けなければならない。この注意を怠るときは症狀は肉體的轉換を起してヒステリー症に變るのである。これは病勢の亢進であつて緩和ではない。重らすのであつて癒すのではない。强迫症狀は强迫症狀として治さねばならぬ。他の症狀に換へてはならないのである。精神分析はこの手段に據る唯一の治療法である。卽ち影である症狀を無視して、その本體を處置するのにある。本體は無意識にある結情である。結情は意識面から抑壓せられ、抵抗の蓋を以て鎖され、それが爲めに自覺出來なくなつてゐる心の働きである。それ故に『忘れようとしても忘れる事の出來ない强迫觀念（症狀）は思ひ出さうとしても思ひ出す事の出來ない心の働き（結情）に基くのである』と云はざるを得ないのである。あらゆる說得、論理の力、總ての理性、德性、意志、決斷の力に反抗して意識せられる觀念は、その源泉に觸るゝにあらざれば決して除去出來ないのである。源泉との接觸はこれを意識面に引き出すにあらざれば出來ない。そしてこの源泉、卽ち結情は各人がその無意識に宿してゐる獨得のものであるから、他人から注ぎ込み得べき性質のものではない。卽ち分析の終局の成果は、他力ではなく、自力に求めなければならないのである。症狀の註釋は如何に巧妙に、推理、理窟附又は美辭、秀句に富んでゐても、患者の聯想が終にその結情に導かれてゆける樣なものでなければ役立たないのである。これに反して、如何にそれが背理無稽に見え、曖昧出鱈目

な牽强に過ぎないと思はれるものでも、患者に受容れられて症狀の緩和を齎らした時には、註釋はその目標を誤たず結情に觸れたものと看做されるのである。精神分析は飽くまで實踐的である。論より證據に重きを置く學術である。數萬卷の論文も一事實を破るの力なく、百日の說法も無意識の結情に觸るゝにあらざれば一屁だにも價しないのである。註釋はなるべく簡單を尊ぶ。時に依ると、一語で盡し得る場合すらある。また時としては、沈默が無限の價値を有する事がある。これ無言の說破、悟道である。悟道は結局自力によらねばならない。精神分析の效果は自力による悟道に據つてのみ得らるゝのである。そして、其の價値と確信とは、被施法者(患者)に於ても、また施法者(分析者)に於ても、實地に當つて初めて求められるのであつて、議論などで、强ひられるやうなものではないのである。

議論で確信を强ひる事が出來なかつた場合に、實際は此れを齎らす力があるのである。それ故、一實例を擧げてこの章を結ぶ事とする。

第一例、强迫感染恐怖症(ヒポコンデリアック、フォビア)(潔癖症の一種)

三十二歲の男子、某大學文科出身、文藝雜誌記者、發情期頃より潔癖症狀を出した。殊に病毒の感染といふことを恐れてゐる。例へば一夕錢湯より歸つて指頭に擦り傷を發見した。そこから病毒が

感染するのではないかと云ふ恐れの爲め、一夜を不眠で過した。患者はこの恐怖の理由を全く知らない。しかもこの恐怖を論理の力で取去らうとしても出來ないのであつた。

分析

患者は、所謂知識階級に屬してゐるので、分析を受諾するに必要な程度まで前記の症狀に關した精神分析的説明を與へ、次いで次の健忘を復活させた。

一、拾一二歳の頃小學生徒として修學旅行中、神社佛閣の前で脱帽敬禮するのが厭ひで、常に他の學友と仲間はづれをしてゐた。何故だか自分には其の動機がわからなかつた。

二、拾四歳の時祖父の死に出逢つた。彼れは死體を見るのを嫌つて、とう〳〵見なかつた。葬式後彼れは形見分けを貰つたが、これに手を觸れるのを忌んで戻して仕舞つた。

前の二つの記憶は症狀（即ち病毒感染恐怖）を出發點として、求められた自由聯想に依つて喚び起したものである。

註釋

症狀は接觸禁斷(タブー)恐怖に因してゐる。

と云ふのは、患者は禁斷されたものに觸れるのを恐れるのである。神社佛閣に禮拜するのを厭うた

のは、敢へて不敬な動機に基いたのではなく『觸らぬ神に祟りなし』、接觸を禁斷されたもの、その禁斷を犯すのを恐れたからである。禁斷を犯したものは、そのもの自からが禁斷の的とならなければならない。卽ち禁斷は感染性を有するものである。死體を見る事、これに手を觸れるといふ事は、死體となつたが爲めに接觸禁斷の的となつたものに接觸することで、その接觸によつて禁斷の感染を受けざるを得ない事になる。これを受けると自分も同樣に禁斷の的卽ち死體となる。換言すれば、感染は死の感染であり、感染の恐怖は死の恐怖である。接觸した結果、感染して死を來すといふものは、病毒に外ならないのである。これは卽ちリビドーの轉位（感情の戸惑）なのである。

前述の註釋は、如何に尤もらしく、如何に巧妙に理窟附され、また辭句が練られたものであつても、まだ無意識の結情に達して居ないのであるから、假令患者は意識面の理性でこれを受諾したとしても、症狀の平癒には毫も資する處がないのである。患者は恰度『論語讀みの論語不識』と云ふぐらゐな程度の啓蒙に達したのみで、悟道することは出來ないのである。何故かと云ふに、患者は聯想に依つて一二の記憶を復活したに止まり、それ以上の自力を使つてゐないからである。そこで、分析を更に進めんが爲めに、夢を記憶すべきことを勸めた。數日經てから彼れは次の夢を語つた。

夢、『齒が拔けた。一本拔けたかと思つてゐると續々拔けてきて、口中が齒で一杯になつた。非常に

不快な夢であつた。』

夢の註釋

これは、典型的の自瀆衝動の夢である。自瀆衝動は『氣が咎める』といふ心持に伴はれるものである。卽ち接觸禁斷恐怖である。接觸の目的物は性器である。嬰兒時代に性器を弄ばうとする傾向又は其の癖が、母や保姆などから強く『禁斷』されたのに基因してゐるのである。哺乳時代に能く性器に手を觸れようとする子供がある(男女に係らず)。これは俗に『蟲のせゐ』とか『癇が起つた』などと云はれてゐるが、精神分析ではこれを自己性的滿足と呼んで、將來卽ち發情期が到來してから自瀆行爲の習癖に陷入る土臺と見做してゐるのである。自己性的滿足の衝動卽ちその願望が、發情期に到つて强められるリビドーに結附く時は、嬰兒時代に受けた『禁斷』の印象やその念慮も亦益々深刻となつて、それに纒綿してゐたリビドーは游離し、感情が意識面の働きに轉位(戸惑ひ)されて來るのである。

聯想、記憶の復活、註釋などが戸惑ひしてゐる感情をその本體に還元し得ると云ふ事、卽ち『迷ひ』を解くといふ事は如何にして出來るかと云ふに、それには戸惑ひしてゐる感情は飽くまで正しいのであつて決して誤つてはゐないが、この感情に宿かししてゐる意識面の心が間違つてゐると云ふ事實を

知らなければならぬ。感情が正しいと云ふのは、その本原である結情に纒綿したリビドーが意識面に現はれて感情として自覺せられる時には、この感情と戸惑ひした感情とは同一なものでなければならない。それゆゑ此の同一性を意識面の心が認めさへすれば、二つの分離した感情は再結合して一つのものとなることが出來るのである。これが卽ち還元である。例へば、前記の患者が嬰兒時代に母又は保姆から受けた『禁斷』の念に伴ふ恐怖と、その後に經驗した死體と其の形見品に對する嫌忌と、また神社佛閣を禮拜する際に薄々感じた恐怖及び病毒の感染恐怖と、或は自瀆衝動（これは夢より得た聯想から認められた）に伴はるゝ『氣咎め』等の中に、同一な性質のものがあることを確認さへすれば可いのである。戸惑ひした感情に宿かしした心の働きは、常に同一な感情で彩られる事になる。そして戸惑ひ卽ち轉位は次へ〳〵と起され『迷ひ』は續々と起り、遂には全く其の本原の性質と異つた場合と時とに移されて、所謂千變萬化、神出鬼沒、全然豫想外なる形で現はれるのである。然も斯樣に廣汎に亙つた轉位と雖も、常に同一の感情の背景に基くのであるから、遂には一つの聯鎖としてこれを辿る事が出來るやうになるのである。感情は自から味ふものでなければならない。他人が注入する事は出來ない。これは卽ち自力に據らなければならない所以である。

患者は夢の註釋によつて、聯想を更に深く無意識の結情に接近させ、それによつて症狀の大部分を

除去し得たのである。

——（終）——

昭和五年三月十二日印刷
昭和五年三月十五日發行

フロイド精神分析學全集

(快不快原則を超えて
強迫神經症)

定價金壹圓五拾錢

譯者　對馬完治
發行者　和田利彥
印刷者　島源四郎
東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷所　日東印刷株式會社

發行所
東京市日本橋區通三丁目八番地
春陽堂
振替東京一六一七電話日本橋五一・六四一・三七八八

東京日日新聞學藝部編 忽五版
□定價壹圓九拾錢
□送料拾貳錢

生きた科學

目次

各專門五拾博士執筆、科學と生活との諸調として最高の家庭寶典とも云ふべき書。

東京日本橋・通三
春陽堂
電話(日)五一•六四一
三七八八
振替(東)一六一七

フロイド精神分析學全集

快不快原則を超えて
強迫神經症

對馬完治譯

●

精神分析學研究所

春陽堂

フロイド精神分析學

快不快原則を超えて
強迫神經症

精神分析學研究所

對馬完治譯

フロイド
精神分析
学全集 L

快不快原則を超えて
強迫神経症



T・I・P・A・

精神分析学研究所

フロイド
快不快原則を超えて
強迫神経症
精神分析
学研究所

フロイド精神分析學全集

（第一期出版）

一、夢の註釋。（第一回刊行） 大槻 憲二

二、夢の註釋補説。 大槻 憲二

三、日常生活の精神病理。 バチラー・オブ・アーツ 矢部八重吉

四、群集心理と自我の分析。宗教の未來。レオナルド・ダ・ギンチ。 長谷川誠也

五、機智とその無意識に對する關係。 長田 秀雄

六、快不快原則を超えて。强迫神經症。（第二回） 醫學士 對馬 完治

七、自我とエス（附、註釋）。妄想性痴呆症。 バチラー・オブ・アーツ 矢部八重吉

八、性説に關する三論文。ヒステリー研究 醫學士 淺羽 武一

九、トオテムとタブウ。宗教儀禮としての强迫神經症。 文學士 仲小路 彰

規定

四六版上製クロス装 各册紙數約三百五拾頁

定價各壹圓五拾錢、第一回刊行より逐次分賣

フロイド
精神分析學全集

（第一期出版）

最新科學の最大驚異、世界文化の革命的事實！ こゝに肇めて綜合的體系的に全人生の深秘は展開闡明された！



ジグムンド・フロイド

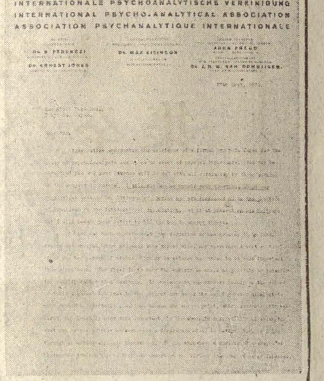
「われ天界を屈服せしめ得ずんば、下界を動亂に導かん！」

（ジグムンド・フロイド）

東京・日本橋・通三 **春陽堂**

振替（東）一六一七
電話（日）五一・六四一
三七八八

ジヨーンズの來簡


INTERNATIONALE PSYCHOANALYTISCHE VEREINIGUNG
INTERNATIONAL PSYCHO-ANALYTICAL ASSOCIATION
ASSOCIATION PSYCHANALYTIQUE INTERNATIONALE

DR. S. FERENCZI
DR. ERNEST JONES
DR. MAX EITINGON
ANNA FREUD
DR. J. H. W. VAN OPHUIJSEN

萬國精神分析學學會の前會長として世界的最高權威なる氏は、親しく書面をもつて、我國の**フロイド全集飜譯**を衷心から欣び、その事業の完成のために、甚大な協力的支持と研究方法に對する懇篤な忠告、助言を本研究所宛に寄せらる。

×

今日まで人類の知的發達は三つの大なる劃期的段階を經過してゐる。その第一は、**ガリレオ・コペルニクスの地動説**の確立である。それにより人間の宇宙中心の獨善的迷盲は打破されその愚かしき自惚は粉碎されたことは、云はゞ人間の無智な自負心に對する天文學的負傷とも考へられよう。その第二回は、**ダーウインの進化論**であり、人間は神々によつて創られた特殊な存在でなく、下等動物と運命を共にする憫然たる一自然物に外ならず、これを生物學的負傷と呼び得よう。更に第三回として、こゝに**精神分析學の發見**となつた。この結論は一見、自由なる意志、精神、行爲、歴史等々はすべてその根柢に無意識の強力な基礎の必然性によつて支配され人間の無智なる自誇は徹底的に震駭された。併しまた一方「自然を克服するには先づ屈服さるゝを要す」と云つたフランシス・ベーコンの言の如く、この自覺によつてのみ眞の人類の輝しき發達は始めて固く將來に約束されるのである。

×

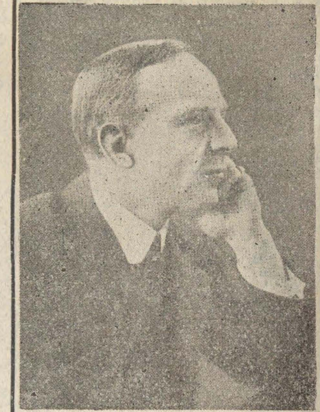
七十餘歳なほ研究に旺盛な業績を上げつゝあるジグムント・フロイド、ヰーンの一醫師としての彼によつて發見確立された「精神分析學」は、正に最近科學の最大驚異である。五千年來、人類文化史を編み來つた、哲學・宗教・道徳・藝術・及び科學のすべては、その根本原理から覆へし變革した、實に截然として一大紀元を畫するもの、その對象領域は幾んど無限の廣さに亘らんとしてゐる。

×

「精神分析學」の既に明かにせる所によれば、我々の意識、意識面とは、その根柢たる無意識的領域に比する時は、全く僅かに九牛の一毛にしか過ぎざるもの、從つて我々の凡ゆる言動は、現象は悉く無意識の絶對的支配を受くるものである。かくて我々の身體及び精神の眞の主權者は、決して意識ではなく無意識そのものである。しかも無意識は赤裸に現象に表示されるものではなく、種々な全く容易に理解し得ない假裝、變曲轉相を爲し、その本質の把握は精確にして獨自なる科學的分析を必要とし、こゝに精神分拆學の重要な方法が、組織化され、その巨大な素晴しい體系が構成されんとする。

×

その發見後未だ日淺きに拘らず既に文化のあらゆる方向、領域に對し驚く程の高速度の下に革命的な收穫を示し、生存・性慾の謎は瞭然と照破されんとする。——しかも現代文明は行詰つた政治に、經濟に、産業にあらゆる、社會現象はすべて盲路地に迷ひ込み現實と理想の相剋、刻々と尖鋭化する矛盾對立の生活苦は、一層、これ等に對し全く今日までの意識面に限定されるいかなる理論も實踐も、殆んど何ら効果を期し得ず、唯徒らに新衣を纏ふた老廢物の流行的繰返しにすぎない。しかも今やわが精神分析學こそ、この深刻な生活の內的矛盾、抑壓の苦惱の解剖にその研究の焦點を有す、その葛藤矛盾の揚棄、より高い綜合への唯一の方法は獨り此の科學の未來多望なる發展にのみ期待し得られる。——重疊する時代苦とその激成する旋轉に困迷する現代人のすべては、暫し靜かに深き無意識の領域に沈潜せられよ！その潤然たる人生の眞相、苦悶の彼岸に、凝然たる久遠の光に面せられよ！しかして現實への力強い進出のために、眞に新しき永劫の生の意義を全面的に科學的に把握せられよ！



アーネスト・ジヨーンズ

本全集の飜譯は、創立以來既に長き時日を有する**東京精神分學析研究所の所員**の手に成る。最も精確忠實なる學的良心の輝しき結晶であり、わが國文化のために實に誇るべき科學的事業たることを至上の誇とする。